

青森県埋蔵文化財調査報告書第143集

富ノ沢(2)遺跡Ⅴ

発掘調査報告書(1)

平成3年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第143集

富ノ沢(2)遺跡Ⅴ

発掘調査報告書(1)

平成3年度

青森県教育委員会



遠 景



調査区西側全景



調查區東側全景



第216号住居跡炭化材出土状況

序

本報告書は国道338号道路改良事業（尾駈工区）に伴い、その事業予定地内に所在する埋蔵文化財の保護と活用をはかるため、平成元年度と同2年度に実施した富ノ沢(2)遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

この調査によって400軒近い数の縄文時代中期の堅穴住居跡をはじめ、集団墓地や配石遺構、あるいは多くの貯蔵庫も同時に発見され、当時としては全国で最も大きい集落跡の一つであることがわかりました。

また、同時に数多くの生活用具も発見され、当時の生活様式の一部がうかがえる好資料を得ることができました。この中には周辺地域はもちろんのこと、遠く北海道や中部地方からもたらされた遺物もあり、他の地域との交流の問題など解明するうえで貴重な資料を得たものと思われれます。この成果が、今後の埋蔵文化財の研究にいささかでも役立てれば幸いです。

最後に、この調査に参加された調査員をはじめ、種々、ご指導、ご協力いただいた関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

青森県教育委員会

教育長 山崎五郎

例 言

- (1) 報告書は、平成元・二年度に発掘調査を実施した国道338号道路改良事業（尾駱工区）内「富ノ沢(2)遺跡」（青森県教育委員会登録番号50049）の調査報告書である。
- (2) 報告書は、平成三年度に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章第1節(6)小ピット群までを第1分冊として刊行し、第Ⅳ章第1節(7)掘立柱建物跡以降を第2分冊として平成5年3月に刊行する。
- (3) 執筆者の氏名は、依頼原稿については文頭に、そのほかは文末に記してある。
- (4) 遺構内の焼土・貼り床等はスクリーントーンを用いて示し、その都度図中に注記した。
- (5) 標準層序、遺構内堆積土の色調は「新版標準土色帖(小山・竹原編1987)」に基づいて、記載した。
- (6) 住居跡の床面積の計測については、 $S = 1/20$ の実測図を用い壁の下端と床面との接点を基準として、プランメーターで3回測り、その平均値を使用した。なお、その数値は、床面(柱穴等含む)全体の面積である。
- (7) 図版縮尺は、原則として次のようにしたが、異なる場合には、その都度図中に示した。
住居跡-1/60、土器実測図1/4、土器拓影図1/3、剥片石器1/1.7、礫石器1/3.4・1/6.8
- (8) 資料の鑑定並びに分析については、下記の方々に依頼した。

石器石質の鑑定	青森県立八戸高等学校教諭	松山 力
石器石質の鑑定と地質の分析	青森県立板柳高等学校教諭	山口 義伸
- (9) 発掘調査及び整理作業に際しては、下記の方々からご教示を得た。
寺村光晴、佐々木和久、酒井宗孝、光井文行、千葉啓蔵、古厩敷則雄、佐藤智雄、瀬川滋、田中寿明、赤井容造、大沼忠春、久保泰、石本省三、秋元信夫、鈴木徹、長尾正義、工藤竹久、小笠原善範、宇部則夫、村木淳、関 豊、矢島敬之、一条秀雄、高田和徳

目 次

序	
例 言	
目 次	
第I章 調査に至る経過と調査要項	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	2
第II章 調査の概要	7
第1節 調査の方法	7
第2節 調査の概要	7
第3節 遺物の分類	8
第III章 遺跡の地形と層序	10
第1節 遺跡の周辺の地形	10
第2節 遺跡周辺の基本層序	12
第IV章 検出遺構	14
第1節 富ノ沢(2)遺跡の検出遺構と出土遺物	14
(1) 住居跡	14
(2) 屋外炉	1156
(3) 配石遺構	1165
(4) 埋設土器	1178
(5) 溝状遺構	1180
(6) 小ピット群	1181

第2分冊 平成5年3月刊行予定

第IV章 検出遺構

第1節 富ノ沢(2)遺跡の検出遺構と出土遺物

(7) 掘立柱建物跡

(8) 土塙

第V章 遺構外出土遺物

第1節 出土遺物

土器・石器・土製品・石製品・骨角器・その他の遺物

第VI章 調査の成果

第1節 調査の歴史と周辺の遺跡

第2節 遺構

住居跡・掘立柱建物跡・土塙・配石遺構

第3節 遺物

土器・石器・土製品・石製品

第4節 集落の変遷

第VII章 自然科学的分析

種子鑑定・土壌分析・獣骨分析・樹種同定・年代測定・ヒスイの産地同定・第216

号住居跡の建築学的考察

第VIII章 まとめ

第3分冊 平成5年3月刊行予定

第IX章 富ノ沢(3)遺跡の検出遺構と出土遺物

第1節 遺構

住居跡・土塙・溝状ピット

第2節 遺構外出土遺物

土器・石器・その他の遺物

第3節 まとめ

第 I 章 調査に至る経過と調査要項

第 1 節 調査に至る経過

本遺跡は、昭和46年度に当教育委員会が実施したむつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財包蔵地分布調査の際に見えられ、周知された遺跡である。

昭和48・49年の2か年にわたって当教育委員会では富ノ沢(2)遺跡(A地区)の試掘調査を実施した。この調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡6軒などを検出したが、この結果から、六ヶ所村内の縄文時代中期を中心とした最大規模の集落であることが予想された。

昭和62年5月から本遺跡の、最初の発掘調査がむつ小川原開発株式会社所有地内で実施された(県埋文報第118集：1989)

本遺跡の国道338号道路改良事業(尾根工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和63年7月表館(1)遺跡発掘調査開始後、予定を変更してスタートした(昭和63年6月17日付け、青道建第187号)。調査区域は、昭和62年度の調査地点から北側に位置している(県埋文報第133集：1991)。

平成元年度は、その第二次調査として富ノ沢(2)遺跡A地区26,000平方メートルを対象に実施された(昭和63年10月17日付け、青地建第425号)。その結果、縄文時代中期の住居跡182軒、墓塚、フラスコ状ピット454基などを含む遺構が重複して検出されて、大規模な集落であることが確認された。同時に段ボール箱で440箱ほどの縄文土器、石器、土製品、石製品、獣骨、貝殻、炭化果実植物等が出土した。当初、年度内終了の予定であったため調査期間の延長や新たな応援チームの投入などいろいろ手を尽くしたが、10月下旬になって、本遺跡の西側台地で新規の遺跡(富ノ沢(3))が発見され、急拠当事者が協議した後、文化課と埋文センターが合同で発掘調査を実施することになった。平成元年度は調査対象面積26,000㎡のうち20,000㎡を終了し、残りの約6,000㎡については、引き続き平成2年度に調査することになった。(平成元年11月6日付け、青地建第463号)。

なお、平成元年度には、本遺跡C地区の発掘調査が、教育庁文化課によって実施されている(県埋文第137集：1991)

(北林八洲晴)

第2節 調査要項

(平成元年度調査要項)

1 調査目的

国道338号道路改良事業(尾駮工区)の実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財の活用に資する。

2 調査期間

平成元年5月8日から同年11月17日まで

3 遺跡名及び所在地

富ノ沢(2)・(3)遺跡 上北郡六ヶ所村大字尾駮字上尾駮 2- 1 他

4 調査面積

富ノ沢(2)遺跡20,000平方メートル・富ノ沢(3)遺跡5,500平方メートル

5 調査委託者

青森県土木部(道路建設課・十和田土木事務所)

6 調査受託者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

六ヶ所村・六ヶ所村教育委員会・上北教育事務所

9 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教授

調査協力員 田中 澄 六ヶ所村教育委員会教育長(平成3年度退職)

調査員 小山 剛造 八戸工業高等専門学校教授

高島 成侑 八戸工業大学助教授

滝沢 幸長 八戸市文化財審議委員

工藤 雅哉 弘前市立弘前第一中学校教諭

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課 総括主幹 市川金丸(現、青森県立郷土館学芸課長補佐)

主 幹 三浦圭介(現、調査第二課課長)

主 査 奈良昌毅(現、青森県立青森北高等学校教諭)

主 査 坂本洋一（現、青森県立図書館主査）
主 事 石戸谷悟（現、岩木町立岩木小学校教諭）
主 事 羽柴直人

調査第二課 課 長 北林八洲晴（現、総括主幹、調査第一課課長）
主 幹 山口義伸（現、青森県立板柳高等学校教諭）
主 事 岡田康博（現、主査）
調査補助員 後藤久志・工藤哲也・神山温子

（主 担）

調査第三課 課 長 三宅徹也（現、文化課埋蔵文化財班班長）
総括主査 成田滋彦（現、主幹）
主 査 畠山 昇
主 事 長崎勝巳
主 事 三浦孝仁
調査補助員 木村功・黒川隆二・篠崎一穂・柳引直通・蛭沢孝之・蝦名由規子
斎藤繁子・白戸恵利子

（富ノ沢(3)遺跡担当）

調査第二課 課 長 北林八洲晴（現、総括主幹、調査第一課課長）
主 幹 遠藤正夫（現、青森市教育委員会社会教育課課長補佐）
主 査 白鳥文雄
調査補助員 秋元宏之・田沢淳逸・石文貢子・福土敦子

青森県教育庁文化課

主 事 工藤大（現、青森県立郷土館学芸員）
補 助 員 会津和夫・沼宮内陽一郎

（平成2年度調査要項）

1 調査目的

国道338号道路改良事業（尾駈工区）の実施に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の活用に資する。

2 調査期間

平成2年4月11日から同年9月14日まで

3 遺跡名及び所在地

富ノ沢(2)遺跡 上北郡六ヶ所村大字尾敷字上尾敷2-1他

4 調査面積

6,000平方メートル

5 調査委託者

青森県土木部（道路建設課・十和田土木事務所）

6 調査受諾者

青森県教育委員会

7 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

8 調査協力機関

六ヶ所村・六ヶ所村教育委員会・上北教育事務所

9 調査参加者

調査指導員 村越 潔 弘前大学教授

調査協力員 田中 澄 六ヶ所村教育委員会教育長（平成3年度退職）

調 査 員 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授（現、教授）

高島成侑 八戸工業大学助教授

滝沢幸長 八戸市文化財審議委員

天間勝也 平内町立茂浦小学校教頭

山口義伸 青森県立板柳高等学校教諭

工藤雅哉 弘前市立第一中学校教諭

遠藤正夫 青森市教育委員会社会教育課主幹兼埋蔵文化財係長（現、課長補佐）

林 謙作 北海道大学助教授

小林達雄 国学院大学教授

吉崎昌一 北海道大学教授

西本豊弘 国立歴史民俗博物館助教授

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課 総括主幹 市川金丸（現、青森県立郷土館学芸課課長補佐）

主 幹 三浦圭介（現、調査第二課課長）

主 査 奈良昌毅（現、青森県立青森北高等学校教諭）

主 事 岡田康博（現、主査）・長瀬昇・羽柴直人

調査補助員 工藤哲也・石川雅康・花田千穂・小野あかね

(主担)

調査第二課 課 長 北林八洲晴 (現、総括主幹、調査第一課課長)

総括主査 成田滋彦 (現、主幹)

主 事 中嶋友文

調査補助員 木村功・福土敦子・後藤優子

調査第二課 主 査 白鳥文雄

主 事 成田悟

調査補助員 蝦名芳純・坪谷光明・神山温子

(主担)

調査第三課 課 長 鈴木克彦

主 査 畠山昇・坂本洋一 (現、青森県立図書館主査)

主 事 長崎勝巳・三浦孝仁

調査補助員 篠崎一穂・柳引直通・蛸沢孝之・近藤輝美・稻見庸子

田中康子・伊藤弘子

第II章 調査の概要

第1節 調査の方法

発掘調査は、昭和48・49年度に実施した試掘調査地点（103ライン）を中心として調査を実施した。

調査区の設定に当たっては、道路工事用の中心杭№3160と№3180の杭を基準線に用い、4×4mのグリッドを設定した。南北の基準線はN-6'-Eである。

グリッドは、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を付し、その呼称は、南東隅の杭番号を使用し、例えば、DA-110区等と呼称した。

調査はグリッド法を用いた分層発掘とし、遺物が包含されている第II・III層の遺物を記録した後、遺構確認面の第IV層まで掘り下げた。

遺構の精査は、堆積土層の観察用断面を残し、住居跡は四分法、他の遺構は二分法を用いて層序毎に掘り下げた。土層の注記には「標準土色帖」を使用した。

遺構の実測は、簡易遺り方・平板測量で行い、埋設土器は10分の1、他の遺構は20分の1の縮尺を用いて記録し図化した。

第2節 調査の概要

(平成元年度)

4月28日は、調査指導員、調査員、関係機関担当者が参集して、発掘調査打合せ会議を六ヶ所村中央公民館で開催した。ここでは調査の方法、体制、工事工程との調整等について話し合われた。この後、調査現場での協議も行われた。

5月8日から調査器材を現地に搬入し、グリッド設定作業と併行しながら粗掘り作業に入った。調査にあたっては、昭和48・49年に県教育委員会が試掘調査を実施した地点（103ライン）を中心にして東西に調査を進めた。

5月中旬の段階で、東側から遺物包含層、西側から住居跡が検出された。

6月上旬に入り、西側地区で遺構が連続してある為、16m間隔でトレンチによる試掘調査を実施した。その結果遺構は遺跡の全面に分布し、大規模集落であることが判明した。

8月には、100ラインの地区で激しい遺構の重複があり、精査作業に手間取った。

10月に入り今年度の調査期間が10月31日までであったが、11月17日まで延長する事が決定し

た。

10月下旬になって本遺跡の西側にある台地で、工事中に未周知の遺跡が発見され、急奥文化課と協議した結果、台地で11月1日から発掘調査を行う事となり、新しい遺跡は富ノ沢(3)遺跡と命名され、調査の結果、縄文時代中期の住居跡3軒、土壊5基が検出された。

11月16日に来年度調査予定の発掘調査区を保護するため全面にシートを掛けた。今年度の調査では、縄文時代中期の住居跡182軒・土壊445基という多量の遺構を検出した。

11月17日には現場での作業を終了し、器材及び出土遺物等を搬出した。

(平成2年度)

4月11日 調査器材を現地に搬入したシートを撤去し遺構精査を開始した。

4月23日は、調査指導員、調査員、関係機関担当者が参集して、打合せ会議を六ヶ所村中央公民館で開催した。ここでは調査の方法、体制、昨年の調査結果、工事工程との調整等について話し合われた。この後、調査現場での協議も行われた。

5月に入り、住居跡及び土壊の重複が激しく、また天候が不順で作業は難行した。

8月中旬に入り、調査期間が8月31日までの予定であったが、遺構精査に手間取り、9月14日まで延長することになった。このころ第216号住居跡のロングハウスから、保存が良好な炭化材を検出し、住居跡構造を解明しえる貴重な資料を検出した。

調査の結果、墓塚を中心とした東西約200mの環状集落である事が判明し、遺構数から日本最大規模の縄文集落である事が判明した。

9月14日には現場での全作業を終了し、器材及び出土遺物等を搬出した。

第3節 遺物の分類

土器

本報告書では、青森県埋蔵文化財調査センターが作成した『青森県内の土器編年表』青森県(1990)を参考にして分類を行った。縄文時代草創期・早期を第I群土器、縄文時代前期を第II群土器、縄文時代中期を第III群土器、縄文時代後期を第IV群土器、縄文時代晩期を第V群土器、弥生時代を第VI群土器、弥生時代以降を第VII群土器と大別し、これを時期・器形・文様などから更に細別した。

第I群土器(縄文時代草創期・早期)

第II群土器(縄文時代前期)

第III群土器（縄文時代中期）

- 1類土器 円筒上層 a 式に相当するもの。
- 2類土器 円筒上層 b 式に相当するもの。
- 3類土器 貼り付け文と刺突を主体に文様構成しており、円筒上層 c 式に相当するもの。
- 4類土器 貼り付け文を主体に文様構成しており、円筒上層 d 式に相当するもの。
- 5類土器 沈線文を主体に文様構成しており、円筒上層 e 式に相当するもの。
- 6類土器 円筒上層 d・e 式に相当し、口縁部の突起に一部貼り付けが見られるものと、粗製の土器を一括した。
- 7類土器 大木 7b～8a 式に併行するもの。
- 8類土器 覆林式に相当するもの。
- 9類土器 中ノ平・最花式に相当するもの。
- 10類土器 弥栄平(1)式に相当し、大木10式に併行するもの。
- 11類土器 中期後葉～末葉に相当する粗製の縄文土器を一括した。

第IV群土器（縄文時代後期）

第V群土器（縄文時代晩期）

第VI群土器（弥生時代）

第VII群土器（弥生時代以降）

石器・石製品

A類石鏃・B類石槍・C類石鏃・D類石匙・E類石筥・F類ビェス・エスキーユ・G類不定形石器・H類異形石器・I類石斧・J類半円状扁平打製石器・K類石錘・L類敲磨器類・M類礫器・N類台石・石皿・O類石冠・P類軽石製品・Q類石棒類・R類石製品

石器実測図中における表現方法のうち、スクリーントーンの使用部分は下記のとおりである。



スリ



タタキ



ケンマ

土製品

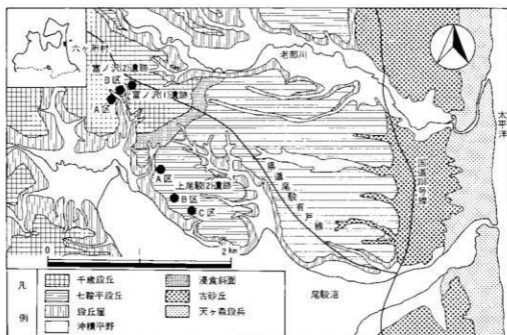
A類土偶・B類有孔土製品・C類土器片利用製品・D類その他の土製品・E類特殊土器把手

第三章 遺跡の地形と層序

第1節 遺跡周辺の地形

上北郡六ヶ所村は、下北半島頭部の太平洋側に位置している。この付近には、北方から、尾駮沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼、そして小川原湖などの湖沼群がみられる。太平洋沿岸には、天ヶ森砂丘が約200mの幅で南北に帯状に分布していて、上記湖沼群の湾口部を閉塞している。この砂丘の内陸側には、標高5～23mにも及ぶ古砂丘があって、200～300mの幅で天ヶ森砂丘に並行して分布している。現在、古砂丘は松林となっていて、防風・防砂林の役割を果たしている。また、この付近には海岸段丘の発達も顕著であって、およそ、4段の段丘面が確認できる。このうち、本遺跡が立地しているのは上位段丘から3段目の千歳段丘である。本段丘は甲地段丘（中川1969）に相当し、標高60～100mである（第1図：遺跡位置図）。

本遺跡の位置する地域は、北方には東流して太平洋に注ぐ老部川があり、南方には湖沼群のうち最北に位置する尾駮沼がある。この間には、東方に舌状に張り出すように海岸段丘が発達していて、南北両端はいずれも急峻な段丘崖をもって沖積平野に臨んでいる。なお、南北の幅はおおよそ2kmである。この地域に広く発達している段丘は最下位の七靴平段丘（標高15～50m）

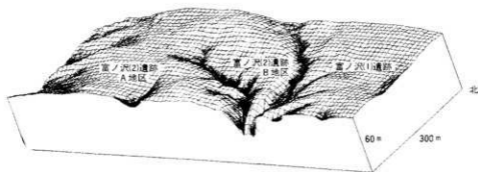


第2図 遺跡周辺の地形分類図

であり、開析されてはいるもののきわめて平坦な地形である。西方には、浸食谷による開析作用がかなり進行した起伏のある千歳段丘が発達している（第2図；地形分類図）。

本遺跡は、現汀線より約4km内陸側の、標高63～68mの千歳段丘上に位置している。尾駮沼西端には低平な沖積平野が小規模に発達していて、二又川が蛇行して尾駮沼に注いでいる。本遺跡はこの川の支流のうち、北側の段丘面を浸食し南北に並行する2本の支流にはさまれた地点に立地している。この支流の谷底は深く、遺跡周辺しの標高差は約40mもある。また、支流の谷頭付近は馬蹄状の浸食地形となっていてやや急傾斜面である。調査区域南端には標高70mの小丘地があって、眼下に尾駮沼が一望でき、沼とは急峻な段丘崖でもって接している。

この小丘地の緩い北斜面は調査区域となっていて、その95～145Lineにおいては住居跡の密集及び土壇墓群等を確認できた。また、135Line以西では西側の支流に刻まれた小谷によって馬蹄状の浸食地形となっていて、稜線部は幅狭い馬の背状を呈している。この馬の背状の稜線部にも土壇墓群等を確認できた。富ノ沢(1)遺跡、同(2)遺跡B地区は、上記支流のうち東側の支流の谷頭付近に立地している。いずれにしても、富ノ沢遺跡は尾駮沼を南側に、東西両側には二又川の支流を配した生活空間であったと思われる。そして、北方には吹越烏帽子、東方には太平洋を望むことができる。



第3図 コンピューターグラフィックによる遺跡内鳥瞰図

なお、第3図はコンピューターグラフィックによる遺跡周辺の鳥瞰図である。調査区域東端（東側の支流）から西方の馬蹄状の浸食地形付近までを表している。この図を作成するにあたって、弘前大学教授塩原鉄郎氏、柴田女子高等学校教諭崎野三太郎氏、青森県立板柳高等学校教諭笹楯一郎氏からの御教示を得た。ここに、諸氏に謝意を表する。

第2節 遺跡周辺の基本層序（第4図）

下北半島の頸部を構成している地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層及び第四系下部洪積統の野辺地層である。北の老部川流域では、泊安山岩類に相当する安山岩質角礫岩及び同質凝灰岩を確認し、遺跡西端の支流の谷底及び尾駁沼の急崖において鷹架層に相当する塊状のシルト岩を確認することができた。遺跡周辺においては、千歳段丘構成層が上記基盤岩を不整合におおっている。段丘構成層は段丘砂礫層と粘土質火山灰層からなっていて、層厚は2～3mである。このうち、火山灰層の厚さは約1mであって、その最上部に堆積する黄褐色ラピリ質浮石（千歳浮石Cb.P）は本地域周辺においては鍵層として把握されているが、尾駁沼以北では堆積しないかあるいはブロック状の堆積しか確認できない。

本遺跡の調査区域は、宮ノ沢遺跡(1)(2)遺跡（泉埋文報第118集1988、同第133集1990）同様に、平坦地においては全般的にローム層への漸移層（III層）まで耕作によって削平されていることから遺構確認面及び遺物包含層等を特定することができなかつた。ただ、調査区域中央部南端に位置している小丘地の北斜面においては表層部の削平が多少認められるものの遺物包含層までは達していないし、遺構確認面を把握することもできた。以下、この区域における土層区分についてその概要を述べることにする。

I層 黒色土（10YR1.7/1） 厚さ20～30cm

粘性・湿性がなく、全体的にしまりにかけもろい。Ia層は耕作土で、しまりにかけ、乾くと灰褐色に変色する。Ib層は薄いレンズ状の堆積を示し、かたいがしまりにかけ、格子状の割れが目立つ。

II層 黒色土（10YR1.7/1）～黒褐色（10YR 2/2） 厚さ50～90cm

層相変化から6層に分層できる。上位のIIa層とIIb層は黒褐色土（20～50cm）で、粘性・湿性が多少あり、またかたさ、しまりもみられるがややソフトな感じがする。ローム粒、焼土粒、炭化粒等が多量に混入している。混入量はIIa層の方がやや多く、粒径も大きい。IIa層及びIIb層は縄文時代中期の遺物包含層である。

IIc層はやや腐植質の黒色土（0～20cm）で、上記混入物が多く、遺構周辺では特に目立つ。逆に遺構から離れるに従って薄層となりしだいに消失していく。混入物中のローム量は竪穴住居跡の周辺部で特に多く、また粒径も大きいこと等を考えると人為的要素をもった堆積物と思われる。本層にも縄文時代中期の遺物が多量に包含されている。

IIId層～IIf層は腐植質黒色土（20～40cm）で、粘性・湿性に富み、カッティング面は滑らかである。混入物としてローム粒が多少認められる程度であるが、ただIIe層のみはロー

ムブロック(径5~20mm)がやや目立ち、間層的要素をもつ。CT-108~109においてはII e層が欠落しているためにII d層とII f層の細分化はできなかった。この黒色土層中からは遺物は確認していない。なお、CU-105付近の南壁で確認した竪穴住居跡はII d層以下を壁面として構築しているのを確認している。

Ⅲ層 暗褐色土 (10YR 3/3) 厚さ20~30cm

ローム層への漸移層である。全般的にローム粒の混入が多く、その混入状況によって分層できる。Ⅲ a層はローム層の混入が多く色調が暗く土壌化している。Ⅲ b層はロームブロックの混入が目立ち、かたくなまっている。

Ⅳ層 明黄褐色ローム (10YR 6/8) 厚さ0~20cm

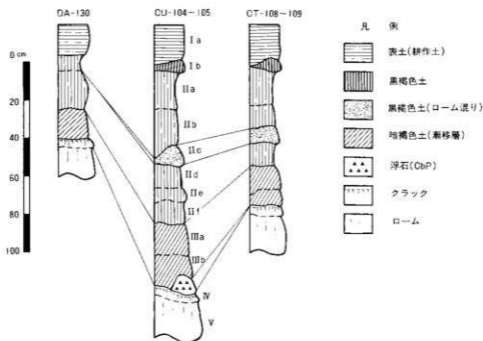
crack帯で、全体的によくしまった粘土質ロームである。このcrack帯の直上には局部的に黄褐色ラピリ質浮石がブロック状の堆積を示すことを確認している。この浮石層を千曳浮石(C b, P)と呼ぶ。

V層 黄褐色ローム (10YR 5/6) 厚さ約100cm

全体的によくしまった粘土質ローム層である。

ローム層直下には細粒~中粒砂層(50~60cm)、中粒~粗粒砂層(約100cm)そして礫層の順に段丘砂礫が堆積している。

(山口 義伸)



第4図 遺跡内の基本層序

第IV章 検出遺構

第1節 富ノ沢(2)遺跡の検出遺構と出土遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡(第5・6図)

<位置と確認> CY・CZ-94グリッドで、第IV層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 直径2～2.2mのほぼ円形を呈する。床面積は2.97㎡である。

<壁・床面> 第IV層を壁面とし、急な立ち上がりである。壁高は北壁22cm、南壁7cmである。床面は、ほぼ平坦で壁から20～30cmほど離れた内側には、貼り床が施されている。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 床面から大小合わせて16個のピットを検出した。このうち、15個の小ピットは壁直下を巡っており、壁柱穴と考えられる。深さは、10cm程のものが多く、各ピットの深さはP₁…9cm、P₂…10cm、P₃…6cm、P₄…13cm、P₅…6cm、F₆…9cm、P₇…7cm、P₈…10cm、P₉…13cm、P₁₀…11cm、P₁₁…14cm、P₁₂…15cm、P₁₃…18cm、P₁₄…11cm、R₅…11cm、P₁₆…25cmである。

<炉> 地床炉で住居跡のほぼ中央に位置する。小型の住居跡のわりに炉の焼土面は大きく、70×55cmの不整楕円形で、焼土の厚さは2程cmである。

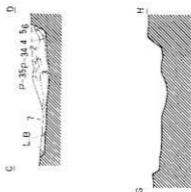
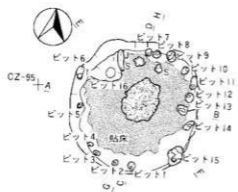
<特殊施設> 北西にあるP₁₆で、深さは25cmである。ピットの脇には自然礫が直立した状態で出土している。

<堆積土> 暗褐色土を主体とし、7層に分層した。

<出土遺物> 土器はすべて覆土からの出土である。石器は覆土から不定形石器3点、敲磨器類1点が出土した。

<小結> 覆土から円筒上層C式期、榎林式期、最花式期の土器が出土している。

(長崎 勝巳)



B



F

- 第1号住居跡、メインセクション
- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物を少量
 - 第2層 黒褐色土 10YR3/2 炭化物を微量
 - 第3層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物微量
 - 第4層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物微量
 - 第5層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第6層 褐色土 10YR4/6 壁際にロームが見られた
 - 第7層 暗褐色土 10YR3/4

- 第1号住居跡 ビット16土層注記 1ビット16 J
- 第1層 黒褐色土 10YR2/2
 - 第2層 黒褐色土 10YR2/1
 - 第3層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第4層 暗褐色土 10YR3/3



0 2m



フク土 1



フク土 2



フク土 3



フク土 4



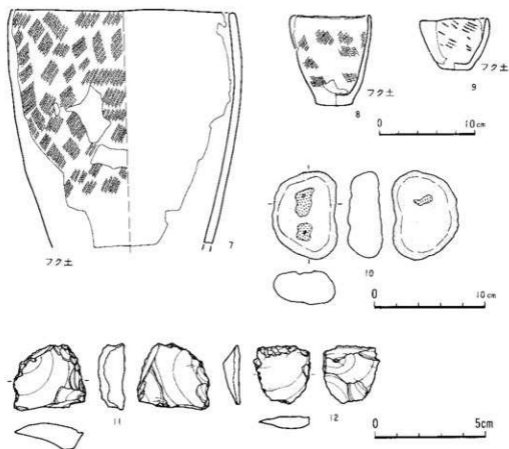
フク土 5



フク土 6

0 5cm

第5図 第1号住居跡(1)



第6図 第1号住居跡(2)

第2号住居跡 (第7・8図)

〈位置と確認〉 CY-96グリッドに位置し、第IV層を調査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 第5号土城と重複しているが、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 平面形は南北に長軸をもち、長軸3m、短軸2m60cmの楕円形を呈する。床面積は5.11㎡である。

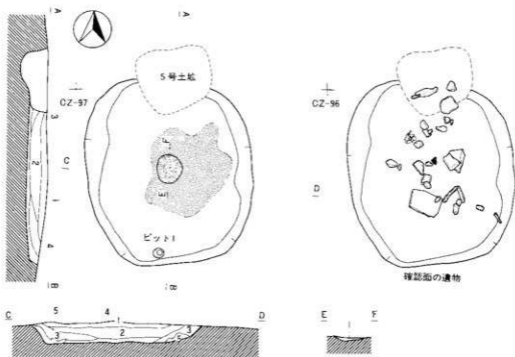
〈壁・床面〉 第IV層を掘り込んで壁面としている。壁高は東・西壁が25cm、南壁15cm、北壁は重複のため不明である。床面はやや北側が低くなっている。

〈壁溝〉 確認されなかった。

〈柱穴〉 ピットは床面から1個検出され、深さは13cmである。

〈炉〉 住居跡の中央部北側に46×40cmの地床炉を検出した。

〈特殊施設〉 確認されなかった。

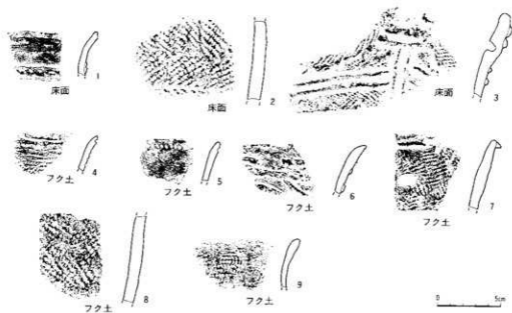


第2号住居跡 土層注記

- 第1層 暗褐色 10YR3/4 炭化物微量、ローム粒少量
 第2層 褐色 10YR4/4 炭化物少量、焼土粒極微量、ローム粒少量
 第3層 褐色 10YR4/4 炭化物微量、ローム粒多量
 第4層 暗褐色 10YR3/3 炭化物微量、焼土粒、ローム粒少量
 第5層 褐色 10YR4/6

第2号住居跡 跡、土層注記
 第1層 赤褐色 5YR4/6

0 2m

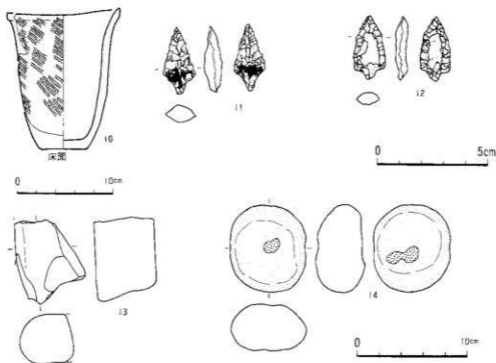


第7図 第2号住居跡(1)

<堆積土> 暗褐色土を主体とし、5層に分層した。

<出土遺物> 土器は床面から(1~3・10)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石皿1点、覆土から石鎌2点、敲磨器類1点、石棒類1点出土した。

<小結> 床面出土の土器から円筒上層e式期の住居跡と考えられる。(長崎 勝巳)



第8図 第2号住居跡2)

第3号住居跡 (第9図)

<位置と確認> CV・CW-94グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

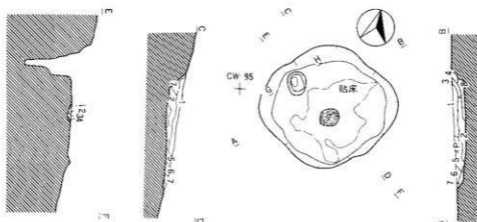
<平面形・規模> 1m88cm~1m90cmの隅丸方形を呈している。床面積は、2.24㎡である。

<壁・床面> 床面はほぼ平坦で、地床炉を中心として貼床が施されている。壁の立ち上がりは緩やかで、壁高は北壁で20cm前後、南壁で2cm前後である。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 北西壁寄りに楕円形のピットを1個(P1)検出した。ピットは段状に掘り込まれており、深さ72cmである。

<炉> 中央よりやや南側に寄った所に地床炉を検出した。直径30cm前後のほぼ円形の炉で若



伊土層注記

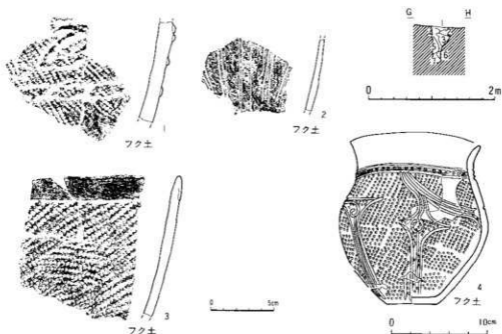
- 第1層 褐色土 IOYR4/4
- 第2層 にぶい黄褐色土 IOYR4/3
- 第3層 暗褐色土 IOYR3/3
- 第4層 赤褐色土 SYR4/6

ビット土層注記

- 第1層 暗褐色土 IOYR3/3
- 第2層 黒褐色土 IOYR3/2
- 第3層 褐色土 IOYR4/4
- 第4層 暗褐色土 IOYR3/3
- 第5層 褐色土 IOYR4/4
- 第6層 褐色土 IOYR4/6
- 第7層 黒褐色土 IOYR2/2

第3号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 IOYR3/3 軟らかく、しまりない。ローム粒を含む
- 第2層 黒褐色土 IOYR3/2 堅く、粘性あり。ローム粒を含む
- 第3層 暗褐色土 IOYR3/3 堅く、粘性あり。ローム粒を含む
- 第4層 黒褐色土 IOYR3/2 軟らかく、しまり弱い。ローム粒を含む
- 第5層 黒褐色土 IOYR2/3 堅く、しまりある。ローム粒を含む
- 第6層 暗褐色土 IOYR3/4 やや堅い。ローム粒を含む
- 第7層 褐色土 IOYR4/4 堅く、しまりある。ローム粒を含む
- 第8層 暗褐色土 IOYR3/4 堅く、しまりある。パミス粒を多く含む



第9図 第3号住居跡

干くぼんでいる。

〈特殊施設〉 検出されなかった。

〈堆積土〉 全体に締まりの弱い黒～暗褐色土が堆積している。自然堆積である。

〈出土遺物〉 覆土から若干の遺物が出土した。石器は覆土から、石皿が1点出土した。

〈小結〉 本住居は本遺跡のなかでも小規模のものに属する。床面から出土した土器がないので本住居跡の時期は不明である。(高山 昇)

第4号住居跡 (第10・11図)

〈位置と確認〉 CV-99グリッドで第IV層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 認められなかった。

〈平面形・規模〉 長軸2.5m、短軸2.2mの隅丸方形を呈する。床面積は4.01㎡である。

〈壁・床面〉 第IV層を壁面とし、急な立ち上がりである。壁高は北壁38cm、東・西壁が15～20cmである。床面は北側がやや低く、全面に貼り床が施されている。

〈壁溝〉 確認できなかった。

〈柱穴〉 床面から1個のビットを検出した。ビットの深さはP₁…27cmである。

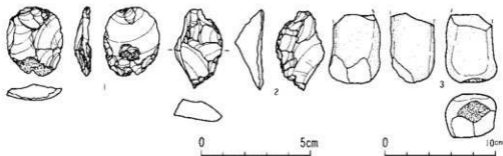
〈炉〉 確認できなかった。

〈特殊施設〉 西壁中央部に60×45cmのビットが半分ほど住居から張り出している。ビットの最深部は住居の外側にのびている。

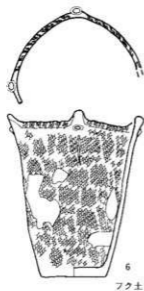
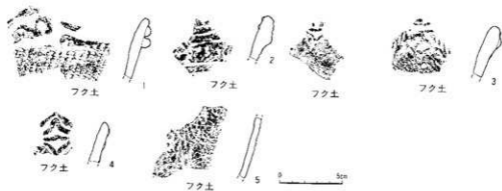
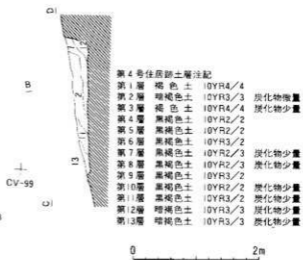
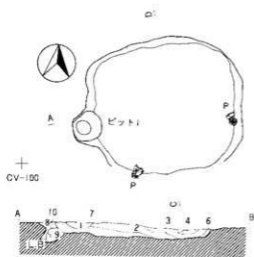
〈堆積土〉 黒褐色の土が主体で、13層に分層した。ほとんどの層に少量の炭化物が含まれている。

〈出土遺物〉 土器はすべて覆土からの出土である。石器は覆土からピエス・エスキュー1点、不定形石器2点、磨製石斧2点、敲磨器類1点、石皿1点である。

〈小結〉 住居跡の覆土から円筒上層d・e期の土器が出土しているところから、円筒上層d式期か、それ以前の住居跡と考えられる。(長崎 勝巳)



第10図 第4号住居跡(1)



第11図 第4号住居跡(2)

第5号住居跡(第12・13図)

<位置と確認> CW-100グリッドで、第III層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 直径2.2～2.4mのほぼ円形を呈する。床面積は3.79㎡である。

<壁・床面> 第III層を掘り込んで壁としている。壁高は北壁13cm、東壁3cm、西壁6cmである。床は第IV層上面を床面とし、南側がやや低くなっている。

<壁溝> 確認されなかった。

<柱穴> 床面からピットを3個検出した。深さは、P₁…6cm、P₂…8cm、P₃…10cmである。

<炉> 住居跡の中央部に直径34cm程の地床炉を検出した。

<特殊施設> 確認されなかった。

<堆積土> 黒褐色土を主体とし、4層に分層した。

<出土遺物> 土器は床面から(1～3)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃1点、不定形石器1点、覆土から石鏃1点、石匙1点、不定形石器6点、敲磨器類1点、床下から不定形石器1点出土している。

<小結> 床面出土の土器(1)から大木8b式期の住居跡と考えられる。(長崎 勝巳)

第6号住居跡(第14・15図)

<位置と確認> CW-99グリッドで、第III層を調査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 直径2mのほぼ円形を呈する。床面積は2.76㎡である。

<壁・床面> 第III層を壁面とし、急な立ち上がりである。壁高は北壁36cm、南壁11cm、西壁35cm、東壁19cmである。床面はほぼ平坦で、西・南壁から30～50cmほど内側には、貼り床が施されている。

<壁溝> 確認できなかった。

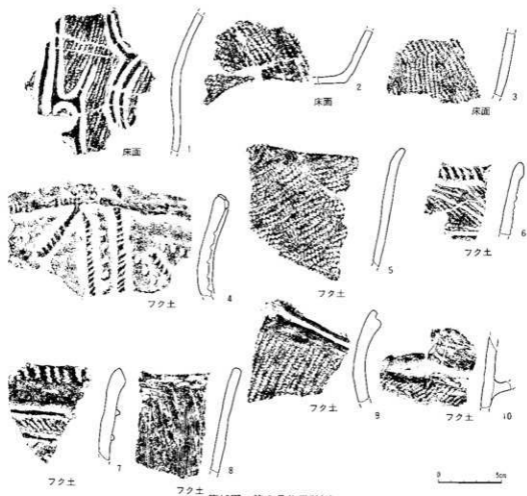
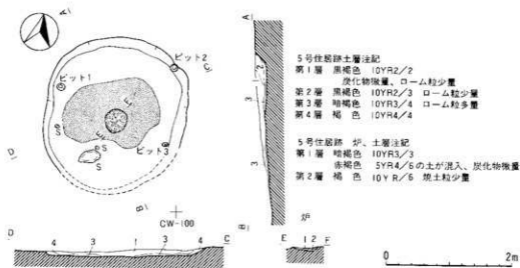
<柱穴> 床面から1個のピットを検出した。ピットの深さはP₁…36cmである。

<炉> 確認できなかった。

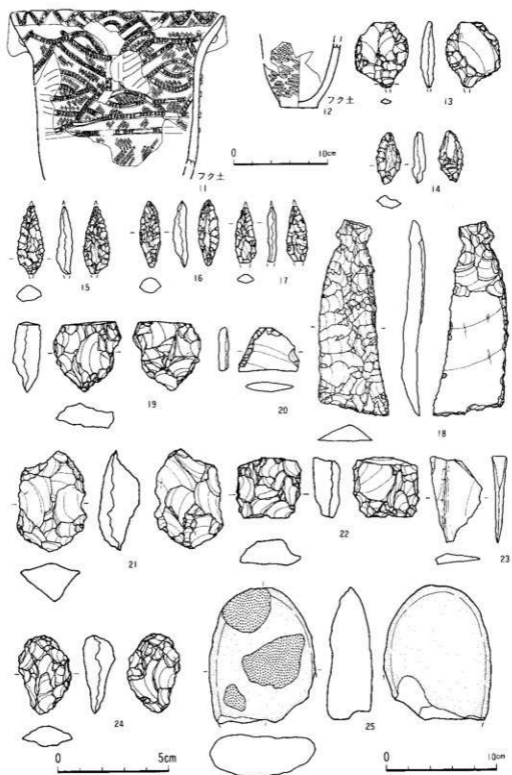
<特殊施設> 北東壁に70×60cmのピットが半分ほど住居跡から張り出している。

<堆積土> 黒褐色土を主体とし、6層に分層した。第5層の他はすべての層に炭化物が含まれている。

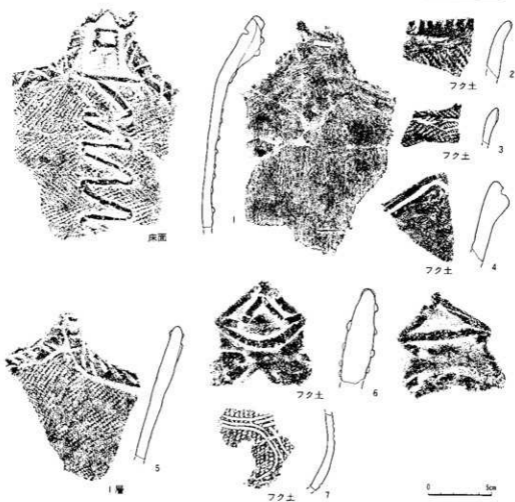
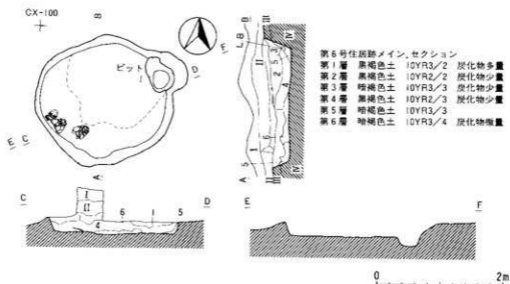
<出土遺物> 土器は床面・床直から(1・8～10)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃1点、敲磨器類1点、覆土から石鏃1点、不定形石器1点、敲磨器類1点出土している。



第12図 第5号住居跡(1)



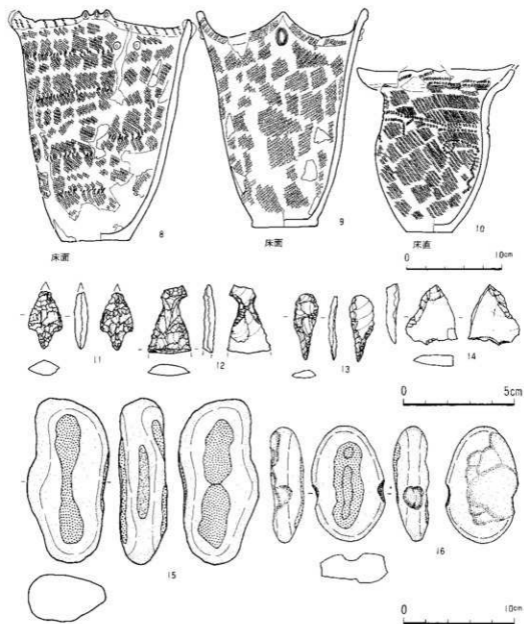
第13図 第5号住居跡(2)



第14図 第6号住居跡(1)

<小結> 床面・床直の出土土器から、円筒上層d式期・大木7b式期の住居跡と考えられる。

(長崎 勝巳)



第15図 第6号住居跡(2)

第7号住居跡（第16～18図）

<位置と確認> CX-102グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第12号住居跡の上に構築されており、本住居跡の方が新しい。

<平面形・規模> 南東側の約2分の1が不明であるが、残存部から推測して1m80cm前後の円～楕円形を呈すると思われる。推定床面積は、9.7㎡である。

<壁・床面> 地山からの掘り込みが浅いため、壁高は、確認できた北西側で4cm前後の深さである。床面は、北西側ではほぼ平坦で貼り床が施されているが、南西側の重複部分では確認できなかった。

<盤溝> 確認できなかった。

<柱穴> 確認できなかった。

<炉> 北西が開放されたコの字形の石囲炉である。安山岩の扁平礫と板状礫とで構築されている。炉底には砂が部分的に敷かれたように検出され、覆土には獣骨片が含まれている。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 北西側では黄褐色土（ローム質）の堆積が見られたが、南西側の重複部分では暗褐色土を主体とした堆積が見受けられた。また、ここの部分の堆積状況は、上位からの堆積土が下位にある第12号住居跡床面に連続するように見られることから、この近辺は住居廃絶後に擾乱（現在ではなく）を受けた可能性が考えられる。

<出土遺物> 炉の南東部の床面と思われるところから円筒上層c式土器（P-17・18、第17図5・6）及び有孔石製品（第17図8）が出土しているが、この近辺の床面の状況は貼床が施されていたわけでもなく、明確に床面からの出土とは言えない状況である。また、堆積状況からも廃棄された可能性が考えられ、したがって、本住居に伴わない可能性が強い。一方、炉の北東部のすぐ傍に出土した、P-16（第17図7）は、堅緻な床面からの出土であり、本住居に伴う。また、石囲炉の北西端に、炉を構成するように土器片（P-1、第16図1）が出土している。石器は、床面から石錐2点、石槍1点、不定形石器3点、台石1点、床面直上から不定形石器4点、覆土から石錐3点、石匙1点、不定形石器5点が出土し、総数20点である。

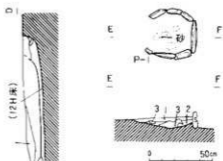
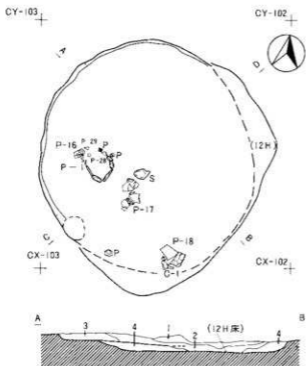
<小結> 本住居跡の構築時期は、出土土器から、円筒上層d式の後半期と考えられる。

（島山 昇）

第8号住居跡（第19～23図）

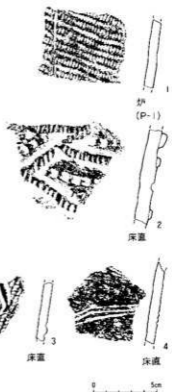
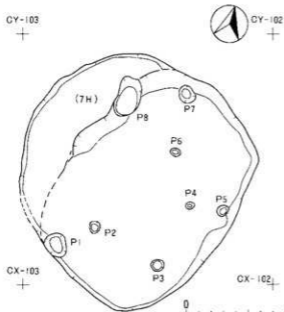
<位置と確認> CY・CZ-104グリッドで暗褐色土の広がりを確認した。

<重複> 北側が第9号住居跡と重複しており、新旧関係は不明であるが、本住居跡の方が新しい可能性がある。また、第33号住居跡の上位に構築され、本住居跡のほうが新しい。

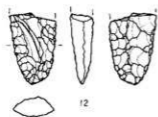
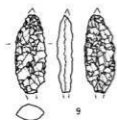
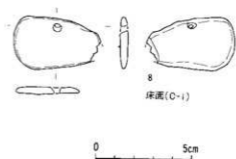
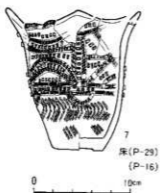
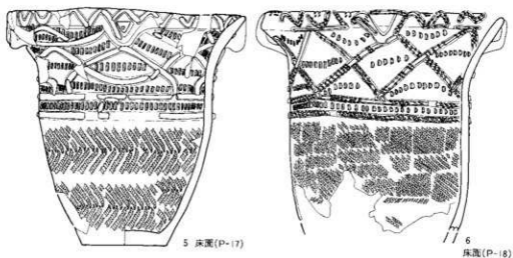


第7号住居跡・炉土層注記
 第1層 暗褐色土 10YR3/3
 較らかい。骨片を微量含む。
 下部に砂粒を含む。
 第2層 暗褐色土 10YR3/4
 第3層 赤褐色土 5YR4/6

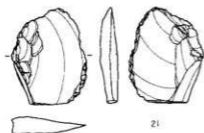
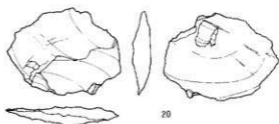
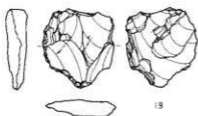
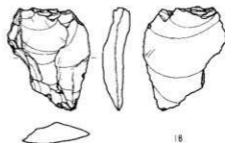
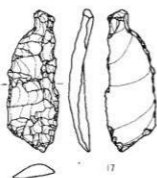
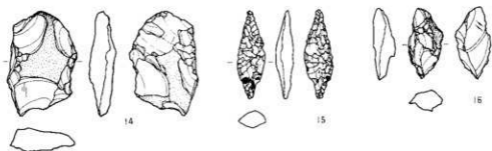
第7・12号住居跡土層注記
 第1層 暗褐色土 10YR3/3 □—ム粒を多量に含む
 第2層 黄褐色土 10YR2/2 □—ム粒を含む
 第3層 黄褐色土 10YR5/8 □—ム質
 第4層 褐色土 10YR4/4 □—ム粒を多量に含む



第16図 第7号住居跡(1)、第12号住居跡



第17图 第7号住居跡(2)



0 5cm

0 20cm

第18图 第7号住居跡(3)

<平面形・規模> ほぼ南北に主軸を持ち、長軸5m55cm、短軸4m11cmの隅丸長方形を呈している。床面積は16.79㎡である。

<壁・床面> 各壁は急な立ち上がりを呈し、東壁55cm、南壁28～48cm、西壁31～47cm、北壁70cmである。床面はほぼ平坦であるが、北側半分は2～5cmほど窪んでいるため、周辺がテラス状になっている。窪んでいるのは、下位に第33号住居跡があるためであり、この部分には貼床が施されている。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 竪穴内から大小合わせて18個のピットを検出した。P₆・P₈はしっかりとしたピットであり主柱穴と思われる。これに対応する南側には検出できなかった。浅いがP₂が位置的には対応する。主なピットの深さは次のとおりである。

P₁…58cm、P₂…17cm、P₃…41cm、P₄…18cm、P₅…75cm、P₆…80cm、P₇…24cm、P₈…81cm、P₉…21cm、P₁₀…18cm、P₁₁…23cm、P₁₂…30cm、P₁₃…22cm、P₁₄…14cm、P₁₅…57cm、P₁₆…9cm、P₁₇…6cm、P₁₈…18cm、P₁₉…58cm、P₂₀…18cm、P₂₁…12cm、P₂₂…20cm、P₂₃…10cm、P₂₄…17cm、P₂₅…16cm、P₂₆…15cm。

<炉> 3か所に床面が焼けているのを検出した。メインの地床炉は中央に位置する。焼土も厚く堆積している。

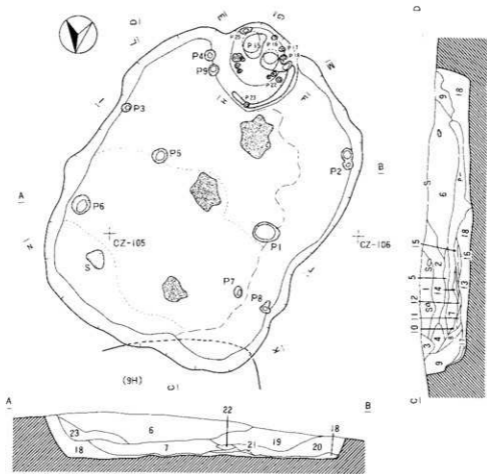
<特殊施設> 南壁のほぼ中央で検出した。南壁が幾分張り出しており、内側には半円状にロームの盛土が巡っている。全体として円形を呈しており、直径30～40cm前後、深さ60cmのピットが2個と直径10cm前後、深さ10～20cm前後の小ピット14個が検出された。特殊施設の上には、やや扁平で大きな隙が3個斜めに重なって出土している状況が確認された。

<堆積土> 中程から床面までは褐色～黄褐色土が多く見られ、それより上位では暗褐色～黒褐色土が多く見られる。黄褐色土（ローム）の堆積状況は、中程までは人為的に埋め戻された様相を呈しているものと考えられる。

<出土遺物> 覆土からはやや多量の遺物が出土した。土器は覆土から床面直上にかけて、円筒上層e式から榎林式までの土器が多く見られた。石器は床面から石鏃4点、不定形石器3点、石皿1点、床面直上から石槍1点、覆土から石鏃2点、石槍4点、石錐1点、石匙1点、不定形石器13点、ピエス・エスキュー1点、敲磨器類5点、磨製石斧1点、石皿1点、台石1点、石棒類1点が出土し、総数40点である。

<小結> 本住居跡の時期は、床面直上から出土した土器から、おおむね榎林式期と思われる。

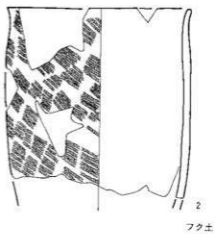
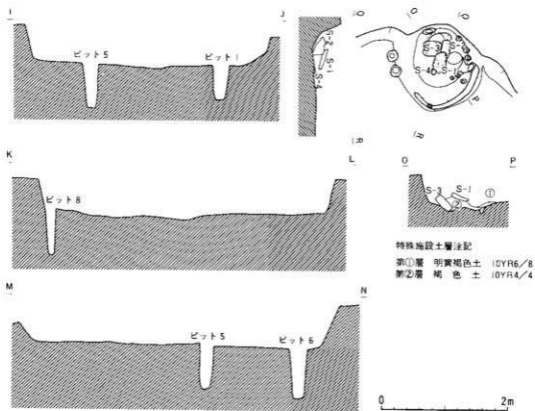
(島山 昇)



第8号住居跡土層注記

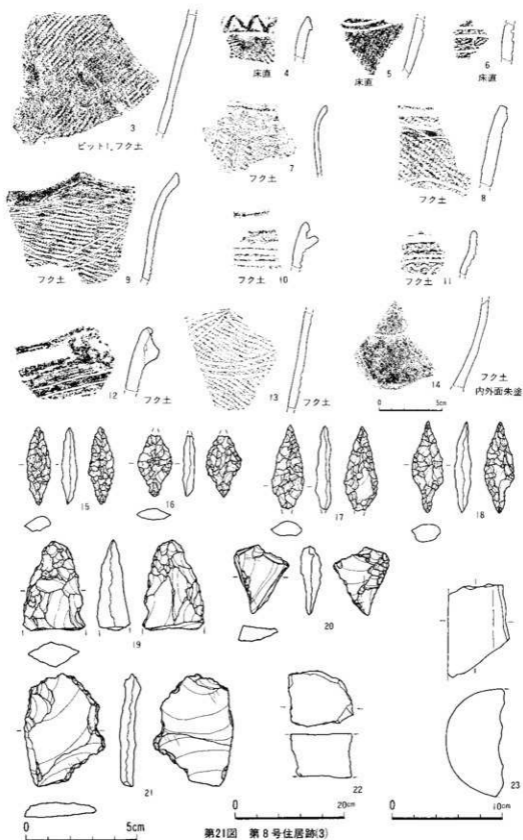
第1層	黒褐色土	10YR2/3	しまりある。ローム粒少量含む
第2層	暗褐色土	10YR3/4	しまりある。ローム粒少量含む
第3層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	
第4層	暗褐色土	10YR4/3	しまりある。ローム粒少量含む
第5層	褐色土	10YR4/4	しまりない。ローム粒少量含む
第6層	暗褐色土	10YR3/4	しまりややある
第7層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	しまりややある
第8層	暗褐色土	10YR3/4	しまりややある。ローム粒少量含む
第9層	褐色土	10YR4/6	しまりある。ローム粒少量含む
第10層	褐色土	10YR4/4	しまりある。ローム粒少量含む
第11層	褐色土	7.5YR3/4	しまり・粘性ある。ローム粒少量含む
第12層	暗褐色土	10YR3/4	しまりややある。ローム粒少量含む
第13層	褐色土	10YR4/4	しまりややある。ローム粒少量含む
第14層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	しまりある
第15層	暗褐色土	7.5YR3/3	しまりある。ローム粒少量含む
第16層	褐色土	7.5YR4/3	しまりある。ローム粒少量含む
第17層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒・塊を多量に含む
第18層	褐色土	10YR4/4	ローム粒・塊を多量に含む
第19層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒・塊を少量含む
第20層	暗褐色土	10YR3/3	しまり・粘性ない。ローム粒を多量に含む
第21層	褐色土	10YR4/6	しまり・粘性ややある。ロームブロックを多量に含む
第22層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	しまり・粘性ない。ローム粒を少量含む
第23層	黒褐色土	10YR3/2	しまり・粘性ない。ローム粒を多量に含む

第19図 第8号住居跡(1)

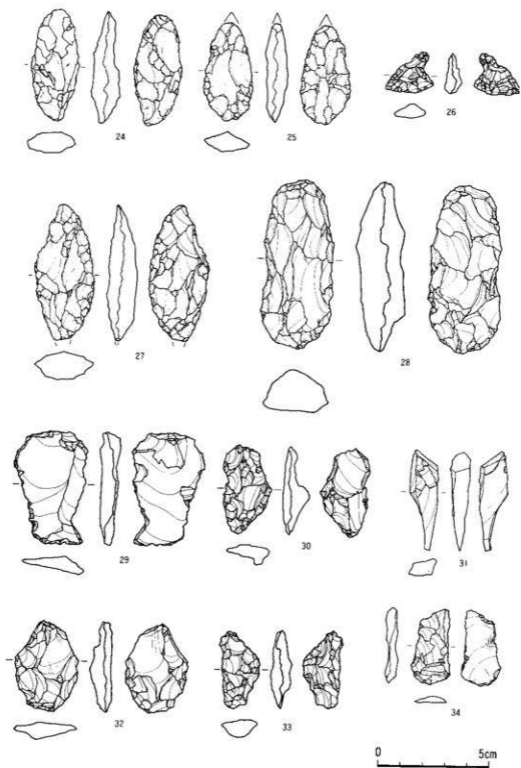


0 10cm

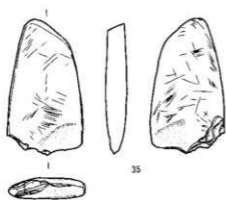
第20図 第8号住居跡(2)



第21図 第8号住居跡(3)

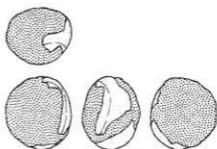


第22图 第8号住居跡(4)



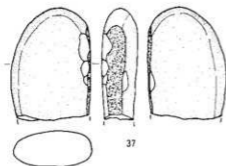
35

0 5cm

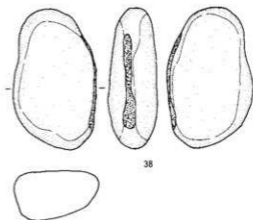


36

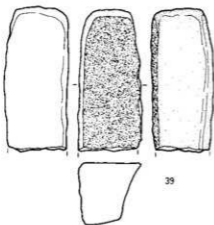
0 10cm



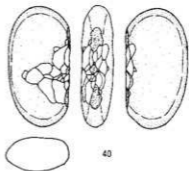
37



38



39



40

0 10cm

第23圖 第8号住居跡(5)

第9号住居跡（第24・25図）

<位置と確認> CZ・DA-103・104グリッドで暗褐色土の広がりを確認した。

<重複> 第85号住居跡より古く、第86号住居跡より新しいが、第8号住居跡とは不明である。調査時の所見では、第8号住居跡より古いものと思われる。

<平面形・規模> 短軸約3m50cm、長軸4m90cmの隅丸長方形を呈し、推定床面積は14.4㎡である。

<壁・床面> 壁高は東・南壁45～50cm、西壁30cm前後である。床面は、ほぼ平坦である。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 本住居跡内に6個、第85号住居跡と重複している部分で6個検出した。P₁・P₅・P₁₁と第85号住居跡内のP₁₂の4本柱が考えられる。また、このほかにもP₁とP₆を加えた6本柱の可能性も考えられる。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…35cm、P₂…28cm、P₃…23cm、P₄…72cm、P₅…66cm、P₆…30cm、P₇…69cm、P₈…20cm、P₉…58cm、P₁₀…18cm。

<炉> 第85号住居跡に切られているため、不明である。

<特殊施設> 東壁のほぼ中央にP₁～P₃のピットは半円状のロームの盛土が見られないが、特殊施設に見られるピットと思われる。

<堆積土> 下に黄褐色土の堆積が厚く見られることから、人為堆積と思われる。

<出土遺物> 覆土から土器は出土しなかった。石器は床面から不定形石器3点、床面直上から石槍1点、覆土から石鏃1点、不定形石器2点、が出土した。また、床面から珧状耳飾り1点が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は、第85号住居跡より古いことから、榎林式期か、それ以前と考えられる。(畠山 界)

第10号住居跡（第26・27図）

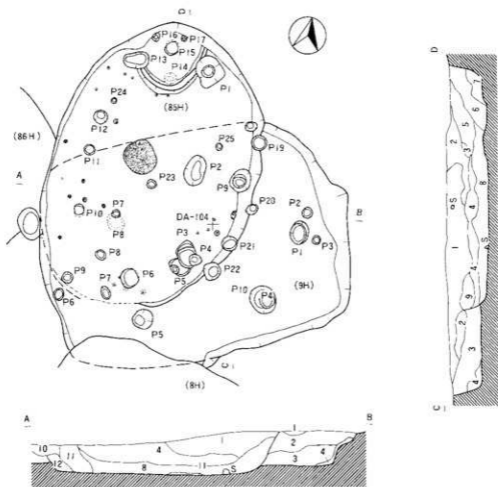
<位置と確認> CX・CY-106・107グリッドでいよいよ黄褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 平面形は短軸3m90cm、長軸4m40cmの楕円形を呈する。床面積は、12.80㎡である。

<壁・床面> 壁の立ち上がりは急で、壁高は北壁で45cm、南壁で37cm、東壁32cm、西壁47cmである。床面はほぼ平坦で、堅緻であるが、西側部分の床がテラス状に6～8cm一段高くなっているところがある。

<壁溝> 確認できなかった。

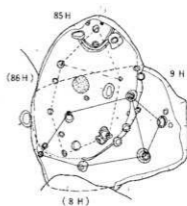


第9号住居跡土層注記

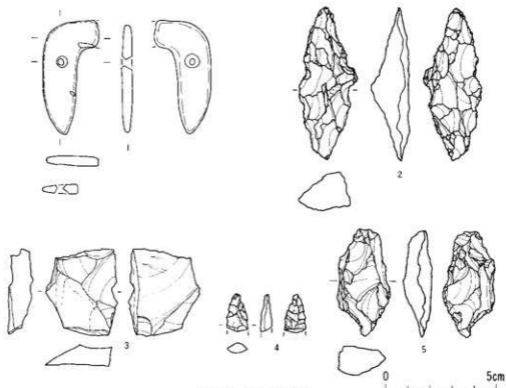
- 第1層 褐色土 IQYR4/4 ローム粒を少量含む。炭化物微量含む
- 第2層 暗褐色土 IQYR3/4 ローム粒、塊を多量に含む。炭化物微量含む
- 第3層 黄褐色土 IQYR5/6 ローム質
- 第4層 黄褐色土 IQYR5/6 ローム質、ローム粒、塊を多量に含む

第85号住居跡土層注記

- 第1層 褐色土 IQYR4/4 ローム粒を少量含む
- 第2層 に少し黄褐色土 IQYR4/3 炭化物を少量含む
- 第3層 に少し黄褐色土 IQYR5/4 炭化物を微量含む
- 第4層 黄褐色土 IQYR5/5 ローム粒を多量。炭化物、灰土粒を微量含む
- 第5層 暗褐色土 IQYR3/4 ローム粒、炭化物を微量含む
- 第6層 黄褐色土 IQYR5/6 炭化物を微量含む
- 第7層 黄褐色土 IQYR4/8 ローム質
- 第8層 褐色土 IQYR4/4 ローム粒を多量に含む
- 第9層 に少し黄褐色土 IQYR5/4 炭化物を微量含む
- 第10層 褐色土 IQYR4/6 ローム粒を少量含む
- 第11層 褐色土 IQYR4/4 ローム粒、塊を多量含む
- 第12層 黄褐色土 IQYR5/5 ローム粒、塊、炭化物を少量含む



第24図 第9・85号住居跡



第25図 第9号住居跡

〈柱穴〉 竪穴内からは大小合わせて16個のピットを検出した。柱穴配置は、以下の2例が考えられる。

A. P₁、P₃、P₅、P₁₀、P₁₁

B. P₂、P₄、P₆、P₉、P₁₁

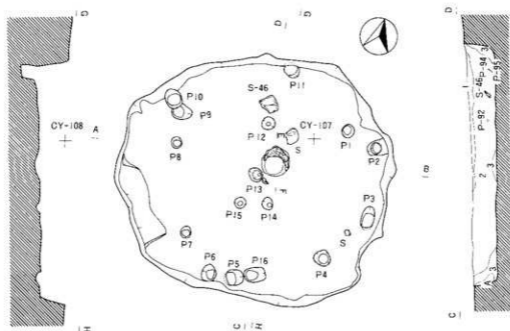
このうち、P₉には上部にロームの貼床が施されていたことから、前者の組み合わせが新しものと考えられ、柱の建て替えがなされたものと考えられる。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…71cm、P₂…42cm、P₃…28cm、P₄…28cm、P₅…43cm、P₆…28cm、P₇…10cm、P₈…16cm、P₉…18cm、P₁₀…38cm、P₁₁…27cm、P₁₂…13cm、P₁₃…8cm、P₁₄…11cm、P₁₅…9cm、P₁₆…10cm。

〈炉〉 中央よりやや北側に寄った所で地床炉を検出した。床面から6cmくぼんでいる。また、すぐ南側に焼土がわずかに見られ、建て替え前の炉と思われる。

〈特殊施設〉 確認できなかった。

〈堆積土〉 3層に区分できたが、堆積土の主体は炭化物を多量に含んだ黄褐色土であり、人為堆積の様相を呈している。



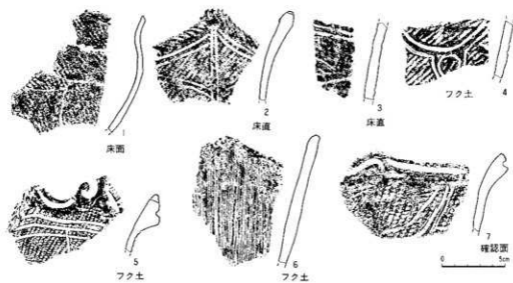
第10号住居跡土層注記

- 第1層 ぬい黄褐色土 10YR6/4 しまりなく、脆い
- 第2層 ぬい黄褐色土 10YR6/4 堅く、しまっている。炭化物を多量に含む
- 第3層 明黄褐色土 10YR6/6 堅く、しまっている
- 第4層 暗褐色土 10YR3/3 間層、しまりある

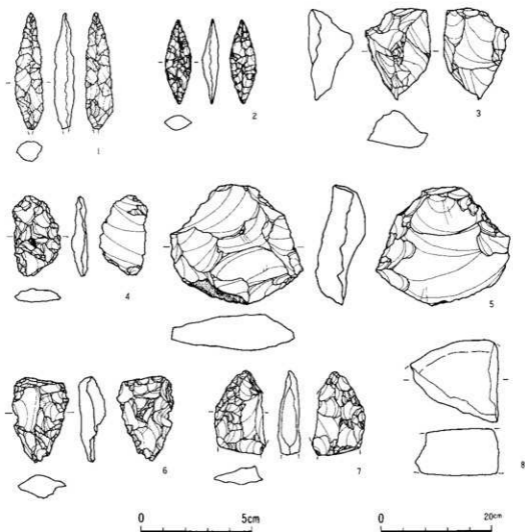
炉土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3
- 第2層 黄褐色土 10YR5/8

0 2m



第26図 第10号住居跡(1)



第27図 第10号住居跡(2)

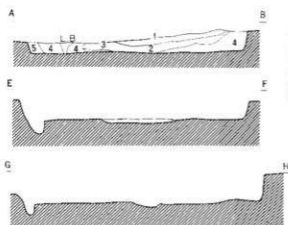
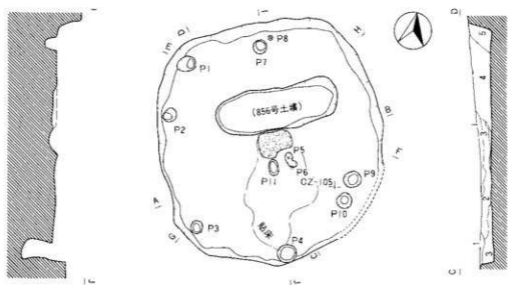
<出土遺物> 覆土及び床面直上から若干の遺物が出土した。石器は床面から、石鎌1点、不定形石器3点、覆土から石鎌2点、石槍1点、不定形石器9点、石皿1点が出土し、総数17点である。また覆土から、軽石が出土した。

<小結> 本住居跡の構築時期は、明確にはできないが、床面直上から出土した土器から、円筒上層e式から榎林式期のあたりと思われる。(畠山 昇)

第11号住居跡 (第28・29図)

<位置と確認> CY・CZ-105グリッドに位置する。

<重複> 第856号土壇と重複しているが、新旧関係は不明である。また第8号住居跡とは南東壁が接しているが、新旧関係は不明である。

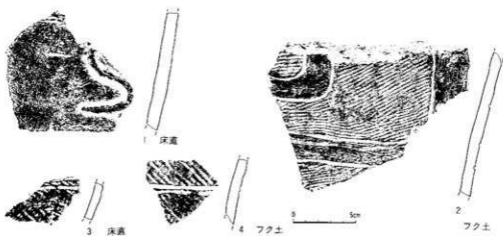


第11号住居跡土層注記

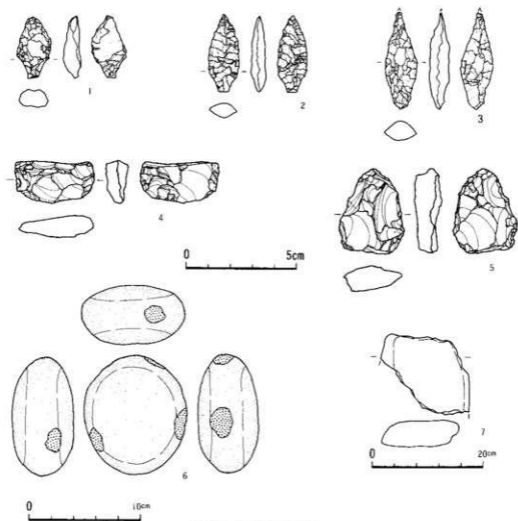
- 第1層 褐色土 10YR4/6 ローム質シルト
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒を多量に含む
- 第4層 黄褐色土 10YR5/6
- 第5層 褐色土 10YR4/6 ローム質



0 2m



第28図 第11号住居跡(1)



第29図 第11号住居跡②

<平面形・規模> 平面形は、ほぼ南北に長軸を持つ四丸方形ないしは若干歪んだ五角形プランを呈し、短軸3m60cm、長軸3m91cmの規模である。床面積は10.48㎡である。

<壁・床面> 北壁38cm、西壁22cm、東壁27cm、南壁20cmの壁高で、立ち上がりは急である。床面はほぼ平坦で、堅緻である。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 大小合わせて12個のビットを検出した。このうち主柱穴と思われるのは、 P_1 ・ P_3 ・ P_{10} （または P_9 ）と思われる。これに対応する北東隅には検出できなかったが、4本柱であった可能性と、これに P_4 と P_7 が組み合わさった6本柱の可能性の二つが考えられる。ただ、 P_4 はやや外側へ張り出したところにあつて、特殊施設に伴うビットの可能性も考えられる。主な

ピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…22cm、P₂…12cm、P₃…17cm、P₄…51cm、P₅…20cm、P₆…6cm、P₁₀…12cm。

<炉> ほぼ中央に位置する。地床炉で5cm程くぼんでいる。

<特殊施設> P₁はやや外側へ張り出したところであって、特殊施設に伴うピットの可能性も考えられる。

<堆積土> 5層に区分できた。褐色土、暗褐色土、黄褐色土が堆積土の大半を占めている。

<出土遺物> 遺物の出土は少なかった。土器は覆土及び床面直上から若干出土したのみである。石器は床面から石鏃2点、床面直上から石鏃1点、不定形石器5点、敲磨器類1点、石皿1点、覆土から不定形石器2点が出土し、総数12点である。

<小結> 本住居跡の構築時期は、縄文時代中期後葉のものであるが、明確な時期は不明である。
(畠山 昇)

第12号住居跡 (第16図)

<位置と確認> CX-102グリッドで、第7号住居跡の調査中に本住居跡を確認した。

<重複> 第7号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。

<平面形・規模> 北東～南西に主軸を持つ隅丸長方形を呈し、長軸3m68cm、短軸2m85cmである。床面積は、7.52㎡である。

<壁・床面> 地山からの掘り込みが浅く、壁高は17cm前後しかない。第7号住居跡床面からは約10cm下位にある。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 7個検出した。第7号住居跡に伴うものもあると思われるが、P₁、P₃、P₇が柱穴の可能性が考えられる。ピットの深さは、P₁…6cm、P₂…30cm、P₃…44cm、P₄…13cm、P₅…6cm、P₆…22cm、P₇…20cmである。

<炉> 確認できなかった。

<付属施設> 確認できなかった。

<堆積土> 褐色土を主体とした堆積が見られるが、南東部分では、上位からの黒褐色土が本住居跡床面に連続するようで見られることから、第7号住居跡の廃絶後に何らかの攪乱(現在ではなく)を受けた可能性が考えられる。

<特殊施設> 遺物は出土しなかった。

<小結> 上位に検出した第7号住居跡の構築時期は、P1筒上層d式の後半期と考えられることから、本住居跡はそれ以前のものといえることができる。
(畠山 昇)

第13号住居跡（第30図）

〈位置と確認〉 CY-98グリッドに位置する。

〈重複〉 風倒木と重複している。

〈平面形・規模〉 攪乱により不明である。

〈壁・床面〉 壁は削平され、床面は焼土の付近で検出した。

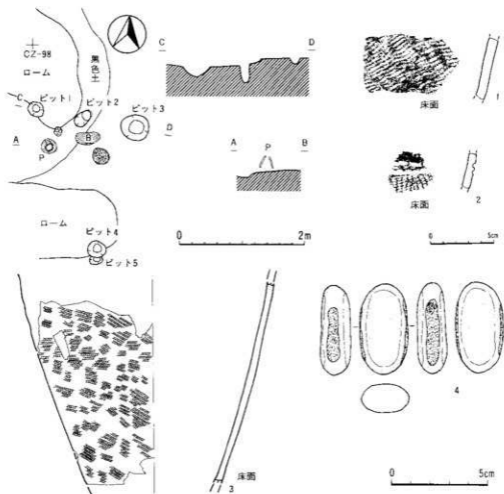
〈壁溝〉 確認されなかった。

〈柱穴〉 焼土の付近から5個のビットを検出した。各ビットの深さはP₁…12cm、P₂…26cm、P₃…10cm、P₄…103cm、P₅…52cmである。

〈炉〉 風倒木痕の南東側に直径24cmのほぼ円形の焼土が認められる。

〈特殊施設〉 確認されなかった。

〈堆積土〉 確認できなかった。



第30図 第13号住居跡

<出土遺物> 土器はすべて床面から出土し、(3)は倒立の状態で出土した。石器は床面から敲磨器類1点が出土した。

<小結> 床面から出土した土器(2)から最花式期の住居跡と考えられる。(長崎 勝巳)

第14号住居跡(第31・32図)

<位置と確認> C Y・C Z-102・103グリッドに位置し、暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 下面に第20・146・147号住居跡と重複し本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 壁が削平されて不明である。

<壁・床面> 壁は確認できず、床面も炉の近辺及び北側の一部でしか確認できなかった。北側が、やや高くなっている。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 確認できなかった。

<炉> C Z-103グリッド北側で石囲炉を1基検出し、石囲炉の礎は2個であるが、抜き取り痕は確認できなかった。その他に焼土2基が検出された。

<特殊施設> 確認できなかった。

<堆積土> 暗褐色土で炭化物を微量、ローム粒を少量含む層である。

<出土遺物> 土器は床面から(1~8)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃4点、不定形石器2点、敲磨器類1点、石製品(21)1点、覆土から石鏃1点、不定形石器2点出土した。

<小結> 床面の土器から榎林式期の住居跡と考えられる。(長崎 勝巳)

第20号住居跡(第33~38図)

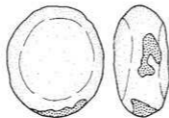
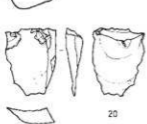
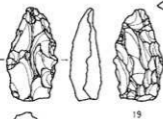
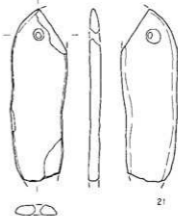
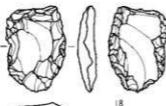
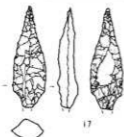
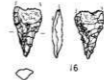
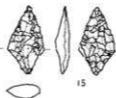
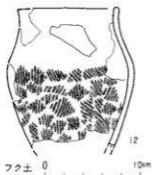
<位置と確認> C Z・DA-102・103グリッドに位置し、第14号住居跡の床面の下で確認した。

<重複> 第14・50・146・147号住居跡、第319号土壌と重複し、第14号住居跡より古く、他の住居跡よりも新しい。

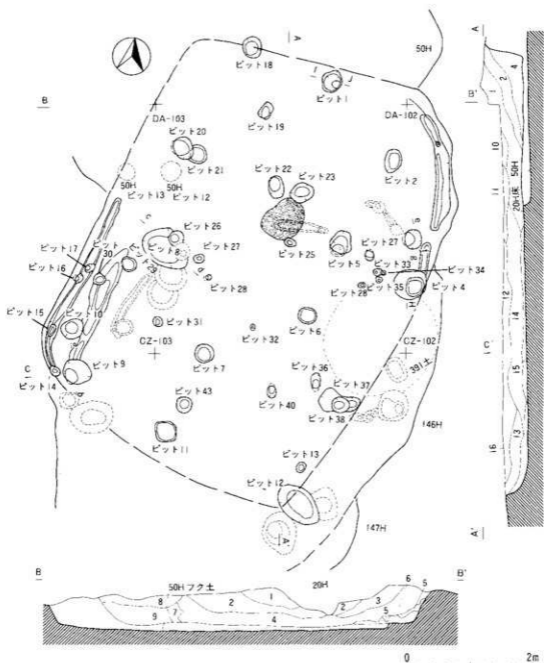
<平面形・規模> 長軸7m、短軸5mの隅丸長方形になるものと考えられる。床面積は29.4㎡である。

<壁・床面> 南・北壁は重複で削平されて、東壁38cm、西壁17cmである。床面は1~5cm程の貼り床が施され、やや起伏があり10cm程の高低差がある。

<壁溝> 東壁から1条、西壁から内側と外側の2条検出した。外側は幅10~14cm、深さ6~8cm、内側は幅8~10cm、深さ14~20cmである。壁溝内ピットも検出され、深さは10~28cmであ



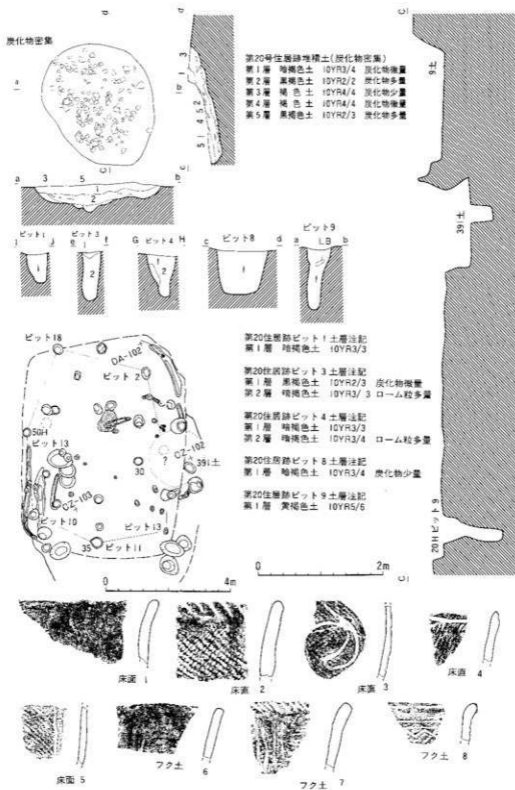
第32図 第14号住居跡2)



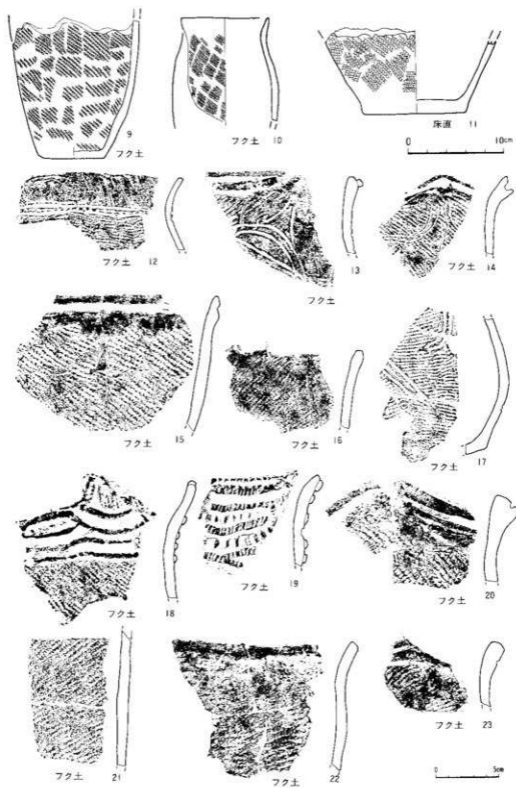
第20号住居跡土層注記

第1層	暗褐色	IOYR3/3	炭化物少量・ローム粒少量	第9層	暗褐色	IOYR3/3	炭化物微量・ローム粒微量
第2層	褐色	IOYR4/4	炭化物微量・ローム粒微量	第10層	にぶい黄褐色	IOYR4/3	炭化物微量・
第3層	暗褐色	IOYR3/4	炭化物微量・ローム粒少量	第11層	褐色	IOYR4/4	炭化物少量・ローム粒少量
第4層	暗褐色	IOYR3/3	炭化物微量・ローム粒少量	第12層	褐色	IOYR4/6	炭化物微量・
第5層	褐色	IOYR4/6	ロームブロックを含む	第13層	黒褐色	IOYR3/2	炭化物微量・ローム粒少量
第6層	褐色	IOYR4/6	黒褐色土IOYR3/2の土を含む	第14層	暗褐色	IOYR3/3	炭化物少量・ローム粒少量
第7層	褐色	IOYR4/4	炭化物少量・ローム粒多量	第15層	暗褐色	IOYR3/3	ローム粒微量
第8層	褐色	IOYR4/4	炭化物微量・ローム粒多量	第16層	黒褐色	IOYR3/2	ローム粒少量

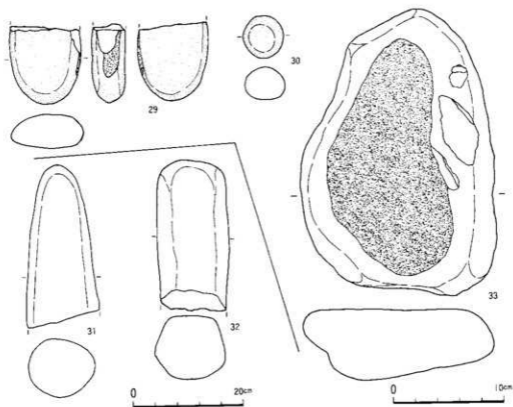
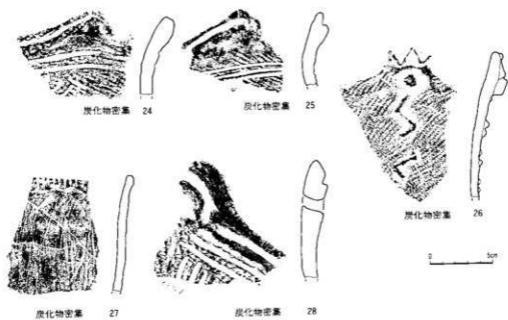
第33図 第20号住居跡(1)



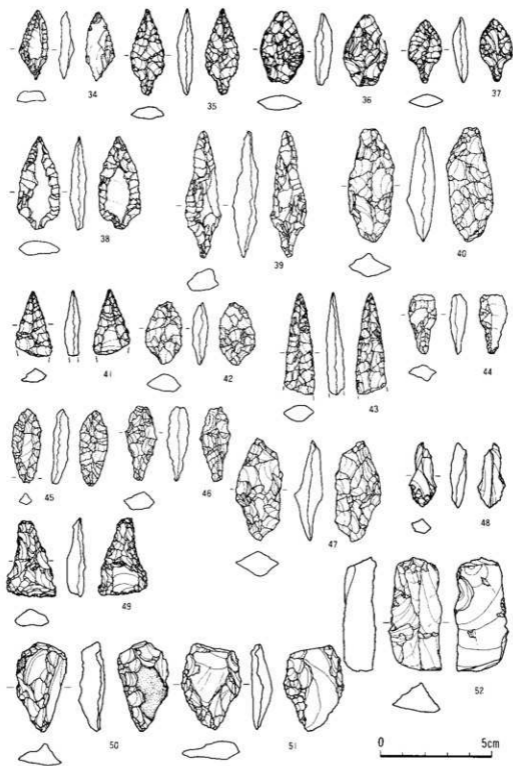
第34図 第20号住居跡2)



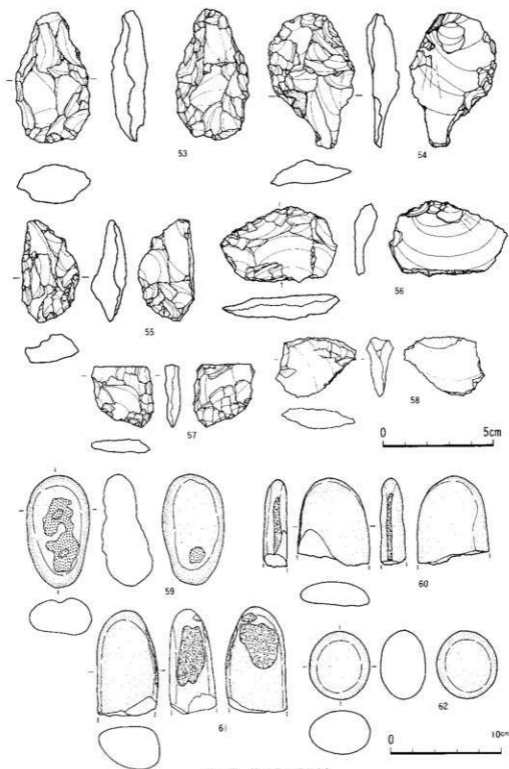
第35図 第20号住居跡(3)



第36图 第20号住居跡(4)



第37图 第20号住居跡(5)



第38图 第20号住居跡(6)

る。

＜柱穴＞ ビットは床面、床下から大小合わせて41個検出した。主柱穴はP₂・P₁₆・P₁₁・P₁₃・P₁₈・第50号住居跡P₁₂と第391号土壇内に存在したと考えられる。各ビットの深さは、P₁…61cm、P₂…38cm、P₃…74cm、P₄…72cm、P₅…60cm、P₆…31cm、P₇…24cm、P₈…70cm、P₉…99cm、P₁₀…44cm、P₁₁…35cm、P₁₂…102cm、P₁₃…11cm、P₁₄…33cm、P₁₅…12cm、P₁₆…4cm、P₁₇…28cm、P₁₈…22cm、P₁₉…42cm、P₂₀…67cm、P₂₁…68cm、P₂₂…80cm、P₂₃…66cm、P₂₄…18cm、P₂₅…5cm、P₂₆…30cm、P₂₇…18cm、P₂₈…4cm、P₂₉…19cm、P₃₀…77cm、P₃₁…12cm、P₃₂…5cm、P₃₃…3cm、P₃₄…3cm、P₃₅…5cm、P₃₆…6cm、P₃₇…17cm、P₃₈…78cm、P₃₉…15cm、P₄₀…21cm、P₄₁…32cmである。

＜炉＞ 住居の中央からやや南側に位置する。70×60cmの楕円形の地床炉である。焼土の厚さは3～5cmである。

＜特殊施設＞ 確認されなかった。

＜堆積土＞ 16層に分層され、褐色土を主体とする。堆積状況から人為的な様相を呈する。上部堆積土において、炭化物を多量に含む層（土器片・石器なども多く含む）が検出された。南北セクションでの傾斜のしかた及び2層、5層、床面での締まりのなさなどから廃棄された可能性がある。

＜出土遺物＞ 土器は床面・床面直上から（1～5・11）が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃2点、覆土から石鏃16点、石槍1点、石錐4点、不定形石器32点、敲磨器類6点、石棒2点、磨製石斧3点、石皿2点、石製品（甕石）3点が出土し、総数71点である。

＜小結＞ 床面出土の土器から榎林式期の住居跡と考えられる。また西壁内外から2条の壁溝が検出されており、建替が行われた可能性がある。（長崎 勝巳）

第21号住居跡（第39・40図）

＜位置と確認＞ CW・CX-104・105グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

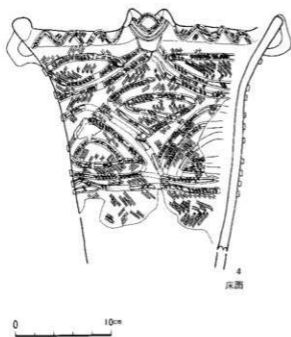
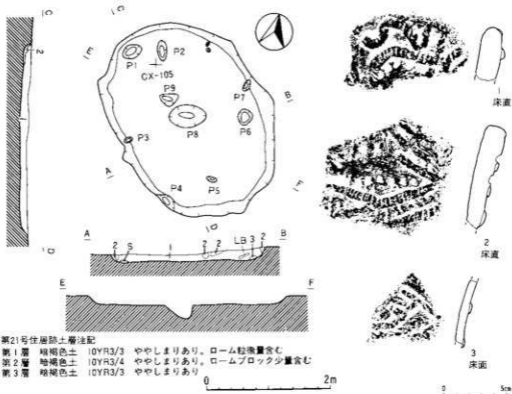
＜重複＞ 確認できなかった。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形を呈し、規模は短軸2 m 37cm、長軸3 m 40cmである。床面積は5.41㎡である。

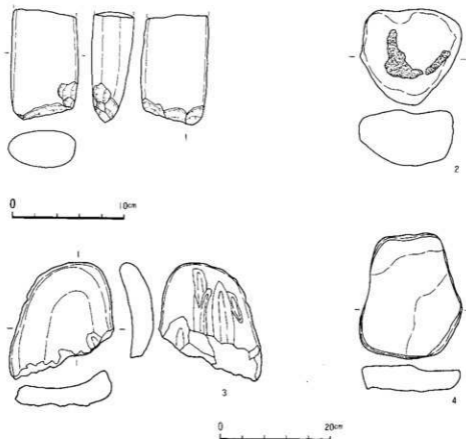
＜壁・床面＞ 床面はほぼ平坦で、堅緻である。壁高は、南壁14cm、北壁14cm、東壁20cm、西壁13cmである。

＜壁溝＞ 検出できなかった。

＜柱穴＞ 大小合わせて約11個のビットを検出した。主なビットの深さは以下のとおりである。



第39図 第21号住居跡(1)



第40図 第21号住居跡(2)

P₁…33cm, P₂…8cm, P₃…5cm, P₄…9cm, P₅…7cm, P₆…15cm, P₇…9cm, P₈…30cm, P₉…9cm。

<炉> 検出できなかった。

<特殊施設> 長軸の北西壁寄りに検出したピット(P₁)には、半円状に巡らされたロームの盛土は見られなかったが、特殊施設の可能性が考えられる。

<堆積土> 暗褐色土を主体とした堆積土が見られた。

<出土遺物> 床面及び床面直上から若干の遺物が出土した。土器は床面から円筒上層d式土器が出土した。石器は、床面から不定形石器7点、石皿1点、床面直上から石皿1点が出土し、総数9点である。

<小結> 本住居跡の時期は、円筒上層d式期である。

(畠山 昇)

第22号住居跡（第41・42図）

〈位置と確認〉 CU-106グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。黒褐色～暗褐色土中に掘り込まれているため、粗掘りの段階で大半を失っており、全体の4分の1を確認できたにすぎない。

〈重複〉 確認できなかった。

〈平面形・規模〉 不明である。

〈壁・床面〉 壁は、確認出来た部分（南壁）で36cmの壁高で、立ち上がりは急である。床面は、ほぼ平坦であるが、第ⅡB層を床面としているため、いくぶん軟らかである。

〈壁溝〉 不明である。

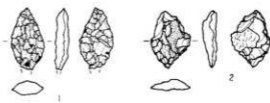
〈柱穴〉 1個のみ検出した。約7cmの深さで浅いピットである。

〈炉〉 不明である。

〈特殊施設〉 不明である。

〈堆積土〉 ローム粒を含んだ暗褐色土の堆積が見られた。

〈出土遺物〉 覆土から床面にかけて若干の遺物が出土した。土器は床面直上から円筒上層d・e式土器が出土している。石器は床面から、不定形石器1点、覆土から石鏃2点、不定形石器2点が出土し、総数5点である。



第41図 第22号住居跡(1)

〈小結〉 床面からの出土土器はなく、明確な時期は不明であるが、本住居は円筒上層d式からe式期にかけてのものと思われる。（晶山 昇）

第23号住居跡（第43～49図）

〈位置と確認〉 CU-106・107グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。粗掘り中に確認したもので、全体の半分程を確認したにすぎない。

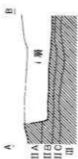
〈重複〉 西側を第24号住居跡と重複しており、本住居跡の方が古い。

〈平面形・規模〉 不明である。

〈壁・床面〉 壁は確認できなかったので不明である。第ⅡC層を床面としており、床面は、ほぼ平坦である。

〈壁溝〉 検出できなかった。

〈柱穴〉 床面及び住居の範囲に含まれると思われる部分から、6個のピットを検出したが柱



第22号住居跡土層注記

第I層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒を多く含む
炭化物を微量含む

0 2m

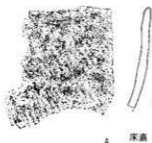


床裏



床裏

床裏



4

床裏



6

フク土



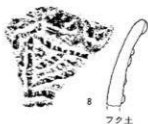
7

フク土



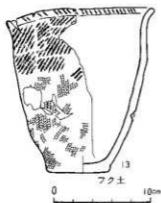
5

フク土



8

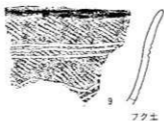
フク土



13

フク土

0 10cm



9

フク土



10

フク土



11

床裏



12

フク土

0 5cm

第42図 第22号住居跡(2)

穴配置は不明である。ピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…14cm、P₂…38cm、P₃…22cm、P₄…33cm、P₅…25cm、P₆…62cm。

<炉> ほぼ中央と思われる位置から土器埋設炉、この西側から地床炉を検出した。地床炉は焼土（火床面）を2枚確認した。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> ローム粒・炭化物を含んだ暗褐色～黒褐色土を主体とした堆積が見られた。

<出土遺物> 覆土からは多量の遺物が出土しているが、粗掘りの段階で、グリッドの遺物として取り上げたものも多い。床面及び床面直上からもやや多量の遺物が出土した。土器は円筒上層d式から榎林式土器及び大木式8a式土器が出土した。石器は床面から不定形石器7点、異形石器1点、石皿1点、敲磨器類1点、床面直上からピエス・エスキュー1点、不定形石器3点、覆土から不定形石器14点、敲磨器類3点が出土し、総数32点である。また石製品（軽石）が覆土から1点出土した。

<小結> 本住居は粗掘りの段階で多くを失ってしまったことと、全体の半分位しか確認できなかった。また、第II B層を床面としているため、床面の確認が難しかった。確認できた床面から地床炉と土器埋設炉を検出した。地床炉は2枚の火床面を確認しており、建て替えの可能性も考えられたが、確認することはできなかった。本住居跡の構築時期は、床面から出土した土器及び炉に転用された土器から、榎林式期に相当すると考えられる。（島山 昇）

第24号住居跡（第50～55図）

<位置と確認> CT-107・108グリッドで、暗褐色土の落ち込みを確認した。調査したところ、2軒の住居跡の重複しているのを検出した。

<重複> 第23号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。

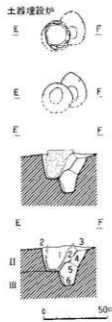
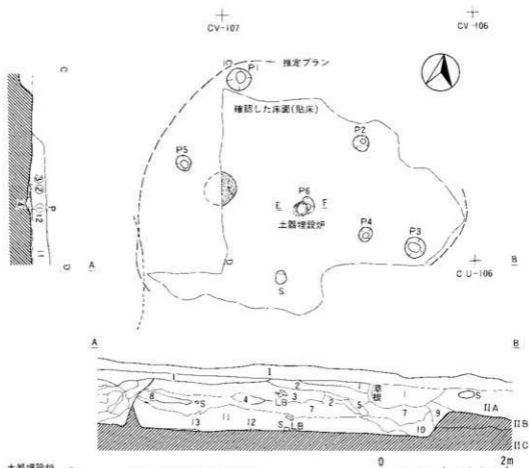
<平面形・規模> 重複部分でうまくプランを把握出来なかったが、確認出来た部分から推定して、平面形は楕円形を呈し、推定規模は、短軸約1 m80cm、長軸約2 m40cm前後である。

<壁・床面> 壁は急に立ち上がり、東西の壁高は60～70cm前後である。床面は、ほぼ平坦である。

<壁溝> 西壁下に幅約10cm、深さ5～7cmの壁溝を検出した。

<柱穴> 大小合わせて、22個検出した。このうち、柱穴と考えられるのはP₁・P₃・P₅・P₉である。P₁はピットの周囲に柱を押えるためのロームを確認している。主なピットの深さは以下のとおりである。

P₁…63cm、P₂…16cm、P₃…66cm、P₄…17cm、P₅…82cm、P₆…25cm、P₇…25cm、P₈…46cm、P₉…5cm、P₁₀…20cm、P₁₁…10cm、P₁₂…49cm、P₁₃…19cm、P₁₄…21cm。



第23号住居跡土層注記(A-B)

- | | | | |
|------|------|---------|-------------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | やや硬く、しまり弱い。ローム粒を若干含む |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | やや硬く、しまり弱い。ローム粒を若干含む |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | やや軟らかく、しまり弱い。ローム粒・炭化物を少量含む |
| 第4層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | やや軟らかく、しまり弱い。ローム粒を多量に含む |
| 第5層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 軟らかく、しまり弱い |
| 第6層 | 褐色土 | 10YR4/4 | ロームブロックの集合。軟らかく、しまりない |
| 第7層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 軟らかく、しまりない。ローム粒・炭化物・焼土粒を微量含む |
| 第8層 | 褐色土 | 10YR4/6 | やや硬く、しまりある。ローム質 |
| 第9層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 軟らかく、しまりない |
| 第10層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 軟らかく、しまりない |
| 第11層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を若干含む。獣骨片を若干含む |
| 第12層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 硬い。貼床 |
| 第13層 | 黄褐色土 | 10YR5/8 | ロームの貼床。硬い |

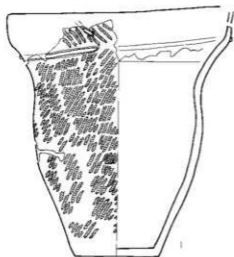
第23号住居跡土層注記(C-D)

- | | | | |
|-----|-------|---------|------------|
| 第①層 | 明赤褐色土 | 5YR5/8 | 焼土。硬い |
| 第②層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 軟らかく、しまりない |
| 第③層 | 明赤褐色土 | 5YR5/8 | 焼土。硬い |
| 第④層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 軟らかく、しまりない |

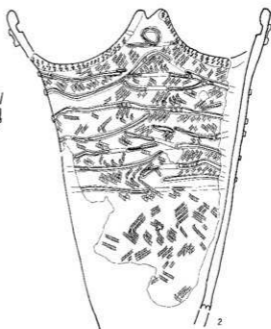
第23号住居、土器埋設炉・ピット6土層注記(E-F)

- | | | | |
|-----|------|---------|-----------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 軟らかく、しまりない。焼土粒を多く含む |
| 第2層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 軟らかく、しまり弱い。焼土を上部に若干含む |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | やや硬く、しまりある。貼床 |
| 第4層 | 黒色土 | 10YR2/1 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を微量含む |
| 第5層 | 黒褐色土 | 10YR2/3 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を微量含む |
| 第6層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を多量に含む |

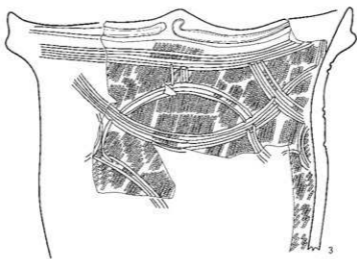
第43図 第23号住居跡(1)



1
炉体土器

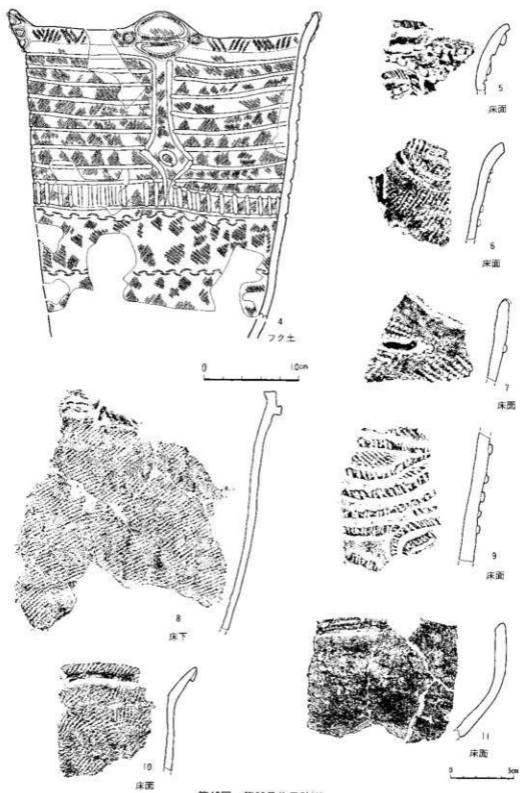


2
フク土

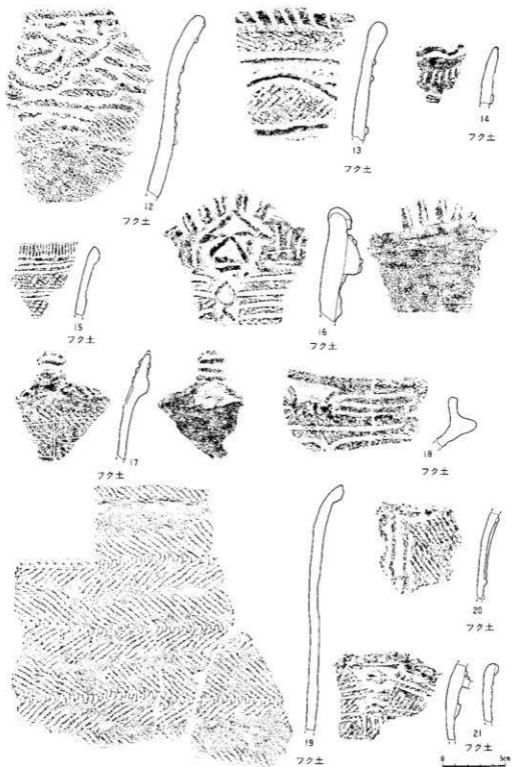


3
床面
0 10cm

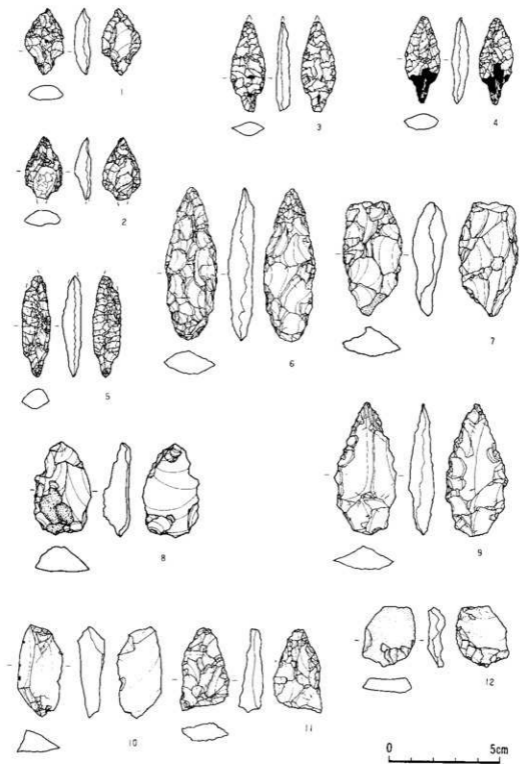
第44図 第23号住居跡(2)



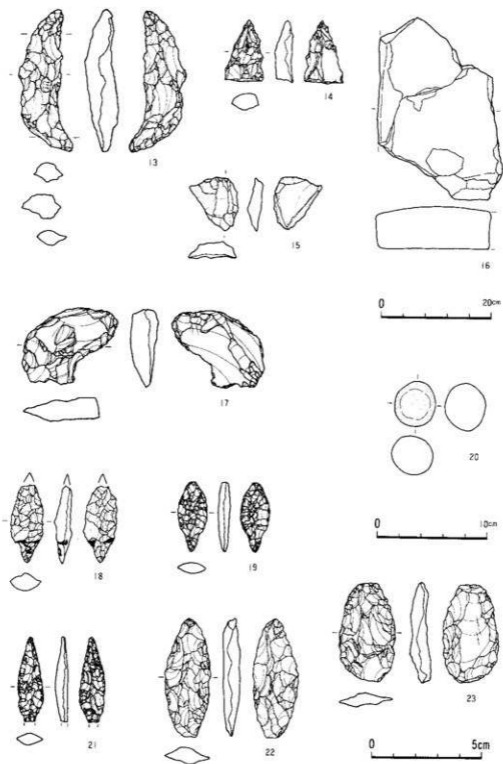
第45図 第23号住居跡(3)



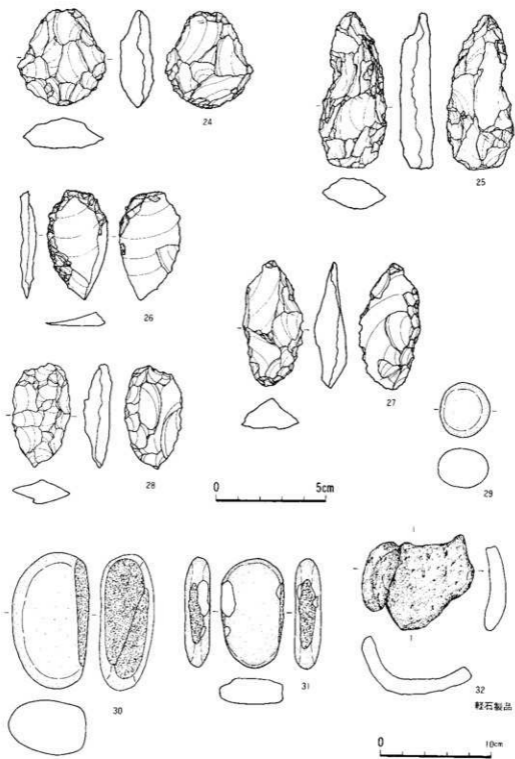
第46図 第23号住居跡(4)



第47图 第23号住居跡(5)



第48图 第23号住居跡(6)



第49図 第23号住居跡(7)

<炉> 住居中央から南側に寄ったところで地床炉を検出した。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 18層に区分できた。ローム粒・炭化物・焼土粒を含んだ黒褐色～暗褐色土の堆積が主体であるが、中に黄褐色土の堆積が見られた。

<出土遺物> 覆土からは多量の遺物が出土しているが、粗掘りの段階で、グリッドの遺物として取り上げたものも多い。床面及び床面直上からも、やや多量の遺物が出土した。土器は円筒上層d式から榎林式・大木8a式にかけてのものが出土した。石器は床面から石鏃2点、石槍1点、不定形石器5点、石皿1点、床面直上から石槍3点、不定形石器17点、敲磨器類4点、覆土から石鏃8点、石槍3点、不定形石器4点、敲磨器類4点、ピットから不定形石器7点が出土し、総数69点である。また覆土から、石冠1点(第55図34)、礫器1点が出土した。

<小結> 本住居跡の構築時期は、床面からの出土土器がなく、明確な時期決定ができないが、重複関係にある第23号住居跡より新しいことから、榎林式期かそれ以後に構築されたものと考えられる。(畠山 昇)

第25号住居跡(第56・58図)

<位置と確認> CV・CW-107・108グリッドで、暗褐色土の落ち込みを確認した。調査したところ、3軒の住居跡が重複していることを確認した。

<重複> 第26・27号住居跡と重複しており、本住居跡の方が新しい。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は短軸約2m40cm(推定)、長軸約2m55cmである。推定床面積は4.26㎡である。

<壁・床面> 地山からの掘り込みが浅い住居跡で、周辺の壁高は20cm前後である。床面は、ほぼ平坦である。

<壁溝> 検出できなかった。

<柱穴> 10個のピット検出したが、柱穴配置は不明である。ピットの深さは以下のとおりである。

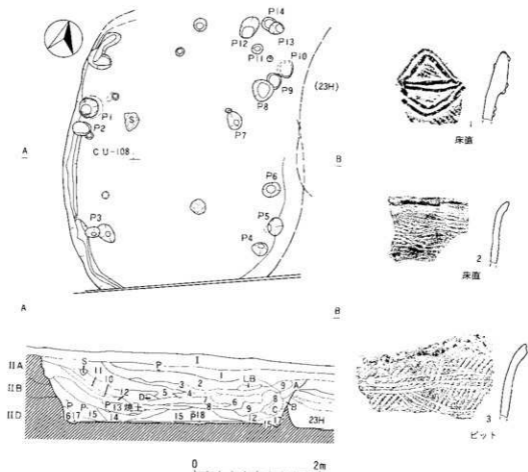
P₁…6cm、P₂…7cm、P₃…15cm、P₄…28cm、P₅…23cm、P₆…18cm、P₇…4cm、P₈…17cm、P₉…32cm、P₁₀…33cm。

<炉> 住居のほぼ中央に検出した。地床炉で、若干くぼんでいる。

<特殊施設> 北壁が半円状に張り出し、その内側に浅いピット(P₁)が検出されている。

<堆積土> 5層に区分できたが、締まりのない暗褐色土を主体とした堆積が見られた。

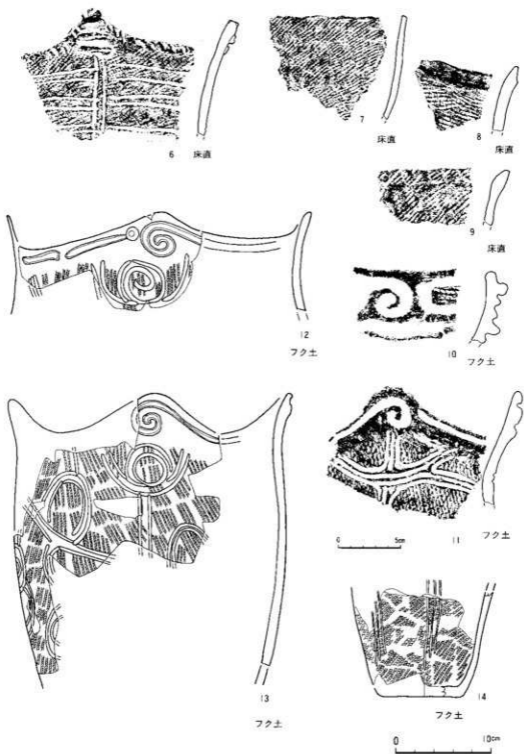
<出土遺物> 遺物の出土はあまり見られなかった。石器は、床面から石鏃2点、敲磨器類1点、床面直上から不定形石器2点、覆土から不定形石器3点が出土し、総数8点である。



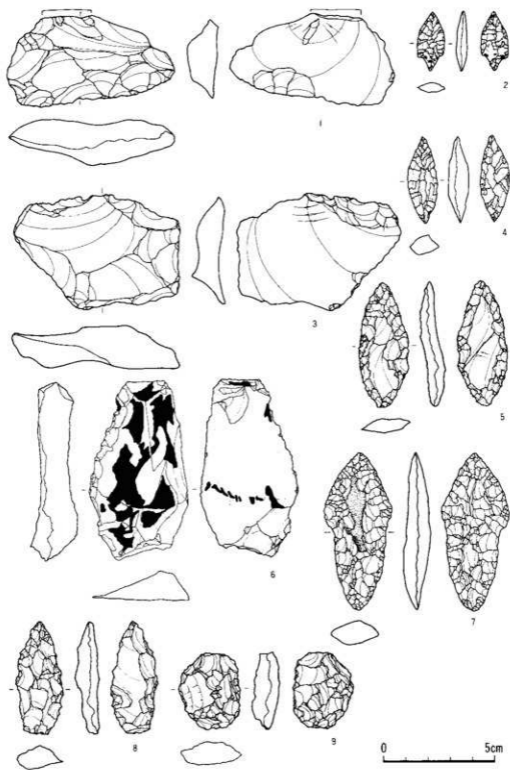
第24号住居跡土層注記

- | | | | |
|------|------|--------|-------------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | やや硬く、しまりある。ローム粒を若干含む |
| 第2層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | 硬く、しまっている。ローム粒・炭化物・焼土粒を若干含む |
| 第3層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | 硬く、しまっている。ローム粒を少量含む |
| 第4層 | 褐色土 | OYR4/4 | やや軟らかく、しまり弱い。ローム粒・炭化物を若干含む |
| 第5層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | やや硬く、しまり強い。ローム粒・炭化物を若干含む |
| 第6層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | やや軟らかく、しまり弱い。焼土を多く含む。ローム質土 |
| 第7層 | 黄褐色土 | OYR5/8 | ローム主体。やや硬く、しまり強い。炭化物を若干含む |
| 第8層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | やや軟らかく、しまり強い。ローム粒・炭化物を若干含む |
| 第9層 | 黄褐色土 | OYR5/8 | ローム主体。7層とほぼ同じ |
| 第10層 | 暗褐色土 | OYR3/3 | やや軟らかく、しまり弱い。ローム粒・炭化物を若干含む |
| 第11層 | 黒褐色土 | OYR3/2 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を微量含む |
| 第12層 | 暗褐色土 | OYR3/3 | やや軟らかく、しまりない。ローム粒を多量。炭化物を若干含む |
| 第13層 | 褐色土 | OYR4/4 | 軟らかく、しまりない。ローム粒・焼土粒を多く含む |
| 第14層 | 暗褐色土 | OYR3/3 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を多量。炭化物を若干含む |
| 第15層 | 黒褐色土 | OYR3/2 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を若干含む |
| 第16層 | 黒褐色土 | OYR3/2 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を若干含む |
| 第17層 | 褐色土 | OYR4/6 | 軟らかく、しまりない |
| 第18層 | 暗褐色土 | OYR3/3 | |
| 第A層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | やや硬く、しまっている。ローム粒を若干含む |
| 第B層 | 暗褐色土 | OYR3/4 | A層よりローム粒の量は少ない |
| 第C層 | 黒褐色土 | OYR3/2 | 軟らかく、しまりない |
| 第D層 | 褐色土 | OYR4/4 | 軟らかく、しまりない |

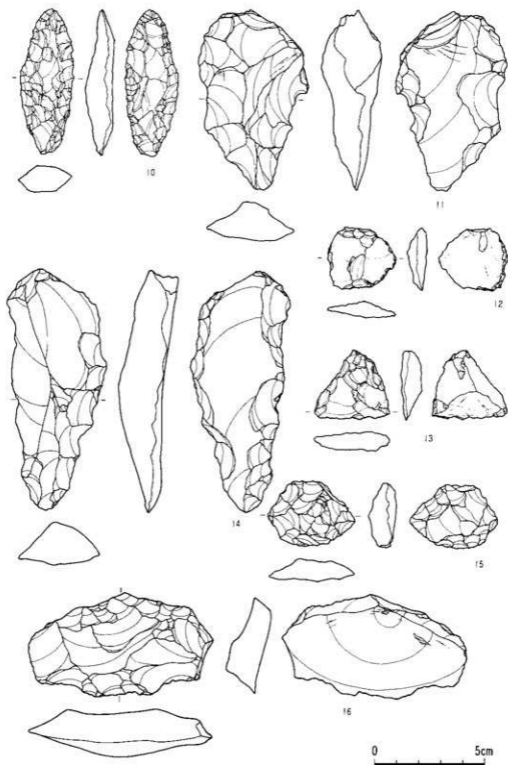
第50図 第24号住居跡(1)



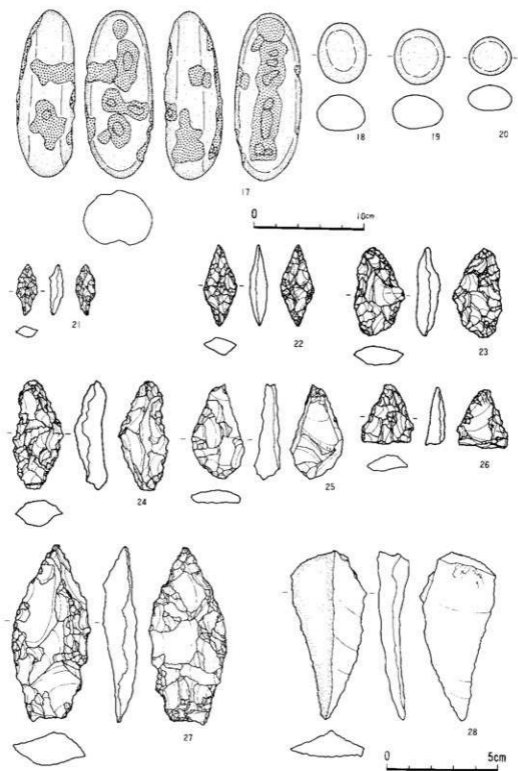
第51図 第24号住居跡(2)



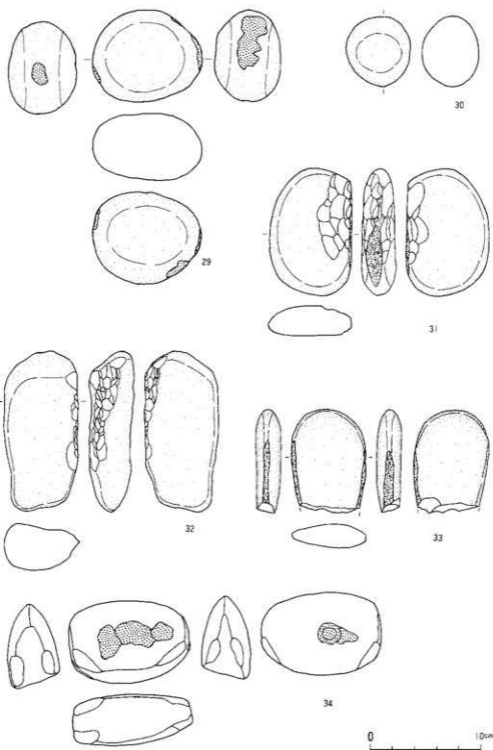
第52图 第24号住居跡(3)



第53图 第24号住居跡(4)



第54图 第24号住居跡(5)



第55图 第24号住居跡(6)

<小結> 床面から出土した土器がないため、明確な時期決定ができないが、床面直上から出土した土器から、本住居跡の構築時期は榎林式期と思われる。(畠山 昇)

第26号住居跡 (第56・57図)

<位置と確認> CV・CW-107・108グリッドで、暗褐色土の落ち込みを確認した。調査したところ、3軒の住居跡の重複していることを確認した。

<重複> 第25号住居跡より古いが、第27号住居跡とは新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 平面形は隅丸方形を呈し、規模は短軸約2m28cm、長軸約2m32cmである。推定床面積は4.5㎡である。

<壁・床面> 地山からの掘り込みが浅い住居跡で、周辺の壁高は10cm前後である。床面にはやや凹凸が認められた。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 12個のピット検出したが、柱穴配置は不明である。ピットの深さは、P₁₆…11cm、P₁₇…18cm、P₁₈…51cm、P₁₉…52cm、P₂₀…37cm、P₂₁…11cm、P₂₂…9cm、P₂₃…56cm、P₂₄…55cm、P₂₅…45cm、P₂₆…49cm、P₂₇…48cmである。

<炉> 住居のほぼ中央に検出した。地床炉で、若干くぼんでいる。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 暗褐色土を主体とした堆積が見られた。

<出土遺物> 覆土から床面にかけて若干の遺物が出土した。土器は数片の破片が出土したに過ぎない。石器は床面から石鏃2点、不定形石器3点、覆土から不定形石器1点の出土で、総数6点である。

<小結> 床面から出土した土器がないため、本住居の時期は不明であるが、第25号住居跡より古いことから、榎林式期より古い時期が考えられる。(畠山 昇)

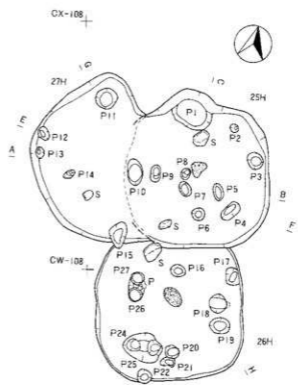
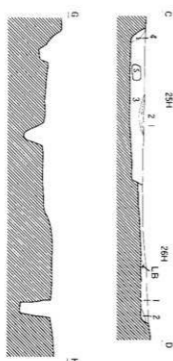
第27号住居跡 (第56・57図)

<位置と確認> CV・CW-107・108グリッドで、暗褐色土の落ち込みを確認した。調査したところ、3軒の住居跡が重複していることを確認した。

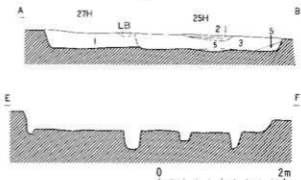
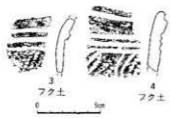
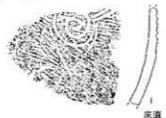
<重複> 第25号住居跡より古いが、第26号住居跡との新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 東側が第25号住居跡に壊されているため全体形は不明であるが、確認できた部分から推定して、不整形円形を呈するものと思われる。規模は短軸約2m前後(推定)、長軸2m70cmである。

<壁・床面> 地山からの掘り込みの浅い住居跡で、各壁高は20～25cmである。床面には凹凸



第25号住居跡出土土器



第25号住居跡土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4 やや硬く、しまり弱い。ローム粒を多量に含む
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 軟らかく、しまりない。炭化物を多量に含む
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 やや軟らかく、しまりない
- 第4層 黄褐色土 10YR5/6 硬く、しまりある。ローム主体
- 第5層 黒褐色土 10YR2/3 軟らかく、しまりない

第26号住居跡土層注記

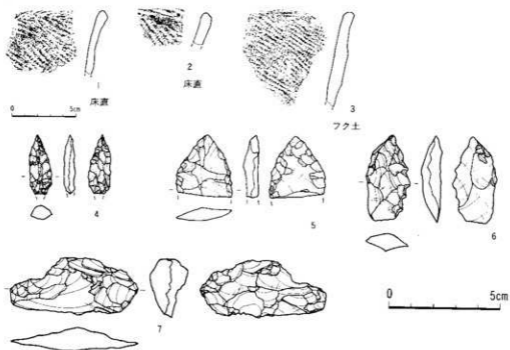
- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 軟らかく、しまりない。炭化物を微量含む
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4 軟らかく、しまりない。ローム粒を多く含む

第27号住居跡土層注記

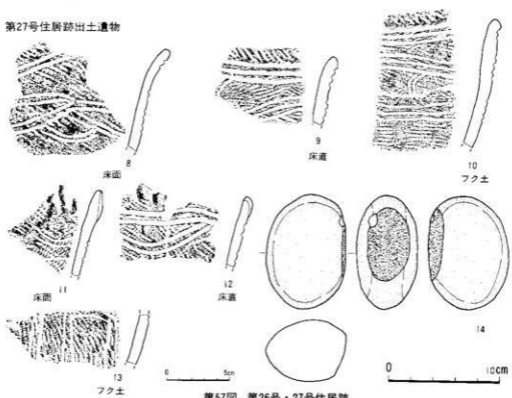
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 しまりない。ローム粒・炭化物を若干含む

第56図 第25号・26号・27号住居跡

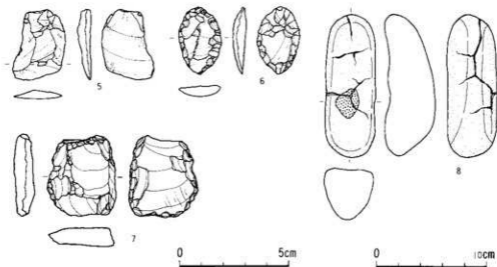
第26号住居跡出土遺物



第27号住居跡出土遺物



第57図 第26号・27号住居跡



第58図 第25号住居跡

が認められた。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 5個のピットを検出したが、柱穴配置は不明である。ピットの深さは、P₁₁…10cm、P₁₂…11cm、P₁₃…9cm、P₁₄…26cm、P₁₅…25cmである。

<炉> 検出されなかった。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 暗褐色土を主体とした堆積が見られた。

<出土遺物> 覆土から床面にかけて若干の遺物が出土したにすぎない。土器は十数片の破片が出土した。石器は床面・覆土から敲磨器類が1点ずつ出土し、総数2点である。

<小結> 床面から出土した土器から本住居跡の構築時期は、円筒上層e式期と思われる。

(畠山 昇)

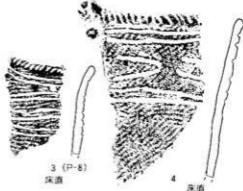
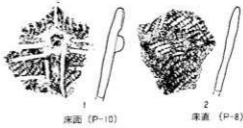
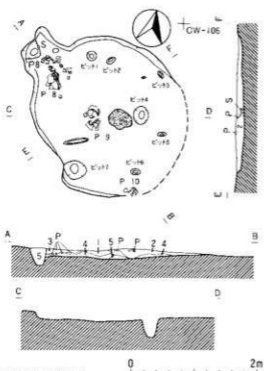
第28号住居跡 (第59・60図)

<位置と確認> CV-106グリッドで、暗褐色土の落ち込みを確認した。

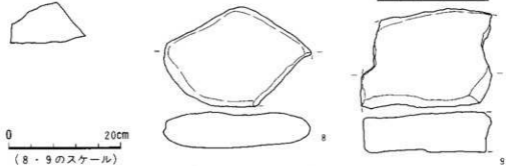
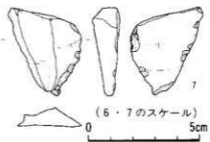
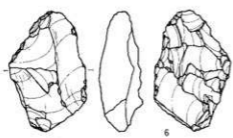
<重複> 確認できなかった。

<平面形・規模> 南東壁を確認できなかったが、平面形は楕円形を呈し、短軸2m22cm、長軸約3m(推定)である。推定床面積は、4.8㎡である。

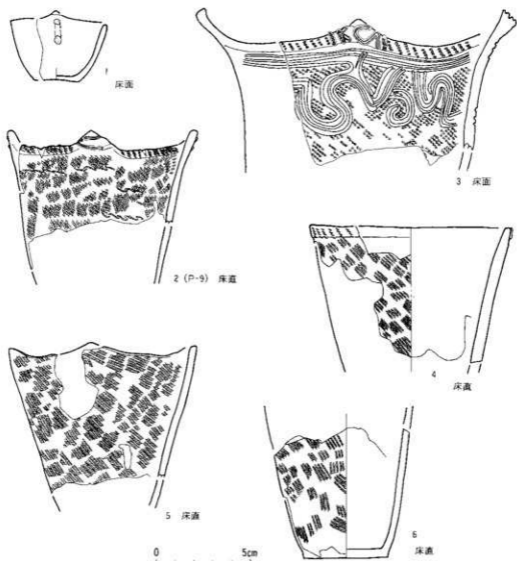
<壁・床面> 地山からの掘り込みが浅い住居跡で、5~15cmの壁高である。床面はほぼ平坦で



- 第28号住居跡土層注記
- | | | | |
|-----|------|---------|-------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | ロームブロック少量含む |
| 第2層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | ローム粒微量含む |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 炭化物微量含む |
| 第4層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒少量含む |
| 第5層 | 黒色土 | 10YR2/1 | ローム粒微量含む |



第59図 第28号住居跡(1)



第60図 第28号住居跡(2)

あり、部分的に貼り床を施している。

〈壁溝〉 検出されなかった。

〈柱穴〉 8個のビットを検出したが、柱穴配置は不明である。ビットの深さは以下のとおりである。

P₁…10cm, P₂…12cm, P₃…5cm, P₄…29cm, P₅…5cm, P₆…6cm, P₇…62cm, P₈…12cm。

〈炉〉 住居跡のほぼ中央で検出した。地床炉で、若干くぼんでいる。

〈特殊施設〉 長軸の北西壁が方形に張り出した部分が特殊施設と思われる。なお、この部分から不整なビット(P₈)を検出したが、このビットは本住居跡より新しいものであり、本住

居跡に伴わない。

<堆積土> 暗褐色～黒褐色土の堆積が見られた。

<出土遺物> 遺物は北西側に多く出土した。土器は床面及び床面直上から円筒上層e式土器と大木系土器の出土が見られた。石器は床面から不定形石器7点、石皿1点、床面直上から石皿1点が出土し、総数9点である。

<小結> 本住居跡の構築時期は床面及び床面直上からの出土土器から円筒上層e式期と思われる。(畠山 昇)

第29号住居跡(第61～63図)

<位置と確認> CX-103・104グリッドで、黄褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 平面形は円形もしくは隅丸方形に近い形状を呈している。規模は径3m22cmである。床面積は6.65㎡である。

<壁・床面> 壁は急な立ち上がりを呈し、壁高は北壁45cm、南壁40cm、西壁37cm、東壁48cmである。床面はほぼ平坦で、炉の周囲から約1mの範囲は堅く踏み締められている。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 大小合わせて、22個のピットを検出した。北壁のピット群は付属施設に関わるものと思われる。南壁のP₁・P₂はしっかりしたピットで、柱穴と考えられるが、これに対応するものは確認できなかった。主なピットの深さは以下のとおりである。

P₁…44cm、P₂…33cm、P₃…37cm、P₆…33cm。

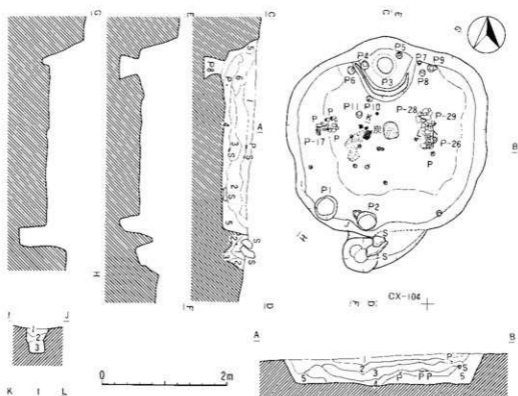
<炉> 地床炉で、3cmほどくぼむ。

<特殊施設> 長軸北端に検出した。北壁が若干張り出し、これに対応するように、床面には幅約10cm～20cmのロームの盛土(厚さ3cm)を半円状に巡らしている。内側には、3個のピットが検出され(P₃～P₅)、P₃に付随するように、両脇にP₄・P₆がある。また、外側にも似たようなピットが検出されている。

<堆積土> 6層に区分できた。上位に黄褐色土の堆積が見られ、中位に暗褐色～黒褐色土、下位にローム粒を多量に含んだ褐色土の堆積が見られた。

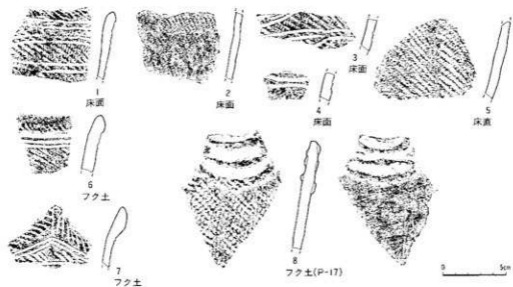
<出土遺物> 覆土から床面にかけて、若干の遺物が出土した。石器は床面から、不定形石器4点、石皿1点、覆土から、石鏃2点、石錐1点、不定形石器9点、磨製石斧1点が出土し、総数16点である。また、覆土から、有孔石製品1点(第62図11)と、垂飾品と思われるアオザメの歯(第63図21)が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は、出土した土器から、円筒上層e式期と思われる。(畠山 昇)

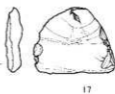
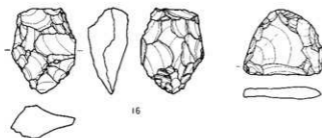
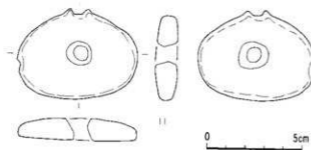
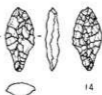
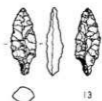
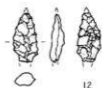
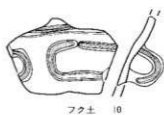
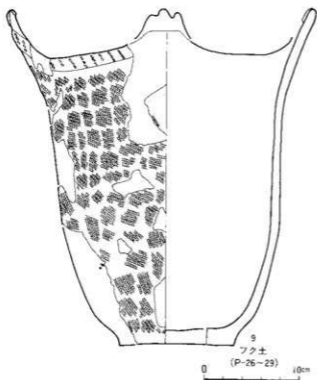


第29号住居跡土層注記

- | | | | |
|-----|---------|---------|-------------------------------|
| 第1層 | にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | 堅く、しまりあり |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | やや硬く、しまりあり。1mm大のロームをまばらに含む |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | 堅く、しまりあり。ローム粒をまばらに含む |
| 第4層 | 暗褐色土 | 10YR4/4 | 軟らかく、しまりやがある。ローム粒を多量、炭化物を若干含む |
| 第5層 | 暗褐色土 | 10YR4/6 | 軟らかく、しまりやがある。ローム粒を含む |
| 第6層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | 堅く、しまっている。ローム粒・炭化物を若干含む |

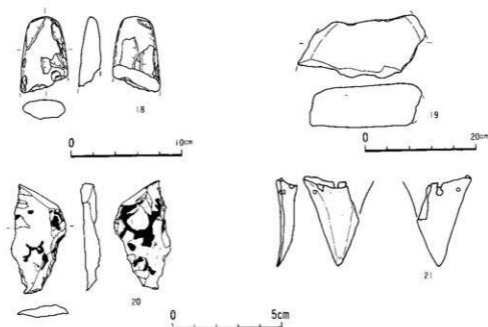


第61図 第29号住居跡(1)



0 5cm
(12~17のスケール)

第62図 第29号住居跡(2)



第63図 第29号住居跡(3)

第30号住居跡 (第64～67図)

<位置と確認> CV-108グリッドで、暗褐色土の広がりを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 短軸3 m94cm、長軸4 m84cmの隅丸長方形を呈している。床面積は、14.36 m²である。

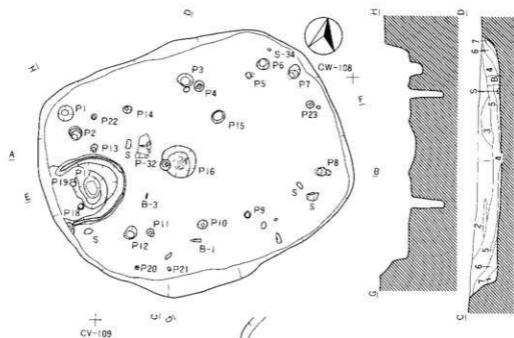
<壁・床面> 各壁は急な立ち上がりを呈し、南東壁42cm、南西壁43cm、北西壁24cm、北東壁15cmである。床面はほぼ平坦で、ほぼ全面が強く踏み締まっている。

<壁溝> 検出されなかった。

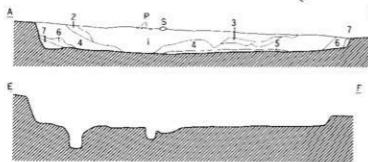
<柱穴> 大小合わせて23個のピットを検出した。このうち主柱穴と思われるのは、P₂・P₇・P₈・P₁₂で、4本柱と考えられる。またP₁・P₃・P₆は、ほぼ同一線上にあり、間仕切り用の柱穴の可能性も考えられなくもない。ピットの深さは次のとおりである。

P₁…21cm、P₂…56cm、P₃…26cm、P₄…17cm、P₅…24cm、P₆…15cm、P₇…47cm、P₈…47cm、P₉…15cm、P₁₀…9cm、P₁₁…15cm、P₁₂…56cm、P₁₃…8cm、P₁₄…7cm、P₁₅…18cm、P₁₆…18cm、P₁₇…31cm、P₁₈…36cm、P₁₉…32cm、P₂₀…21cm、P₂₁…6cm、P₂₂…10cm、P₂₃…4cm。

<炉> 中央からやや南西に寄った所で地床炉を検出した。8cmほどくぼんでおり、覆土からは獣骨片が検出された。



特殊施設及び炉の掘り方

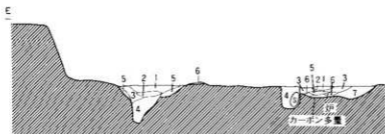


第30号住居跡土層注記

- | | | | |
|-----|------|---------|--------------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 軟らかく、しまりない。ローム粒・炭化物を若干含む |
| 第2層 | 黒褐色土 | 10YR2/2 | 軟らかく、しまりない。ローム粒を若干含む |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 軟らかく、しまり弱い。ローム粒を多量に含む |
| 第4層 | 黄褐色土 | 10YR5/8 | 軟らかく、しまり弱い |
| 第5層 | 褐色土 | 10YR4/4 | やや硬く、しまりややある。ローム粒を微量含む |
| 第6層 | 黒褐色土 | 10YR3/1 | 軟らかく、しまりない |
| 第7層 | 黄褐色土 | 10YR5/8 | 軟らかく、しまりややある |

0 2m

第64図 第30号住居跡(1)

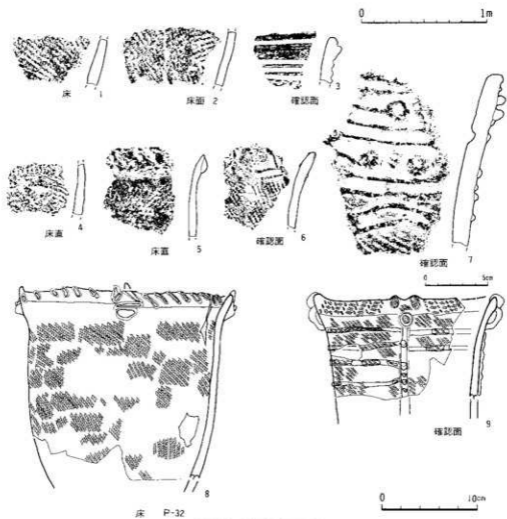


第30号住居ピット土層注記

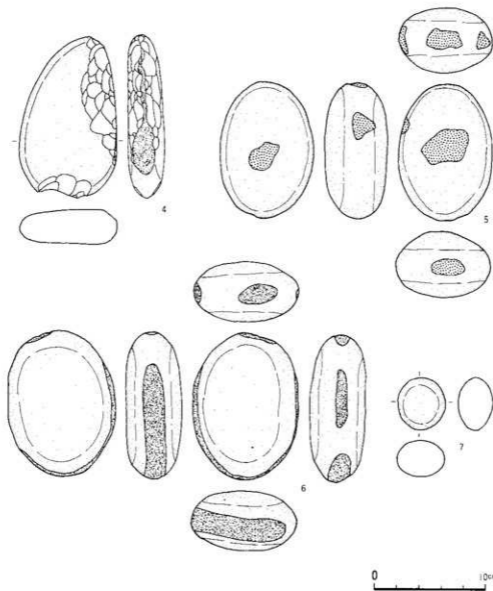
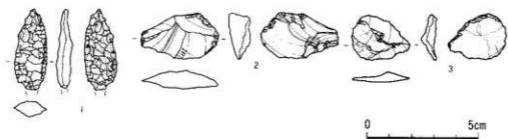
- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 軟。L・Bを多量含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/4+黄褐色土 10YR5/8 粗粒
 第3層 暗褐色土 10YR3/3 軟。L・Bを多量に含む
 第4層 褐色土 10YR3/3 軟らかく、しり筋あり
 第5層 黄褐色土 10YR5/8 上部は堅い。L・Bの集合
 第6層 黄褐色土 10YR5/8 硬くしまっている。ローム

第30号住居跡、炉土層注記

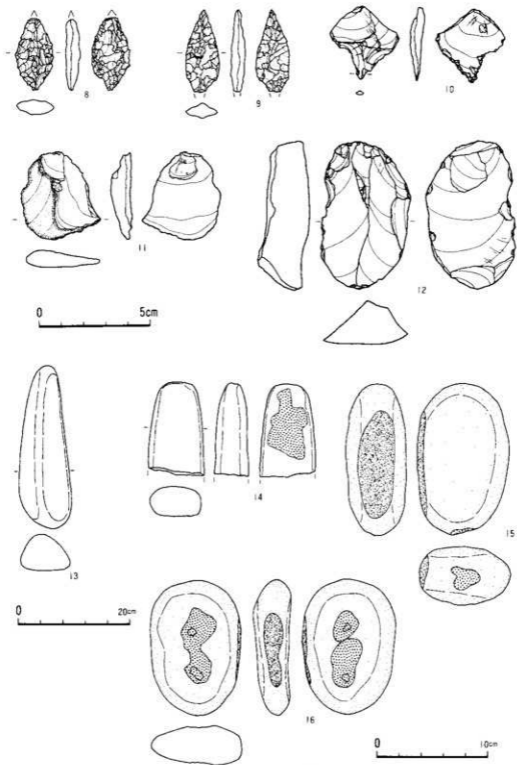
- 第1層 褐色土 10YR4/6
 第2層 黒褐色土 10YR3/1 炭化物多い。炭土粒を少量含む
 第3層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物・炭土粒を微量含む
 第4層 黒褐色土 10YR2/3
 第5層 オリーブ土 5YR5/4 獣骨片多い
 第6層 暗褐色土 10YR3/3 焼土粒・炭化物を多量に含む
 第7層 褐色土 10YR3/4 ロームブロック主体



第65図 第30号住居跡(2)



第66图 第30号住居跡(3)



第67图 第30号住居跡(4)

<特殊施設> 南西壁のほぼ中央に検出した。半円状にロームの盛土が巡らされており、内側にはやや大きなピットと、その両脇に2個の小ピットが対になって検出された。

<堆積土> 7層に区分できたが、大部分は、ローム粒を含んだ暗褐色土(1層)と黄褐色土(4層)である。

<出土遺物> 確認面からは、円筒上層d式がやや多量に出土したが、覆土中位から床面にかけては、若干の出土である。石器は床面から不定形石器1点、敲磨器類4点、床面直上から石鏃1点、不定形石器1点、覆土から石鏃1点、石錐1点、不定形石器4点、敲磨器類2点、磨製石斧1点、石棒類1点が出土し、総数19点である。

<小結> 本住居跡の時期は出土土器から円筒上層d・e式期である。(島山 昇)

第31号住居跡(第68~70図)

<位置と確認> CX-108グリッドで褐色土の広がりを確認した。

<重複> 第32号住居跡と重複し、本住居の方が古い。また東側は、風倒木による攪乱を受けている。

<平面形・規模> 南東から北西にかけての部分しか確認できなかったが、平面形は楕円形を呈するものと推測される。推定規模は短軸2m40cm前後、長軸3m20cm前後と思われる。推定床面積は5.73m²である。

<壁・床面> 壁高は約20cmで、急な立ち上がり呈している。床面は、ほぼ平坦である。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 床面及び床面と思われる所から、大小合わせて24個のピットを検出した。本住居の近辺からは、多数のピットが検出されていることから、24個のピットがすべて本住居に伴うかどうかは疑問がある。ピットの深さは次のとおりである。

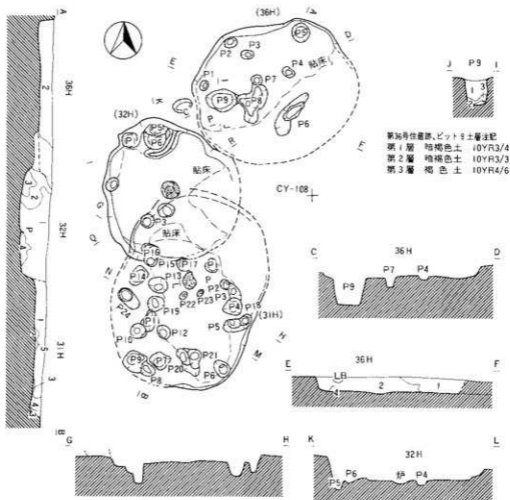
P₁…32cm、P₂…21cm、P₃…7cm、P₄…23cm、P₅…15cm、P₆…8cm、P₇…12cm、P₈…14cm、P₉…20cm、P₁₀…20cm、P₁₁…8cm、P₁₂…28cm、P₁₃…17cm、P₁₄…8cm、P₁₅…12cm、P₁₆…30cm、P₁₇…5cm、P₁₈…15cm、P₁₉…21cm、P₂₀…32cm、P₂₁…35cm、P₂₂…6cm、P₂₃…6cm、P₂₄…19cm。

<炉> ほぼ中央、もしくは中央からやや北に寄った所に位置しているものと思われる。地床炉である。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> ローム粒を若干含んだ褐色土を主体としている。

<出土遺物> 遺物はあまり出土しなかった。土器は覆土から床面にかけて椀林式土器が少量出土した。石器は床面から不定形石器5点、磨製石斧1点、覆土から石鏃3点、不定形石器7



第36号住居跡、ピット土層注記
 第1層 暗褐色土 10YR3/3
 第2層 暗褐色土 10YR3/3
 第3層 褐色土 10YR4/6

第31号住居跡土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4 しまりなく、軟らかい。ローム粒を若干含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 しまりなく、軟らかい。ローム粒を若干含む
 第3層 褐色土 10YR4/6 しまりなく、軟らかい。ローム粒を多く含む
 第4層 褐色土 7.5YR4/4 ローム質。
 第5層 黒褐色土 10YR3/2 しまりなく、軟らかい。ローム粒を若干含む。

第32号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 しまりなく、軟らかい。ローム粒を多量に含む
 第2層 褐色土 10YR4/4 しまりなく、軟らかい。ローム粒を多量に含む
 第3層 黄褐色土 10YR5/6 しまりなく、軟らかい。粗粒
 第4層 褐色土 10YR4/4 しまりなく、軟らかい。ローム粒を多量に含む

第36号住居跡土層注記

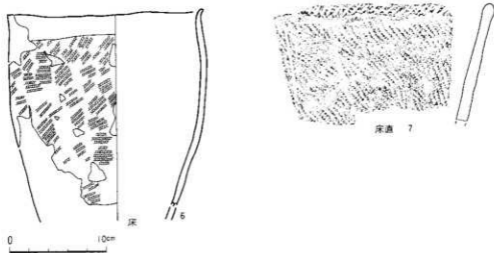
- 第1層 黄褐色土 10YR5/8 しまりあって、堅い。ローム質
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 しまりなく、軟らかい。ローム粒を多く含む
 第3層 黄褐色土 10YR5/8 やや硬い。ローム質
 第4層 褐色土 10YR4/6 しまりなく、軟らかい。ローム粒を多く含む

第68図 第31号・32号・36号住居跡(1)

第31号住居跡出土土器



第32号住居跡出土土器

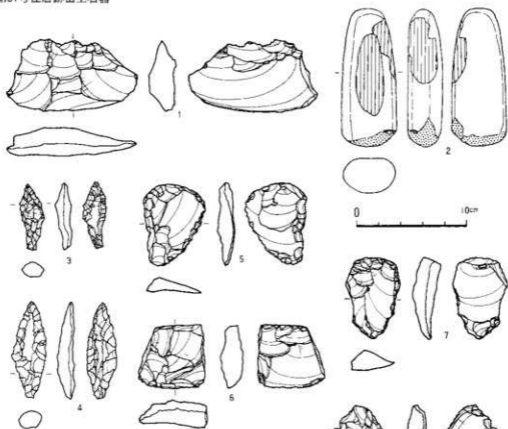


第36号住居跡出土土器



第69図 第31・32・36号住居跡(2)

第31号住居跡出土石器



第32号住居跡出土石器



第70図 第31・32号住居跡

点が出土し、総数16点である。

<小結> 本住居跡の構築時期は出土土器から、榎林式期と考えられる。 (畠山 昇)

第32号住居跡 (第68～70図)

<位置と確認> CX・CY-108グリッドで黒～暗褐色土の広がりを確認した。

<重複> 第31号・36号住居跡と重複している。新旧関係は、第31号住居跡より本住居の方が新しいが、第36号住居跡とは不明である。また北東部は、風倒木による攪乱を受けている。

<平面形・規模> 東壁を確認できなかったが、残存部から推定して、短軸2m25cm、長軸2m40cmの円～楕円形を呈すると思われる。推定床面積は、3.29㎡である。

<壁・床面> 東壁を除いた壁高は約30cm前後で、急な立ち上がりを呈している。床面は、ほぼ平坦で、炉の周辺では確認できたが、東～南側では確認できなかった。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 6個のビットを検出した。柱穴は不明であるがP₂は柱穴の可能性があり、また第31号住居跡のP_{1a}も本住居に伴う可能性がある。ビットの深さは次のとおりである。

P₁…4cm、P₂…32cm、P₃…22cm、P₄…7cm、P₅…17cm、P₆…10cm。

<炉> ほぼ中央に位置している。地床炉で、若干くぼんでいる。

<特殊施設> 北壁に見られ、ロームの盛土が半円状に巡らされている。内側には2個のビットが検出されたが、やや浅い。

<堆積土> ローム粒を多量に含んだ暗褐色土を主体としている。

<出土遺物> 遺物はあまり出土しなかった。土器は床面から円筒上層式系以後の縄文施文の土器(第69図6)と床面直上から円筒上層e式と思われる土器(7)が出土している。石器は、覆土から石鏃1点が出土した。

<小軸> 明確な時期を決定できる資料がないが、本住居は第31号住居跡より新しいことが確認されていることから、榎林式期かそれ以降と考えられる。(島山 昇)

第33号住居跡(第71・72図)

<位置と確認> CY・CZ-103・104グリッドに位置し、第8号住居跡北側の床下から検出した。

<重複> 第8号住居跡より古い。

<平面形・規模> 平面形は東西に長軸をもち、やや不整な五角形を呈し、短軸2m57cm、長軸3m92cmである(第8号住居床面からの計測)。床面積は7.58㎡である。

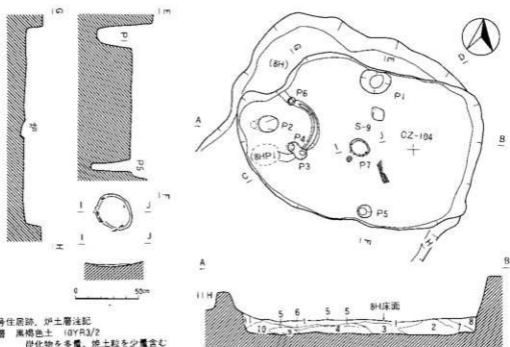
<壁・床面> 壁高は第8号住居跡床面まで約25cmで、地山まで約90cmを掘り、かなり深く掘り込まれている。床面は、ほぼ平坦で、堅緻である。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 7個のビットを検出した。主柱穴と思われるのは南壁と北壁に1個ずつ対に検出したP₁・P₈の2本柱である。ビットの深さは次のとおりである。

P₁…55cm、P₂…55cm、P₃…62cm、P₄…18cm、P₅…64cm、P₆…19cm、P₇…10cm。

<炉> ほぼ中央に位置している。地床炉のように、若干くぼんでいるが、その南側に土器片で、粗雑に囲っている。

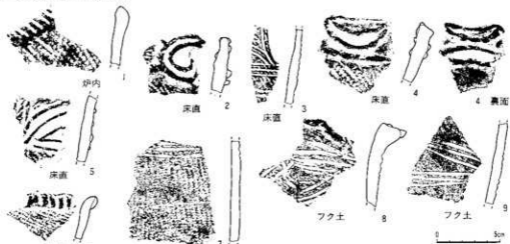


第33号住居跡，伊土層注記

第1層 黒褐色土 IOYR3/2
炭化物を多量、焼土粒を少量含む

第33号住居跡土層注記

第1層	暗褐色土	IOYR3/4	ローム粒少量含む
第2層	褐色土	IOYR4/6	ローム粒・塊を多量に含む
第3層	暗褐色土	IOYR3/3	ローム粒・塊を微量含む
第4層	いり黄褐色土	IOYR4/3	しまり・粘性ややあり
第5層	黒褐色土	IOYR3/2	炭化物多量に含む
第6層	褐色土	IOYR4/6	ローム粒・塊を少量含む
第7層	暗褐色土	IOYR3/4	ローム粒を多量含む
第8層	褐色土	IOYR4/6	ローム粒多量、炭化物微量含む
第9層	暗褐色土	IOYR3/4	炭化物・焼土粒を微量含む
第10層	黄褐色土	IOYR5/6	炭化物を微量含む
第11層	明黄褐色土	IOYR6/8	



第71図 第33号住居跡(1)



第72図 第33号住居跡(2)

〈特殊施設〉 西壁が半円状に張り出し、それに対応して内側にはロームの盛土が半円状に巡らされている。全体として楕円形を呈している。内側から2個のピットが検出されたが、このピットに向けてロームの盛土から徐々に低くなっている。P₃は内側に向かって、斜めに掘り込まれている。

〈堆積土〉 上部はほぼ全面にロームの貼床が施されている。それより下位は、暗褐色、褐色、

黄褐色などが乱れた状態で堆積している。人為堆積である。

〈出土遺物〉 覆土からは、少量の遺物が出土した。石器は床面（炉）から石錐1点、床面直上から不定形石器7点、台石1点、覆土から不定形石器2点が出土し、総数11点である。

〈小結〉 本住居跡の時期は、出土土器から円筒上層e式期と考えられる。（畠山 昇）

第34号住居跡（第73・74図）

〈位置と確認〉 CX-105グリッドに位置し、第IV層を調査中に褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 第31号土壇と重複し、本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 直径3.1cmのほぼ円形を呈する。床面積は7.26㎡である。

〈壁・床面〉 第IV層を壁面とし緩やかな立ち上がりである。壁高は東壁5cm、西壁10cm、北壁5cmである。床面はほぼ平坦で、全面に貼り床が施されている。

〈壁溝〉 確認できなかった。

〈柱穴〉 床面から大小合わせて13個のピットを検出した。各ピットの深さは

P₁…17cm、P₂…11cm、P₃…10cm、P₄…30cm、P₅…70cm、P₆…33cm、P₇…18cm、P₈…9cm、P₉…23cm、P₁₀…34cm、P₁₁…29cm、P₁₂…19cm、P₁₃…19cmである。

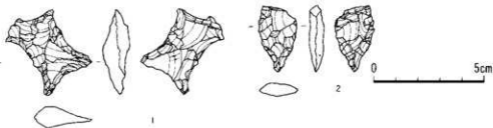
〈炉〉 地床炉で住居跡のほぼ中央に位置する。30×20cmの不整形で焼土の厚さは2～3cmである。

〈特殊施設〉 確認できなかった。

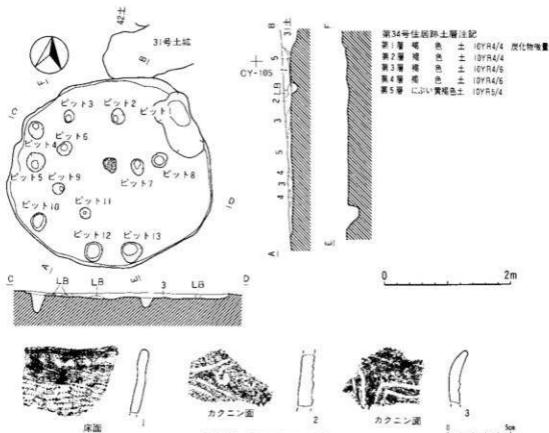
〈堆積土〉 褐色土が主体で、5層に分層した。ロームブロックが堆積土上面及び床面に堆積している。

〈出土遺物〉 土器は床面から(1)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石錐2点出土している。

〈小結〉 床面出土の土器(1)から、最花式期の住居跡と考えられる。（長崎 勝巳）



第73図 第34号住居跡(1)



第35号住居跡 (第75図)

〈位置と確認〉 CY・CZ-107・108グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 認められなかった。

〈平面形・規模〉 平面形は、2 m36cm～2 m90cmの楕円形を呈する。床面積は5.16㎡である。

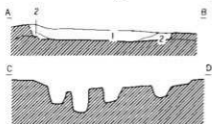
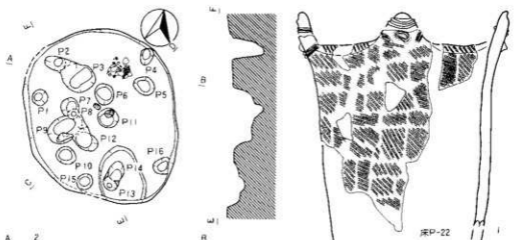
〈壁・床面〉 各壁とも5 cm前後の壁高で、壁はあまり明瞭でない。床面は、ほぼ平坦である。

〈壁溝〉 確認できなかった。

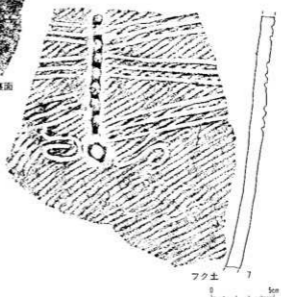
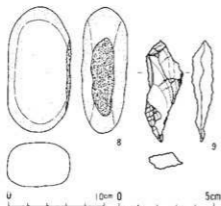
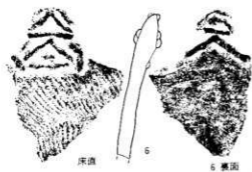
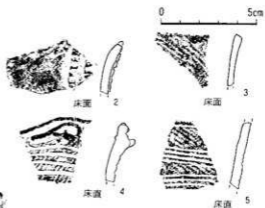
〈柱穴〉 竪穴内からは16個のピットを検出した。このうち、主柱穴と考えられるのは、位置的にはP₁・P₄・P₁₂・P₁₆であるが、P₁₆以外のピットは10～17cmと浅いことや、近辺には多数の小ピットが住居跡外にも検出されていることから断定はできない。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…17cm, P₂…56cm, P₃…41cm, P₄…12cm, P₅…20cm, P₆…21cm, P₇…36cm, P₈…53cm, P₉…41cm, P₁₀…28cm, P₁₁…40cm, P₁₂…39cm, P₁₃…32cm, P₁₄…28cm, P₁₅…21cm, P₁₆…10cm。

〈炉〉 住居のほぼ中央で小さな地床炉を検出した。



第35号住居跡
 第1層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒・塊を若干含む
 第2層 褐色土 10YR4/6 ローム粒を微量含む



第75図 第35号住居跡

<特殊施設> 南壁に接して、楕円形状に6~7cmの浅い掘り込みが見られ、その内側に深さ30cm前後のピットを検出した。外縁にロームの盛土は見られないが、それに類する特殊施設と思われる。

<堆積土> 全体に締まりのある褐色~暗褐色土が堆積している。

<出土遺物> 覆土及び床面直上から円筒上層e式が出土した。石器は床面から、不定形石器1点、敲磨器類1点が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は床面直上から出土した土器から円筒上層e式期と考えられる。

(島山 昇)

第36号住居跡 (第68・69図、第76図)

<位置と確認> CY-108グリッドで黄褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 南東壁が、第32号住居跡とわずかに重複しているが、風倒木により攪乱を受けているため、新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 残存部から、平面形は楕円形を呈し、推定規模は短軸2m36cm、長軸2m90cm前後と思われる。推定床面積は4.3㎡である。

<壁・床面> 北壁は25cm前後の壁高で、急に立ち上がる。確認できた床面は、ほぼ平坦である。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 竪穴内からは9個のピットを検出したが、柱穴配置は不明である。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…18cm、P₂…7cm、P₃…8cm、P₄…6cm、P₅…16cm、P₆…25cm、P₇…17cm、P₈…17cm、P₉…43cm。

<炉> 検出されなかった。

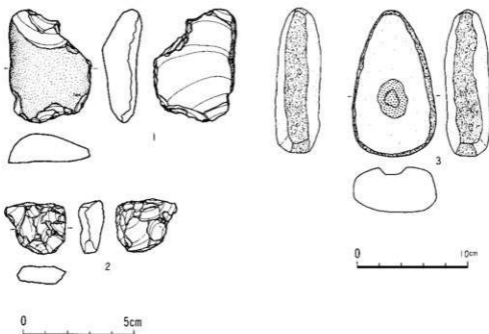
<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 南東部分が風倒木による攪乱を受けているが、堆積土の大半は黄褐色土とローム粒を多量に含んだ暗褐色土で占められている。人為堆積と思われる。

<出土遺物> 覆土及び床面直上からは遺物はほとんど出土しなかった。石器は、床面から不定形石器2点、敲磨器類1点が出土した。

<小結> 本住居跡の明確な構築時期は不明であるが、円筒上層式期以降と思われる。

(島山 昇)



第76図 第36号住居跡

第37号住居跡 (第77図)

〈位置と確認〉 CY-109グリッドで、褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 第41号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 3m15cm～3m50cmの楕円形を呈するが、北壁が若干張り出している。

〈壁・床面〉 各壁とも25cm前後の壁高で、立ち上がりは急である。床面は、ほぼ平坦である。床面積は6.6㎡である。

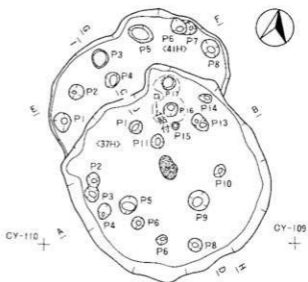
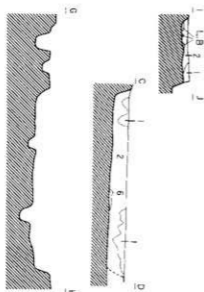
〈壁溝〉 検出されなかった。

〈柱穴〉 17個のピットを検出した。このうち、主柱穴と考えられるのは、位置的にはP₁・P₂・P₉・P₁₀(またはP₁₂)であるが、確認はない。北壁の若干張り出した部分でピット(P₁₆・P₁₇)を検出したが、これらのピットの外縁には、厚さ2cmのロームが張り付けられている。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…11cm, P₂…21cm, P₃…12cm, P₄…13cm, P₅…23cm, P₆…9cm, P₇…7cm, P₈…19cm,
P₉…23cm, P₁₀…19cm, P₁₁…15cm, P₁₂…15cm, P₁₃…30cm, P₁₄…17cm, P₁₅…18cm, P₁₆…17cm,
P₁₇…32cm。

〈炉〉 住居のほぼ中央で地床炉を検出した。

〈特殊施設〉 北壁の張り出した部分が、特殊施設の可能性があるが、確認はない。

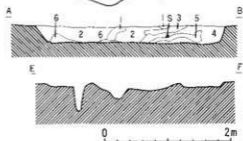


第37号住居跡土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4 ローム粒微量含む
- 第2層 褐色土 10YR4/6 ロームブロック微量含む
- 第3層 褐色土 10YR4/6 ロームブロック微量含む
- 第4層 黄褐色土 10YR5/6 ローム質
- 第5層 黄褐色土 10YR5/8 ローム質
- 第6層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒少量、炭化物微量含む

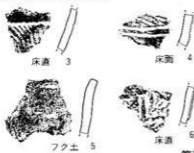
第41号住居跡(一ノ)土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/6 ローム粒を微量含む
- 第2層 黄褐色土 10YR5/6 ローム粒を少量含む

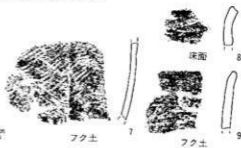


第37号住居跡出土石器

第37号住居跡出土土器



第41号住居跡出土土器



第77図 第37・41号住居跡

<堆積土> 確認面で廃棄された焼土を検出したが、全体に締まりのある褐色～暗褐色土が堆積している。

<出土遺物> 覆土から床面直上にかけて、少量の遺物が出土した。石器は床面直上から、不定形石器が2点出た。

<小結> 本住居跡の構築時期は、良好な資料が出土していないので不明であるが、円筒上層d～e式期と思われる。(畠山 昇)

第38号住居跡(第78～84図)

<位置と確認> CT・CU-108・109グリッドで、暗褐色～褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第231号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 残存部から推定して、隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は短軸3m70cm、長軸4m20cm(推定)前後(床面では短軸3m35cm、長軸4m20cm)である。

<壁・床面> 壁の立ち上がりは急で、床面は、ほぼ平坦である。第231号住居跡と重複している部分には貼り床を施している。

<壁溝> 西から南壁にかけてと東西壁の一部で検出した。

<柱穴> 大小37個のピットを検出した。このうち、主柱穴と考えられるのは、P₁・P₅・P₈・P₁₃と、P₄・P₁₀・P₁₈・P₂₈の二通りが考えられる。おそらく、建て替えが行なわれたものと思われる。主なピットの深さは以下のとおりである。

P₁…58cm、P₂…19cm、P₃…20cm、P₄…76cm、P₅…76cm、P₆…12cm、P₇…24cm、P₈…60cm、P₉…68cm、P₁₀…94cm、P₁₁…23cm、P₁₂…6cm、P₁₃…46cm、P₁₄…21cm、P₁₅…49cm、P₁₆…48cm、P₁₇…35cm、P₁₈…16cm、P₁₉…22cm、P₂₀…14cm、P₂₁…20cm、P₂₂…23cm、P₂₃…20cm、P₂₄…26cm、P₂₅…34cm、P₂₆…16cm、P₂₇…16cm、P₂₈…47cm

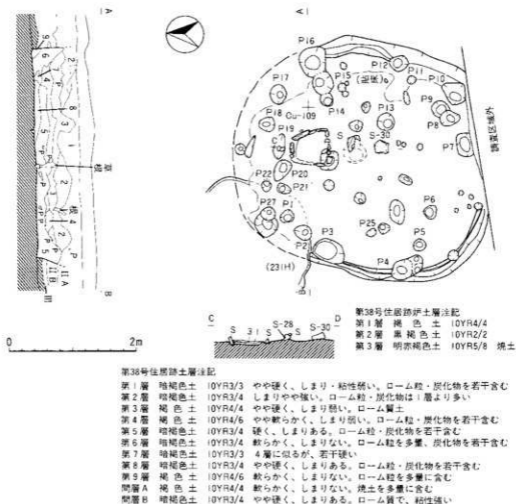
<炉> 中央から若干北に寄った所に位置している。西側の一部が開放されたコの字状の石囲い炉である。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> ローム粒・炭化物を含んだ暗褐色～褐色土の堆積が多く見られた。また中位にローム質の褐色土や廃棄された焼土の堆積が見られた。

<出土遺物> 覆土からは多量の遺物が出土した。土器は、覆土から床面直上にかけて円筒上層d式～最花式、大木系土器が出土した。床面からは土器は出土しなかった。

石器は床面から石棒類1点(第82図1)、覆土から石鏃12点、石槍3点、石錐1点、石砧1点、不定形石器40点、磨製石斧1点、敲磨器類3点、石皿1点、台石1点、ピット3から不定形石器1点が出土し、総数52点である。また石製品(軽石製)が覆土から2点出た。



第78図 第38号住居跡(1)

〈小結〉 床面から土器が出土していないため本住居跡の明確な時期は不明であるが、床面直上からの出土土器から、榎林式～最花時期のあたりと思われる。(畠山 昇)

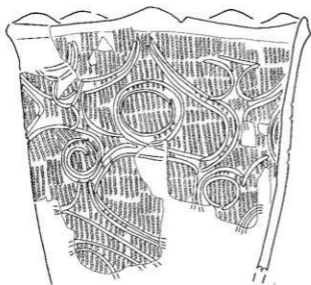
第39号住居跡 (第85図)

〈位置と確認〉 CU-109・110グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 第231号住居跡と重複しており、本住居跡のほうが新しい。

〈平面形・規模〉 不明である。

〈壁・床面〉 壁はほとんど確認できなかった。床面は炉の南側部分のみで確認できただけであるが、その部分は、ほぼ平坦である。第231号住居跡と重複している部分には貼り床を施している。



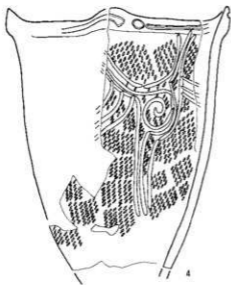
フク土



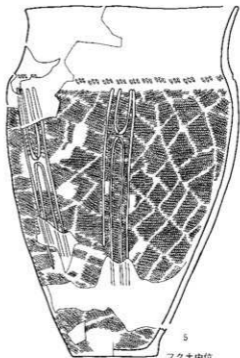
フク土中位 2



フク土下位 3



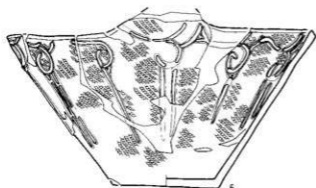
フク土



フク土中位

0 10cm

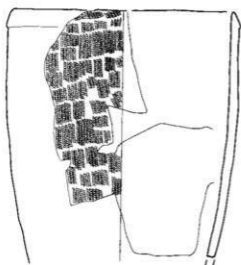
第79図 第38号住居跡(2)



6
フク土中位



7
フク土中位



8
フク土



9
フク土



10
床直



11
フク土



12
フク土下位



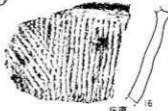
13
床直



14
床直



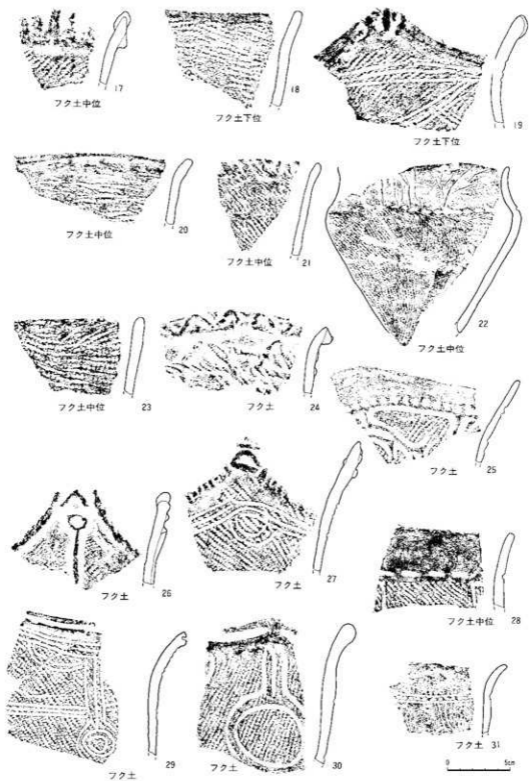
15
ピット



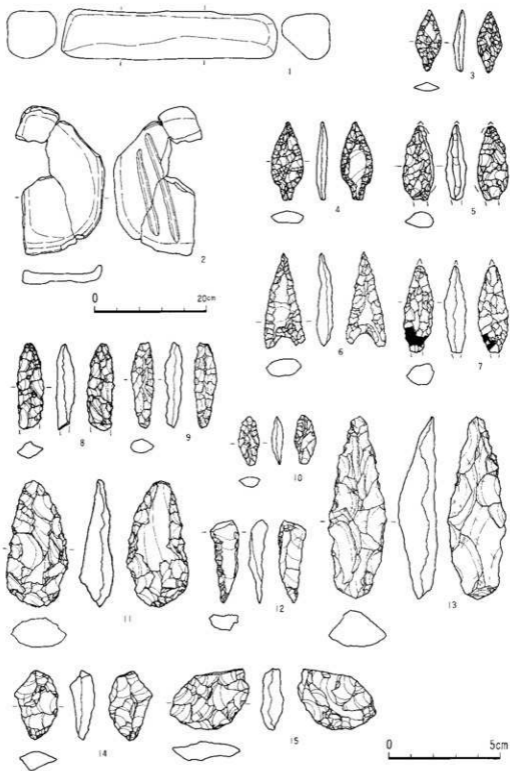
16
床直



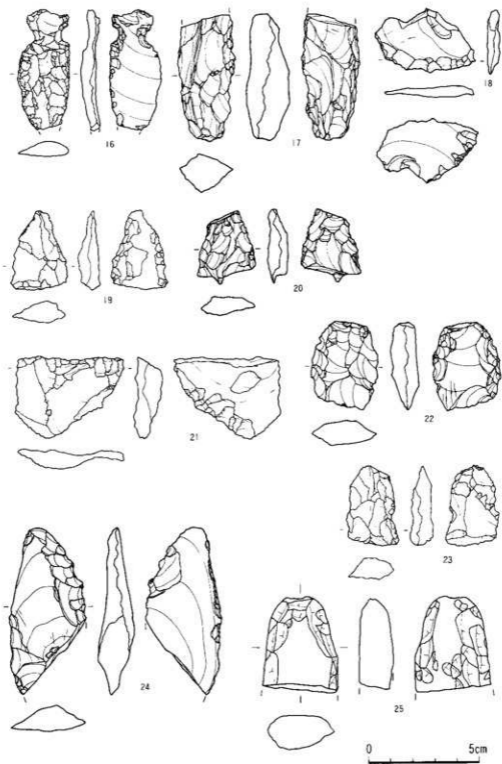
第80図 第38号住居跡(3)



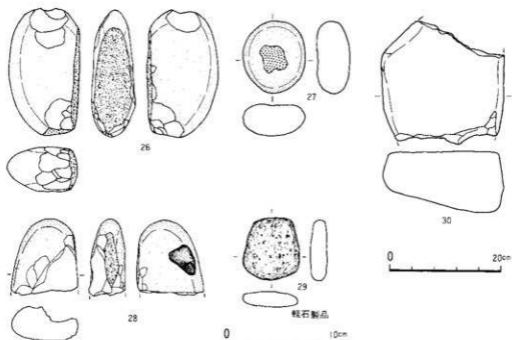
第81図 第38号住居跡(4)



第82图 第38号住居跡(5)



第83图 第38号住居跡(6)



第84図 第38号住居跡(7)

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 柱穴と思われるビットは1個のみ検出した(P_1)。 P_1 は29cmの深さで、内側に傾いている。このほか炉の北側に不整形の落ち込みを検出し、これを P_2 とした。 P_2 は2個のビットが連なったものとも思われたが、堆積土の状況から、一個のものと考えた。長軸130cmで中央で若干くびれ、その東側は幅約90cm、西側は幅約40cmで深さ10cmである。

<炉> 地床炉である。覆土から骨片を検出している。

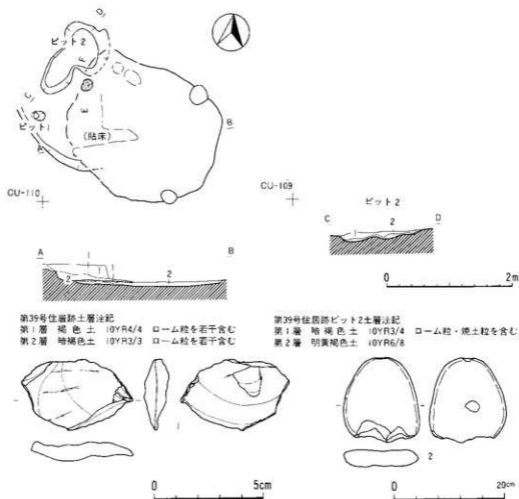
<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 粗掘りで大部分を失っているためと、掘り込みが浅いため、ローム粒を含んだ褐色～暗褐色土の堆積が見られただけである。

<出土遺物> 遺物はほとんど出土しなかった。わずかに、床面直上から石皿1点、覆土から不定形石器3点の石器が出土しただけである。

<小結> 本住居跡の時期は不明である。

(高山 昇)



第85図 第39号住居跡

第40号住居跡 (第86図)

<位置と確認> C Z・CU-109グリッドで褐色～黄褐色土の落ち込みを確認した。

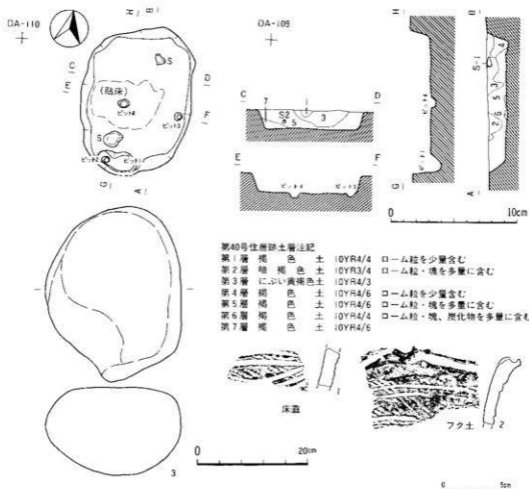
<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 短軸1m76cm、長軸2m42cmの隅丸長方形を呈している。南側が若干丸みを帯び、やや楕円形気味である。床面積は、2.83㎡である。

<壁・床面> 全体に、壁はしっかりしており、南壁の一部が張り出している。壁高は25～35cm前後で、立ち上がりは急である。床面はほぼ平坦で、中央近辺は踏み固められ、堅緻である。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 4個のピットを検出したが、いずれも浅い。ピットの深さはP₁…13cm、P₂…10cm、



第86図 第40号住居跡

P₃…5 cm, P₄…9 cmである。

〈炉〉 検出されなかった。

〈特殊施設〉 不確かであるが、南壁に接して検出したP₁は特殊施設の可能性も考えられる。

〈堆積土〉 黄褐色土とローム粒を多量に含んだ褐色土が大半を占め、人為堆積の様相を示している。

〈出土遺物〉 遺物は、ほとんど出土しなかった。土器は数点の出土である。石器は、覆土から台石1点が出土した。

〈小結〉 床面からの出土土器がないことから、明確な時期決定はできないが、床面直上及び覆土からの出土土器から、本住居跡は円筒上層e式期に構築されたものと思われる。

(晶山 昇)

第41号住居跡（第77図）

＜位置と確認＞ C Y-109グリッドで、第37号住居跡の調査中に確認した。第37号住居跡の北側に位置している。

＜重複＞ 第37号住居跡より古い。

＜平面形・規模＞ 残存部から推定して、楕円形もしくは隅丸長方形を呈するものと思われる。規模は不明であるが、長軸は2 m30cm前後と思われる。

＜壁・床面＞ 壁・床は不明瞭で、北西壁の壁高は5～7cm前後で低い。

＜壁溝＞ 検出されなかった。

＜柱穴＞ 8個のピットを検出した。ピットの深さはP₁…29cm、P₂…37cm、P₃…25cm、P₄…12cm、P₅…23cm、P₆…28cm、P₇…13cm、P₈…14cmである。

＜炉＞ 不明である。

＜特殊施設＞ 不明である。

＜堆積土＞ 褐色土と黄褐色土の堆積が見られた。

＜出土遺物＞ 遺物の出土は少なく、土器破片が数点見られただけである。

＜小結＞ 本住居跡の構築時期は不明であるが、第37号住居跡より古いので、円筒上層d式からe式と思われる。

（高山 昇）

第42号住居跡（第87・88図）

＜位置と確認＞ D F-106・107グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。

＜重複＞ 重複はないが、北東側の半分程を風倒木による攪乱を受けている。

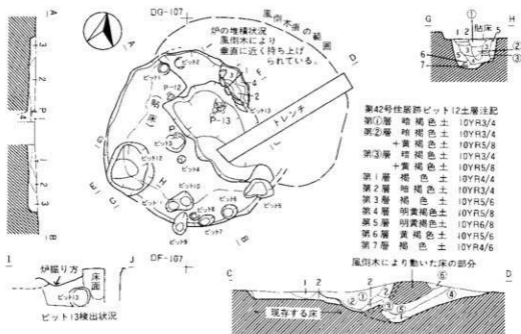
＜平面形・規模＞ 残存部から推定して、円形を呈するものと思われる。推定規模は、直径2 m30cm前後と思われる。

＜壁・床面＞ 残存部分は約10cm前後の壁高を持ち、立ち上がりは急である。床面はほぼ平坦であるが、東側は風倒木により大きく動いている。そして、炉を含む東側の床面が垂直に近く持ち上がっている。そのため、平面図には炉の土層断面が見られ、炉の平面図は横方向のから実測である。

＜壁溝＞ 検出されなかった。

＜柱穴＞ 13個のピットを検出した。P₁・P₁₃は風倒木により動いている。とくにP₁₃は立ち上がった床面から検出したもので、位置的には、本来、P₉の近辺に位置していたものと思われる。ピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…28cm、P₂…35cm、P₃…45cm、P₄…14cm、P₅…31cm、P₆…5cm、P₇…18cm、P₈…2cm、P₉…34cm、P₁₀…29cm、P₁₁…26cm、P₁₂…48cm、P₁₃…18cm。

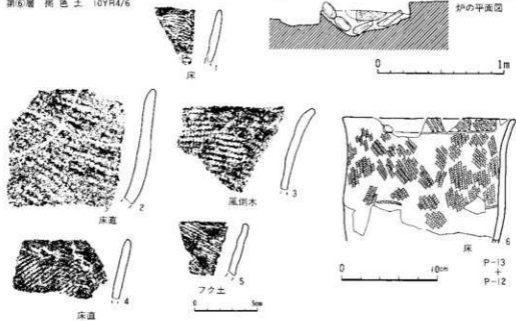


- 第42号住居跡ピット12土層注記
- 第①層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第②層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第③層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第④層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑤層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑥層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑦層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑧層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑨層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑩層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑪層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑫層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑬層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑭層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑮層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑯層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑰層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑱層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑲層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第⑳層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉑層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉒層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉓層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉔層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉕層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉖層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉗層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉘層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉙層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉚層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉛層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉜層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉝層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉞層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㉟層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊱層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊲層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊳層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊴層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊵層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊶層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊷層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊸層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊹層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊺層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊻層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊼層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊽層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊾層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第㊿層 暗褐色土 10YR3/4

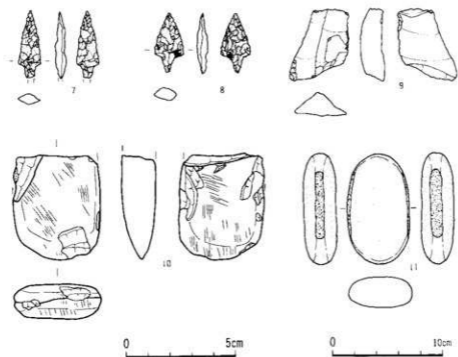
第42号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
- 第2層 暗褐色土 10YR3/4
- 第3層 暗褐色土 10YR4/4
- 第4層 暗褐色土 10YR3/3
- 第①層 黒褐色土 10YR2/3
- 第②層 褐色土 10YR4/4
- 第③層 暗褐色土 10YR3/4
- 第④層 褐色土 10YR4/6
- 第⑤層 褐色土 10YR4/6
- 第⑥層 褐色土 10YR4/6

- ローム粒・木炭粒を含む。粗粒
- ローム粒・木炭粒を若干含む
- ローム質土
- ローム粒・木炭粒を含む



第87図 第42号住居跡(1)



第88図 第42号住居跡(2)

<炉> 石囲い炉で、方形を呈するものと思われる。

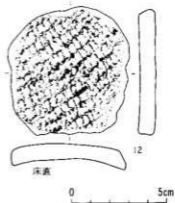
<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 暗褐色土の堆積が主体を占めている。住居跡の本来の堆積土は第1～4層、風倒木により動いた部分及びそれ以降の堆積土は①～⑥で示した。

<出土遺物> 覆土から床面にかけて若干の遺物が出土した。第87図6は風倒木によって動いた床面の近くから出土した土器(P-13)と、風倒木の影響を受けずに原位置を保って出土した土器(P-12)が接合したものである。石器は、床面から石鏃2点、床面直上から敲磨器類1点、覆土から石鏃1点、不定形石器1点、磨製石斧1点が出土した。また、覆土から土器片利用製品(第88図12)が1点出土した。

<小結> 床面から出土の土器から、本住居跡の構築時期は弥栄平(1)式期に相当するものと思われる。

(畠山 昇)



第43号住居跡 (第89～93図)

<位置と確認> DB・DC-101・102グリッドに位置し、暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 東側の第48号住居跡と重複し本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 長軸6m70cm、短軸5m程の楕円形と考えられる。床面積は25.3㎡である。

<壁・床面> 壁は緩やかな立ち上がりで東壁22cm、西壁14cm、南壁22cm、北壁18cmである。

床面は暗褐色土の上に1～3mmのロームで貼り床され、やや凸凹している。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> ビットは床面から5個検出された。P₁～P₆は規模・配列から主柱穴と考えられる。

(6本柱)西側床面からは確認されなかった。P₅は住居跡外のビットと考えられる。各ビットの深さはP₁…40cm、P₂…20cm、P₃…26cm、P₄…20cm、P₅…22cm、P₆…24cmである。

<炉> 焼土は5基検出された。南側に位置する焼土が6cmと厚く、堆積土から骨粉が出土している。

<特殊施設> 確認されなかった。

<堆積土> 褐色土を主体とし、4層に分層された。ロームの混入状況から人為的堆積と考えられる。

<出土遺物> 土器は床面・床面直上から(1～4・10)が出土し、他は覆土からの出土である。

石器は床面から石鏃2点、不定形石器5点、石皿1点、覆土から石鏃1点、不定形石器14点、敲磨器類1点、石棒類1点、石皿4点が出土し、総数で29点である。

<小結> 床面出土の土器は、円筒上層d式期と考えられるが、堆積土の状況から、投棄された様相が強く、構築時期は不明である。
(長崎 勝巳)

第45号住居跡 (第94～103図)

<位置と確認> DA・DB・DC-102・103グリッドに位置する。

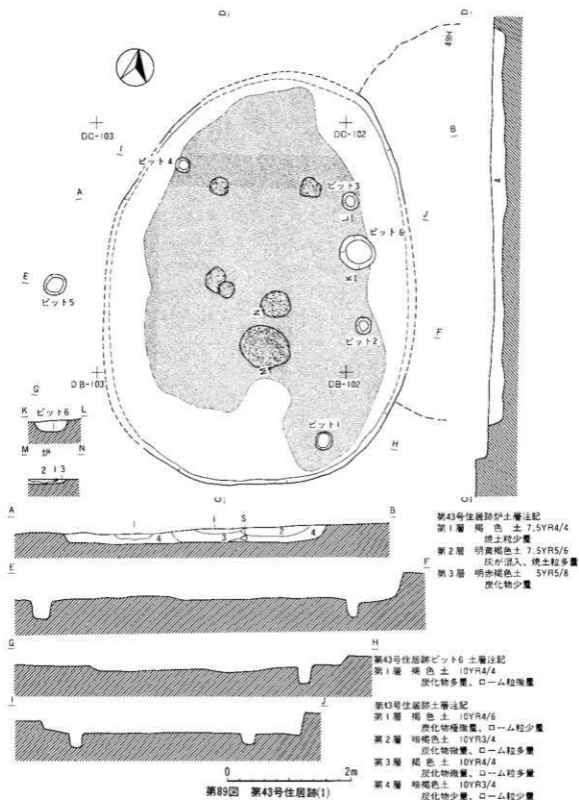
<重複> 東に第49号住居跡、南に第46号住居跡、北に第50号住居跡があり本住居跡が新しい。

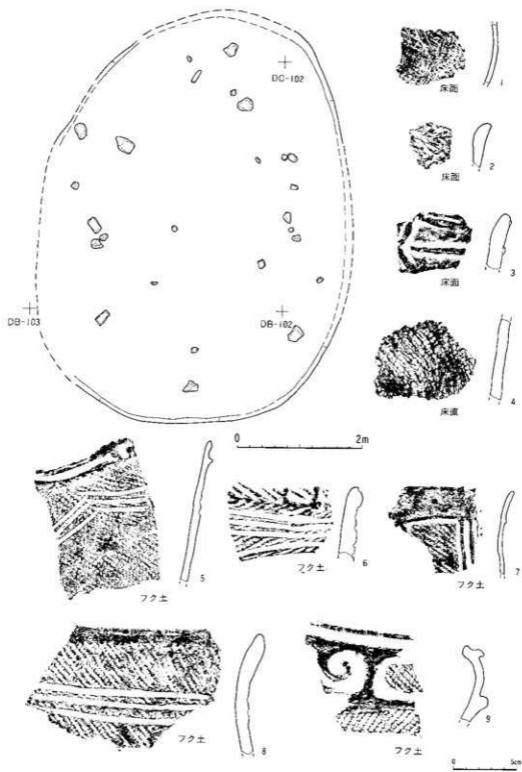
<平面形・規模> 南北に長い楕円形で南側がやや膨らむ。長軸12m、短軸6m40cmで床面積は53.15㎡である。

<壁・床面> 西壁は第IV層を壁面としているが、東・南・北壁は他住居跡の堆積土を壁面としている。西壁(地山)の高さは26～40cm程で、ほかの壁高は不明である。床面は第IV層を掘り込み、貼り床され、堅緻である。

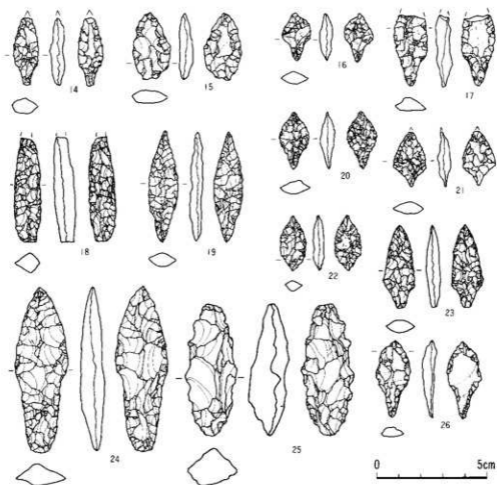
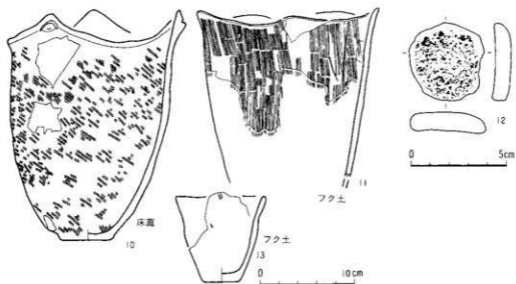
<壁溝> 貼り床除去後に西壁側で2条検出された。外側は幅6～22cm、深さ5～20cmで内側は幅12cm、深さ14～20cmである。

<柱穴> 柱穴配置からP₁～P₇・P₁₇の8本柱が考えられる。床面及び床下から100個以上の

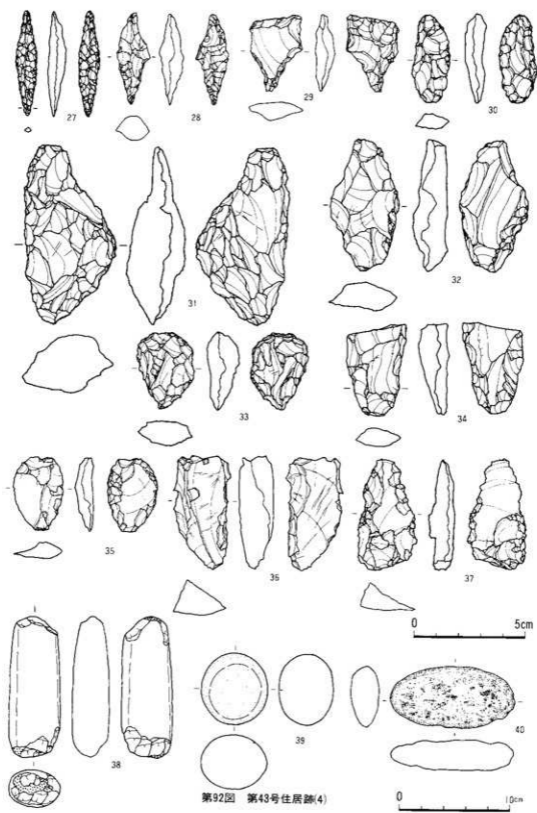




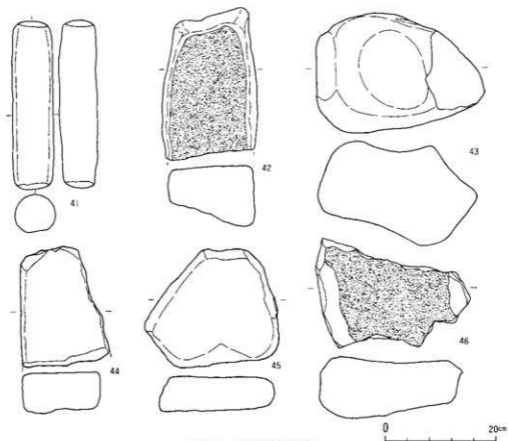
第90図 第43号住居跡(2)



第91図 第43号住居跡(3)



第92図 第43号住居跡(4)



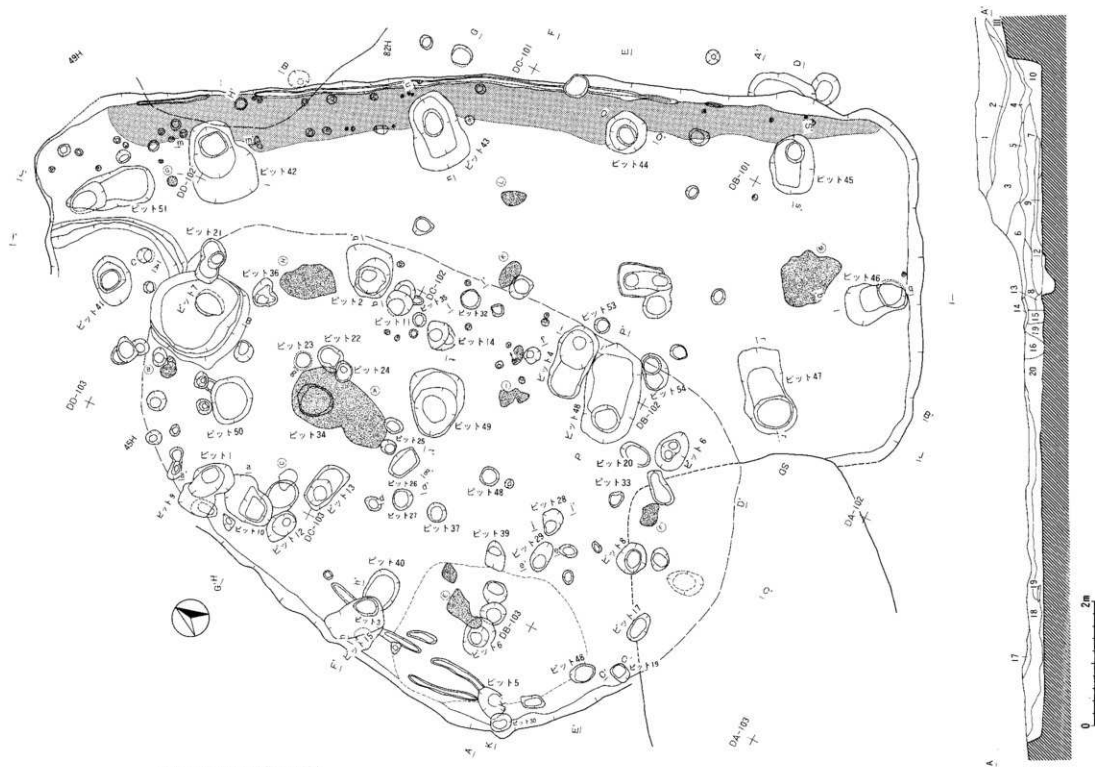
第93図 第43号住居跡(5)

ピットを検出した。各ピットの床面からの深さは、P₁…96cm、P₂…132cm、P₃…106cm、P₄…102cm、P₅…86cm、P₆…82cm、P₇…69cm、P₈…58cm、P₉…51cm、P₁₀…89cm、P₁₁…57cm、P₁₂…65cm、P₁₃…75cm、P₁₄…75cm、P₁₅…44cm、P₁₆…78cm、P₁₇…45cm、P₁₈…48cm、P₁₉…41cm、P₂₀…50cm、P₂₁…59cm、P₂₂…37cm、P₂₃…25cm、P₂₄…22cm、P₂₅…41cm、P₂₆…46cm、P₂₇…30cm、P₂₈…52cm、P₂₉…40cm、P₃₀…28cm、P₃₁…17cm、P₃₂…15cm、P₃₃…19cm、P₃₄…55cm、P₃₅…51cmで、他の小ピットの深さは、8～38cmである。

<炉> 焼土は6基検出された。A. 100×170cmの不整楕円形 B. 20×35cmの不整楕円形 C. 25×35cmの楕円形 D. 直径20cmのほぼ円形 E. 25×60cmの不整形 F. 25×40cmのほぼ長方形である。Aは住居跡の長軸線上にあり地床がと考えられる。

<特殊施設> 北壁のほぼ中央に位置する。直径160cm程の馬蹄状に盛土を巡らし、中心部はわずかにくぼむ。その盛土の中心東寄りには直径40cm、深さ70cmのピットがある。

<堆積土> 遺構確認の為に、長期間土層堆積土を残していたため、各土層ごとの番号を付した。A堆積土は22層、B堆積土は16層、C堆積土は20層である。ロームの混入が多く、北から



第94図 第45号・49号住居跡(1)

第45・49号住居跡 A, A'土層注記

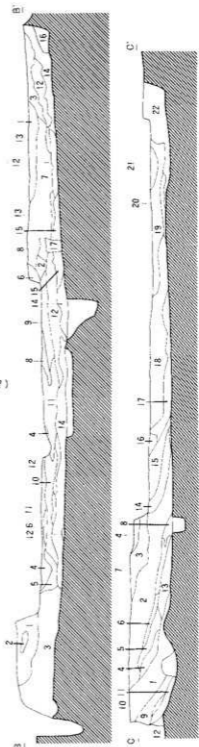
第1層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物少量
第2層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒少量、炭化物少量
第3層	暗褐色	色	10YR4/6	ローム粒少量、炭化物少量
第4層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒少量、炭化物少量
第5層	暗褐色	色	10YR3/4	L, B(小)ちらびっている。炭化物多量
第6層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物少量
第7層	暗褐色	色	10YR4/6	L, Bが零状
第8層	暗褐色	色	10YR2/3	ローム粒少量、炭化物微量
第9層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒多量
第10層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量
第11層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物微量
第12層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒少量
第13層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒微量、炭化物少量
第14層	暗褐色	色	10YR4/6	L, Bの層
第15層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物微量
第16層	暗褐色	色	10YR4/6	ローム粒微量、炭化物微量
第17層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒微量、炭化物少量
第18層	暗褐色	色	10YR4/6	L, Bが零
第19層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒微量、炭化物少量
第20層	暗褐色	色	10YR4/4	L, Bがちらびっている
第21層	暗褐色	色	10YR4/6	L, Bが零状、炭化物微量
第22層	暗褐色	色	10YR3/3	ローム粒微量、炭化物微量

第45, 49号住居跡 B, B'土層注記

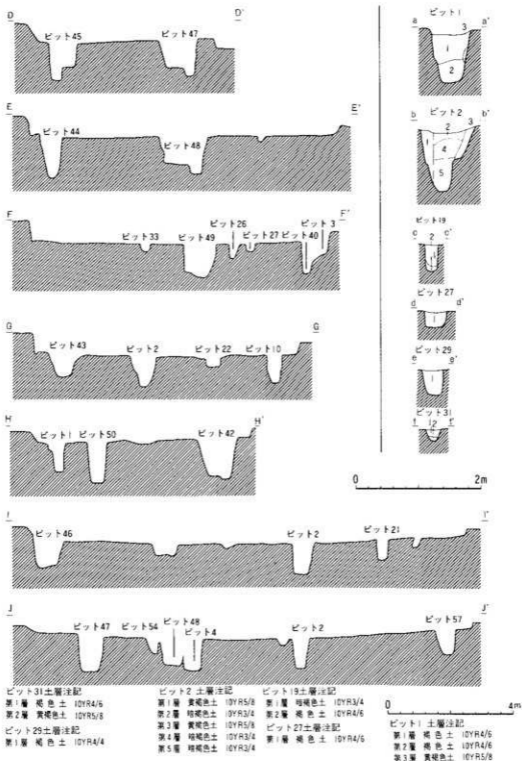
第1層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒中量、炭化物微量含む
第2層	暗褐色	色	10YR3/2	ローム粒極微量、炭化物微量
第3層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒多量、炭化物微量
第4層	暗褐色	色	10YR2/3	ローム粒少量、炭化物微量
第5層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物極微量
第6層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒少量
第7層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒中量、炭化物微量
第8層	にぶい黄褐色	色	10YR5/4	ロームL, Bが不規則に混入(人為的なもの?)
第9層	にぶい黄褐色	色	10YR4/3	ロームL, Bが不規則に混入
第10層	暗褐色	色	10YR2/3	ローム粒微量、炭化物少量
第11層	にぶい黄褐色	色	10YR4/3	ローム粒少量、炭化物極微量
第12層	黄褐色	色	10YR5/8	
第13層	暗褐色	色	10YR3/4	ロームL, B混入
第14層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒、L, Bを少量
第15層	暗褐色	色	10YR3/3	ローム粒少量
第16層	暗褐色	色	10YR4/6	L, B中量、炭化物極微量

第45, 49号住居跡 C, C'土層注記

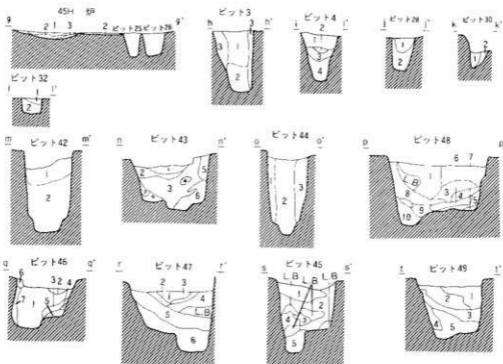
第1層	暗褐色	色	10YR3/4	ローム粒少量、炭化物少量
第2層	暗褐色	色	10YR3/4	L, B零状に混入
第3層	暗褐色	色	10YR3/3	ローム粒(小)多量、炭化物微量
第4層	暗褐色	色	10YR2/3	ローム粒(小)多量、炭化物極微量
第5層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物微量、焼土粒少量
第6層	暗褐色	色	10YR3/3	ローム粒少量、炭化物多量
第7層	暗褐色	色	10YR3/3	ローム粒少量、炭化物少量
第8層	黄褐色	色	10YR5/8	
第9層	暗褐色	色	10YR2/3	褐色4/4の土混入、ローム粒多量
第10層	暗褐色	色	10YR3/4	黒色粒とローム粒の混合層
第11層	暗褐色	色	10YR5/6	
第12層	暗褐色	色	10YR3/2	ローム粒少量、炭化物少量
第13層	暗褐色	色	10YR4/4	黒色粒とローム粒の混合
第14層	暗褐色	色	10YR3/3	48H床?
第15層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物少量
第16層	暗褐色	色	10YR4/6	ローム粒少量
第17層	暗褐色	色	10YR4/4	L, B多量、炭化物少量
第18層	暗褐色	色	10YR4/6	ローム粒多量、炭化物少量
第19層	暗褐色	色	10YR4/4	L, Bが零状に混入
第20層	暗褐色	色	10YR4/4	ローム粒少量、炭化物少量



第95図 第45・49号住居跡(2)



第96図 第45・49号住居跡(3)



炉、土層注記

- 第1層 暗赤褐色土 5YR3/6 炭化物多量
- 第2層 赤褐色土 2.5YR4/8 灰が混入(にぶい橙色)
- 第3層 暗赤褐色土 5YR2/4 炭化物少量
- 第4層 褐色土 10YR4/4

ビット4土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
- 第2層 暗赤褐色土 5YR2/4
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4
- 第4層 褐色土 10YR4/4

ビット28土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/6
- 第2層 黄褐色土 10YR5/6

ビット30土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4
- 第2層 褐色土 10YR4/4

ビット32土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4
- 第2層 褐色土 10YR4/6

ビット42土層注記

- 第1層 黄褐色土 10YR5/8
- 第2層 褐色土 10YR4/4

ビット43土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/6
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3
- 第4層 褐色土 10YR4/4
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4
- 第6層 黄褐色土 10YR5/6
- 第7層 褐色土 10YR4/4

ビット44土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/6
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3
- 第3層 褐色土 10YR4/6

ビット3土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4
- 第2層 褐色土 10YR4/6
- 第3層 黄褐色土 10YR5/8

ビット45土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3
- 第3層 黄褐色土 10YR5/6
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4
- 第5層 褐色土 10YR4/4

ビット46土層注記

- 第1層 褐色土 10YR3/3
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3
- 第3層 暗褐色土 10YR3/2
- 第4層 黄褐色土 10YR5/6
- 第5層 黒褐色土 10YR2/3
- 第6層 褐色土 10YR4/6
- 第7層 褐色土 10YR4/6

ビット49土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4
- 第2層 黄褐色土 10YR2/3
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3
- 第4層 褐色土 10YR4/6
- 第5層 暗褐色土 10YR3/4

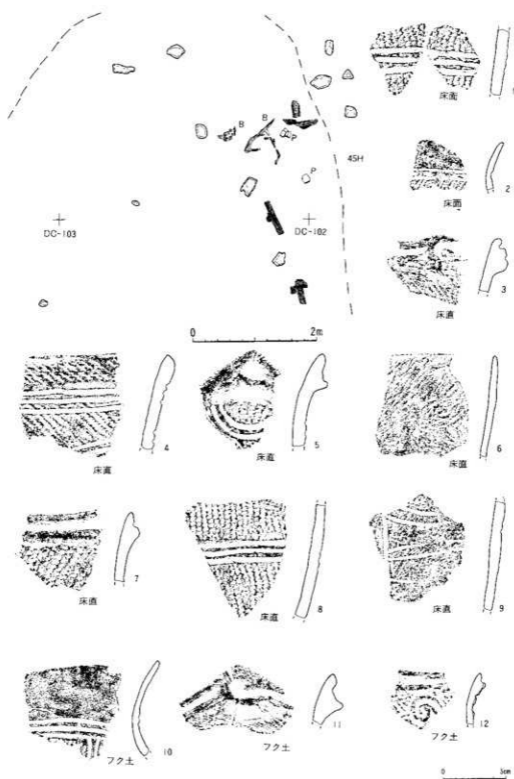
ビット47土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
- 第2層 褐色土 10YR4/4
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4
- 第5層 黒褐色土 10YR2/3
- 第6層 褐色土 10YR4/6

ビット48土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3
- 第3層 黄褐色土 10YR2/3
- 第4層 黄褐色土 10YR3/2
- 第5層 褐色土 10YR4/4
- 第6層 暗褐色土 10YR3/3
- 第7層 暗褐色土 10YR6/8
- 第8層 暗褐色土 10YR3/4
- 第9層 暗褐色土 10YR3/3
- 第10層 黒褐色土 10YR2/4

第97図 第45・49号住居跡(4)



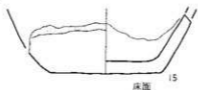
第98図 第45号住居跡(5)



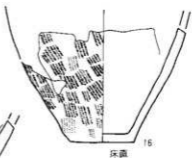
13 床蓋(熊角の下)



14 床蓋



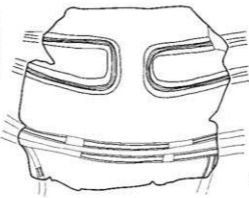
15 床蓋



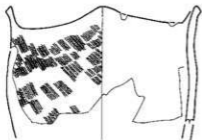
16 床蓋



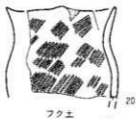
17 床蓋



18 床蓋



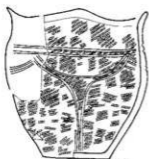
19 フク土



20 フク土



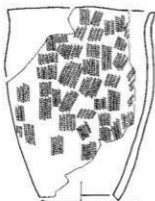
第99図 第45号住居跡(6)



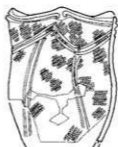
フク土 21



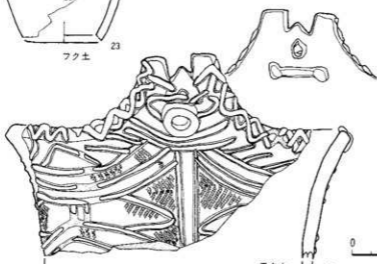
フク土 22



フク土 23

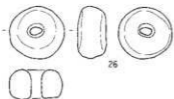


フク土 24



フク土 25

0 10cm



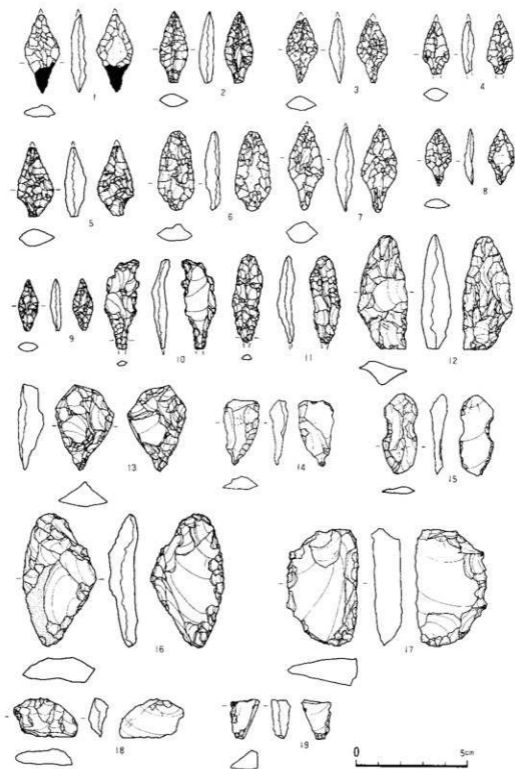
26



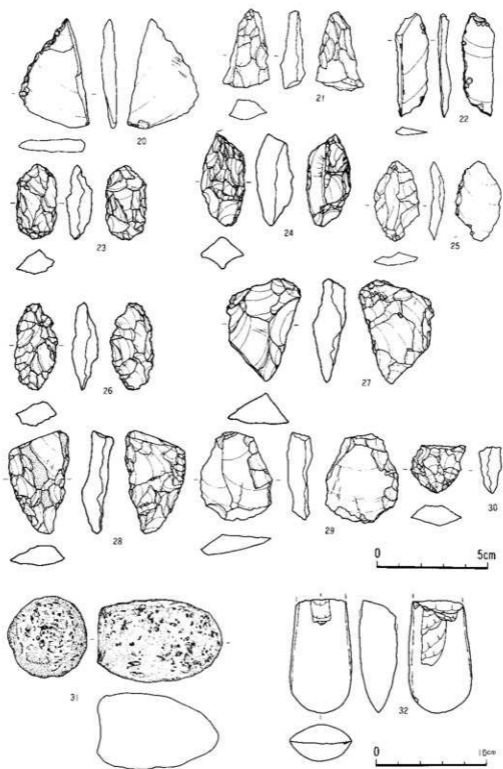
27

0 5cm

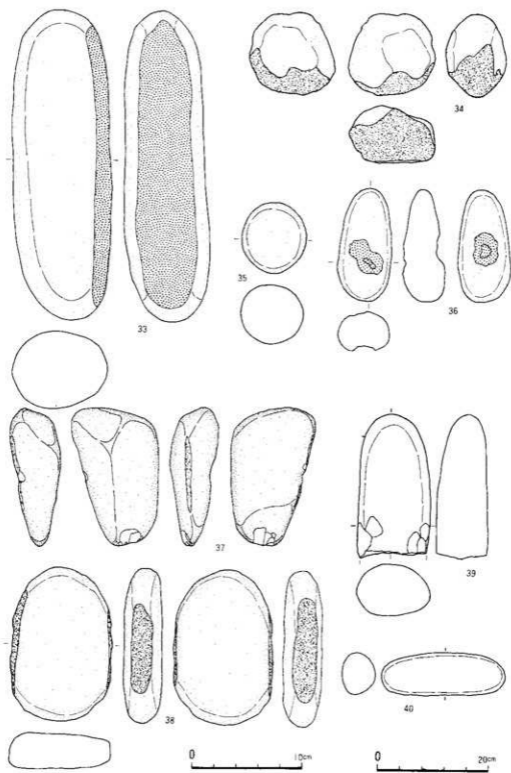
第100図 第45号住居跡(7)



第101图 第45号住居跡(8)



第102图 第45号住居跡(9)



第103图 第45号住居跡(10)

南に入り込んでいる。

<出土遺物> 土器は床面・床面直上から(1~9・13~18)が出土し、他は覆土からの出土である。北側の第49号住居跡と近接する床面直上部分で鹿の角が出土し、その鹿の角の下床面から土器(13)が出土した。石器は床面から石錐2点、石槍1点、不定形石器1点、床直上から石錐7点、石錐2点、石筥1点、ピエス・エスキーユ1点、不定形石器8点、敲磨器類3点、磨製石斧1点、覆土から石錐14点、石槍2点、石錐2点、石匙1点、不定形石器40点、砥石1点が出土し、総数87点である。

<小結> 床面から出土した土器(13)から榎林式期の住居跡と考えられる。また西壁より検出した壁溝から建て替えも行われた可能性が考えられる。(長崎 勝巳)

第46号住居跡(第104~112図)

<位置と確認> DC・DE-102・103グリッドに位置している。調査の早い段階で確認したが、周辺に多数の遺構が重複しているため、調査に手間取った。

<重複> 第45・75・95・97・98・102号住居跡よりは古いのが、第49・94・134・165・166・167・168号住居跡・第307・395・396号土壇より新しい。なお、第165・166号住居跡は本住居の建て替え前の住居の可能性が考えられる。

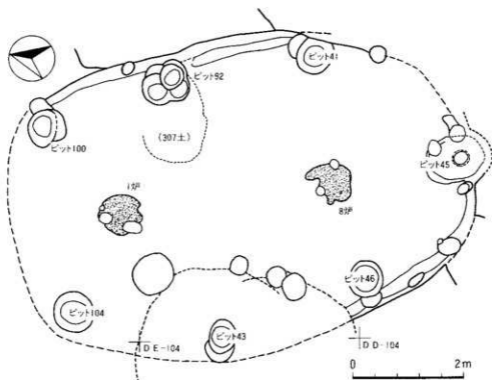
<平面形・規模> 北側の壁を検出できなかったが、楕円形を呈すると思われる。推定規模(床面での計測)は、長軸8m30cm前後、短軸5m40cm前後のやや大型の住居跡である。推定床面積は37.64㎡である。

<壁・床面> 壁は南西壁と東壁の2分の1程を確認できた。この部分の壁高は約35cm前後で、急に立ち上がる。床面は部分的に貼り床が施され、平坦で、堅緻である。

<壁溝> 南西壁、東壁の直下で、幅10cm前後、深さ10cm前後の壁溝を検出した。この壁溝の内側でも2条の壁溝を検出したが、それぞれ第165・166号住居跡とした。

<柱穴> 竅穴内から多数のピットを検出している。他の住居跡のピットも含まれているものと考えられるが、重複が激しいため、ピットの番号は本住居を中心に、第79・97号住居跡のものも合わせて通し番号を付けた。主なピットの深さは以下のとおりである。

P₄₀…76cm、P₄₁…83cm、P₄₂…40cm、P₄₃…80cm、P₄₄…80cm、P₄₅…44cm、P₄₆…38cm、P₄₇…34cm、P₄₈…36cm、P₄₉…51cm、P₅₀…58cm、P₅₁…30cm、P₅₄…38cm、P₅₅…38cm、P₅₈…57cm、P₅₉…25cm、P₆₀…35cm、P₆₁…25cm、P₆₂…22cm、P₆₃…35cm、P₆₈…41cm、P₆₉…47cm、P₇₁…20cm、P₇₂…21cm、P₇₄…49cm、P₇₅…55cm、P₇₆…19cm、P₇₇…19cm、P₇₈…22cm、P₈₀…25cm、F₈₁…41cm、P₈₅…64cm、P₈₇…75cm、P₈₉…41cm、P₉₄…27cm、P₉₇…53cm、P₉₈…78cm、P₉₉…72cm、P₁₀₂…85cm、P₁₀₃…52cm、P₁₀₆…63cm、P₁₀₈…57cm、P₁₀₉…64cm。



第106図 第46号住居跡(3)

このうち、本住居跡の柱穴はP₄₁・P₄₃・P₄₆・P₉₂・P₁₀₀・P₁₀₄と考えられる。

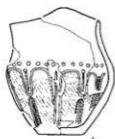
〈炉〉 床面が焼けている部分が11か所検出された。レベル差はあまりなく、新旧関係を把握できなかったものもあるが、位置的には、1号炉と7号炉が本住居に伴う可能性が高い。1号炉は、径70cmの円形で、7号炉は径60cm前後の不整形を呈している。

〈特殊施設〉 長軸の南端で検出した。第45号住居跡と重複しているため不明な部分もあるが、短軸80cm、長軸1m10cmの楕円形で、南壁が外側へ張り出すものと思われる。内側には径25cm前後、深さ44cmのピットが認められている。外縁にはロームの盛土は見られず、ピットに向かって、若干(7cm)低くなっている。また東西の両脇には、2個のピットが検出されており、特殊施設の一部を構成していることが考えられる。

〈堆積土〉 全体にローム粒・炭化物粒を含んだ暗褐色～褐色土を主体としており、壁際や中央部には特にローム粒が多く含まれている。

〈出土遺物〉 覆土からは、多量の遺物が出土した。第3層からは炭化した堅果類や獣骨片の出土が見られた。土器は覆土から床面直上にかけて椗林式から最花式にかけての土器が多く見られた。床面からは、円筒上層式以後の縄文施文の土器が見られた。

石器は床面から石鏃2点、石槍1点、不定形石器1点、床面直上から石鏃7点、石錐2点、



フク土 1



床直 2



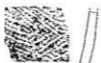
床直 3



床直 4



床直 5



床直 6



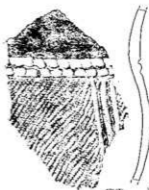
床直 7



床直 8



床直 9



床直 13



床直 10



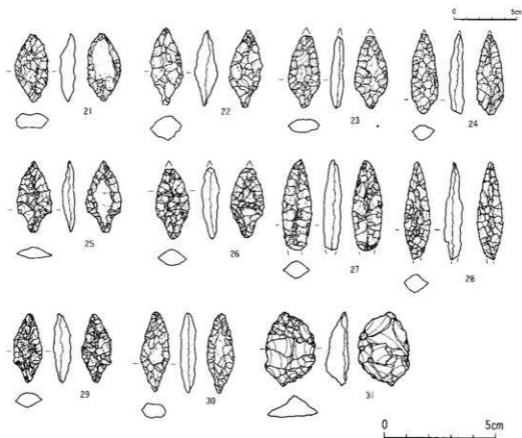
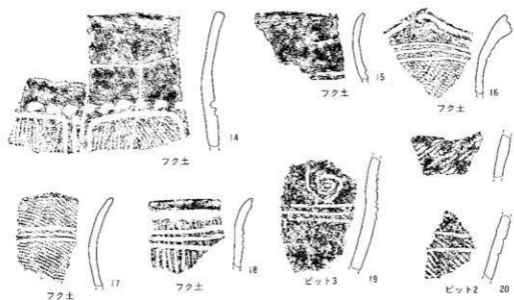
床直 11



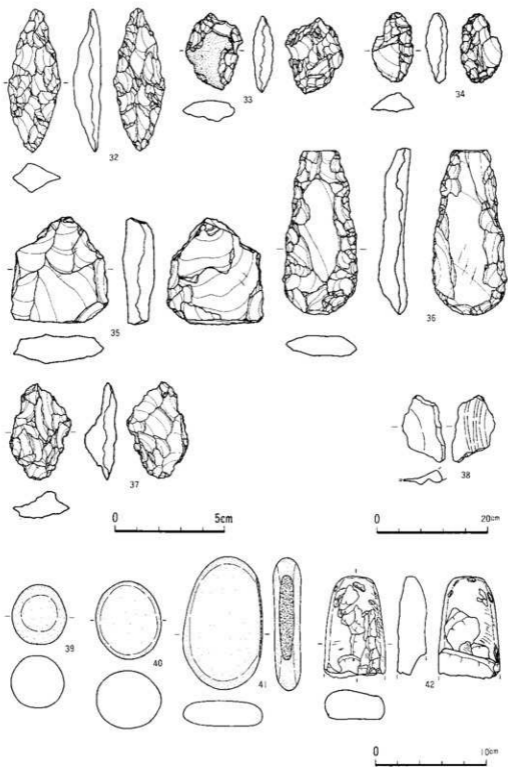
床直 12



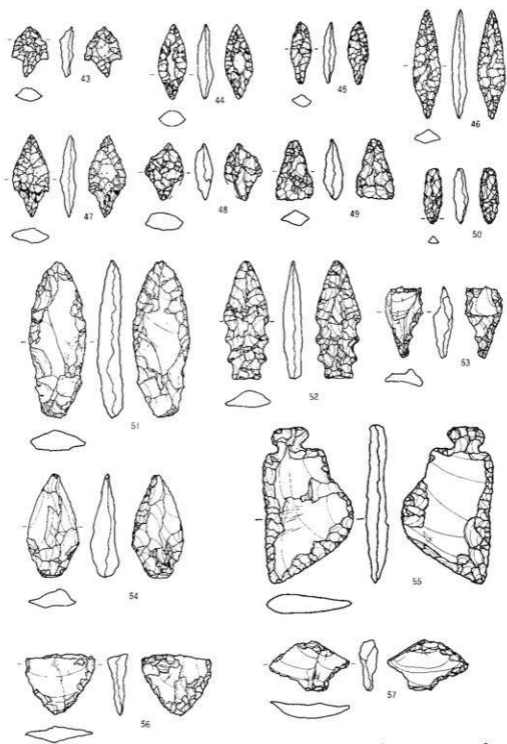
第107図 第46号住居跡(4)



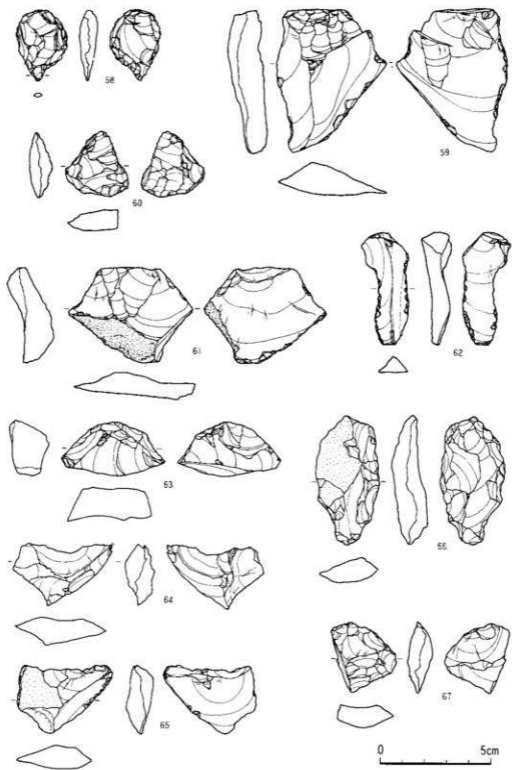
第108図 第46号住居跡(5)



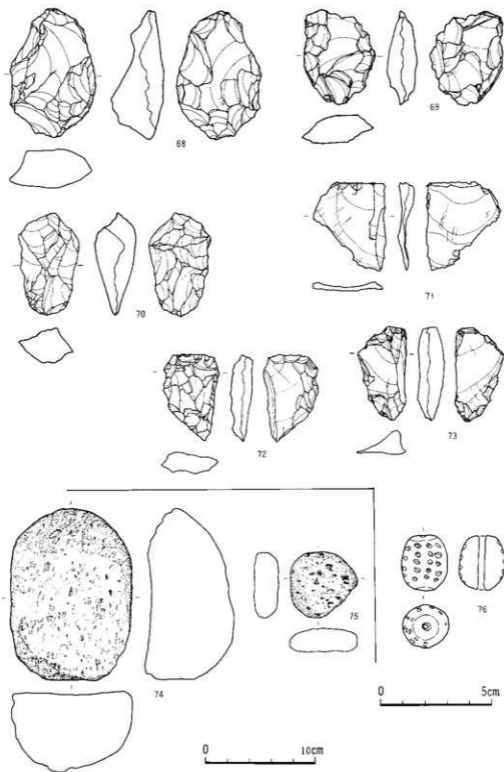
第109図 第46号住居跡(6)



第110图 第46号住居跡(7)



第1111图 第46号住居跡(8)



第112图 第46号住居跡(9)

石篋1点、不定形石器8点、ピエス・エスキュー1点、敲磨器類3点、磨製石斧1点、覆土から石鏃14点、石槍2点、石錐2点、石匙1点、不定形石器40点、砥石1点が出土し、総数87点のである。また、この他に床面と覆土から軽石（製品？）がそれぞれ1点、床面から琥珀（原石？）が2点、覆土から有孔土製品が1点出土した。

<小結> 床面から、本住居跡の時期を決定する良好な土器は出土していないが、床面直上からの出土土器と合わせて考えると、榎林式期と思われる。（畠山 昇）

第48号住居跡（第113～116図）

<位置と確認> DB・DC-101グリッドに位置し、褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第43・49号住居跡と重複し、第43号住居跡より古く、第49号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 長軸6m50cm、短軸4m程の楕円形と考えられる。床面積は22.44㎡である。

<壁・床面> 壁は急な立ち上がりで、東壁は22cm、北壁は38cmの壁高がある。床面直上から多数の炭化材が検出され、ほとんどが丸太状である。床面は褐色土の上に1～3cmの厚さでロームが貼り床され、軟弱であるがほぼ平坦である。住居跡の南側に位置するP₀の覆土中から床面にかけて多数の小礫が発見された。40×50cm程の範囲で、小礫の大きさは2～6cmで隙間なく敷かれたような状態であった。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 床面から6個のピットが検出された。主柱穴と考えられるものは不明である。各ピットの深さはP₁…40cm、P₂…20cm、P₃…26cm、P₄…20cm、P₅…22cm、P₆…26cmである。

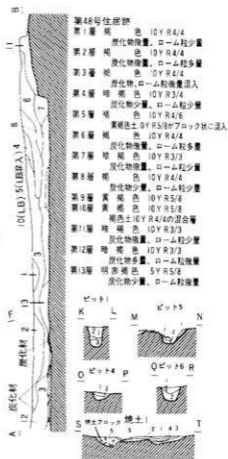
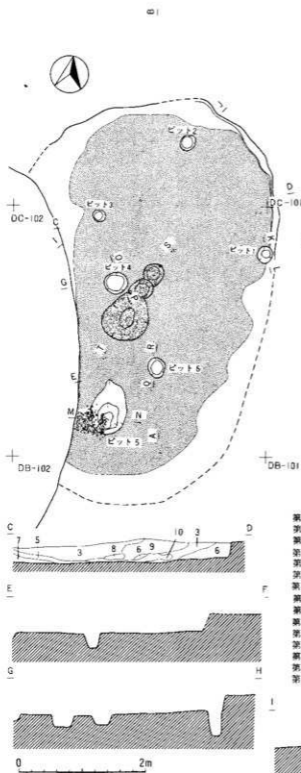
<炉> 地床炉で住居跡のほぼ中央に位置する。浅い掘り込みがみられた。

<特殊施設> 確認されなかった。

<堆積土> 褐色土を主体とし、13層に分層した。ローム粒が多く含まれている。

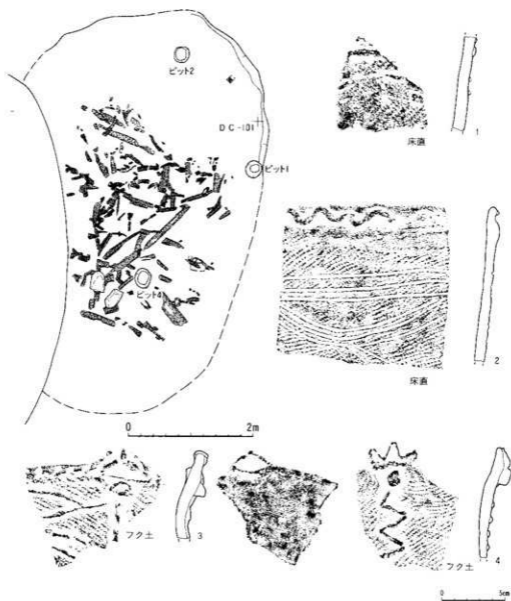
<出土遺物> 土器は床面(1)・床面直上(2)から出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃1点、磨製石斧1点、床面直上から不定形石器6点、P₁から石鏃2点、覆土から石鏃2点、石篋1点、石槍1点、石錐1点、不定形石器16点、敲磨器類3点、石製品2点が出土し、総数で36点である。

<小結> 焼失家屋とみられる。床面出土の土器から円筒上層d・e式期のものと考えられる。（長崎 勝己）

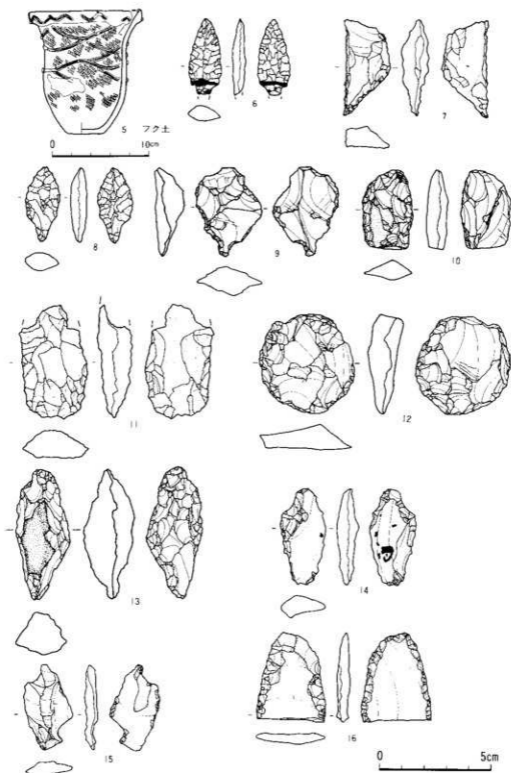


- 第48号住居跡ピット1土層注記
 第1層 暗褐色 10YR3/4 ローム粒微量
 第2層 黄褐色 10YR5/6
 第3層 暗褐色 10YR2/3 ローム粒微量
- 第48号住居跡ピット4土層注記
 第1層 暗褐色 10YR3/4 ローム粒微量
 第2層 褐色 10YR4/4 ローム粒少量
- 第48号住居跡ピット5土層注記
 第1層 暗褐色 10YR3/3 炭化物少量、ローム粒少量
 第2層 黒褐色 10YR3/3 炭化物微量、ローム粒微量
- 第48号住居跡ピット6土層注記
 第1層 暗褐色 10YR3/3 炭化物多量、ローム粒微量
 第2層 暗褐色 10YR3/4 炭化物微量、ローム粒微量
- 第48号住居跡火土層注記
 第1層 濃い赤褐色 5YR4/4 焼土粒少量
 第2層 赤褐色 2.5YR4/8
 第3層 暗赤褐色 5YR3/6
 第4層 褐色 7.5YR4/6 ローム粒少量
 第5層 暗褐色 7.5YR3/4 焼土ブロックが多量

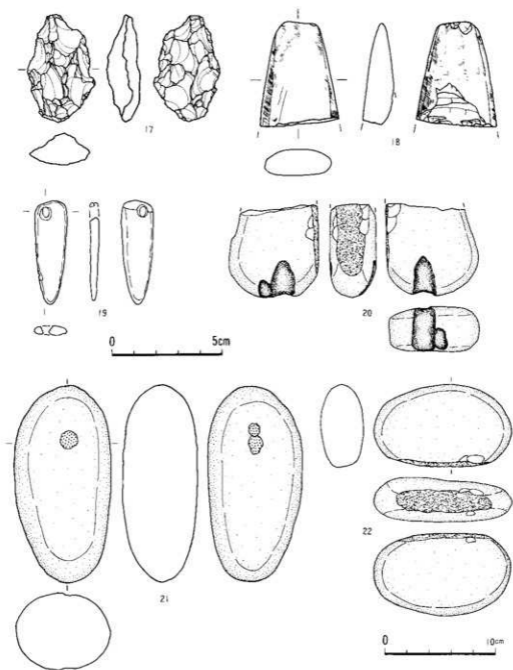
第113図 第48号住居跡(1)



第114図 第48号住居跡(2)



第115図 第48号住居跡(3)



第116图 第48号住居跡(4)

第49号住居跡 (第94～96・117～123図)

<位置と確認> DA・DB・DC・DD-101・102グリッドに位置する。

<重複> 西に第45号住居跡、第50号住居跡、北に第82号住居跡、第46号住居跡があり、すべての住居跡よりも古い。

<平面形・規模> 北及び西側は他の住居跡との重複で不明であるが、柱穴配置から、長軸14m、短軸6m20cmの隅丸長方形を呈する。床面積は81.17㎡の大型住居跡である。

<壁・床面> 北・西壁は他の住居跡との重複で不明であるが、壁高は北壁44cm、東壁50cmである。床面から東壁際に30～50cmの幅で長さ10m程のロームを貼り固めたテラスが検出され、高低差は2～5cm程である。東壁のテラス状を除くと、ほとんど平坦で堅緻である。また、第45号住居跡の床面との高低差はない。

<壁溝> 東壁側から1条検出した。幅6～12cm、深さ3～8cmである。壁溝内からピットが1個検出され、深さは15cmである。

<柱穴> 柱穴配置からP₄₁～P₅₀の10本が支柱穴である。床面及び床下から多くのピットを検出した。各ピットの床面からの深さは、P₄₁…59cm、P₄₂…97cm、P₄₃…131cm、P₄₄…125cm、P₄₅…123cm、P₄₆…87cm、P₄₇…122cm、P₄₈…124cm、P₄₈…108cm、P₅₀…132cmで、小ピットの深さは7～35cmである。

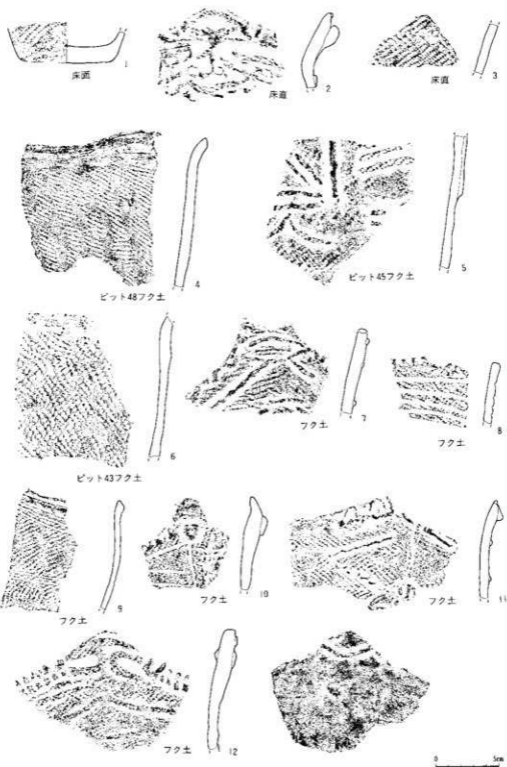
<炉> 焼土は7基検出し、G、直径15cmのほぼ円形 H、90×50cmの不整楕円形 I、45×25cmの不整形 J、30×20cmの楕円形 K、50×25cmの楕円形 L、40×25cmの楕円形 M、100×90cmの不整形。長軸線上にはH・K・Mとした焼土があり地床炉と考えられる。

<特殊施設> 北壁の中央部に位置する。直径2m程の盛土が馬蹄状に巡らされ中心に向けてわずかにくぼむ。施設内からは3個のピットが検出された。直径70cm、深さ60cmと直径20～35cm、深さ20～25cmのピットである。第45号住居跡の特殊施設及び第46号住居跡と重複している。

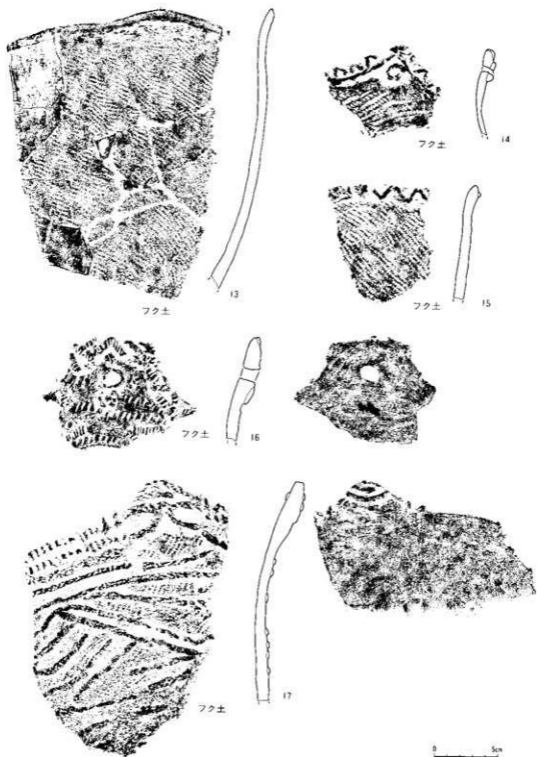
<堆積土> 第45号住居跡参照

<出土遺物> 土器は床面・床面直上(1～3)、及びP₄₃(6)、P₄₄(4)、P₅₁(21)から出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃4点、石槍2点、不定形石器17点、敲磨器類1点、石製品(軽石)3点、床面直上から石鏃1点、敲磨器類1点、ピットから石鏃2点、石筈1点、不定形石器6点、覆土から石鏃8点、石槍1点、石鏃3点、石匙1点、石筈2点、不定形石器42点、敲磨器類3点が出土し、総数で98点である。

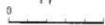
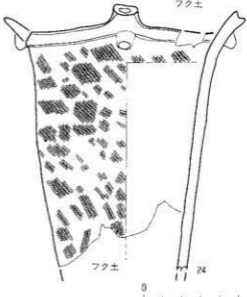
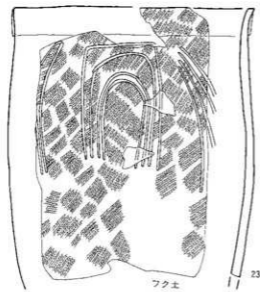
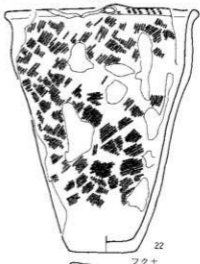
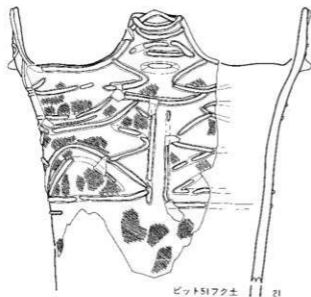
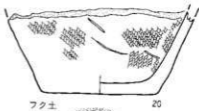
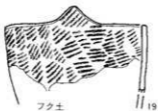
<小結> 覆土から円筒上層d・e式期、最花式期、榎林式期の土器が出土している。テラス及び貼り床除去後小ピットが、多数検出され東側は列状になる。 (長崎 勝巳)



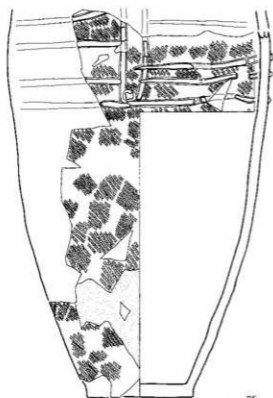
第117図 第49号住居跡(1)



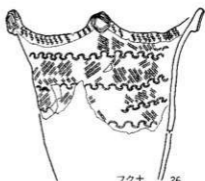
第118図 第49号住居跡(2)



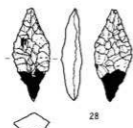
第119図 第49号住居跡(3)



フク土 25



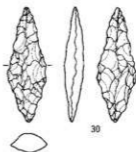
フク土 26



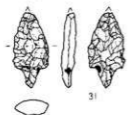
28



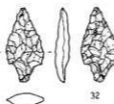
29



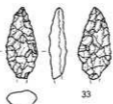
30



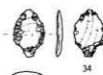
31



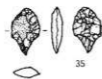
32



33



34



35



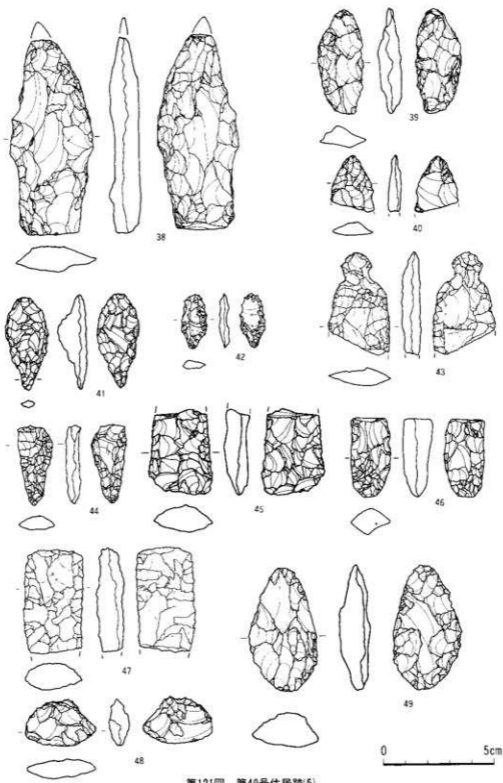
36



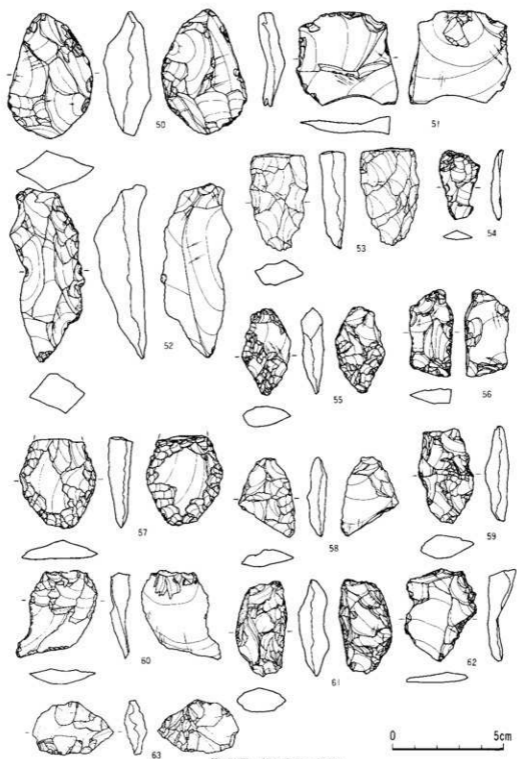
37



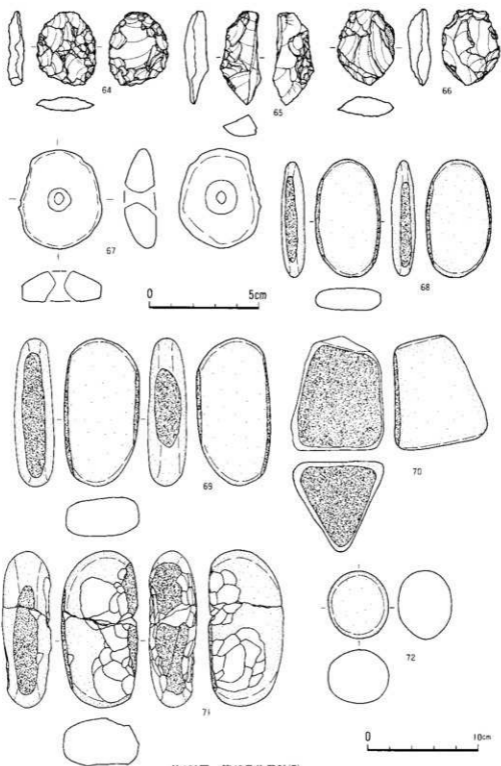
第120図 第49号住居跡(4)



第121图 第49号住居跡(5)



第122图 第49号住居跡(6)



第123图 第49号住居跡(7)

第50号住居跡（第124・125図）

＜位置と確認＞ C Z・DA-102グリットに位置し、第14号住居跡・第20号住居跡の床面下で確認した。

＜重複＞ 北に第45号住居跡、南に第20号住居跡、東に第49号住居跡があり、第49号住居跡より新しく、第45・20号住居跡より古い。

＜平面形・規模＞ 長軸5.9m、短軸4.2mの隅丸長方形を呈する。床面積は20.56㎡である。

＜壁・床面＞ 第IV層を掘り込んで壁とし、東壁32cm、西壁29cm、南壁2cm、北壁37cmである。床面はほぼ平坦で、南側がやや低くなっている。

＜壁溝＞ 確認されなかった。

＜柱穴＞ 床面より大小合わせて22個のピットを検出した。ピットの配列及び規模からP₁・P₄・P₁₀・P₁₅の4個が主柱穴と思われる。各ピットの深さは、P₁…67cm、P₂…30cm、P₃…14cm、P₄…64cm、P₅…7cm、P₆…10cm、P₇…8cm、P₈…27cm、P₉…29cm、P₁₀…39cm、P₁₁…25cm、P₁₂…49cm、P₁₃…58cm、P₁₄…17cm、P₁₅…74cm、P₁₆…25cm、P₁₇…10cm、P₁₈…80cm、P₁₉…5cm、P₂₀…5cm、P₂₁…3cm。

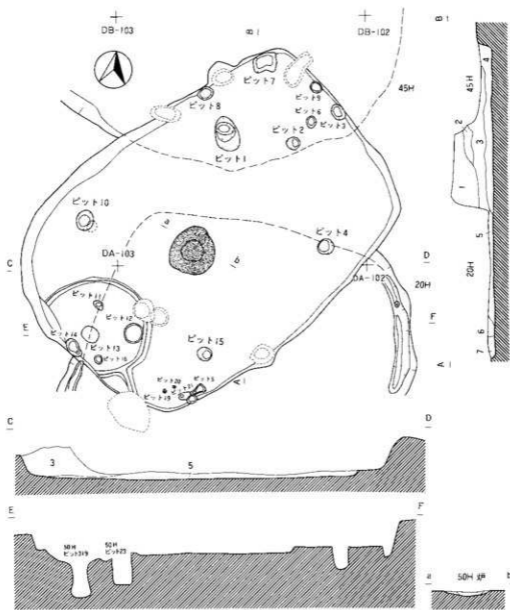
＜炉＞ 住居のほぼ中央に位置し、80×70cmの地床炉である。焼土面は堅緻で、縁辺部から中央に向けて9cmくぼむ。

＜特殊施設＞ 西壁のほぼ中央に位置する。直径170cm程の馬蹄状に盛土を巡らす。その盛土は貼り付けたもので、縁辺部から中央に向けて14cmくぼむ。その中から5個のピットが検出された（P₁₁・P₁₃・P₁₄・P₁₉・P₂₃）。また、盛土は、南側部分で二又に分かれて巡らされている。

＜堆積土＞ 7層に分層され、暗褐色土を主体とする。堆積状況から人為堆積と考えられる。

＜出土遺物＞ 土器は床面から（1～4）が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃2点、不定形石器2点、床面直上から不定形石器3点、覆土から石鏃1点、石棒類1点が出土し、総数で9点である。

＜小結＞ 床面出土の土器から円筒上層e式期の住居跡と考えられる。（長崎 勝巳）



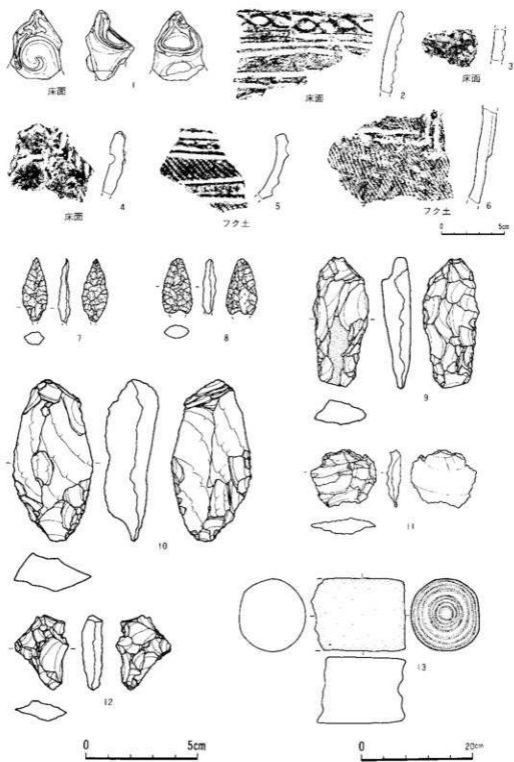
第50号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物微量、ローム粒少量
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物少量、ローム粒少量
- 第3層 黄褐色土 10YR5/8 炭化物多量、黑色粒混入
- 第4層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒微量
- 第5層 黄褐色土 10YR2/3
- 第6層 暗褐色土 10YR2/4 炭化物微量
- 第7層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物微量、ローム粒多量

第50号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物、焼土粒多量
- 第2層 赤褐色土 2.5YR4/8 焼土層

第124図 第50号住居跡(1)



第125図 第50号住居跡(2)

第51号住居跡 (第126～128図)

〈位置と確認〉 調査区DG-88・89グリッドで、調査区東側の台地平坦面にある。第IV層を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

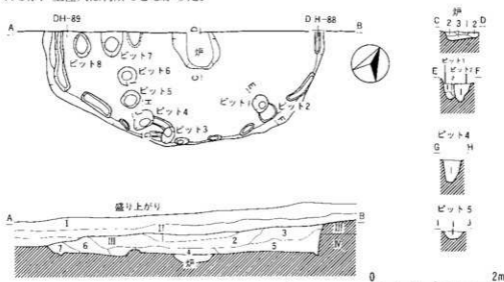
〈重複〉 認められなかった。

〈平面形・規模〉 住居跡の北側が調査区域外に延びている為に完掘はできなかったが、残存部から推定すると円形と思われる。規模は、長軸4m47cm・短軸(1m76cm)である。

〈壁・床面〉 東壁及び南壁は床面から上端にかけて垂直に立ち上がり、西壁は上端から床面にかけて緩やかに傾斜している。壁は堅緻な造りである。壁高は、東壁40cm・西壁11cm・南壁34cm・北壁は不明である。床面は、炉の中心が非常に固くほぼ平坦である。

〈壁溝〉 壁寄りに幅15cm・深さ7cmの浅い溝を巡らしている。溝は一周せず断続的に途切れている。

〈柱穴〉 ビットは8個検出し、住居跡の西側に多く集中している。形態等から柱穴と考えられるが、主柱穴は判断できなかった。



第51号住居跡 ビット1 土層注記

- 第1層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子多量、炭化物若干含む
第2層 明黄褐色 10YR5/6 暗褐色土混入

第51号住居跡 ビット2 土層注記

- 第1層 褐色 10YR4/6 暗褐色土混入、ロームブロックを多量に含む

第51号住居跡 ビット5 土層注記

- 第1層 黄褐色 10YR3/2 ローム粒・ロームブロック混入

第51号住居跡 ビット4 土層注記

- 第1層 暗褐色 10YR3/4 炭化物・ローム粒子少量含む

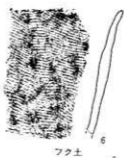
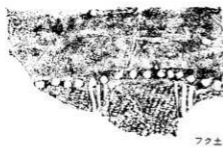
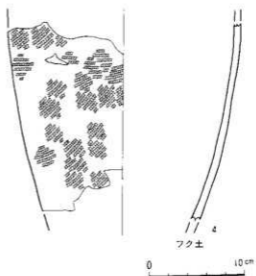
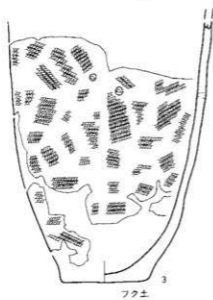
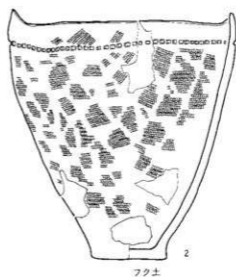
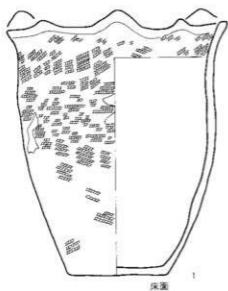
第51号住居跡 土層注記

- 第1層 暗褐色 10YR3/4 焼土粒・ローム粒子を少量含む
第2層 暗褐色 10YR3/3 炭化物・ローム粒を全面に含み、焼土粒若干混入
第3層 褐色 10YR4/4 ローム粒少量含む
第4層 暗褐色 10YR3/3 焼土粒多量、ローム粒少量含む
第5層 暗褐色 10YR3/4 ローム粒多量、炭化物少量含む
第6層 褐色 10YR4/6 ローム粒多量、炭化物少量含む
第7層 黄褐色 10YR5/6 暗褐色土混入

第51号住居跡 炉土層注記

- 第1層 赤褐色 5YR4/6 焼土粒多量、炭化物若干含む
第2層 暗褐色 10YR3/4 焼土粒・炭化物を少量含む
第3層 黄褐色 10YR5/6 暗褐色土混入、焼土粒を若干含む

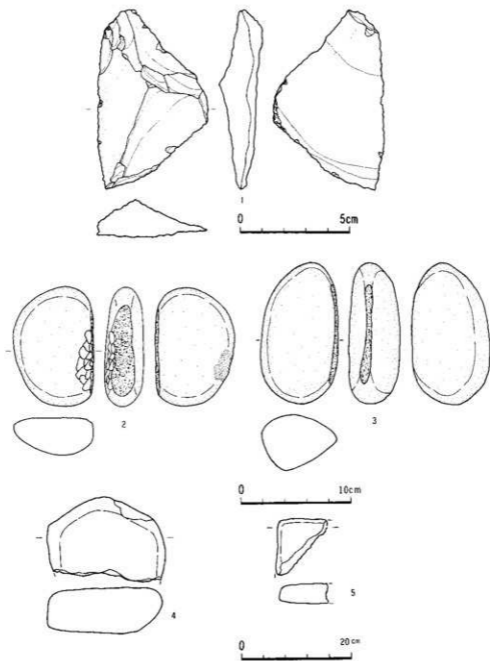
第126図 第51号住居跡(1)



第127図 第51号住居跡(2)

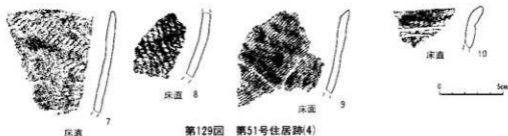
<炉> 炉は住居跡の中央部に位置している。規模は長径(72)cm・短径59cm・深さは14cmで、残存部から推定すると地床炉と思われる。

<特殊施設> 炉の西側で幅24cm・高さ6cmの第IV層を利用した盛土を検出した。完掘していない為に用途に関しては不明である。



第128図 第51号住居跡(3)

＜堆積土＞ 7層に分層できた。第1・2・4層から焼土粒が出土し、本住居跡は焼失家屋の可能性が考えられる。



第129図 第51号住居跡(4)

＜出土遺物＞ 遺物は炉を中心とした範囲から多く出土した。土器は床面・床直から、1・7～10が出土し他は覆土からの出土である。石器は、覆土から不定形石器1点・敲磨器類2点、床面・床直から台石・石皿類1点の総数4点が出土した。

＜小結＞ 住居跡の時期は、床面・床直の土器から榎林式期と思われる。(成田 滋彦)

第53号住居跡 (第130～132図)

＜位置と確認＞ 調査区DE・DF-87グリッドで、調査区東側の台地平坦面に位置している。

＜重複＞ 住居跡の北側は風倒木及び溝と重複し、新旧関係は、風倒木より新しく溝より古い。

＜平面形・規模＞ 北側が張り出した不整形を呈する。規模は、長軸3 m12cm・短軸2 m57 cm・床面積は6.08㎡である。

＜壁・床面＞ 上端から床面にかけてなだらかに傾斜しており、軟弱な造りである。壁高は、東壁22cm・西壁8 cm・南壁5 cm・北壁29cmである。床面は、ほぼ平坦であり壁同様に軟弱な造りである。

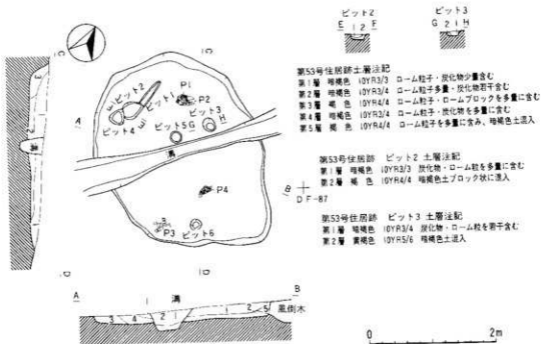
＜柱穴＞ ビットは6個検出し、住居跡の北側に多い。配置等から主柱穴かどうか判断できなかった。

＜炉・特殊施設＞ 認められなかった

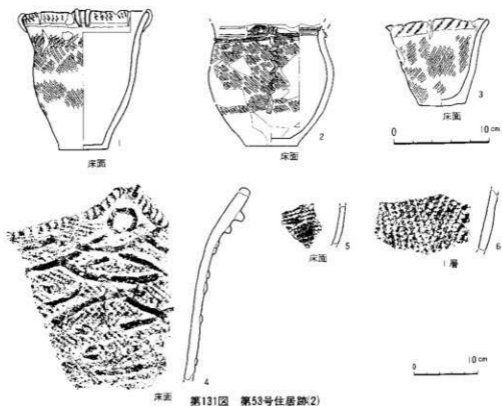
＜堆積土＞ 5層に分層できた。住居跡の廃棄時に第2～5層が堆積し、最終的に第1層が堆積した。自然堆積と思われる。

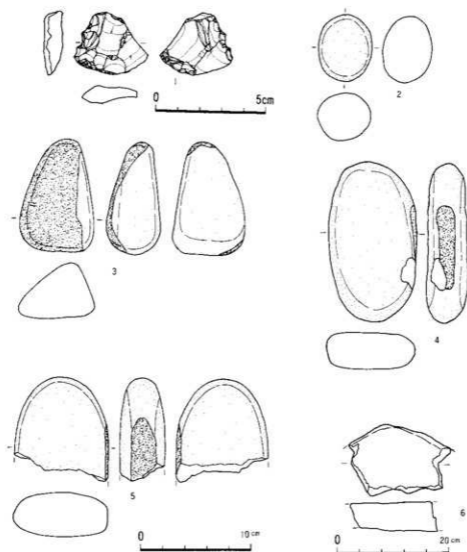
＜出土遺物＞ 住居跡の北側から深鉢形土器が出土した。(1)が倒立、(2)・(3)が横位の状態で床面から出土した。(1)～(3)は、この時期のセットとして良好な資料と思われる。(2)は胴部が張り出すプロポジションで円筒系の深鉢形土器と趣を異にする。石器は、覆土から不定形石器2点・敲磨器類2点、床直から敲磨器類1点、床面から敲磨器類1点・台石石皿類1点の総数7点出土した。

＜小結＞ 住居跡の時期は、床面の土器から円筒上層d式期と思われる。(成田 滋彦)



第130図 第53号住居跡(1)





第132図 第53号住居跡(3)

第51号住居跡ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	24×23	30.9	2	円形	29×26	22.2	3	楕円形	26×20	22.1
4	楕円形	37×31	43.2	5	円形	28×26	16.8	6	円形	31×30	29.0
7	楕円形	60×34	19.9	8	楕円形	37×25	13.1				

第53号住居跡ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	69×12	17.2	2	楕円形	62×25	10.0	3	円形	21×20	10.5
4	不整形	24×22	12.1	5	円形	20×19	12.5	6	円形	16×16	7.0

第54号住居跡（第133図）

<位置と確認> 調査区の東側の低台地上のDG-85グリッドに位置している。第II層下面で暗褐色土の不整な円形の落ち込みを確認した。

<重複> 第105号土壌及び第109号土壌と重複しており、本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 南東部が若干変形した円形で、規模は、長軸2 m72cm、短軸2 m40cmである。床面積は4.34m²である。

<壁・床面> 各壁ともにほぼ垂直に立ち上がる。土壌と重複している北壁ははっきりしていないが、残りの壁は堅緻な構築である。壁高は東壁30cm、西壁38cm、南壁32cm、北壁46cmである。床面は全般的に平坦で堅緻な構築である。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> あまり深くないピットが4個検出された。その4個が基本的に支柱穴と思われる。

ピットの深さはP₁…14cm、P₂…9cm、P₃…14cm、P₄…10cmである。

<炉> 住居跡のほぼ中央で小さな地床炉が1基検出された。不整な長方形で、規模は長軸17cm、短軸13cm、深さ3cmである。堅緻な火床面が認められた。

<特殊施設> 南西部に張り出し状の特殊施設が認められた。規模は長軸73cm、短軸70cm、深さ42cmで、床面からの深さは8cmである。特殊施設から遺物は出土なかった。

<堆積土> 7層に分層した。全体的にレンズ状に堆積しており、自然堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 遺物は覆土上部より出土し、床面からほとんど出土しなかった。土器は第1層より円筒上層e式土器が出土している。石器は出土していない。

<小結> 張り出し状の特殊施設をもつことが特徴であるが、その用途は不明である。第1層に円筒上層e式土器が廃棄されているため、本住居跡の構築時期は円筒上層d・e式期の可能性が高い。（三浦 孝仁）

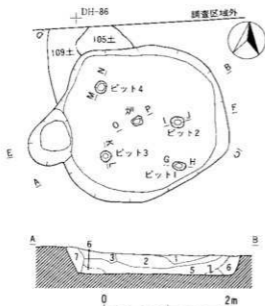
第55号住居跡（第134・135図）

<位置と確認> 調査区の東側の低台地上にDF-84、DF-85グリッドに位置している。第II層下面で床面の一部と円形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 南西部が若干変形した円形で、規模は長軸4 m15cm、短軸3 m54cmである。床面積は10.86m²である。

<壁・床面> 各壁とも、ほぼ緩やかに立ち上がる。壁はもろい構築で、壁高は東壁8cm、西壁12cm、南壁30cm、北壁17cmである。床面は貼り床が一部に施されているものの全般的に起伏があり、締まりに欠ける。



第54号住居跡土層注記

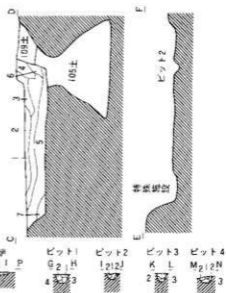
- 第1層 灰褐色 (10YR3/2) ローム粒を少量
- 第2層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 5mm L B 中量
- 第3層 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒少量、炭化粒少量
- 第4層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒微量
- 第5層 暗褐色 (10YR4/4) ローム粒及び10mm L B を中量
- 第6層 灰褐色 (10YR2/3) ローム粒微量
- 第7層 黄褐色 (10YR5/6) ローム粒及びL B 多量

第54号住居跡 炉土層注記

- 第1層 灰褐色 (10YR2/2) ローム粒微量、炭化粒少量
- 第2層 暗褐色 (10YR4/4) ϕ 5mm のL B 少量、黄土少量

第54号住居跡 ビット4 土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR4/6) ローム粒中量
- 第2層 暗褐色 (10YR4/4) ローム粒少量
- 第3層 黄褐色 (10YR5/6) ローム粒多量



第54号住居跡 ビット2 土層注記

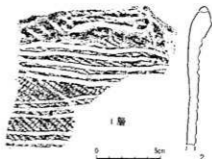
- 第1層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒少量
- 第2層 黄褐色 (10YR5/6) ローム質土

第54号住居跡 ビット1 土層注記

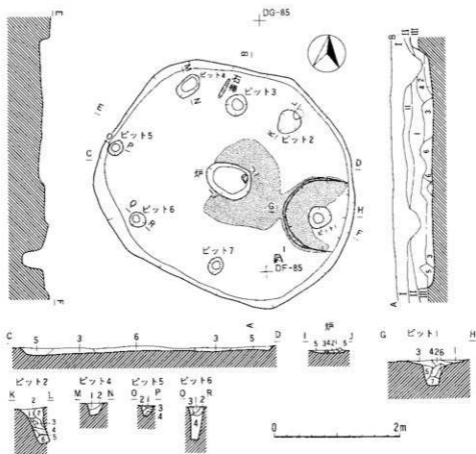
- 第1層 にぶい黄褐色 (10YR4/3) ローム粒少量
- 第2層 暗褐色 (10YR4/5) ϕ 10mm のL B 少量
- 第3層 明黄褐色 (10YR6/8) ϕ 10mm の砂粒ブロック少量
- 第4層 黄褐色 (10YR5/6) 黄褐色土を中量

第54号住居跡 ビット3 土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR4/4) ローム粒少量
- 第2層 黄褐色 (10YR4/6) ローム粒多量
- 第3層 明黄褐色 (10YR6/8) 粘土質



第133図 第54号住居跡



第55号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒微量, 5mmのL B少量
- 第2層 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒微量, 3mmのL B微量
- 第3層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒中量, 10mmのL B少量
- 第4層 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒中量
- 第5層 褐色 (10YR4/6) ローム粒中量, 炭化粒を微量
- 第6層 褐色 (10YR4/4) ローム粒少量, 炭化粒を少量

第55号住居跡 炉土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒微量, ϕ 5mmの炭土中量
- 第2層 褐色 (10YR4/6) ローム粒少量, ϕ 5-10mmの炭土中量
- 第3層 明赤褐色 (2.5YR5/8) 焼土ブロック
- 第4層 明黄褐色 (10YR6/8) ローム質土
- 第5層 黄褐色 (10YR5/8) ローム粒少量, ϕ 5-15mmのL B少量

第55号住居跡 ビット1 土層注記

- 第1層 にじい黄褐色 (10YR5/4) ローム粒少量
- 第2層 褐色 (10YR4/6) ローム粒中量
- 第3層 褐色 (10YR4/4) ローム粒微量
- 第4層 黄褐色 (10YR5/6) ローム粒, ϕ mmのL B中量
- 第5層 黄褐色 (10YR5/6) ローム粒中量, ϕ 5mmの炭化粒少量
- 第6層 黄褐色 (10YR5/8) ローム粒, ϕ 5mmのL B多量
- 第7層 明黄褐色 (10YR6/6) ローム粒, ϕ 5mmのL B多量

第55号住居跡 ビット2 土層注記

- 第1層 褐色 (10YR4/4) ローム粒少量
- 第2層 褐色 (10YR4/4) ローム粒少量
- 第3層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒少量
- 第4層 にじい黄褐色 (10YR4/3) ローム粒中量
- 第5層 明黄褐色 (10YR6/8) ローム質土
- 第6層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒多量

第55号住居跡 ビット4 土層注記

- 第1層 褐色 (10YR4/4) ローム粒微量
- 第2層 褐色 (10YR4/6) ローム粒微量

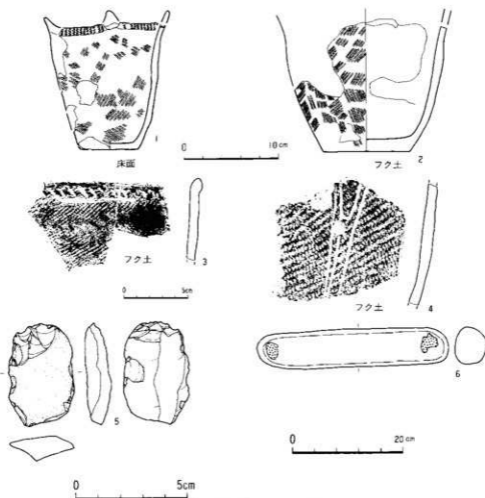
第55号住居跡 ビット5 土層注記

- 第1層 褐色 (10YR4/4) ローム粒微量
- 第2層 黄褐色 (10YR5/8) ローム粒多量
- 第3層 褐色 (10YR4/6) ローム粒少量
- 第4層 明黄褐色 (10YR6/8) 黒色土少量

第55号住居跡 ビット6 土層注記

- 第1層 にじい黄褐色 (10YR4/3) ローム粒微量
- 第2層 黄褐色 (10YR5/6) ローム粒少量
- 第3層 明黄褐色 (10YR6/8) ローム粒多量
- 第4層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒多量

第134図 第55号住居跡(1)



第135図 第55号住居跡(2)

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> ビットが7個検出されたが、配置等から考えてP₂・P₄・P₆・P₇が主柱穴と思われる。ビットの深さはP₁…40cm、P₂…54cm、P₃…16cm、P₄…20cm、P₅…16cm、P₆…54cm、P₇…13cmである。

<炉> 住居跡のほぼ中央から地床炉が1基検出された。楕円形で規模は長軸73cm、短軸54cm、深さ4cmである。焼土は認められたものの明確な火床面は認められなかった。

<特殊施設> 住居跡の東側で盛土状の隆起の貼り付けとビットをもった特殊施設が認められた。規模は長軸73cm、短軸70cm、深さ42cmである。遺物は出土しなかった。

<堆積土> 6層に分層した。周辺部に炭化粒を含む。人為的堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 床面から円筒上層d式土器が出土している。石器は、北側の床面から石棒1点、

覆土から不定形石器1点、総数2点出土している。

〈小結〉 床面から円筒上層d式土器(1)が出土していることより、本住居跡の構築時期は円筒上層d式期と思われる。(三浦 孝仁)

第56号住居跡(第136・137図)

〈位置と確認〉 調査区の東側の低台地上にDG-83、DG-84グリッドに位置している。第Ⅱ層下面で調査区外にかかる暗褐色土の半円状の落ち込みを確認した。

〈重複〉 第137号土城と重複しており、本住居跡が新しい。

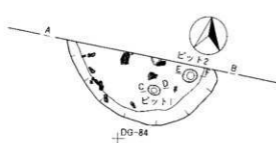
〈平面形・規模〉 調査区外にプランの半分が延びており、正確ではないが、円形とみられる。規模は、残存部から推測すると径2m50cmぐらいと思われる。

〈壁・床面〉 各壁ともにほぼ垂直に立ち上がる。壁は比較的堅緻な構築である。壁高は東壁46cm、西壁40cm、南壁42cmである。床面は平坦で堅緻な造りである。

〈壁溝〉 認められなかった。

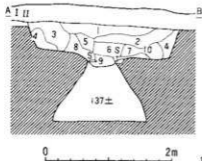
〈柱穴〉 ビットが2個検出されたが、いずれも浅く支柱穴かどうか不明である。ビットの深さはP₁…12cm、P₂…10cmである。

〈炉〉 調査区外に半分かかっているが、住居跡のほぼ中央と思われる位置で石囲炉を1基検出した。石は囲まれていない。規模は径60cm程で深さ20cmである。焼土は認められたものの明確な火床面は認められなかった。



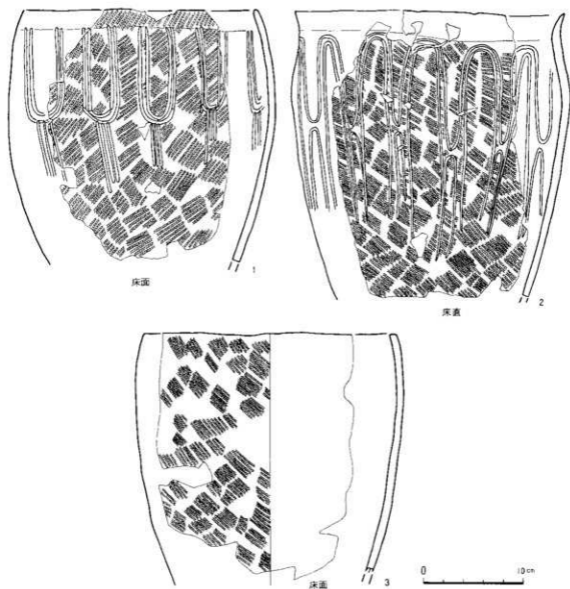
第56号住居跡 ビット1土層注記
 第1層 明黄褐色 (10YR6/8) ローム粒多量
 第2層 明黄褐色 (10YR6/6) ローム粒多量

第56号住居跡 ビット2土層注記
 第1層 黄褐色 (10YR5/6) ローム粒中量
 第2層 明黄褐色 (10YR6/8) ローム粒多量



第56号住居跡土層注記
 第1層 褐色 (10YR3/3) ローム粒、焼土、炭化物ほんの微量
 第2層 褐色 (10YR4/4) ローム粒少量、炭化物微量
 第3層 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒微量
 第4層 褐色 (10YR4/4) ローム粒少量
 第5層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒微量、φ5-10mmの炭化物まばら
 第6層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒、φ10mmの焼土・炭化物少量
 第7層 褐色 (10YR4/4) ローム粒少量、φ10-20mmの炭化物中量
 第8層 暗褐色 (10YR3/3) φ50mmの炭化材ブロック所々
 第9層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒少量、φ5-20mmのしB少量
 第10層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒少量、大部分炭化物

第136図 第56号住居跡(1)



第137図 第56号住居跡(2)

〈特殊施設〉 調査区域内の本住居跡では認められなかった。

〈堆積土〉 炭化材を多く含む。

〈出土遺物〉 土器は床面から最花式土器が出土している。石器は出土しなかった。

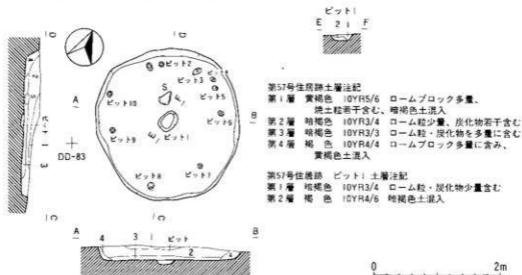
〈小結〉 本住居跡から多量の炭化材が検出され、焼失家屋と思われる。(C14の測定結果参照)。床面から最花式土器(1)が出土していることから、本住居跡の構築時期は最花式期と思われる。
(三浦 孝仁)

第57号住居跡 (第138~140図)

<位置と確認> 調査区東側の台地平坦面の調査区DC・DD-82グリッドに位置する。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 全体的に丸みをもつ円形のプランを呈する。規模は長軸2m47cm、短軸2m36cm、床面積3.96㎡を測る小型の住居跡である。



第138図 第57号住居跡(1)

<壁・床面> 上端から床面にかけて傾斜し、堅緻な構築である。壁高は、東壁19cm、西壁12cm、南壁9cm、北壁21cmを測る。床面は、ほぼ平坦で固さはピット1を中心として固く、壁に寄るほど軟らかい。

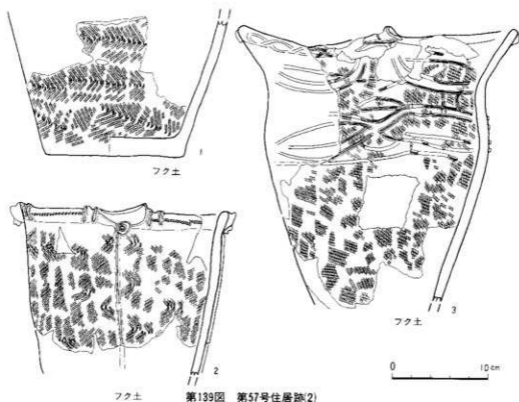
<柱穴> ピットは11個検出し、ピット1については付属施設の項目で記載する。P₂~P₁₁のピットは、壁寄りに等間隔に配置されており、配置等から壁柱穴と考えられる。特にP₆~P₉の柱穴がひろく、住居跡の南側部分を入り口として使用したと思われる。

第57号住居跡ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
2	円形	8×7	7.6	3	楕円形	14×7	9.6	4	円形	9×6	2.8
5	円形	9×7	5.0	6	円形	9×9	15.2	7	円形	8×8	8.0
8	円形	11×9	10.2	9	円形	9×9	4.0	10	円形	10×8	7.6
11	楕円形	13×7	3.4								

<炉> 検出されなかった。

<特殊施設> 住居跡の中央部から長径32cm、短径24cm、深さ7cmの楕円形のピットを検出した。位置等から炉とも考えられたが、堆積土中に焼土を含まず焼熱の痕跡も認められなかった為、炉とは断定できなかった。このような施設は第63号住居跡からも検出している。

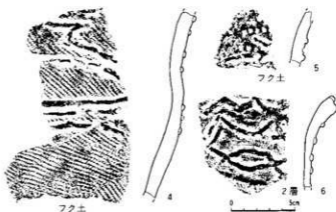


第139図 第57号住居跡(2)

<堆積土> 4層に分層できた。住居跡廃棄後に第3・4層が流入し、その後に第1・2層が堆積しており、大きくは2層に区分できる。断面観察等から自然堆積と考えられる。

<出土遺物> 遺物はピット1を中心にした東側から出土した。土器は、床面・床直から出土せず覆土の第1・2層中からの出土である。石器は覆土から台石石皿が1点出土した。

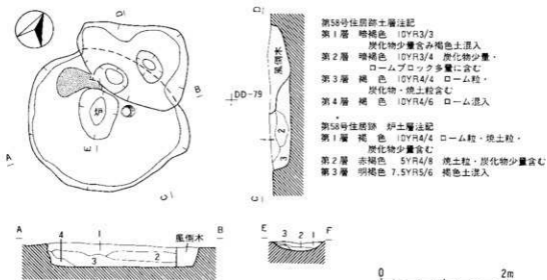
<小結> 住居跡の構築時期は、覆土の土器以前であり、円筒上層c・d式期と思われる。(成田 滋彦)



第140図 第57号住居跡(3)

第58号住居跡 (第141・142図)

〈位置と確認〉 調査区DC・DD-79グリッドに位置し、調査区の東側の台地平坦部に位置している。



第141図 第58号住居跡(1)

〈重複〉 北側で風倒木と重複し、新旧関係は本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 残存部から推定すると、円形を呈すると思われる。規模は、長軸2m50cm、短軸2m20cm、床面積3.73㎡で小型な住居跡である。

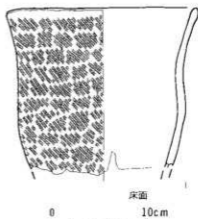
〈壁・床面〉 床面から上端にかけて垂直に立ち上がり堅緻な構築である。壁高は、東壁31cm、西壁32cm、南壁27cmを測る。床面は、ほぼ平坦で炉の北側で一部分だけ貼り床を検出した。

〈柱穴・特殊施設〉 認められなかった。

〈炉〉 住居跡の中央部に位置し、長径74cm、短径61cm、深さ12cmで楕円形を呈する地焼炉である。3層に分層でき第2・3層上面が火床面である。

〈堆積土〉 4層に分層できた。断面観察等から人為堆積と思われる。

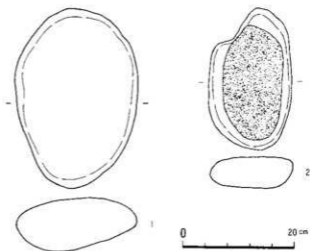
〈出土遺物〉 土器は、炉の東側から倒立で深鉢形土器(1)が床面から出土した。石器は、覆土



第142図 第58号住居跡(2)

から台石・石皿類が2点出土した。
 <小結> 住居跡の時期は、(I)
 の土器から縄文時代中期後葉(榎
 林式)～末葉(弥栄平(I)式期と
 思われる。

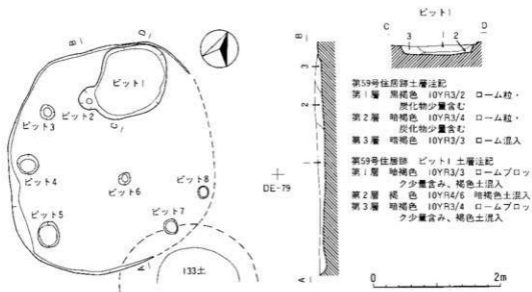
(成田 滋彦)



第143図 第58号住居跡(3)

第59号住居跡 (第144～146図)

<位置と確認> 調査区DD・DE-79グリッドで確認し、調査区東側の台地平坦面に位置している。



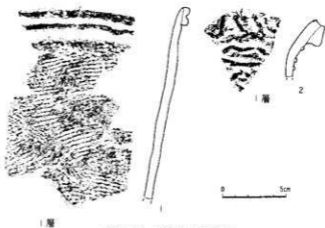
第144図 第59号住居跡(1)

<重複> 住居跡の南側で第133号土壇と重複し、新旧関係は本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 西側部分を確認できなかったが、残存部から推定すると南北に長い楕円形

を呈すると思われる。規模は長径3m64cm・短径(3m21cm)・床面積は(9.15)㎡である。

〈壁・床面〉 東壁は確認できなかったが、他の壁は上端から床面にかけてゆるやかに傾斜しており、軟弱なつくりである。壁高は、東壁不明・西壁7cm・南壁10cm・北壁8cmを測る。床面は、ほぼ平坦で壁同様に軟らかい構築である。



第145図 第59号住居跡(2)

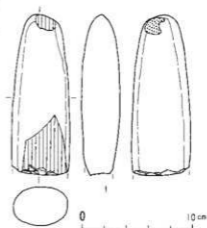
〈柱穴〉 ビットは8個検出された。P₁は特殊施設の項目で記載する。他のビットは壁寄りに位置している。P₂・P₃・P₄の3本が主柱穴ではないかと考えられる。

〈炉〉 認められなかった。

〈特殊施設〉 住居跡の北側に長径118cm・短径104cm・深さ13cmで、方形を呈するP₁を検出した。その用途及び性格については不明である。

〈堆積土〉 3層に分層できた。第1・2層から炭化物が出土している。

〈出土遺物〉 遺物は、住居跡の北側からまともになく出土している。土器は覆土からの出土である。石器は、1層から磨製石斧が1点出土した。



第146図 第59号住居跡(3)

〈小結〉 住居跡の床面から土器は出土しなかったが、堆積土の厚さが10cmと薄く出土土器から榎林式に近い時期に構築されたものと思われる。

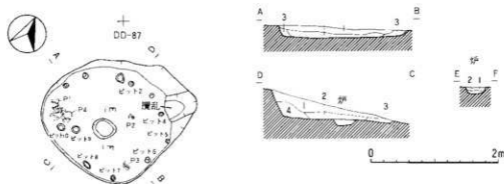
(成田 滋彦)

第59号住居跡ビット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
2	円形	35×29	20.0	3	円形	24×22	9.4	4	円形	33×32	20.4
5	円形	41×38	13.0	6	円形	20×18	8.2	7	円形	22×22	7.6
8	円形	17×15	6.6								

第60号住居跡 (第147~149図)

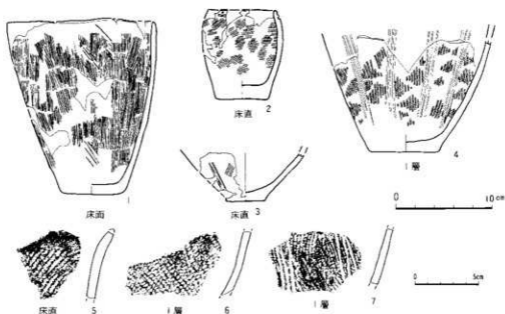
<位置と確認> 調査区D C-86グリッドで、調査区東側の緩斜面に位置している。



第60号住居跡 炉土層注記
 第1層 褐色 10YR4/4 焼土ブロック状に含む
 第2層 黄褐色 10YR5/6 暗褐色土混入

第60号住居跡土層注記
 第1層 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子・炭化物少量含む
 第2層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子多量、炭化物若干含む
 第3層 褐色 10YR4/4 黄褐色土混入
 第4層 黄褐色 10YR5/6 暗褐色土混入

第147図 第60号住居跡(1)



第148図 第60号住居跡(2)

<重複> 住居跡の東側部分は攪乱によって切られている。

<平面形・規模> 東側が張り出し、他が丸みを有する不整形である。規模は長軸2 m32cm・短軸1 m96cm・床面積2.71㎡を測る小型の住居跡である。

<壁・床面> すべて上端から床面にかけて傾斜しており、北壁は堅緻な造りであるが、他は

もろい造りである。壁高は、東壁7cm・西壁18cm・南壁5cm・北壁45cmを測る。床面は、ほぼ平坦で貼り床を施し固い造りである。

第60号住居跡ピット計画表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	15×12	9.0	2	円形	7×7	9.6	3	円形	9×8	7.0
4	円形	7×7	7.2	5	円形	7×7	8.0	6	円形	8×7	9.4
7	円形	7×7	22.0	8	楕円形	15×6	12.2	9	円形	12×12	11.8
10	円形	11×11	6.0	11	円形	7×7	4.8	12	円形	9×8	8.8

〈柱穴〉 ピットは12個検出され、壁寄りに等間隔で配置されている。配置等から壁柱穴と思われる。

〈炉〉 住居跡の中心部から、やや西側奇りに位置している。形態は円形を呈し長径36cm・短径32cm・深さ10cmの地床炉である。第2層上面が火床面であるが、火床面は薄く短期間の使用と考えられる。

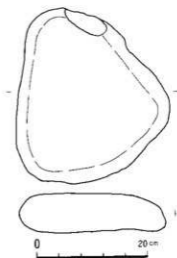
〈特殊施設〉 認められなかった。

〈堆積土〉 4層に分層できた。住居跡の廃棄時に第2～4層が堆積し、最終的に第1層が堆積しており、大きく2層に区分できる。断面観察等から自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉 遺物は、炉の東側から集中して出土した。

土器は床面・床直から(1)～(3)・(5)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は、床面から台石石皿が1点出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床面・床直の土器から最花式期と思われる。 (成田 滋彦)



第149図 第60号住居跡3)

第61号住居跡 (第150・151図)

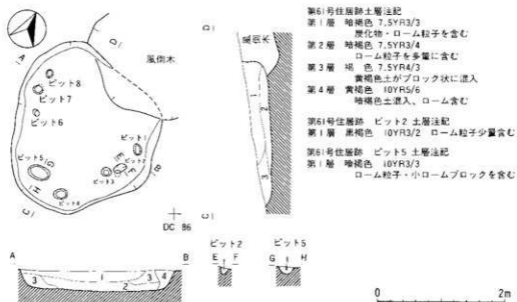
〈位置と確認〉 調査区D C - 86グリッドで、調査区東側の台地緩斜面に位置している。

〈重複〉 住居跡の北側で風倒木と重複し、新旧関係は本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 北側の一部を確認できなかったが、北側が直線的で南側が張り出す不整形を呈する。規模は、長軸2 m76cm・短軸2 m24cm・床面積は(4.15)㎡の小型の住居跡である。

〈壁・床面〉 北壁が床面から上端にかけてほぼ垂直に立ち上がり、他の壁は上端から床面にかけてゆるやかに傾斜している。壁高は東壁25cm・西壁27cm・南壁12cm・北壁35cmを測る。床面は、やや起伏があり壁同様に軟らかい造りである。

〈柱穴〉 ピットは8個検出された。壁寄りでは等間隔に配置されており、配置等から壁柱穴と思われる。



第150図 第61号住居跡(1)

第61号住居跡ビット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	21×12	11.1	2	方形	19×11	20.9	3	円形	16×15	6.7
4	楕円形	21×16	13.1	5	方形	34×21	15.0	6	円形	12×7	13.6
7	円形	16×13	7.8	8	円形	13×11	5.3				

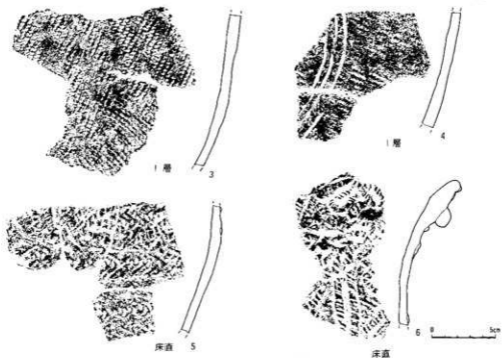
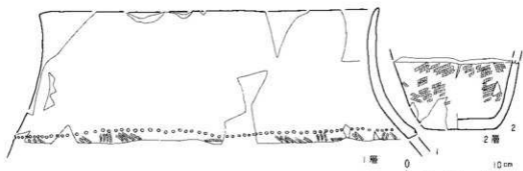
＜炉・特殊施設＞ 認められなかった。

＜堆積土＞ 4層に分層できた。住居跡廃棄後に第2～4層が堆積し、最終的に第1層が堆積した。大きく2層に区分できる。断面観察等から自然堆積と思われる。

＜出土遺物＞ 遺物は、住居跡の北側から東側にかけて分布しており、第1・2層中からの出土が多い。石器は、出土しなかった。

＜小結＞ 住居跡の時期は、床直(5)・(6)の土器から円筒上層d式期と思われる。

(成田 滋彦)



第151図 第61号住居跡(2)

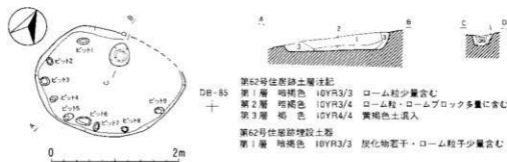
第62号住居跡 (第152・153図)

〈位置と確認〉 調査区DA・DB-85グリッドに位置し、調査区東側の緩斜面で落ち込みを確認した。

〈重複〉 認められなかった

〈平面形・規模〉 北側の一部を確認できなかったが、残存部から推定すると楕円形のプランを呈する。規模は、長軸2m33cm・短軸1m64cm・床面積(2.69)㎡を測る小型な住居跡である。

〈壁・床面〉 すべての壁は上端から床面にかけて傾斜しており、堅緻な造りである。壁高は、東壁13cm・西壁12cm・南壁10cm・北壁30cmを測る。床面は、ほぼ平坦で壁同様に固い。



第152図 第62号住居跡(1)

第62号住居跡ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	19×9	11.2	2	楕円形	12×9	11.0	3	円形	14×12	18.6
4	不整形	13×9	9.6	5	楕円形	17×9	15.4	6	方形	23×11	18.8
7	楕円形	13×9	7.4	8	円形	9×8	7.8	9	楕円形	13×10	9.6

＜柱穴＞ ピットは9個検出された。壁寄りの北側から東側にかけて等間隔に配置しており、配置等から壁柱穴と思われる。埋設土器からピット9の間に柱穴がみられず出入口の可能性も考えられる。

＜炉＞ 認められなかった。

(特殊施設) 住居跡の北側寄りに円形の掘り方をもつ埋設土器が出土した。土器は正立し、ほぼ完形の深鉢土器である。

＜堆積土＞ 3層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

＜出土遺物＞ 土器は、住居跡の北壁よりに埋設土器が出土した。石器は、出土しなかった。

＜小結＞ 住居跡の時期は、埋設土器から円筒上層c式期と思われる。(成田 滋彦)



第153図 第62号住居跡(2)

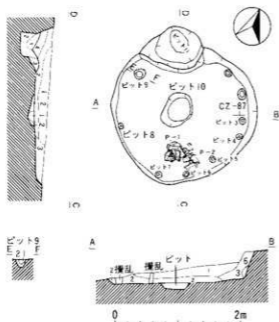
第63号住居跡 (第154～156図)

＜位置と確認＞ 調査区C・Y・C・Z-87グリッドで、調査区東側の台地緩斜面に位置している。

＜重複＞ 認められなかった。

＜平面形・規模＞ 北側が張り出した円形を呈する。規模は、長軸2 m54cm・短軸2 m34cm・床面積3.18㎡の小型な住居跡である。

＜壁・床面＞ すべて上端から床面にかけて傾斜しており、堅緻である。壁高は、東壁42cm・



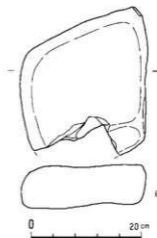
第154図 第63号住居跡(1)

西壁12cm・南壁9cm・北壁27cmを測る。床面は、ほぼ平坦でピット10を中心として住居跡の中央部が非常に堅い。

〈柱穴〉 ピットは11個検出した。P_{10・11}は特殊・付属施設の項目で記載する。P₁～P₉は壁よりで等間隔に配置しており、配置等から壁柱穴と思われる。特にP₇～P₉にかけての間隔が広く西側部分を出入り口として使用したのと思われる。

〈炉〉 認められなかった。

〈特殊施設〉 ピット11は、住居跡の北側に位置し円形のピットである。規模は、長径94cm・短径74cm・深さ15cmを測る。ピットの南側には、幅15cm・高さ6cmの弧状の盛土が見られる。



第155図 第63号住居跡(2)

第63号住居跡ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	12×11	5.6	2	楕円形	17×12	4.8	3	円形	12×11	6.2
4	円形	10×9	12.8	5	円形	9×9	8.2	6	円形	9×8	2.2
7	円形	10×9	4.0	8	円形	9×7	6.4	9	円形	17×16	13.0

〈付属施設〉 ピット10は、住居跡の中央部に位置し、南側がやや張り出した不整楕円形を呈する。規模は、長径55cm・短径44cm・深さ9cmと浅いピットである。住居跡の中央部に位置す

第63号住居跡土層注記

- 第1層 黄褐色 10YR2/3
ローム粒・炭化物若干含む
- 第2層 暗褐色 10YR3/4
小ロームブロック・炭化物を若干含む
- 第3層 黄褐色 10YR4/4
ロームブロック少量・炭化物若干含む
- 第4層 黄褐色 10YR2/2
ローム粒・炭化物若干含む。褐色土混入

第63号住居跡 ピット9 土層注記

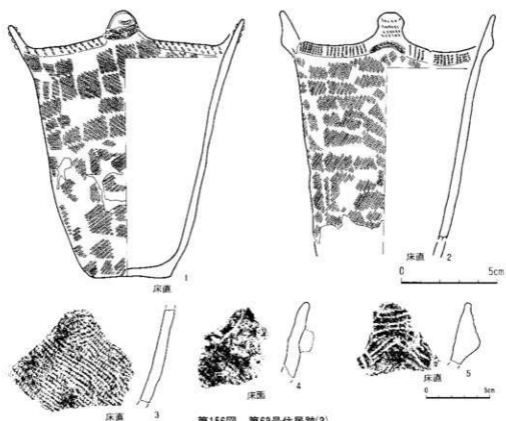
- 第1層 黄褐色 10YR4/6
炭化物若干・ロームブロック少量含む
- 第2層 黄褐色 10YR5/6 褐色土混入

第63号住居跡 ピット11 土層注記

- 第1層 灰黄色 10YR5/4
ロームブロック若干含む
- 第2層 黄褐色 10YR5/6 ロームブロックを多量に含み、暗褐色土混入
- 第3層 黄褐色 10YR5/8 褐色土混入

第63号住居跡 ピット10 土層注記

- 第1層 黄褐色 10YR4/6 炭化物若干含む
- 第2層 黄褐色 10YR5/6 褐色土混入



第156図 第63号住居跡(3)

ることから炉とも考えられたが、堆積土中に焼土を含まず火熱の痕跡が見られなかった為に炉とは断定できなかったものである。

<堆積土> 4層に分層できた。第2～4層が住居跡の廃棄時に流入し、第1層が最終的な堆積土である。大きく2層に区分できる。断面観察等から自然堆積と思われる。

<出土遺物> 遺物は、P₁₀₀を中心として東側から多く出土した。床面・床直からは深鉢土器が2個体横位の状態で出土した。石器は、1層から台石・石皿類が1点出土した。

<小結> 住居跡の時期は、床直の土器から円筒上層d・e式期と思われる。(成田 滋彦)

第64号住居跡 (第157図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央の平坦部のDD-95グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で不整な円形の落ち込みを確認した。

〈重複〉 認められなかった。

〈平面形・規模〉 ほぼ円形で、規模は長軸2 m25cm、短軸2 m20cmである。床面積は3.87㎡である。

〈壁・床面〉 各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁12cm、西壁4cm、南壁10cm、北壁14cmである。床面は全般的に平坦である。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 認められなかった。

〈炉〉 認められなかった。

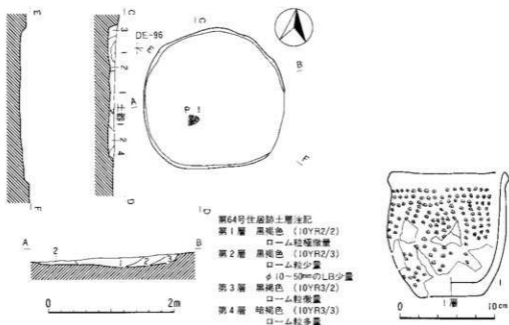
〈特殊施設〉 認められなかった。

〈堆積土〉 4層に分層した。レンズ状に堆積しており、自然堆積の可能性が高い。

〈出土遺物〉 住居跡の中央寄り若干南西側に完形土器が1個出土した。製作技法より円筒上層c～e式期に作られた土器と考えられる。石器は出土しなかった。

〈小結〉 本住居跡は小型住居跡である。床面から円筒上層c～e期の土器(1)が出土したことにより構築時期も円筒上層c～e期の可能性が高い。

(三浦 孝仁)



第157図 第64号住居跡

第65号住居跡（第158～160図）

＜位置と確認＞ 調査区のほぼ中央でDG-95、DG-96グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で重複によると見られる不整な黒褐色土の落ち込みを確認した。

＜重複＞ 第66号、67号住居跡及び第146号土壇と重複しており、本住居跡はいずれの遺構よりも古い。

＜平面形・規模＞ 一部調査区域外に延びており、全体は確認できないものの、東西に長い形状と思われる。規模は長軸6m60cm、短軸4m00cmである。床面積は推定で23.17㎡である。

＜壁・床面＞ 重複により一部明確でない部分もあるが、東壁はほぼ垂直に立ち上がり、堅緻な構築である。壁高は東壁42cm、（西壁9cm）、（南壁26cm）である。床面は平坦で、壁際はやや軟弱なものの全般的に堅緻な造りである。

＜壁溝＞ 認められなかった。

＜柱穴＞ ビットが5個検出されたが、配置等から考えてP₂～P₅が主柱穴と思われる。ビットの深さはP₂…86cm、P₃…77cm、P₄…83cm、P₅…94cmである。

＜炉＞ 住居跡のほぼ長軸線上に比較的大きな地床炉1基（炉1）と小さな地床炉（炉2）が1基検出された。炉1は不整な楕円形で、規模は長軸75cm、短軸60cm、深さ14cmである。炉2は不整な円形で、規模は長軸25cm、短軸21cm、深さ5cmである。

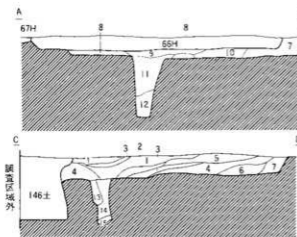
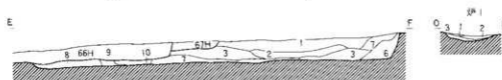
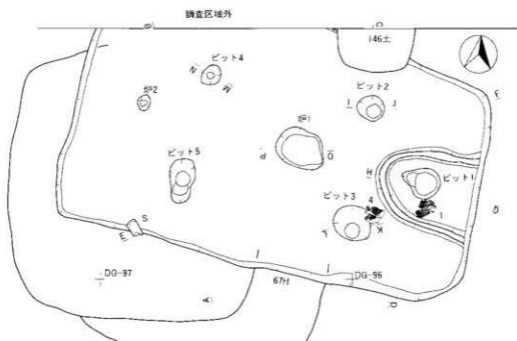
＜特殊施設＞ 住居跡内東側に隆起の貼り付けとビットをもった特殊施設が認められた。規模は長軸170cm、短軸70cm、ビットの深さは55cmである。ビット内から遺物は出土しなかったが、施設内床面からは①の土器が出土している。

＜堆積土＞ 堆積土上部に焼土、炭化粒を含む。人為的堆積の可能性が高い。

＜出土遺物＞ 全体的に遺物が散在している。床面及び覆土下位から円筒上層c式土器が出土している。石器は床面直上から石鏃3点、炉底面から石鏃1点、覆土から石鏃2点、石筥1点、不定形石器5点、総数12点出土している。

＜小結＞ 床面から円筒上層c式土器（1、4）が出土していることより、本住居跡は円筒上層c式期に構築されたと思われる。

（三浦 孝仁）



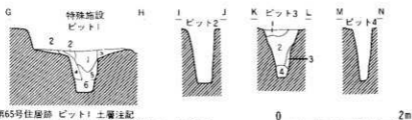
第65号住居跡土層注記

- | | | |
|------|----------------|-----------------------|
| 第1層 | 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒微量、炭化物微量 |
| 第2層 | 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒少量 |
| 第3層 | 黄褐色 (10YR5/8) | φ 5-20mmのLB多量 |
| 第4層 | 褐色 (10YR4/6) | φ 5-20mmのLB少量 |
| 第5層 | 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒、焼土粒少量 |
| 第6層 | 黄褐色 (10YR5/8) | ローム粒少量、φ 10mmのLB少量 |
| 第7層 | 褐色 (10YR4/4) | ローム粒少量 |
| 第8層 | 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒微量 |
| 第9層 | 褐色 (10YR4/4) | ローム粒少量 |
| 第10層 | 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒少量、φ 5-10mm LBまばら |
| 第11層 | 黒褐色 (10YR2/6) | ローム粒微量 |
| 第12層 | 黄褐色 (10YR5/8) | ローム粒多量 |
| 第13層 | 明黄褐色 (10YR6/8) | ローム質土 |
| 第14層 | 黒褐色 (10YR2/2) | ローム粒少量 |
| 第15層 | 黄褐色 (10YR5/8) | ローム粒多量 |

第65号住居跡炉土層注記

- | | | |
|-----|---------------|----------------|
| 第1層 | 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒、炭化粒、焼土粒少量 |
| 第2層 | 褐色 (10YR4/4) | ローム粒、焼土粒中量 |
| 第3層 | 明赤褐色 (5YR5/8) | ローム粒極微量、焼土 |

第158図 第65号住居跡(1)

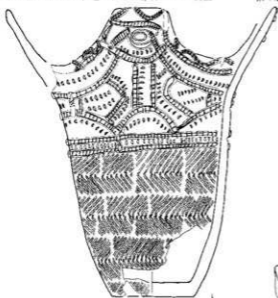


第65号住居跡 ビット1 土層注記

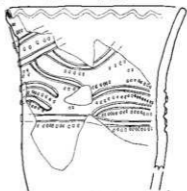
- 第1層 黒褐色 (10YR 2/2) ローム粒微量
- 第2層 にじみ黄褐色 (10YR 4/3) ローム粒少量
- 第3層 暗褐色 (10YR 3/3) ローム粒少量
φ 5-10mmL, B中量
- 第4層 黄褐色 (10YR 5/6) ローム粒多量
φ 10mmL, B少量
- 第5層 褐色 (10YR 4/4) ローム粒中量
- 第6層 明黄褐色 (10YR 6/8) ローム黄土

第65号住居跡 ビット3 土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR 3/3) ローム粒少量 炭化物微量
- 第2層 褐色 (10YR 4/6) ローム粒中量
- 第3層 明黄褐色 (10YR 6/6) ローム粒多量
- 第4層 黄褐色 (10YR 5/8) ローム粒多量



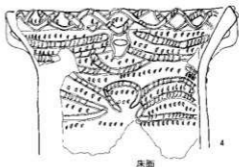
床面



床面



床面



床面



0

1cm

フク土

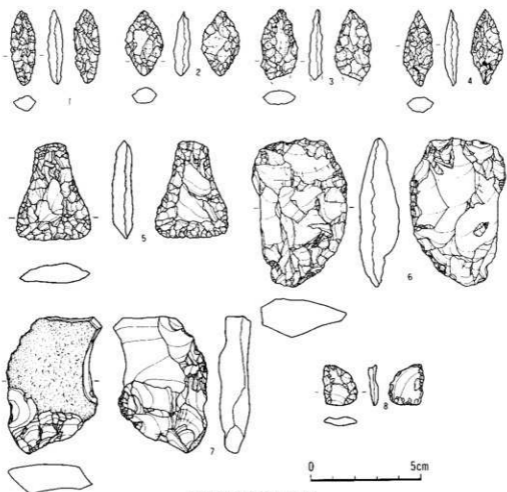


フク土



フク土

第159図 第65号住居跡(2)



第160図 第65号住居跡(3)

第66号住居跡 (第161～164図)

〈位置と確認〉 本調査区のほぼ中央でDG-95、DG-96グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で重複によると見られる不整な黒褐色土の落ち込みと本住居跡の床面の一部を確認した。

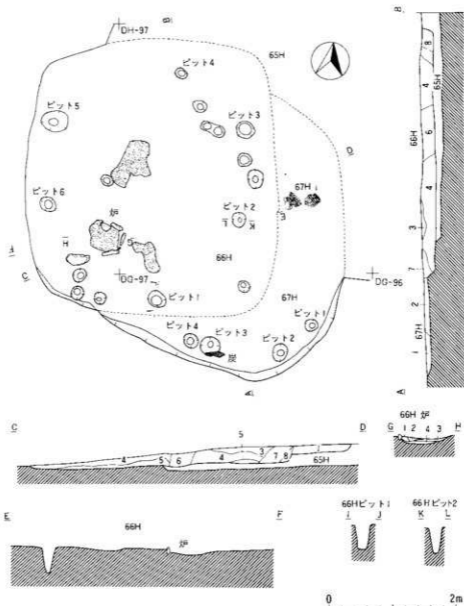
〈重複〉 第65号、67号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 重複のため壁が確認できない部分が多く、平面形は明確に判断できない。規模は、残存部土層断面及び床面の広がりから長軸4 m30cm、短軸4 m00cm程と思われる。

〈壁・床面〉 壁はほとんど確認できなかった。床面は起伏があり、炉の周辺の床面は貼り床がなされ堅緻である。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 ビットは15個確認されたが、配置等からP₁～P₆が支柱穴と思われる。ビットの深さ



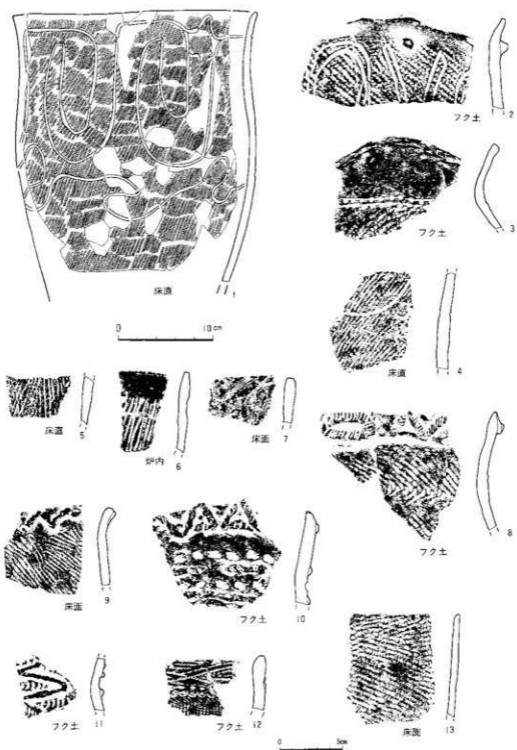
第66, 67号住居跡土層注記

- | | |
|-------------------|-----------------|
| 第1層 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒少量。67H |
| 第2層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒中量。67H |
| 第3層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒微量 |
| 第4層 黒褐色 (10YR2/3) | φ 5mm炭化物少量 |
| 第5層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒微量 |
| 第6層 黒褐色 (10YR2/2) | 草木灰多量。擾乱 |
| 第7層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒微量 |
| 第8層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒微量
炭化物微量 |

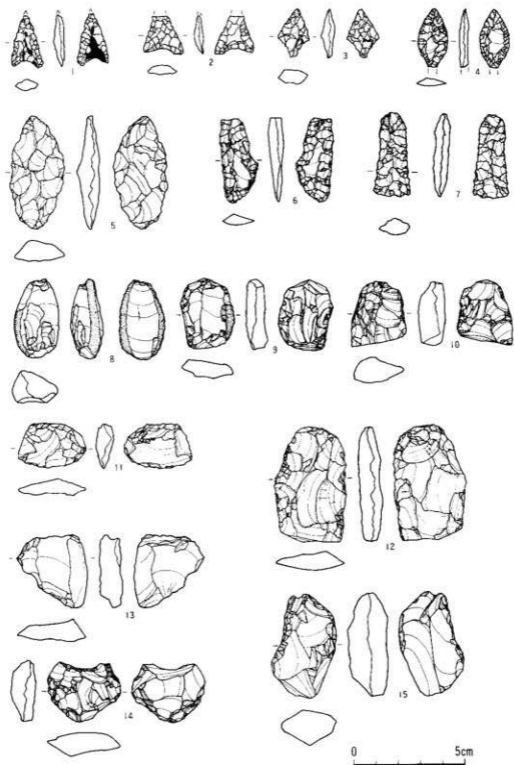
第66号住居跡 炉土層注記

- | | |
|-------------------|-------------|
| 第1層 暗褐色 (10YR3/3) | 炭化物少量。焼土粒微量 |
| 第2層 黒褐色 (10YR3/2) | 炭化物微量。焼土粒微量 |
| 第3層 暗褐色 (10YR3/3) | 炭化物中量。焼土粒少量 |
| 第4層 褐色 (10YR4/6) | 焼土ブロック多量 |

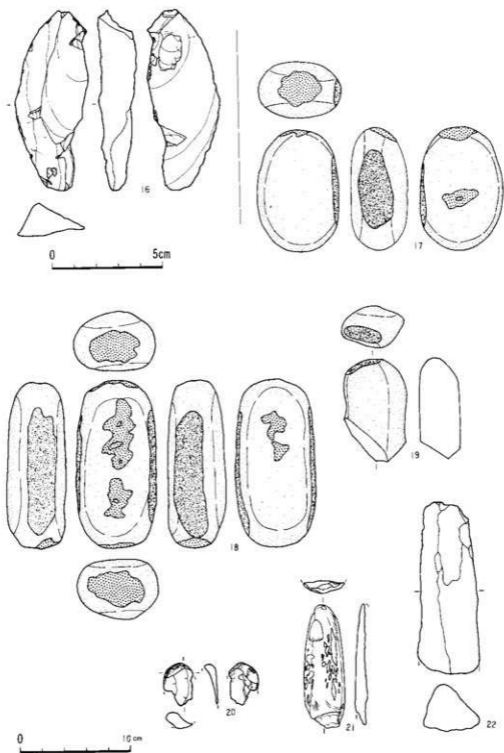
第161図 第66・67号住居跡



第162図 第66号住居跡(1)



第163图 第66号住居跡(2)



第164图 第66号住居跡(3)

はP₁…38cm、P₂…40cm、P₃…36cm、P₄…22cm、P₅…13cm、P₆…19cmである。

<炉> 床面の南西部で石囲炉1基が検出した。その回りの床面は焼けている。石囲炉はコの字状で、その規模は長軸56cm、短軸50cm、深さ12cmである。第4層上面が火床面である。

<特殊施設> 認められなかった。

<堆積土> 8層に分層した。中央部に炭化材を含む。人為的堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 床面から弥栄平(1)式土器が出土している。石器は床面からピエス・エスキーユ1点、不定形石器3点、敲磨器類1点、石皿1点、石棒1点、覆土から石鎌6点、石槍1点、石筥2点、ピエス・エスキーユ1点、不定形石器21点、磨製石斧4点、敲磨器類2点、確認面から石鎌1点、総数45点出土している。

<小結> 本住居跡の床面から弥栄平(1)式土器が出土していることから、本住居跡は弥栄平(1)式期に構築されたと思われる。(三浦 孝仁)

第67号住居跡 (第161・165図)

<位置と確認> 本調査区のほぼ中央でDG-95・96、DF-96グリッドに位置している。第III層下面で重複によると見られる不整な黒褐色土の落ち込みを確認した

<重複> 第65号、66号住居跡と重複しており、本住居跡は第65号住居跡よりは新しいが、第66号住居跡より古い。

<平面形・規模> 第66号住居跡に切られているため、確認できない。

<壁・床面> 壁は一部確認したが、ほぼ垂直に立ち上がる。残存している床面は、平坦であるが、締まりがなく軟弱な造りである。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 残存する床面からは4個のピットを確認したが、支柱穴の配置等は不明である。ピットの深さはP₁…10cm、P₂…6cm、P₃…35cm、P₄…10cmである。

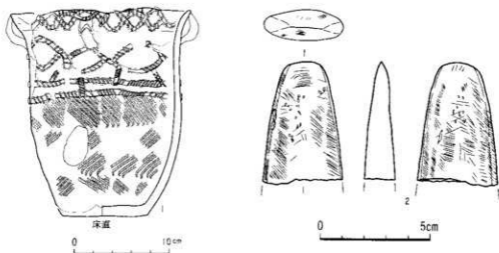
<炉> 残存部からは認められなかった。

<特殊施設> 認められなかった。

<堆積土> ローム粒を含む黒褐色土である。

<出土遺物> 遺物はあまり出土しなかった。床面直上から円筒上層d式土器が出土している。石器は覆土から磨製石斧が1点出土した。

<小結> 床面直上から円筒上層d式土器(1)が出土していることと重複関係から、円筒上層d式期に構築された可能性が高い。(三浦 孝仁)



第165図 第67号住居跡

第68号住居跡 (第166図)

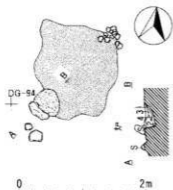
<位置と確認> 調査区のDG-93グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で貼り床の一部と石囲炉を確認した。

<重複> 認められなかった。

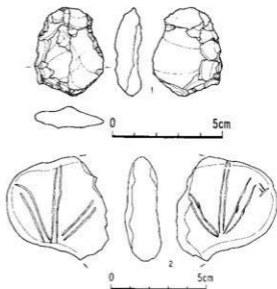
<平面形・規模> 貼り床を確認したのみで平面形、規模とも不明である。

<壁・床面> 貼り床は堅緻であるが、貼り床の回りには床らしきものは確認できなかった。

<壁溝> 認められなかった。



第68号住居跡 伊土層注記
 第1層 暗褐色 (10YR3/3)
 φ 2-3cm焼土B少量
 第2層 黄褐色 (10YR5/6)
 暗褐色土少量
 第3層 黄褐色 (10YR5/8)
 暗褐色土まばら
 第4層 明黄褐色 (10YR6/6)
 φ 2-2.5cm焼土B少量



第166図 第68号住居跡

<柱穴> 認められなかった。

<炉> 石がひとつの石囲炉を確認した。焼土は認められたものの明確な火床面は認められなかった。

<特殊施設> 認められなかった。

<出土遺物> 炉のすぐ脇に土偶が1点確認した。土器、石器は確認できない。

<小結> 土器を確認できず時期不明である。 (三浦 孝仁)

第69号住居跡 (第167～171図)

<位置と確認> 調査区のDB-97、DC-97グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第70号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。

<平面形・規模> 平面形は東西に長い卵形で、規模は長軸4m40cm、短軸3m53cmである。床面積は10.54㎡である。

<壁・床面> 各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。一部重複により確認できない部分もあるが、各壁とも堅緻な構築である。壁高は東壁14cm、西壁30cm、南壁14cm、北壁38cmである。床面全面に平坦で貼り床がなされ全般的に堅緻な造りである。

<壁溝> 認められなかった。

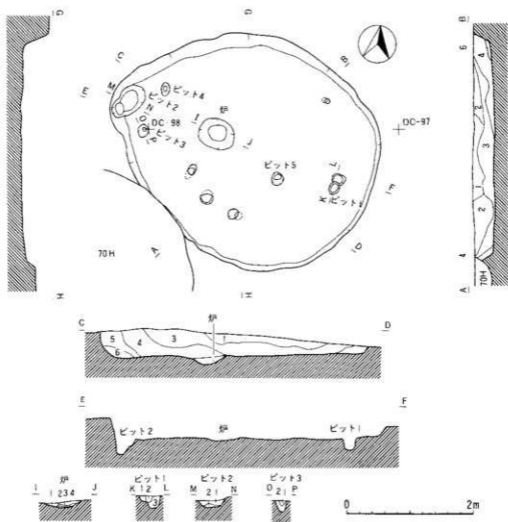
<柱穴> 大小11個のピットが検出されたが、支柱穴の配置等は不明である。ピットの深さはP₁…8cm、P₂…17cm、P₃…18cm、P₄…20cm、P₅…13cmである。

<炉> 住居跡の中心から若干西側で地床が1基検出した。楕円形で、規模は長軸57cm、短軸46cm、深さ5cmである。第3層上面が火床面で堅くしまっている。

<特殊施設> 南東部で若干張り出し状の特殊施設の可能性があるピットを検出した。P₃とP₄を含めて何らかの用途があったと思われる。この特殊施設から遺物は出土しなかった。

<出土遺物> 覆土に遺物が散在していた。覆土から榎林式土器、最花式土器が出土している。石器は床面直上から石皿1点、覆土から石鏃5点、石槍1点、石鏃1点、石匙1点、不定形石器19点、石斧1点、敲磨器類3点、石皿2点、総数34点、また軽石が2点が出土している。

<小結> 床面から本住居跡の構築時期を判断する良好な土器は出土していないが、覆土から榎林式土器、最花式土器が出土していることから、榎林式期・最花式期に構築された可能性が高い。 (三浦 孝仁)



第69号住居跡土層注記

- | | | |
|-----|---------------|--------|
| 第1層 | 黒褐色 (10YR2/3) | ローム粒少量 |
| 第2層 | 暗褐色 (10YR3/3) | 炭化粒少量 |
| 第3層 | 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒中量 |
| 第4層 | 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒少量 |
| 第5層 | 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒少量 |
| 第6層 | 黒褐色 (10YR2/2) | ローム粒少量 |

第69号住居跡 炉土層注記

- | | | |
|-----|----------------|-------|
| 第1層 | 暗褐色 (10YR3/3) | 焼土粒少量 |
| 第2層 | 明褐色 (7.5YR5/8) | 焼土粒少量 |
| 第3層 | 明褐色 (5YR5/8) | |
| 第4層 | 明褐色 (7.5YR5/8) | |

第69号住居跡 ピット2 土層注記

- | | | |
|-----|---------------|------------|
| 第1層 | 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒、炭化粒少量 |
| 第2層 | 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒中量 |

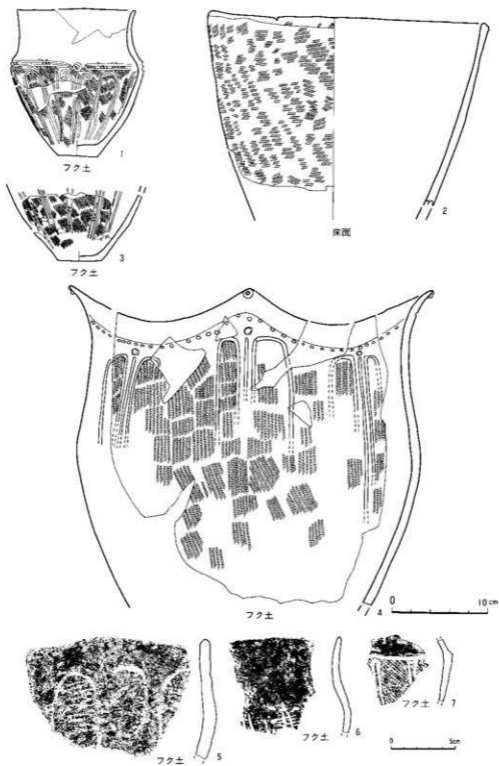
第69号住居跡 ピット3 土層注記

- | | | |
|-----|---------------|------------|
| 第1層 | 褐色 (10YR4/4) | ローム粒中量 |
| 第2層 | 黄褐色 (10YR5/6) | ローム粒、炭化粒少量 |

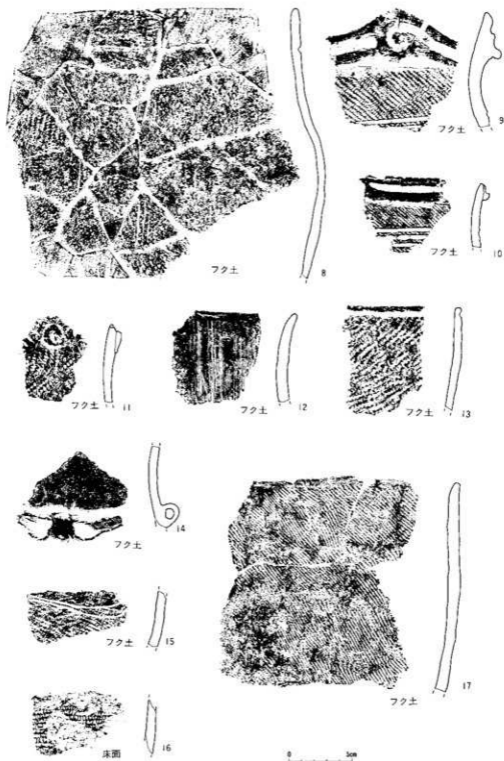
第69号住居跡 ピット1 土層注記

- | | | |
|-----|---------------|------------------------|
| 第1層 | 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒少量 |
| 第2層 | 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒少量
φ10mmの炭化物B少量 |
| 第3層 | 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒少量 |

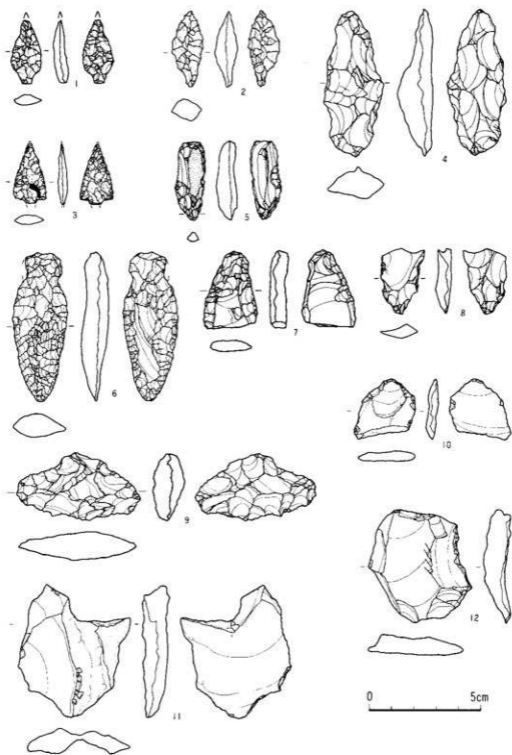
第167図 第69号住居跡(1)



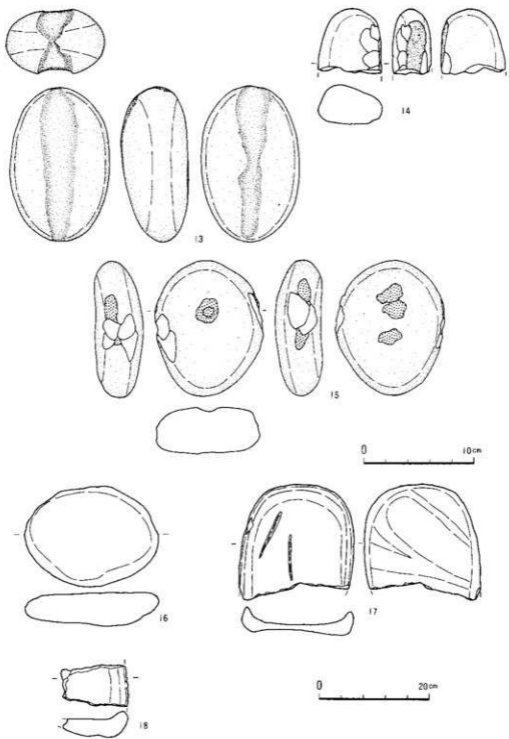
第168図 第69号住居跡(2)



第169図 第69号住居跡(3)



第170图 第69号住居跡(4)



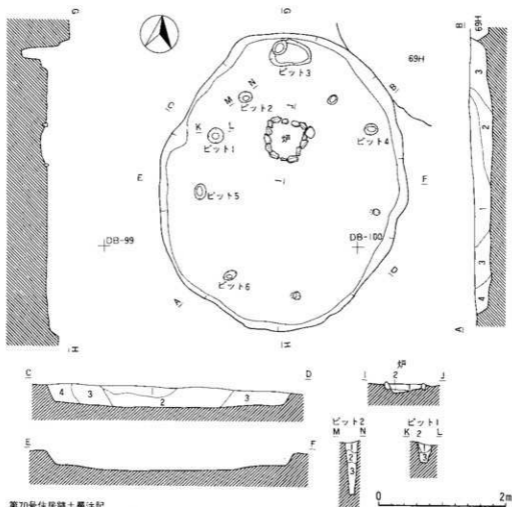
第171图 第69号住居跡(5)

第70号住居跡 (第172~176図)

<位置と確認> 調査区のDA-98、DB-98グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第69号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 南北に長い楕円形で、規模は長軸4m72cm、短軸3m93cmである。床面積は12.76㎡である。



第70号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR3/2) ローム粒微量
- 第2層 黒褐色 (10YR3/2) ローム粒少量
- 第3層 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒微量
- 第4層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒微量

第70号住居跡 炉土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR3/4) ローム粒、焼土粒微量
- 第2層 明赤褐色 (5YR5/8) 焼土

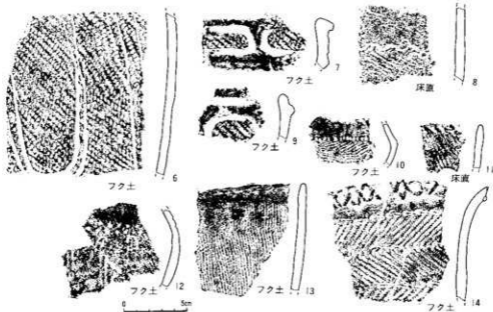
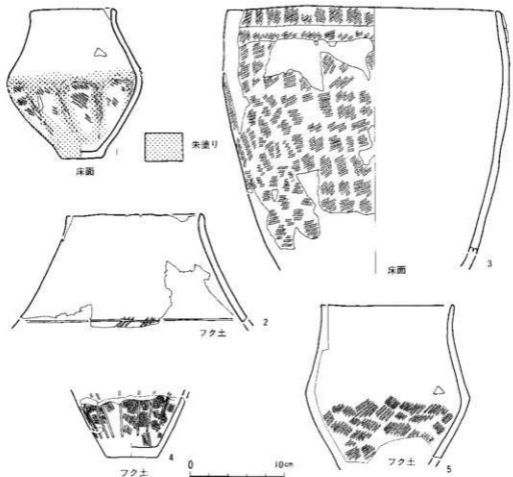
第70号住居跡 ピット1 土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒多量 φ10mmLB少量
- 第2層 明黄褐色 (10YR6/6) 暗褐色土少量
- 第3層 暗褐色 (10YR3/3) ローム粒少量

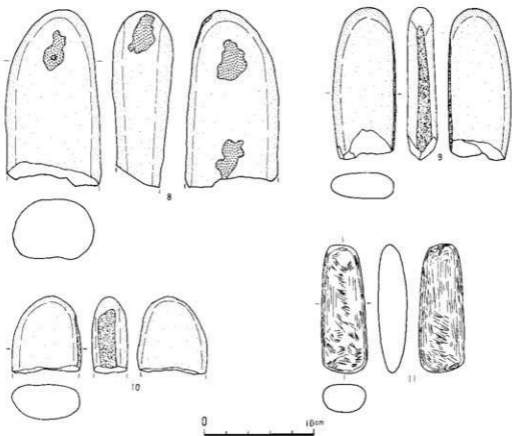
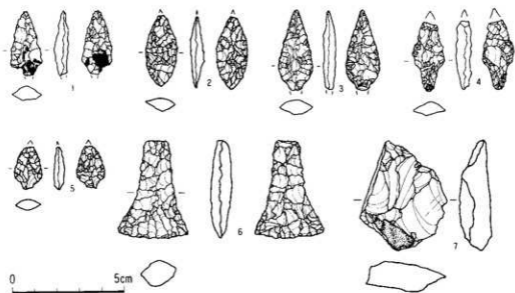
第70号住居跡 ピット2 土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR3/2) φ10mmLB中量
- 第2層 黒褐色 (10YR2/3) ローム粒少量
- 第3層 黄褐色 (10YR5/8) 暗褐色まばら

第172図 第70号住居跡(1)



第173図 第70号住居跡(2)



第174图 第70号住居跡(3)



第175图 第70号住居跡(4)



第176図 第70号住居跡(5)

<壁・床面> 各壁ともほぼ垂直に立ち上がる。各壁とも堅緻な構築である。壁高は東壁20cm 西壁22cm、南壁17cm、北壁35cmである。床全面に貼り床がなされ平坦で一般的に堅緻な造りである。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 大小10個のピットを検出した。P₁・P₄は主柱穴であるが、他の主柱穴と思われるピットは検出されなかった。ピットの深さはP₁…36cm、P₂…86cm、P₃…24cm、P₄…94cm、P₅

…9cm、P₈…11cmである。

<炉> 住居跡の中心から若干北側で石囲炉を1基検出した。炉石がほぼ正方形、口の字状に配置されている。規模は長軸68cm、短軸70cm、深さ7cmである。第1層下面が火床面で堅く締まっている。

<特殊施設> P₃が特殊施設の可能性も考えられる。

<堆積土> 全体的にローム粒を含む黒褐色土の層でレンズ状に堆積しており、自然堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 床面から朱を塗った完形の最花式土器(1)が出土している。石器は床面から石皿1点、床面直上から石斧2点、覆土から石鏃7点、石筥1点、不定形石器3点、石斧4点、敲磨器類3点、石皿3点、石棒類1点、総数25点、また覆土から土器片利用製品が7点出土している。

<小結> 本住居跡は床面から最花式土器が出土していることから、最花式期に構築されたものと思われる。(三浦 孝仁)

第71号A住居跡(第177～183図)

<位置と確認> DD・DE—104～108グリッドで、暗褐色土の落ち込みを確認、調査に入って間もなく貼り床を検出した。この貼り床を追っていったところ、大型の住居跡を検出した。

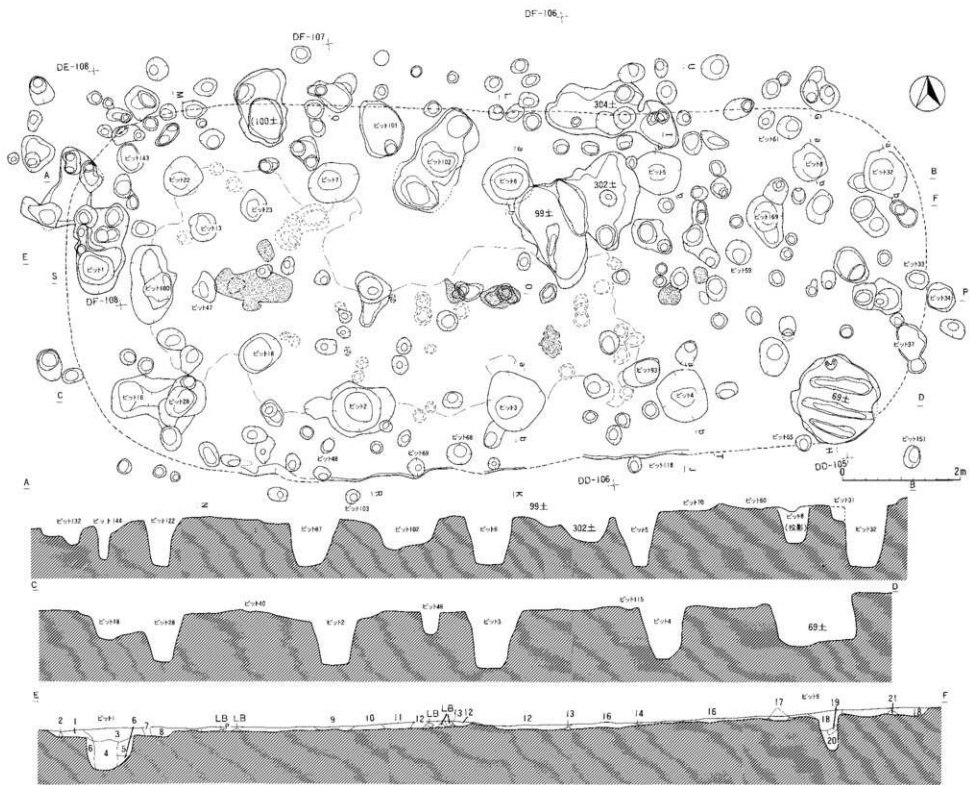
<重複> 第71号B・144・145・161号住居跡及び第69・99・100・302・304号土壇と重複している。第69号住居跡より古いが、第71号B・144・145・161号住居跡より新しい。第99・302号土壇とは新旧関係は不明である。

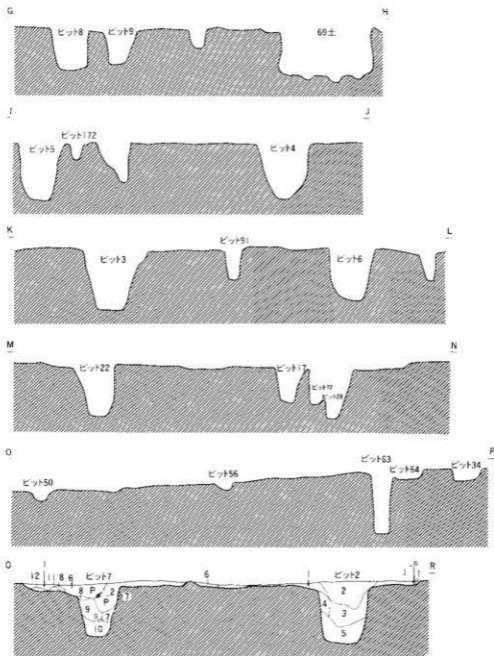
<平面形・規模> 平面形は不明であるが、柱穴配置から隅丸長方形を呈するものと思われる。推定規模は短軸6m30cm、長軸14m60cm前後の大型の住居跡で、推定床面積は82.66㎡である。

<壁・床面> 床面は貼り床が検出されているが、柱穴状の小ピットが多数検出されたため、柱穴だらけという状況である。壁は南壁の一部を確認したにすぎず、その部分の壁高は5cm前後の浅いものである。床・壁とも良好な検出状況ではない。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 床面からは多数のピットを検出した。その中で木住居跡の主柱穴は、P₁～P₈・P₂₂・P₂₈で、直径60cm～100cm、深さ60～100cm(80cm前後が多い)の円～楕円形の大きなピットである。断面の観察から、柱の痕跡(P₁)は径40cm弱である。P₂～P₇、P₂₂、P₂₈はそれぞれ対応するように検出されているが、P₈と対応するピットは、第69号土壇に破壊されているため、検出されなかった。P₁は棟柱と考えられるが、P₁と対応する位置には、これらと同規模のピットは検出されなかった。P₃₀・P₃₄・P₆₃・P₆₄がP₁と対応する位置にあるが、ピットの規模の点で





ビット7 土層注記
 第6層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒少量含む
 第7層 黄褐色土 10YR5/8
 第8層 黒褐色土 2.5YR3/1 焼土微量、炭化物微量含む
 第9層 暗褐色土 10YR3/4 焼土微量、炭化物少量含む
 第10層 黄褐色土 10YR5/8
 第11層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物微量、
 ローム粒微量含む
 第12層 黄褐色土 10YR5/6

ビット2 土層注記
 第1層 褐色土 10YR4/4 炭化物少量、
 ローム粒多量含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 炭化物少量含む
 第3層 褐色土 10YR4/4 炭化物多量含む
 第4層 褐色土 10YR4/4 ロームブロック多量含む
 第5層 黄褐色土 10YR5/8 炭化物多量含む

第178図 第71号A住居跡(2)

0 2m

第71号A住居跡土層注記 (SPA-B ビット1, ビット9の注記も含む)

第1層	黄褐色土	10YR5/8	
第2層	褐色土	10YR4/4	
第3層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物微量、ローム粒少量含む
第4層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物少量、ロームブロック多量含む
第5層	褐色土	10YR4/4	炭化物微量、ロームブロック多量含む
第6層	明黄褐色土	10YR6/8	
第7層	暗褐色土	10YR3/3	ロームブロック微量含む
第8層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物微量、ローム粒少量含む
第9層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒少量含む
第10層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒微量含む
第11層	褐色土	10YR4/4	炭化物少量、ロームブロック多量含む
第12層	褐色土	10YR4/4	炭化物微量、ローム粒微量含む
第13層	褐色土	10YR4/6	炭化物少量含む
第14層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物少量、ローム粒少量含む
第15層	褐色土	10YR4/6	ロームブロック多量含む
第16層	褐色土	10YR4/4	炭化物少量、ローム粒多量含む
第17層	黄褐色土	10YR5/6	
第18層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物多量、ローム粒多量含む
第19層	褐色土	10YR4/5	炭化物微量、ロームブロック多量含む
第20層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物微量、ローム粒少量含む



ビット8 土層注記

第1層	暗褐色土	10YR3/4
第2層	暗褐色土	10YR3/3
第3層	褐色土	10YR4/4
第4層	褐色土	10YR4/6



ビット3 土層注記

第1層	暗褐色土	10YR3/3	炭化物微量、ローム粒少量含む
第2層	黄褐色土	10YR2/2	炭化物微量、ローム粒微量含む
第3層	暗褐色土	10YR3/4	炭化物微量、ローム粒微量含む
第4層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	炭化物微量含む
第5層	褐色土	10YR4/6	炭化物微量、ローム粒少量含む
第6層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒多量含む

ビット4 土層注記

第1層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	炭化物微量、ローム粒少量含む
第2層	褐色土	10YR4/6	炭化物微量、ローム粒少量含む
第3層	黄褐色土	10YR5/6	ローム粒多量含む
第4層	黄褐色土	10YR5/8	ローム質

ビット5 土層注記

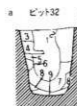
第1層	褐色土	10YR4/4	炭化物微量、ローム粒少量含む
第2層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	炭化物微量、ローム粒少量含む
第3層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム粒少量含む
第4層	褐色土	10YR4/6	ロームブロック多量含む
第5層	明黄褐色土	10YR6/8	ローム質
第6層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	ローム粒少量含む

ビット6 土層注記

第1層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	炭化物微量、ローム粒少量含む
第2層	褐色土	10YR4/6	ローム粒多量含む
第3層	黄褐色土	10YR5/8	ロームブロック多量含む
第4層	黄褐色土	10YR5/6	ロームブロック微量含む
第5層	黄褐色土	10YR5/8	ローム粒多量含む

ビット32 土層注記

第1層	褐色土	10YR4/4	塊土層微量、炭化物少量含む
第2層	褐色土	10YR4/6	炭化物微量、ロームブロック多量含む
第3層	黄褐色土	10YR5/8	炭化物微量含む
第4層	黄褐色土	10YR5/8	炭化物微量含む
第5層	黄褐色土	10YR5/6	炭化物少量含む
第6層	黄褐色土	10YR5/8	炭化物少量含む
第7層	褐色土	10YR4/6	炭化物少量、ロームブロック多量含む
第8層	褐色土	10YR4/6	ロームブロック多量含む
第9層	黄褐色土	10YR5/6	



0 2m

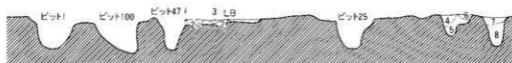
第179図 第71号A住居跡(3)

疑問が残る。北列、南列とも柱間は2m60cm前後、北列と南列とは4m弱である。主なピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…48cm, P₂…90cm, P₃…95cm, P₄…91cm, P₅…91cm, P₆…82cm, P₇…80cm, P₈…66cm,
P₁₃…30cm, P₁₆…41cm, P₂₂…82cm, P₂₃…44cm, P₂₈…76cm, P₃₂…104cm, P₃₇…29cm, P₄₇
…48cm, P₄₈…29cm, P₅₉…62cm, P₆₃…96cm, P₆₅…42cm, P₆₈…16cm, P₆₉…29cm, P₉₃…43

S

O



第71号A住居跡 炉, ピット90-91土層注記

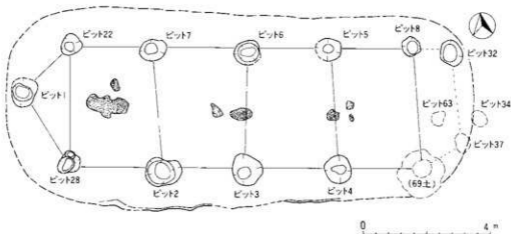
- | | | | |
|-----|------|---------|---------------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 焼土少量、炭化物微量含む |
| 第2層 | 褐色土 | 10YR4/4 | 焼土少量、炭化物微量含む |
| 第3層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 焼土少量、炭化物微量、ローム粒少量含む |
| 第4層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 焼土微量、炭化物少量含む |
| 第5層 | 褐色土 | 10YR4/6 | ロームブロック少量含む |
| 第6層 | 黄褐色土 | 10YR5/6 | 炭化物微量、ローム粒少量含む |
| 第7層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 焼土微量、ローム粒少量含む |
| 第8層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | 炭化物微量、ロームブロック少量含む |



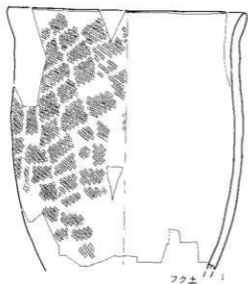
0 2m

第71号A住居跡土層注記 (SPE-F)

- | | | | | | | | |
|-----|------|---------|--------------|-----|------|---------|-------------|
| 第1層 | 褐色土 | 10YR4/4 | 焼土微量、炭化物少量含む | 第5層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ロームブロック微量含む |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | 炭化物微量含む | 第6層 | 黄褐色土 | 10YR5/8 | |
| 第3層 | 褐色土 | 10YR4/4 | | 第7層 | 黄褐色土 | 10YR5/6 | |
| 第4層 | 褐色土 | 10YR4/4 | ロームブロック多量含む | 第8層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | |



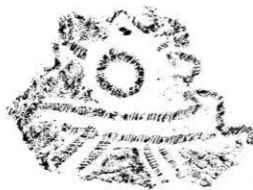
第180図 第71号A住居跡(4)



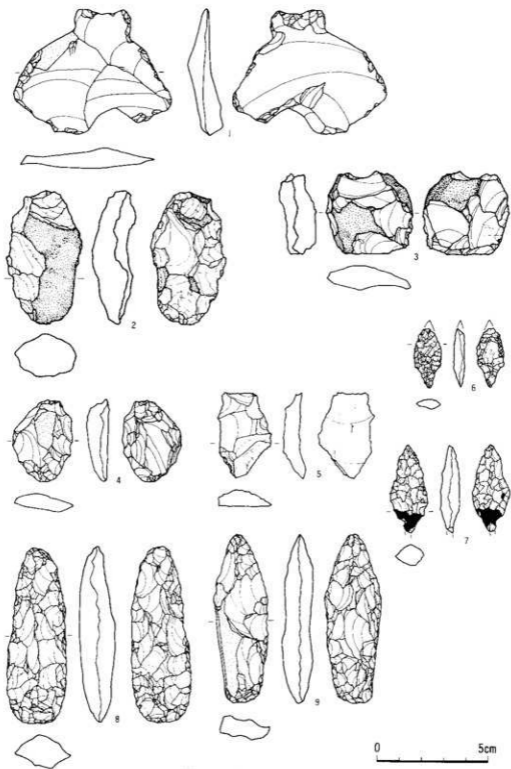
ビット125 フク土



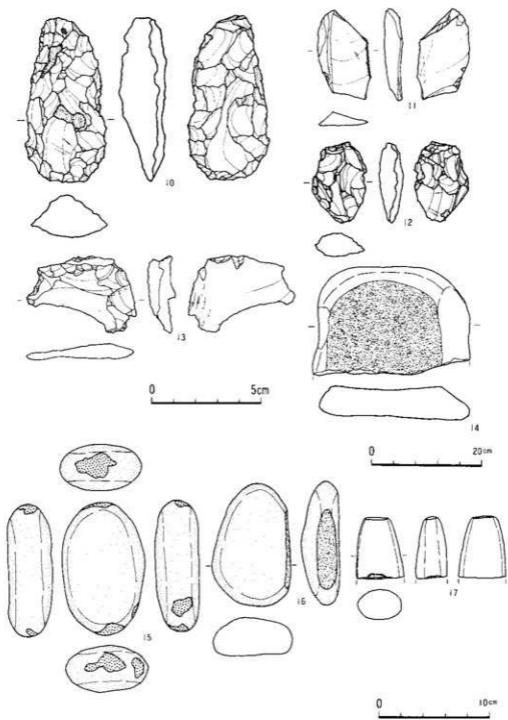
0 10cm



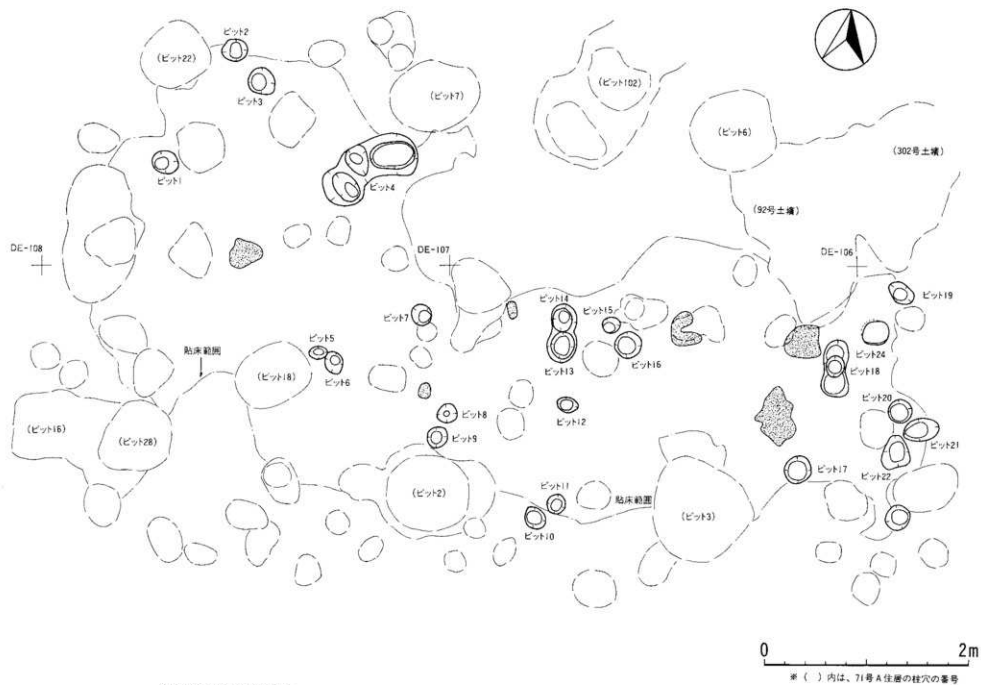
第181図 第71号A住居跡(5)



第182图 第71号A住居跡(6)



第183图 第71号A住居跡(7)



第184図 第71号日住居跡

cm、P₁₀₀…51cm、P₁₀₁…37cm、P₁₀₂…50cm、P₁₀₃…35cm、P₁₁₃…24cm、P₁₂₅…30cm、P₁₉₉…67cm。

<炉> 長軸に沿って、床面が焼けている部分を10か所検出した。地床炉と考えられるが、これらは大きく3ブロックに分けられ、ほぼ長軸線上に並んでいる。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 暗褐色土を主体とした堆積土が見られたが、掘り込みが浅い住居跡のため堆積状況は不明である。

<出土遺物> 覆土から床面にかけて、少量出土した。石器は、床面から石鏃1点、石槍1点、石筥2点、不定形石器6点、台石1点、床面直上から覆土から石鏃2点、不定形石器1点、敲磨器類2点、磨製石斧1点、ピットから石鏃1点、不定形石器11点が出土し、総数29点である。

<小結> 床面の検出状況と土器の出土状況が良好でないため、本住居跡の時期を決定づけることができないが、床面及びP₄から出土した土器から円筒上層d式期のあたりと思われる。

(島山 昇)

第71号B住居跡 (第184図)

<位置と確認> DD・DE-104~108グリッドに位置する。第71号A住居跡の下部で、貼り床を広範囲に確認した。

<重複> 第71号A住居跡より古く、第144・145号・161号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 平面形及び規模は不明であるが、確認した床面の範囲は、短軸3m~3m60cm、長軸8m40cm前後で、やや大型の住居跡と考えられる。

<壁・床面> 壁は確認していない。床面は貼り床が検出されているが、良好な検出状況ではない。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 貼り床を確認した時点で検出したピットは23個である。主なピットの深さは、P₃…34cm、P₅…23cm、P₈…32cm、P₇…33cm、P₁₂…25cm、P₁₄…41cmである。

<炉> 床面が焼けている部分を5か所検出した。最も西側のものは第71号A住居跡の下位にある。中央に位置するものは小規模のものが点在しており、酸化の状態は良くない。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 掘り込みが浅く、堆積状況は不明である。

<出土遺物> 遺物は出土しなかった。

<小結> 本住居は第71号A住居跡の下位に位置し、検出された貼り床の分布範囲の広さから、第71号A住居跡の拡張の可能性が考えられる。

(島山 昇)

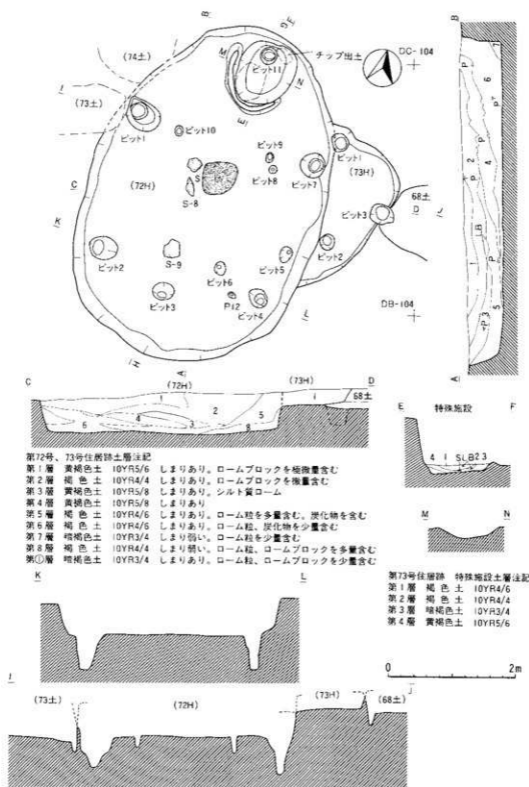
第72号住居跡（第185～187図）

- <位置と確認> DB-104グリッドで暗褐色土の落ち込みを確認した。
- <重複> 第73号住居跡より新しいが、第73号・74号土壌との新旧関係は不明である。
- <平面形・規模> 3 m82cm～5 m44cmの楕円形を呈している。床面積は、14.54㎡である。
- <壁・床面> 床面はほぼ平坦で、地床炉を中心として張り床が施されている。壁の立ち上がりは急で、壁高は北壁で66cm、南壁で40cm前後である。
- <壁溝> 検出されなかった。
- <柱穴> 大小12個のピットを検出した。P₁・P₂・P₄・P₇が主柱穴と思われる。ピットの深さは、次のとおりである。P₁…49cm、P₂…56cm、P₃…9cm、P₄…57cm、P₅…14cm、P₆…5cm、P₇…62cm、P₈…4cm、P₉…27cm、P₁₀…20cm、P₁₁…62cm、P₁₂…7cm。
- <炉> 地床炉で若干くぼんでいる。
- <特殊施設> 北壁に検出した。ロームの盛土（高さ3cm）が「し」の字状に見られ、その内側が90～100cmの範囲で楕円形状にくぼんでいた（深さ10cm）。ここからは、多量のチップが出土した。また、北壁寄りに深さ62cmのピット（P₁₁）を検出した。
- <堆積土> 褐色～黄褐色土を主体とした堆積が見られ、人為堆積の可能性が高い。
- <出土遺物> 覆土及び床面直上から榎林式土器が出土した。石器は、床面から石鏃1点、床面直上から石鏃1点、石皿2点、覆土から石鏃2点、石槍1点、不定形石器5点、石皿1点が出土した。
- <小結> 本住居跡の時期は床面直上から出土した土器から榎林式期と考えられる。

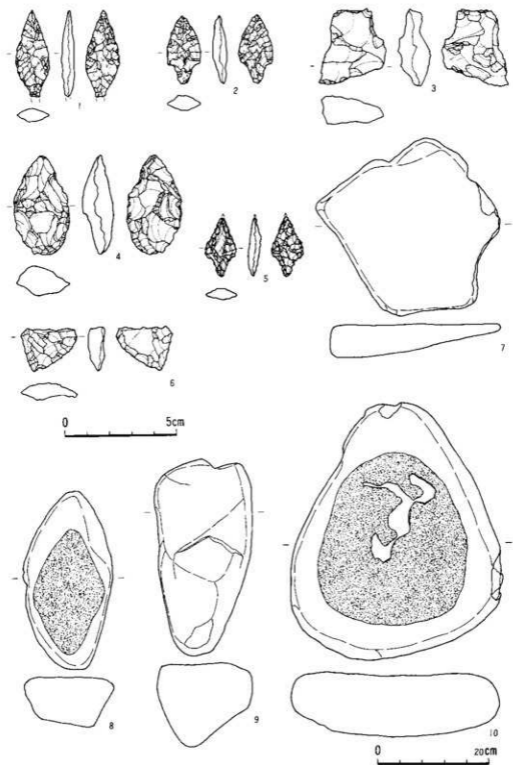
（畠山 昇）

第73号住居跡（第185図）

- <位置と確認> DB-104グリッドで、第72号住居跡の調査中に本住居跡を確認した。
- <重複> 第72号住居跡より古いが、第68号土壌より新しい。
- <平面形・規模> 不明であるが、残存部から楕円形を呈するものと思われる。
- <壁・床面> 床面はほぼ平坦であるが、南側だけは若干低くなっている。東壁のみ確認できた。壁の立ち上がりは急で、残存部分の壁高は北側で25cm、南側で4cm前後である。
- <壁溝> 検出されなかった。
- <柱穴> 3個のピットを検出した。ピットの深さは、P₁…18cm、P₂…10cm、P₃…49cmである。すべて柱穴か否か不明である。
- <炉> 不明である。
- <特殊施設> 不明である。



第185図 第72・73号住居跡



第187图 第72号住居跡(2)

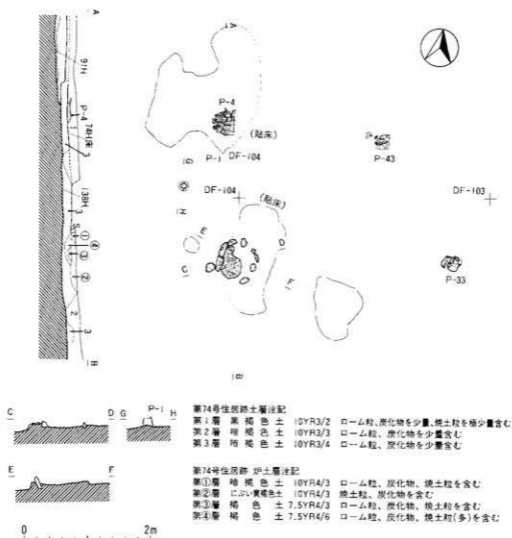
〈堆積土〉 暗褐色土を主体とした堆積が見られ、人為堆積の可能性が高い。

〈出土遺物〉 覆土から遺物は出土しなかった。

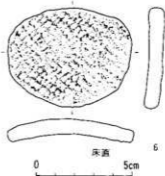
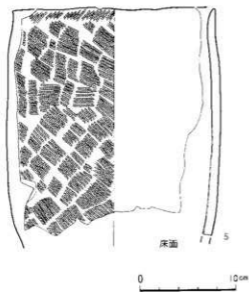
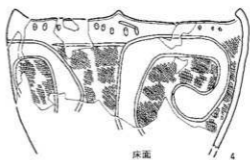
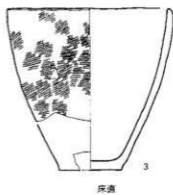
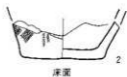
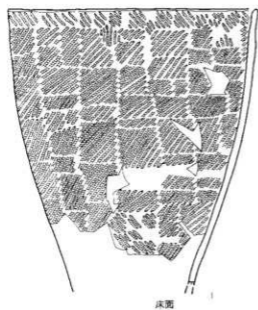
〈小結〉 本住居跡の時期は第72号住居跡に切られていることから、榎林式期かそれ以前と考えられる。 (高山 昇)

第74号住居跡 (第188~192図)

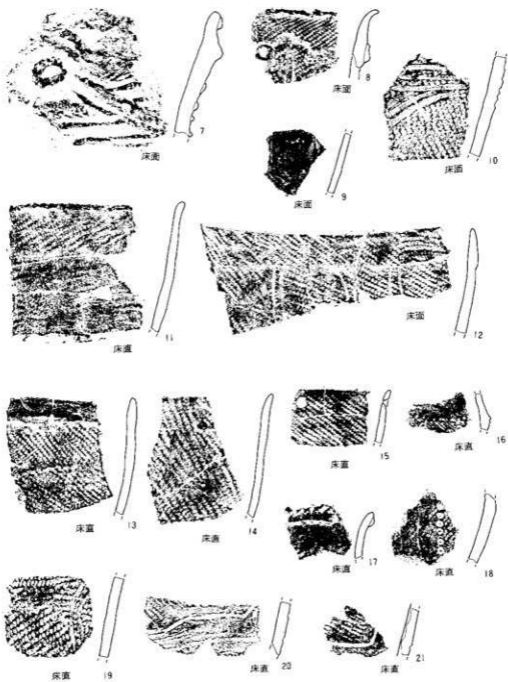
〈位置と確認〉 DE・DF-103・104グリッドで、貼り床と石囲炉を確認、第74号住居跡とした。第91・97・138・139号住居跡の上位に位置している。



第188図 第74号住居跡(1)

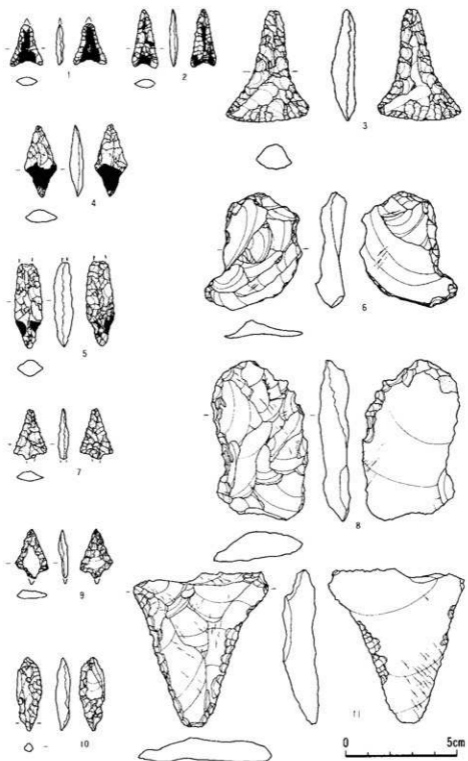


第189图 第74号住居跡(2)

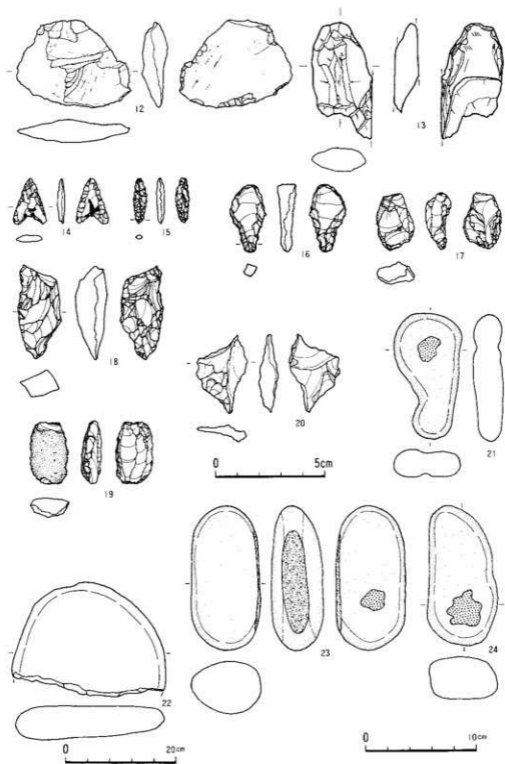


6 cm

第190图 第74号住居跡(3)



第191图 第74号住居跡(4)



第192图 第74号住居跡(5)

<重複> 第91・97・138・139号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 平面形・規模は不明であるが、検出した貼り床の分布からは、中型の住居跡と思われる。

<壁・床面> 壁は検出できなかった。床面は貼り床が施され、部分的ながらも、広く確認することが出来た。

<壁溝> 検出できなかった。

<柱穴> 検出できなかった。

<炉> 南側が開いた半円形の石囲炉を検出したが、南東側に炉石の抜き取り痕を2個検出した。本来は「コ」の字形の石囲炉であった可能性が高い。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> ローム粒・炭化物を少量含んだ黒褐色土～暗褐色土の堆積が見られたが、重複関係にある住居跡との境界は明瞭ではない。

<出土遺物> 遺物は覆土から床面にかけて、比較的多量の遺物が出土した。土器は床面から床面直上にかけて、最花式・弥栄平(1)式の土器が多い。

石器は床面から石鏃5点、不定形石器4点、磨製石斧1点、敲磨器類1点、床面直上から石鏃1点、石鏃1点、不定形石器1点、敲磨器類1点、覆土から、石鏃1点、石鏃3点、石匙1点、不定形石器20点、ピエス・エスキュー2点、敲磨器類1点、石皿1点、台石1点が出土し、総数45点である。また床面直上から、土器片利用製品が1点出土した。

<小結> 周辺及び下部から多数の住居跡が検出されているが、本住居跡は其中でも比較的新しい時期に構築されたものである。本住居跡の時期は、床面から出土した土器から最花式期から弥栄平(1)式期にかけてのものと思われるが、弥栄平(1)式期の可能性が高い。(高山 昇)

第75号住居跡 (第193図)

<位置と確認> DF-103グリッドに位置している。

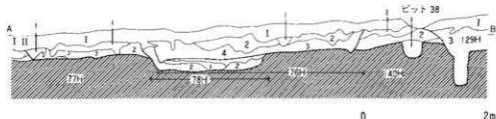
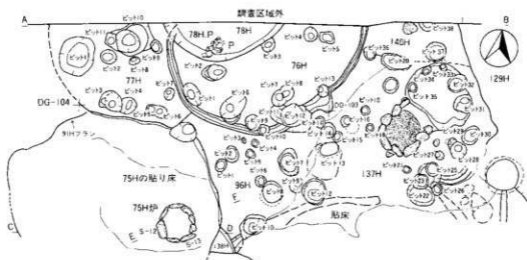
<重複> 第91・96住居跡より新しい。また第77号住居跡とも重複しているが、その新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 北～東壁の一部を検出できたにすぎないため、平面形・規模は不明である。

<壁・床面> 検出できた部分の壁高は、6～8cmである。床面は、炉の周辺で貼り床が検出された。

<壁溝> 検出できなかった。

<柱穴> 検出できなかったが、下位にある第91号住居跡で検出したピットの中に本住居の柱穴が含まれているものと考えられる。



第75号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 □—ム粒を若干含む
 第2層 褐色土 10YR4/4 □—ム粒を多量含む

第76号住居跡土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/6 □—ム粒を粗状に多量に含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 □—ム粒、炭化物を少量含む
 第3層 暗褐色土 10YR3/4 □—ム粒、炭化物を少量含む
 第4層 暗褐色土 10YR3/3 貼床

第78号住居跡土層注記

- 第1層 褐色土 10YR4/4 □—ム粒、塊を含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/4 □—ム粒、炭化物を微量含む

第75号住居跡出土土器



第75号住居跡 炉土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
 第2層 褐色土 7.5YR4/6 焼土、炭化物を含む
 第3層 赤褐色土 5YR4/8 焼土
 第4層 暗褐色土 10YR3/3 焼土粒、炭化物を含む
 第5層 褐色土 7.5YR4/4 焼土粒を多量含む

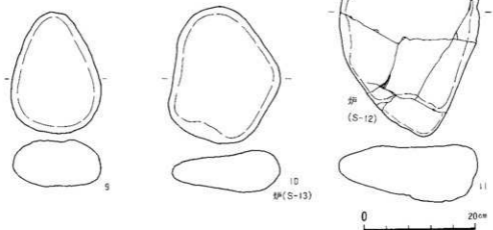
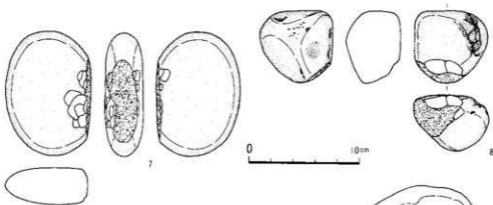
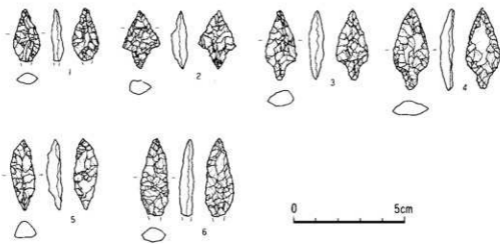
第77号住居跡土層注記

- 第1層 赤褐色土 10YR2/3 □—ム粒を微量含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 □—ム粒、炭化物を微量含む
 第3層 褐色土 10YR4/6 □—ム粒を多量に含む

第140号住居跡土層注記

- 第1層 赤褐色土 10YR2/3 □—ム粒を微量含む
 第2層 暗褐色土 10YR3/3 □—ム粒、炭化物を微量含む
 第3層 明黄褐色土 10YR5/8 □—ム
 ビット38 暗褐色土 10YR3/4

第193図 第75号・76号・77号・78号・96号・137号・140号住居跡



第194図 第75号住居跡

<炉> 円形の石囲炉で、南西の炉石には石皿と台石（S-12、S-13）を転用している。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 暗褐色土の堆積が見られた。

<出土遺物> 遺物は少量出土した。土器は数片出土したにすぎない。石器は、床面から石鏃2点（うち1点は炉からの出土）、炉に利用された石皿1点、台石1点、床面直上から石鏃4点、石錐1点、敲磨器類2点、台石1点が出土し、総数12点である。

<小結> 本住居跡の時期は、床面直上から出土した土器から弥栄平(1)式期のあたりと思われる。(畠山 昇)

第76号住居跡（第193・195・196図）

<位置と確認> D F・D G-102・103グリッドに位置している。第137号住居跡の調査中に確認した。

<重複> 第77・78・96・140号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 北側が調査区域外のため平面形、規模は不明である。

<壁・床面> セクションの観察から東西壁は急に立ち上がり、壁高は20cm前後である。床面は平坦であるが、第78号住居跡との重複部分は若干くぼんでいる。

<壁溝> 調査できた部分では幅約12cm、深さ4～6cmの壁溝を検出した。

<柱穴> 床面からは8個、壁溝と重複して5個検出した。ピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…63cm、P₂…41cm、P₃…7cm、P₄…18cm、P₅…8cm、P₆…53cm、P₇…10cm、P₈…12cm、P₁₀…18cm、P₁₁…19cm、P₁₂…95cm、P₁₃…31cm。

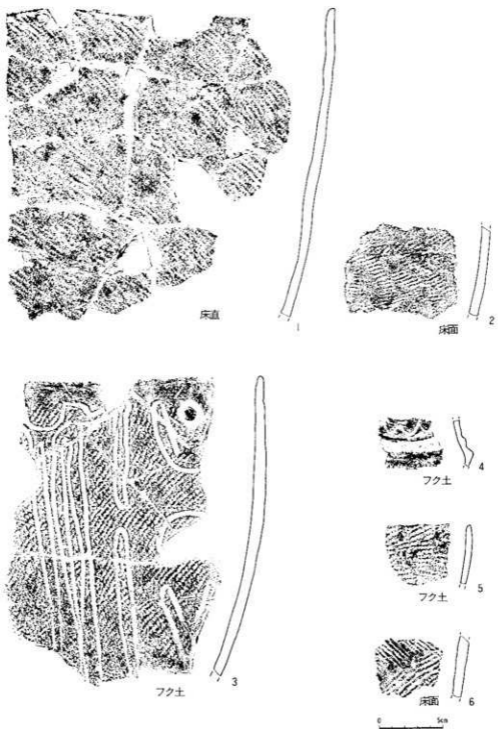
<炉> 調査した部分では検出できなかった。

<特殊施設> 調査した部分では検出されなかった。

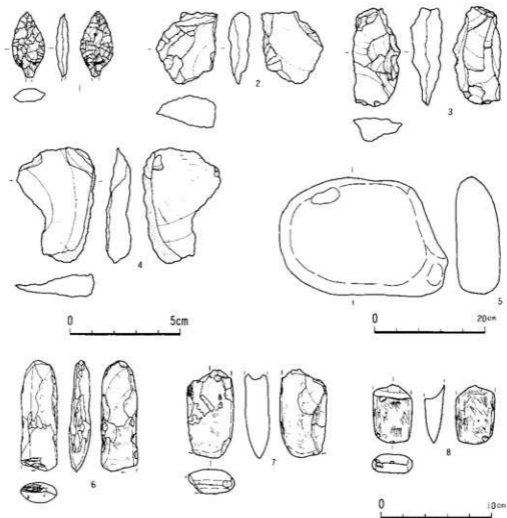
<堆積土> 暗褐色土を主体とした堆積が見られた。

<出土遺物> 覆土から床面直上まで若干の遺物が出土した。石器は、床面から不定形石器2点、石皿1点、床面直上から磨製石斧2点、覆土から不定形石器2点、磨製石斧1点、ピットから石鏃1点、不定形石器2点が出土し、総数11点である。

<小結> 本住居跡の時期は、最花式期の前後と思われる。(畠山 昇)



第195図 第76号住居跡(1)



第196図 第76号住居跡(2)

第77号住居跡 (第193・197図)

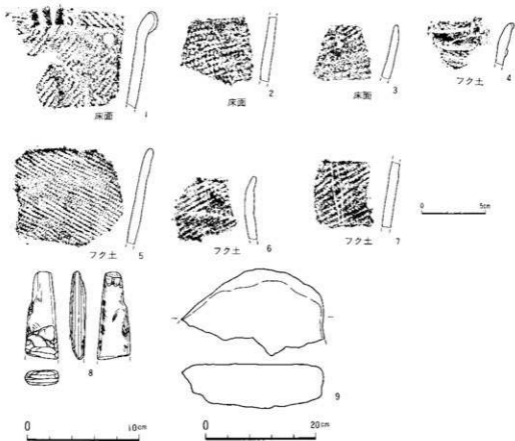
<位置と確認> DG-103グリッドに位置している。第76号住居跡の調査中に確認した。

<重複> 第76・78号住居跡より古い。また第75・91・96号住居跡とも重複しているが、新旧関係は把握できなかった。

<平面形・規模> 北側が調査区域外に延びていることと、第76・78号住居跡に切られていることから平面形、規模は不明である。

<壁・床面> セクションからは、18cmの壁高を確認できたが、遺構確認面からはほとんど、壁高を確認できなかった。床面はほぼ平坦である。

<壁溝> 調査した部分では、検出できなかった。



第197図 第77号住居跡

<柱穴> 11個のビットを検出した。主なビットの深さは、P₁…24cm、P₂…36cm、P₃…56cm、P₄…19cm、P₆…14cm、P₉…10cm、P₁₀…70cm、P₁₁…50cmである。

<炉> 調査した部分では検出できなかった。

<特殊施設> 調査した部分では検出されなかった。

<堆積土> 黒褐色～暗褐色土の堆積が見られた。

<出土遺物> 床面から、円筒上層e式と思われる土器片が出土した。石器は、床面から石皿1点、覆土から磨製石斧1点が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は円筒上層e式期と思われる。

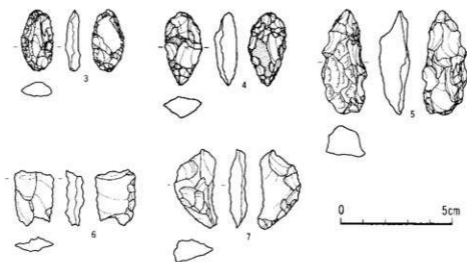
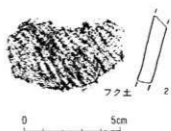
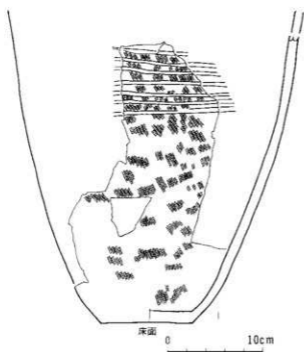
(高山 昇)

第78号住居跡（第193・198図）

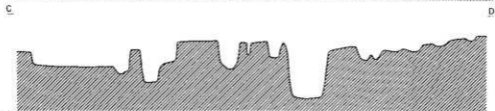
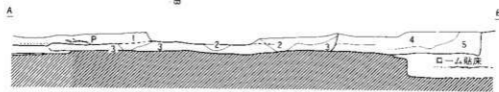
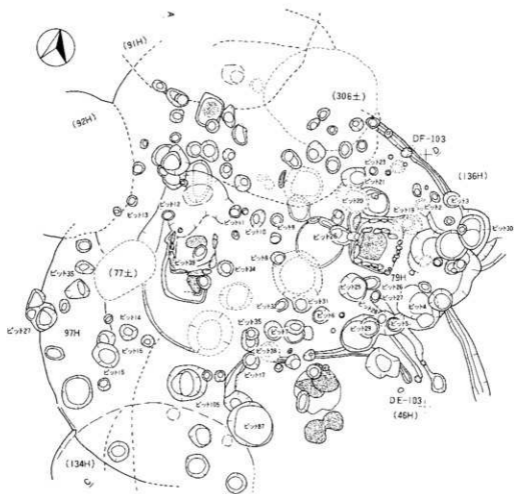
- <位置と確認> DG-103グリッドに位置している。第76号住居跡の調査後に確認した。
- <重複> 第77号住居跡より新しく、第76号住居跡より古い。
- <平面形・規模> 北側が調査区域外のため平面形、規模は不明である。
- <壁・床面> セクションからは、東西の両壁は急に立ち上がり、40cm前後の壁高である。第76号住居跡床面からは10cm前後低い。床面はほぼ平坦である。
- <壁溝> 調査した部分では、検出できなかった。
- <柱穴> 調査した部分では、検出できなかった。
- <炉> 調査した部分では検出できなかった。
- <特殊施設> 調査した部分では検出されなかった。
- <堆積土> 褐色土と暗褐色土の堆積が見られた。
- <出土遺物> 覆土から床面にかけて、少量の遺物が出土した。土器は床面から円筒上層e式土器が出土した。石器は、覆土から石槍1点、不定形石器4点が出土した。
- <小結> 本住居跡の時期は円筒上層e式期である。 (畠山 昇)

第79号住居跡（第199～203図）

- <位置と確認> DE-103グリッドに位置しており、多数の遺構と重複して確認した。
- <重複> 第74号住居跡よりは古い、第46・97・165号住居跡よりも新しい。また第136A・136B・138・139号住居跡との新旧関係は不明であるが、これらより新しい可能性がある。
- <平面形・規模> 重複のため不明である。
- <壁・床面> 壁は確認できなかった。床面はほぼ平坦で、堅緻である。とくに、炉の周辺は非常に堅い。また、炉の北側は壁溝に向かい、20cmほど緩やかに高くなっている。
- <壁溝> 炉の北側で、幅10cm～15cmで深さ10cm前後の壁溝を検出した。
- <柱穴> 本住居跡及び第97号住居跡を中心とする範囲から、多数のピットを検出した。これらのピットが、どの住居跡に伴うものか現場で判断できなかったため、この住居跡の近辺から検出したピットは住居跡に関係なく通し番号を付けて調査した。主なピットの深さは以下のとおりである。
- P₁…40cm、P₂…16cm、P₃…29cm、P₄…41cm、P₅…66cm、P₆…52cm、P₇…46cm、P₈…26cm、P₉…17cm、P₁₀…33cm、P₁₁…17cm、P₁₂…32cm、P₁₃…26cm、P₁₄…40cm、P₁₅…29cm、P₁₆…28cm、P₁₇…36cm、P₁₈…24cm、P₁₉…49cm、P₂₀…59cm、P₂₁…59cm、P₂₂…19cm、P₂₃…23cm、P₂₄…38cm、P₂₅…75cm、P₂₆…51cm、P₂₇…49cm、P₂₈…41cm、P₂₉…65cm、P₃₀…21cm、P₃₁…46cm、P₃₂…26cm、P₃₃…33cm、P₃₄…29cm、P₃₅…44cm、P₃₆…38cm、P₃₇…57cm、P₃₈…63cm、



第198図 第78号住居跡



第97号住居跡土層注記

- | | | |
|----------|---------|-----------------------|
| 第1層 黒褐色土 | 10YR3/2 | ローム粒、炭化物を少量、焼土粒を極少量含む |
| 第2層 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒、炭化物を少量含む |
| 第3層 暗褐色土 | 10YR3/4 | ローム粒、炭化物を少量含む |
| 第4層 暗褐色土 | 10YR3/4 | ローム粒、炭化物を少量含む |
| 第5層 褐色土 | 10YR4/4 | ローム粒、炭化物を含む |

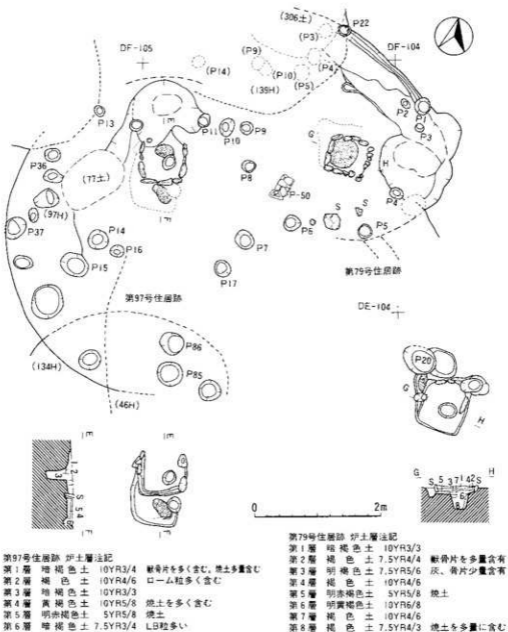
0 2m

第199図 第79・97号住居跡(1)

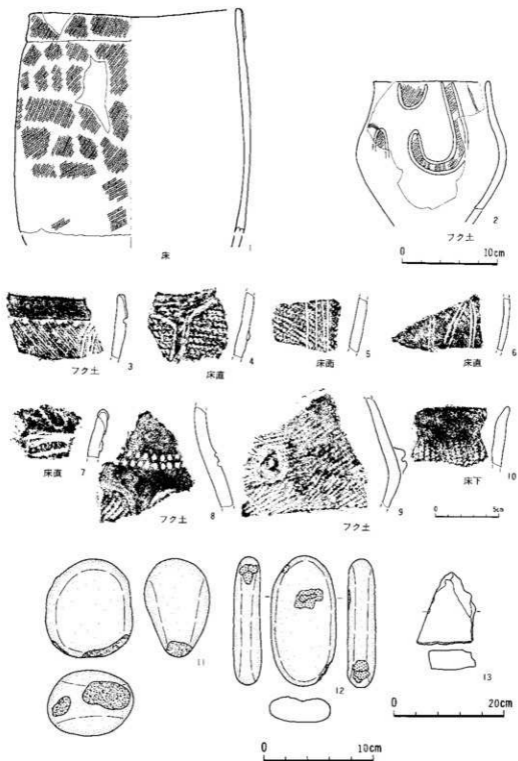
P₃₀…57cm.

<炉> 壁溝との位置関係から見て、住居跡の東寄りに位置するものと思われる。

方形に組まれた石囲炉で、短軸65cm、長軸70cmである。東側は楕円形状に、若干低くなっている。またこの炉の西側に、重複して古い炉を検出した。炉の改築が行われたものであろう。掘



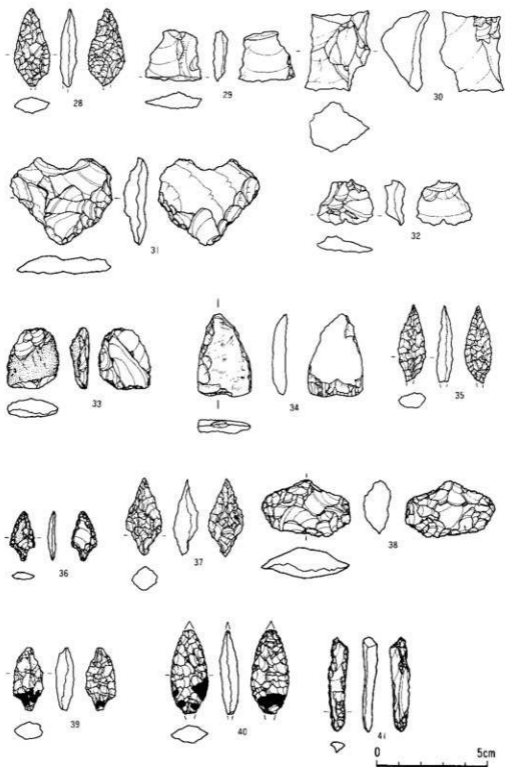
第200図 第79・97号住居跡(2)



第201図 第79号住居跡(3)



第202图 第79号住居跡(4)



第203图 第79号住居跡(5)

り方のみの検出であるが、同タイプの炉であった可能性が考えられる。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 全体にローム粒・炭化物粒を含んだ暗褐色～褐色土を主体としている。

<出土遺物> 覆土から床面にかけて、遺物はあまり出土しなかった。土器は、床面から円筒上層式系以後の縄文施文の土器（P-50、第201図1）が出土し、本住居跡に伴う。この他、覆土から床面にかけて、榎林式～弥栄平(1)式期の土器が若干出土している。石器は床面から石鏃2点、不定形石器5点、ピエス・エスキュー1点、敲磨器類2点、磨製石斧1点、床面直上から石鏃1点、不定形石器1点、覆土から石鏃10点、石鏃2点、石匙1点、石筥1点、不定形石器26点、ピエス・エスキュー5点、磨製石斧2点が出土し、総数60点である。

<小結> 床面からは、本住居跡の構築時期を知る良好な土器は出土していないが、床面直上からの出土土器及び重複している他の住居跡との関係等から考えると、最花式～弥栄平(1)期と思われる。 (畠山 昇)

第80号住居跡（第204・205図）

<位置と確認> 本調査区ほぼ中央のDA-100、CZ-100グリッドに位置している。第III層下面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第149号土壌と重複しており、本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 南北に長い二等辺三角形を呈する。規模は長軸3m70cm、短軸2m60cmである。床面積は6.92㎡である。

<壁・床面> 北壁と東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁と西壁は緩やかに立ち上がる。各壁とも堅緻である。壁高は東壁31cm、西壁18cm、南壁8cm、北壁19cmである。床下に土壌があるため、床面は起伏に富むが、貼り床が所々なされ堅緻である。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 深さ40cmのピットが1個認められた。支柱穴のひとつと思われる。

<炉> 3個の炉石で囲った石囲炉が1基認められた。焼土は認められたものの火床面は認められなかった。

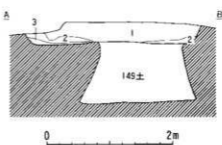
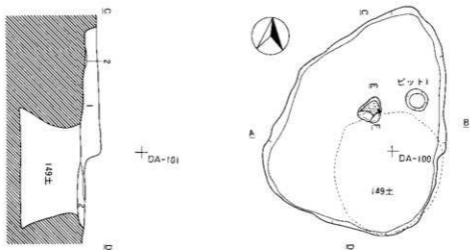
<特殊施設> 認められなかった。

<堆積土> ローム粒を多量に含む黒・暗褐色土の層で、自然堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 覆土から円筒上層c式土器～最花式土器が出土している。石器は覆土から石鏃3点、不定形石器2点、敲磨器類1点、石皿1点、総数7点出土している。

<小結> 床面から構築時期を判断する良好な土器は出土しておらず、構築時期は不明である。

(三浦 孝仁)

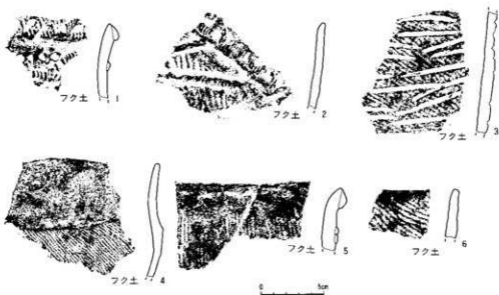


第80号住居跡土層注記

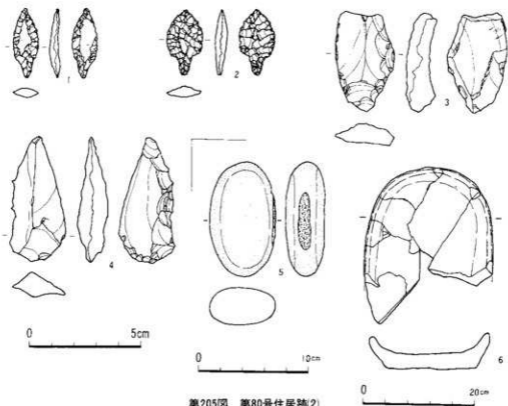
- | | |
|-------------------|--------|
| 第1層 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒多量 |
| 第2層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒少量 |
| 第3層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒多量 |

第80号住居跡 炉土層注記

- | | |
|-------------------|-------|
| 第1層 黄褐色 (10YR5/6) | 焼土粒混入 |
| 第2層 黄褐色 (10YR5/8) | |



第204図 第80号住居跡(1)



第205図 第80号住居跡(2)

第81号住居跡 (第206～216図)

〈位置と確認〉 本調査区のほぼ中央でDC-99、DD-99グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で本住居跡の床面の一部と暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 第82号、90号、104号～106号住居跡及び第173号、281号、第282号土壇と重複しており、本住居跡はいずれの遺構よりも新しい。

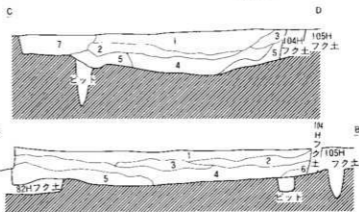
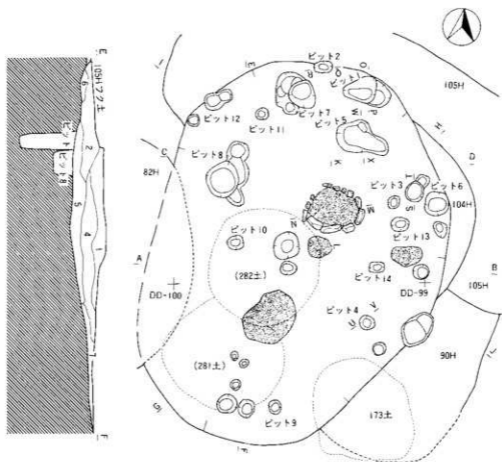
〈平面形・規模〉 南北に若干長い楕円形で、規模は長軸6m20cm、(短軸4m80cm)である。床面積は推定で23.03㎡である。

〈壁・床面〉 壁は重複のため確認できなかった。床面全体に貼り床がなされ、堅緻であるが、床面は摺鉢状になっており、炉に向けてなだらかに傾斜していく。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 本住居跡の床面から大小のピットが検出された。支柱穴の配置等は明確に判断できない。ピットの深さはP₁…30cm、P₂…34cm、P₃…25cm、P₄…39cm、P₅…10cm、P₆…60cm、P₇…65cm、P₈…72cm、P₉…34cm、P₁₀…61cm、P₁₁…55cm、P₁₂…58cm、P₁₃…44cm、P₁₄…11cmである。

〈炉〉 住居跡の中心から若干北側の部分から石囲炉を1基検出した。炉石は口の字状に配置



第81号住居跡 炉土層注記

- | | |
|-------------------|---------------|
| 第1層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒少量, 炭化粒少量 |
| 第2層 黒褐色 (10YR2/3) | ローム粒少量, 炭化材屑々 |
| 第3層 黒褐色 (10YR5/3) | ローム粒少量, 焼土粒少量 |
| 第4層 明赤褐色 (5YR5/8) | 黒褐色土少量 |

第81号住居跡土層注記

- | | |
|-------------------|----------------------------------|
| 第1層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒少量, 炭化粒微量 |
| 第2層 紅褐色 (10YR4/3) | ローム粒少量, $\phi 10\text{mm}$ のLB少量 |
| 第3層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒中量, $\phi 10\text{mm}$ のLB少量 |
| 第4層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒中量, $\phi 10\text{mm}$ のLB少量 |
| 第5層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒中量, $\phi 10\text{mm}$ のLB少量 |
| 第6層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒中量, 焼土粒屑々 |
| 第7層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒少量, 焼土粒, 炭化粒少量 |

第206図 第81号住居跡(1)

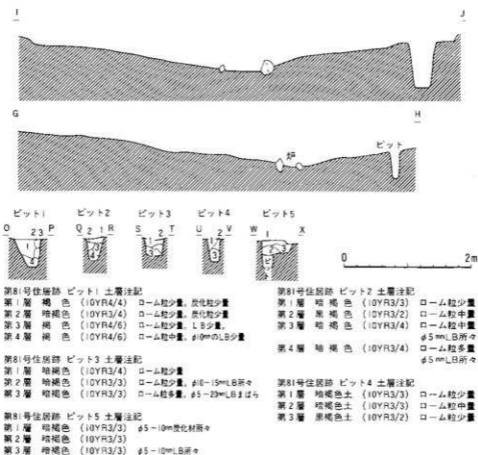
され、その炉石は南側が大きな礫、北側には小さな礫を利用している。規模は長軸9cm、短軸7.6cm、深さ3cmである。第4層下面が火床面で堅緻である。

〈特殊施設〉 認められなかった。

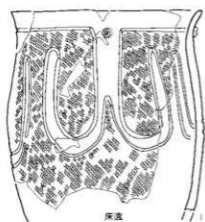
〈堆積土〉 暗褐色土を主体にした層で7層に分層した。東南部に焼土、炭化材を含む。レンズ状に堆積しており、自然堆積の可能性が高い。

〈出土遺物〉 覆土から遺物が散在して出土した。土器は弥栄平(1)式土器が主体で、石器は床面から石皿2点、床面直上から石匙1点、石斧1点、石皿1点、不定形石器6点、覆土から石鏃45点、石槍4点、石錐8点、石鏃4点、ピエス・エスキューユ3点、不定形石器59点、石斧11点、敲磨器類8点、石棒1点、石皿8点、炉より石鏃1点、総数163点出土している。また覆土から土器片利用製品が1点出土している。

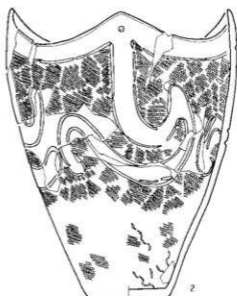
〈小結〉 本住居跡は傾斜という極めて特殊な床面をしている。床面から弥栄平(1)式土器が出土していることから、本住居跡は弥栄平(1)式期に構築されたものと思われる。(三浦 孝仁)



第207図 第81号住居跡(2)



床蓆



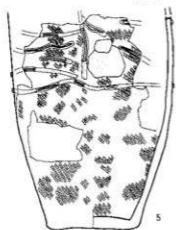
フク土



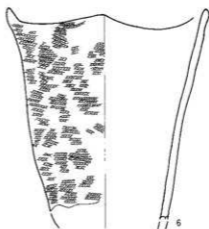
フク土



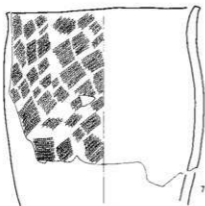
フク土



フク土



フク土



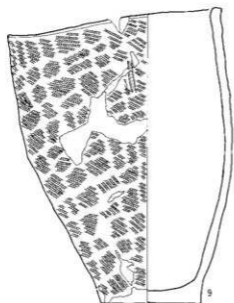
フク土



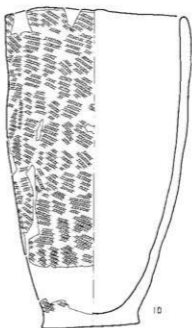
フク土

0 10cm

第208図 第81号住居跡(3)



フク土



フク土



フク土



フク土



0 10cm



床面



13



床面



14



フク土



15



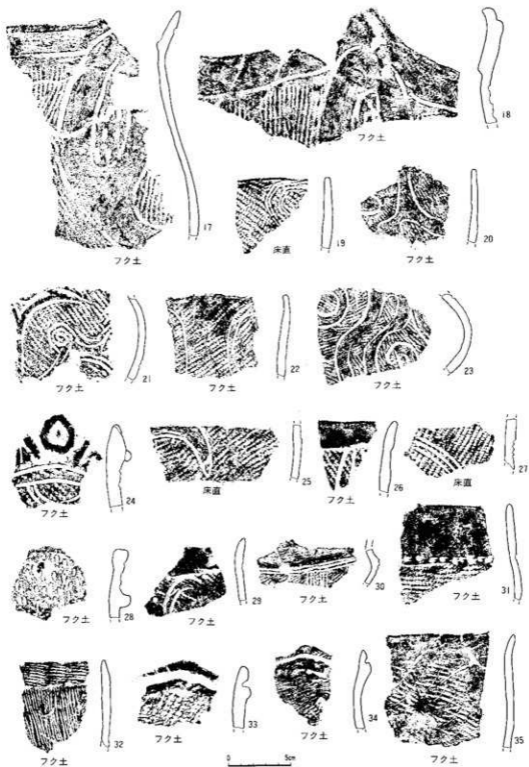
床面



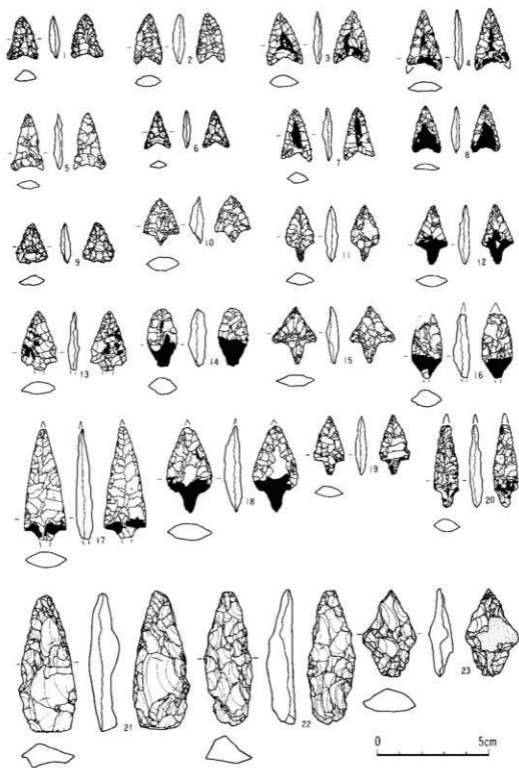
16

0 5cm

第209図 第81号住居跡(4)



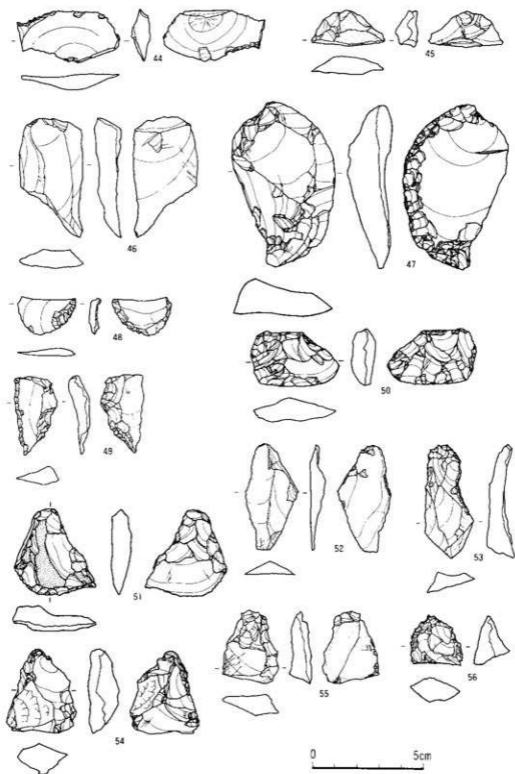
第210図 第81号住居跡(5)



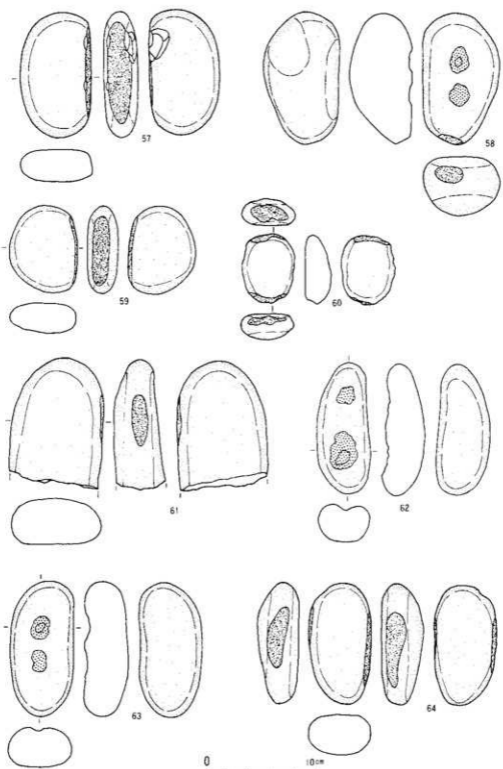
第211图 第81号住居跡(6)



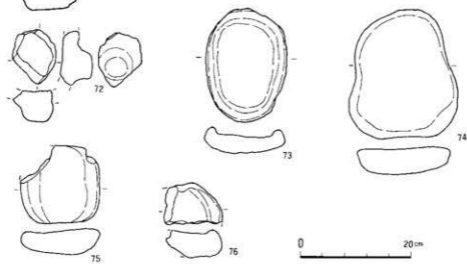
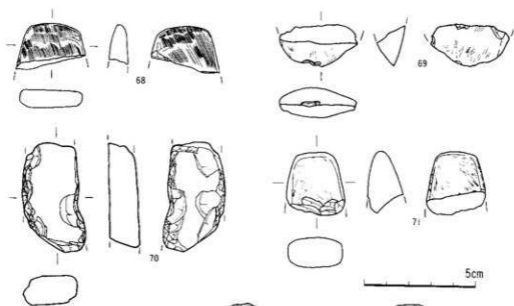
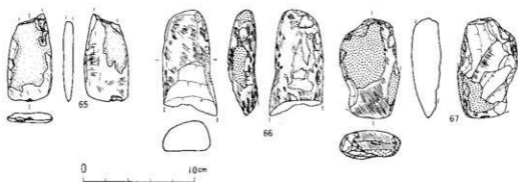
第212图 第81号住居跡(7)



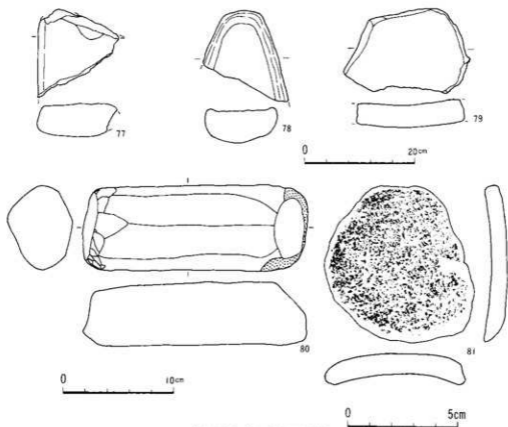
第213图 第81号住居跡(8)



第214图 第81号住居跡(9)



第215图 第81号住居跡(10)



第216図 第81号住居跡①

第82号住居跡 (第217～224図)

〈位置と確認〉 調査区DC・DD-99・100・101グリッドに位置し、第83号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第49・81・83号住居跡、第274・853・854号土壌と重複し、新旧関係は下記の変遷である。(旧) → (新)

第49号住居跡 \ 第81号住居跡

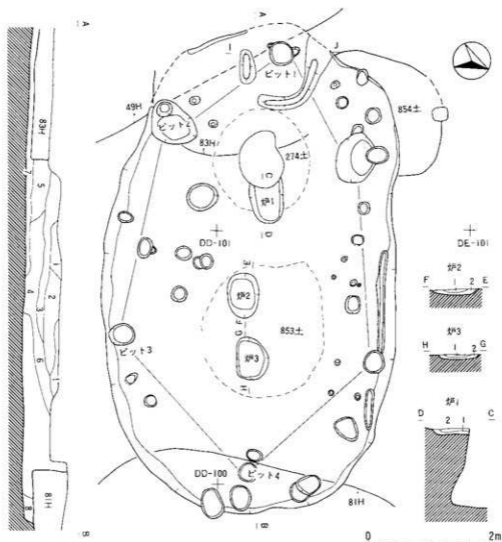
第853号土壌 → 本住居跡 → 第274号土壌

第854号土壌 / 第83号住居跡

〈平面形・規模〉 西側部分で一部確認できなかったが、残存部から推定すると楕円形を呈する。規模は、長軸7m74cm・短軸4m60cm・床面積(27.56㎡)の大型住居跡である。

〈壁・床面〉 上端から床面にかけて傾斜しており、堅緻なつくりである。壁高は、東壁32cm・西壁18cm・南壁38cm・北壁42cmを測る。床面はほぼ平坦で、貼り床を呈し壁同様に固い。

〈壁溝〉 北壁寄りで一部検出した。幅14cm・深さ4cmであり、一部途切れている。



第82号住居跡 ビット1 土層注記

- 第1層 暗褐色 7.5YR3/3 炭化物少量含む、
ロームブロック混入
第2層 褐色 7.5YR4/6 ロームブロック混入

第82号住居跡 炉2・3 土層注記

- 第1層 明赤褐色 2.5YR5/6 ローム粒を含む(焼土層)
第2層 暗褐色 7.5YR3/3 焼土粒混入

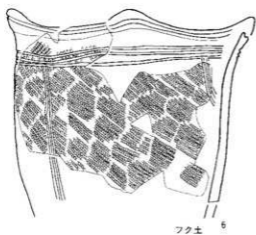
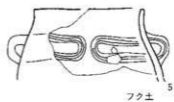
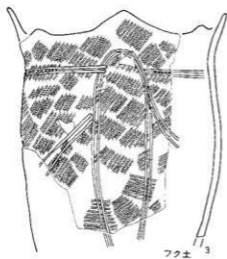
第82号住居跡土層注記

- | | | | |
|-----|--------|---------|-------------------|
| 第1層 | 褐色 | 10YR4/6 | 炭化粒少量含む。ロームブロック混入 |
| 第2層 | 暗褐色 | 10YR3/4 | 炭化物、ローム粒を少量含む。 |
| 第3層 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 炭化物・焼土粒・ローム粒を少量含む |
| 第4層 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 炭化物・焼土粒を多量に含む |
| 第5層 | にじみ黄褐色 | 10YR4/3 | 炭化物を多量に含む |
| 第6層 | 褐色 | 10YR4/4 | ロームブロック混入 |
| 第7層 | 暗褐色 | 10YR3/4 | 炭化物・焼土粒を多量に含む |
| 第8層 | 黒褐色 | 10YR2/3 | ローム粒を少量含む |

第82号住居跡 炉1 土層注記

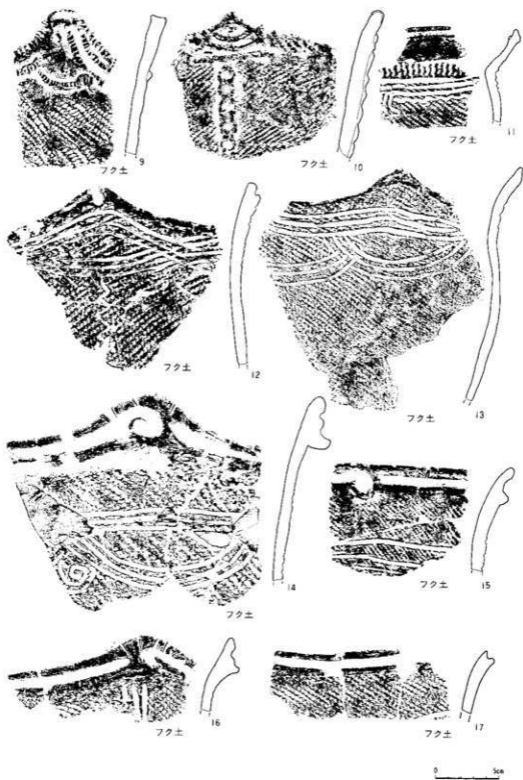
- 第1層 赤褐色 2.5YR4/8 骨粉を含む(焼土層)
第2層 明褐色 7.5YR5/6 焼土粒混入

第217図 第82号住居跡(1)

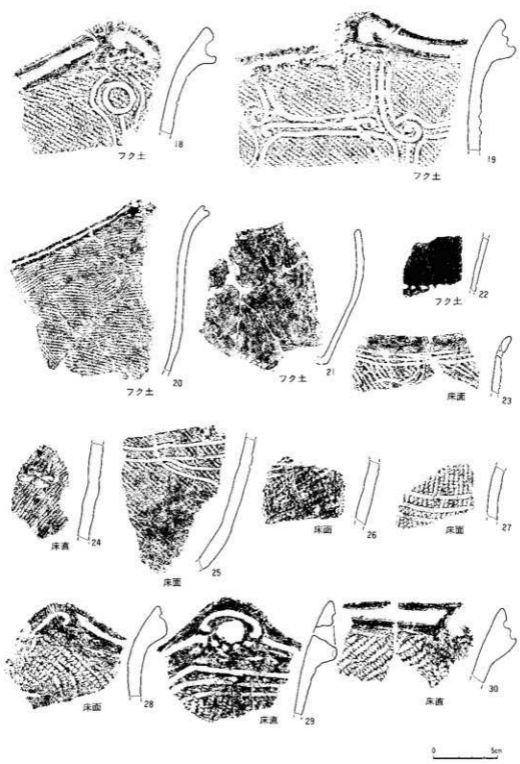


0 5cm

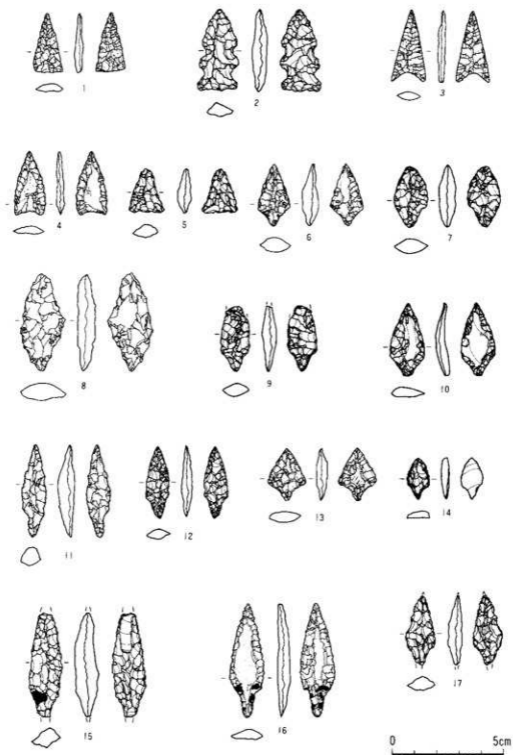
第218図 第82号住居跡(2)



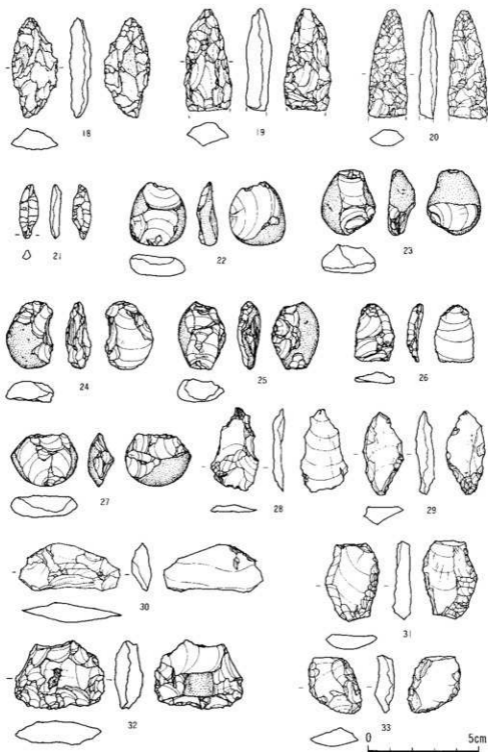
第219図 第82号住居跡(3)



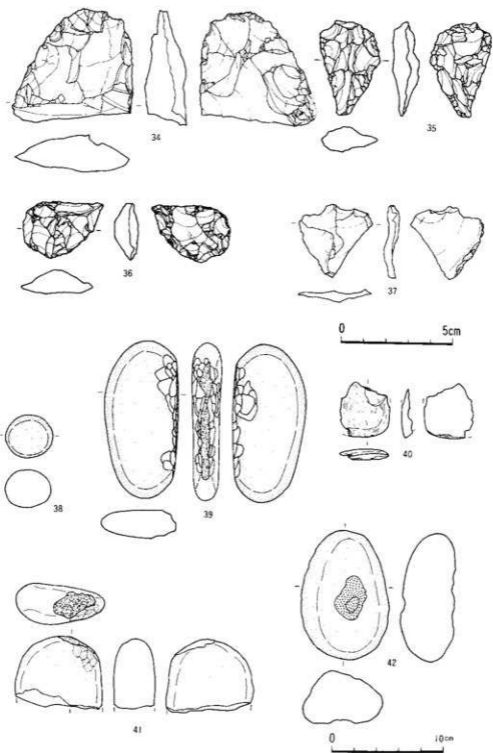
第220図 第02号住居跡(4)



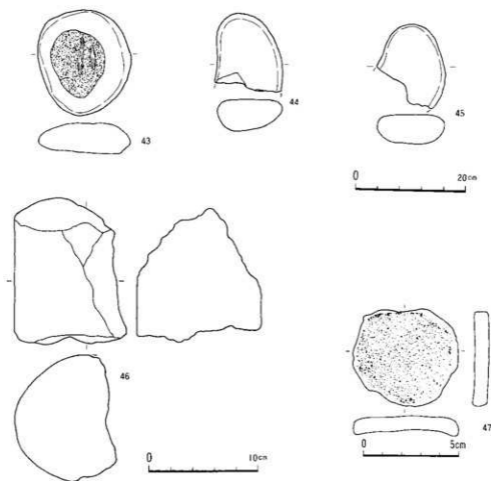
第221图 第82号住居跡(5)



第222图 第82号住居跡(6)



第223图 第82号住居跡(7)



第224図 第82号住居跡(8)

<柱穴> ビットは壁寄りから多く検出した。配置等から柱穴と思われる。P₁～P₆の6本が主柱穴と思われる。

第82号住居跡ビット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	80×57	56	2	楕円形	78×60	70	3	円形	41×37	70
4	円形	36×33	50	5	円形	37×31	73				

<炉> 住居跡の長軸線上に沿って3基検出した。3基の炉はすべて地床炉であり、炉1は第274土壌によって一部切られている。規模は、炉1が長径(57)cm・短径(52)cm・深さ8cm、炉2が長径70cm・短径50cm・深さ9cm、炉3が長径67cm・短径49cm・深さ6cmを測る。

<特殊施設> 西壁寄りに幅17cm・高さ7cmの逆U字形の盛土を確認した。この周堤は一部途

切れており、中央部に柱穴を1個検出した。規模は、長径140cm・短径132cmを測る。

〈堆積土〉 8層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉 土器は、円筒上層d式～最花式に至る土器が出土した。石器は、覆土から石鏃32点・石槍2点・石錐1点・ピエス・エスキュー6点・不定形石器49点・敵磨器類4点・台石・石皿類1点、床直から磨製石斧1点・石棒類2点、床面から不定形石器2点・台石石皿2点、特殊施設から石鏃2点・石槍1点の総数105点が出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床面・床直の土器から榎林式期と思われる。 (成田 滋彦)

第83号住居跡 (第225・226図)

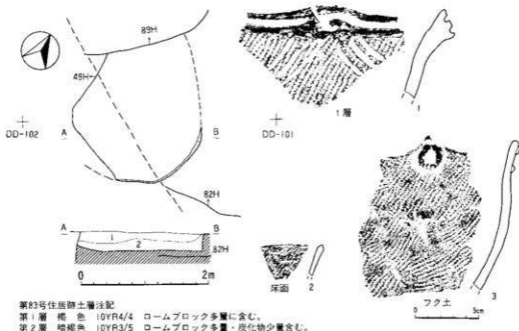
〈位置と確認〉 調査区DC・DD-101グリッドに位置している。第49・82号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第49・82・89号住居跡と重複し、新旧関係は下記の変遷である。

(旧) → (新)

第49号住居跡 → 第82号住居跡 → 本住居跡 → 第89号住居跡

〈平面形・規模〉 南側一部の確認であるが、残存部から推定すると円形を呈する。残存部の規模は、長軸(2m32cm)・短軸(1m94cm)を測る。



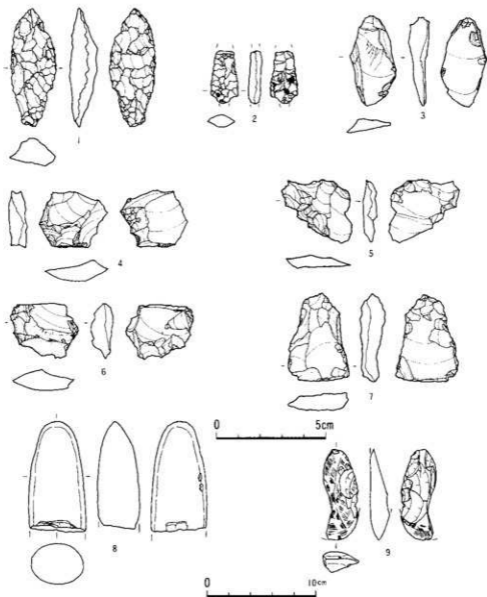
第225図 第83号住居跡(1)

〈壁・床面〉 床面から上端にかけて垂直に立ち上がり、堅緻な造りである。壁高は、南壁27cmで他は不明である。床面は、ほぼ平坦で貼り床は固い。

〈柱穴・炉・特殊施設〉 認められなかった。

〈堆積土〉 2層に分層できた。ロームブロックを多量に含んでおり人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉 土器は出土量は少ない。石器は、覆土から石鏃2点・石槍1点・磨製石斧1点・



第226図 第83号住居跡(2)

不定形石器7点が出土し、床面から磨製石斧1点の総数12点が出土した。

〈小結〉 床面からは、粗製の深鉢形土器が1片出土したのみである。土器の胎土・調整等から円筒上層期以降の時期であり、覆土の遺物から住居跡の時期は、榎林式期と思われる。

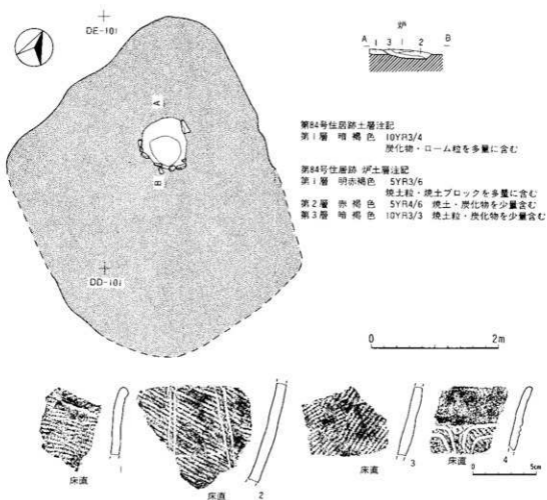
(成田 滋彦)

第84号住居跡 (第227～230図)

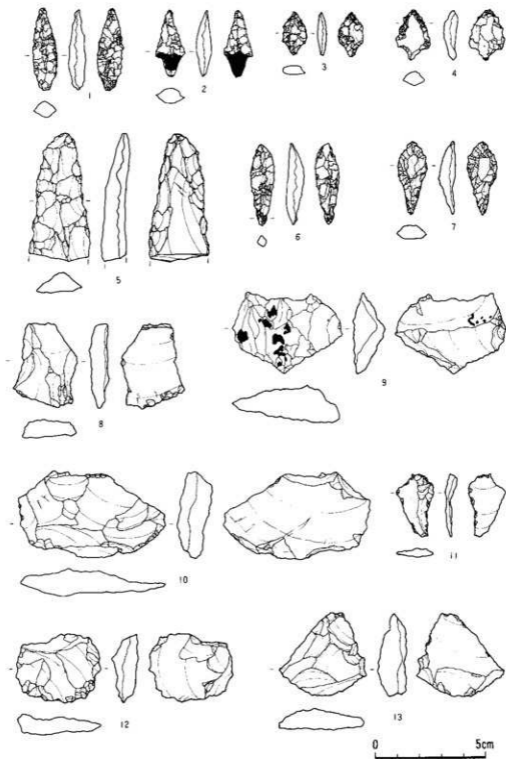
〈位置と確認〉 調査区DC・DD-100・101グリッドに位置している。遺構を精査中に石囲炉と貼り床を確認した。

〈重複〉 第82・89・130号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡が新しい。

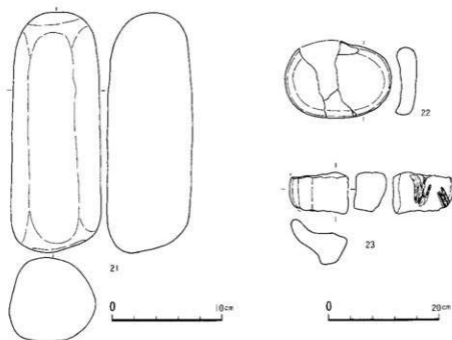
〈平面形・規模〉 貼り床からプランを推定すると、長方形を呈すると思われる。規模は、長



第227図 第84号住居跡



第228图 第84号住居跡(2)



第230図 第84号住居跡(4)

軸（4 m60cm）・短軸（4 m00cm）・床面積（16.63㎡）を測る。

〈壁・床面〉 壁の立ち上がりは確認できなかった。床面は、ほぼ平坦であり、特に炉の周辺が固くしまった貼り床である。

〈柱穴・特殊施設〉 認められなかった。

〈炉〉 住居跡の北側に位置し、角張った礫を円形に配置した石囲炉である。規模は、長径85cm・短径74cm・深さ14cmを測る。

〈堆積土〉 炉の一部のみが確認され、人為か自然堆積かどうかは確認できなかった。

〈出土遺物〉 遺物は炉の周辺から多く出土した。石器は、覆土から不定形石器7点・敲磨器類1点・石棒類1点、台石石皿1点、床直から石鏃2点・不定形石器1点・磨製石斧1点・敲磨器類1点、床面から石鏃1点・石槍1点・石錐2点・不定形石器4点・石棒類2点、炉石に台石・石皿類2点を使用している。出土石器の総数は26点出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床直の土器から最花式期と思われる。 (成田 滋彦)

第85号住居跡（第231～233図）

<位置と確認> CZ・DA-103・104グリッドで暗褐色土の広がりを確認した。調査の進行に伴い炭化材が多く現われ、焼失家屋であることが分かった。

<重複> 第9号住居跡、第86号住居跡と重複しており、本住居跡のほうが新しい。

<平面形・規模> 南北に長い楕円形を呈している。規模は長軸4m65cm、短軸3m30cmで、床面積は11.01㎡である。

<壁・床面> 壁は急に立ち上がり、壁高は50cmである。床面は、ほぼ平坦である。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 壁内から、大小合わせて約50個のピットを検出したが、そのうちの2個は第9号住居跡の柱穴である（9HP₇～P₉）。本住居の柱穴配置は、P₄・P₁₀・P₁₂・P₂₅の4本柱と思われるがP₂₅は深さが14cmと浅く、やや疑問が残る。また、北壁の近くにある付属施設内のピット（P₁₈）を柱穴と考えると、前述のものに、P₆あるいはP₇を加えた6本柱と考えることができるかも知れない。主なピットの深さは以下のとおりである。

P₁…41cm、P₂…30cm、P₃…21cm、P₄…41cm、P₅…17cm、P₆…41cm、P₇…27cm、P₈…14cm、P₉…10cm、P₁₀…35cm、P₁₁…29cm、P₁₂…35cm、P₁₃…10cm、P₁₄…39cm、P₁₅…38cm、P₁₆…26cm、P₁₇…27cm、P₁₈…27cm、P₁₉…27cm、P₂₀…12cm、P₂₁…36cm、P₂₂…42cm、P₂₃…6cm、P₂₄…8cm、P₂₅…14cm。

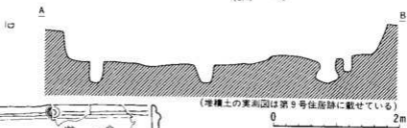
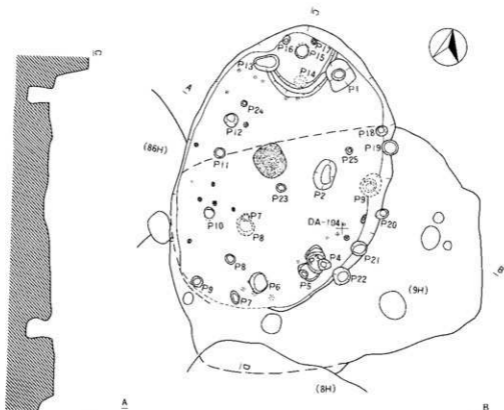
<炉> ほぼ中央に位置するものの、若干西に片寄っている。径約50cmの、円形を呈する地床炉である。

<特殊施設> 住居の北壁（長軸端）に向かって、半円状の地山ロームの高まり（盛土ではなく、掘り残して構築している）が巡る。この高まりの内側には、壁近くに直径20cm、深さ38cmのピットがあり、さらにその後方の両脇に、壁に接して2個の小ピット（直径7～10cm、深さ26cm前後）が検出された。また、高まりの部分にもピットが検出されている（P₁・P₁₃・P₁₄）が、特殊施設に伴うものかどうか、疑わしい。とくにP₁・P₁₃は、P₂・P₁₁と関連するものと思われ、古い住居の柱穴である可能性もある。

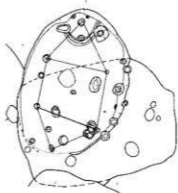
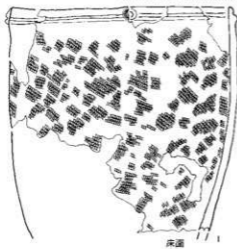
<堆積土> 堆積土の大半は、ローム粒を多量に含んだ褐色土と黄褐色土で占められており、人為堆積と思われる。

<出土遺物> 覆土から床面にかけて若干の遺物が出土した。土器は榎林式土器が出土した。石器は、床面から石槍1点、不定形石器6点、覆土から石槍1点、不定形石器6点が出土した。

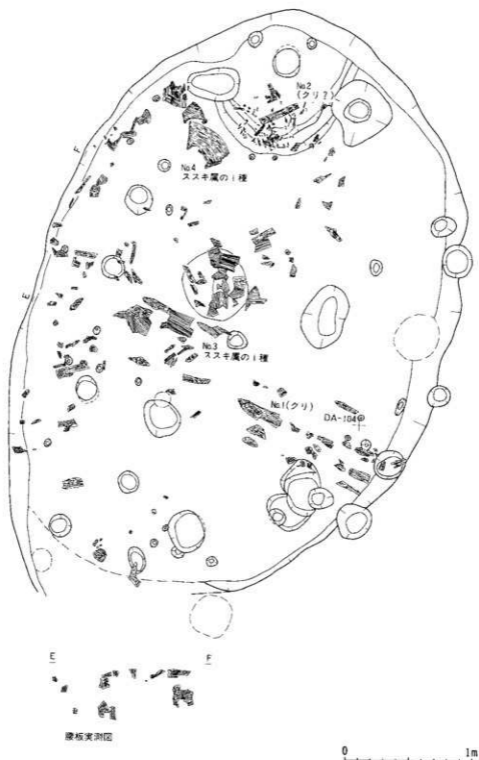
<小結> 床面直上及び床面から出土の土器から本住居跡の時期は榎林式期と考えられる。本住居跡は焼失家屋であり、多くの炭化材が出土した。とくに西側が保存がよく、腰板と考えられる部分の一部や、それを支えていたと思われる、“しがらみ”が検出された。また、敷物と思



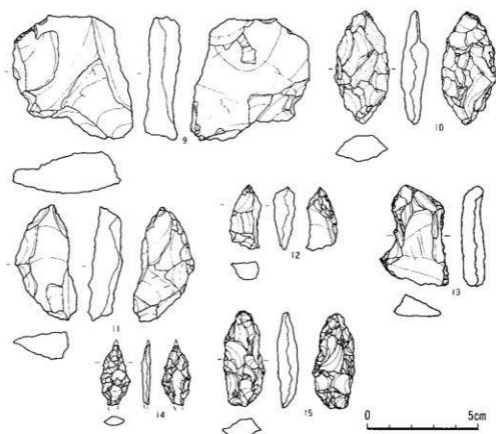
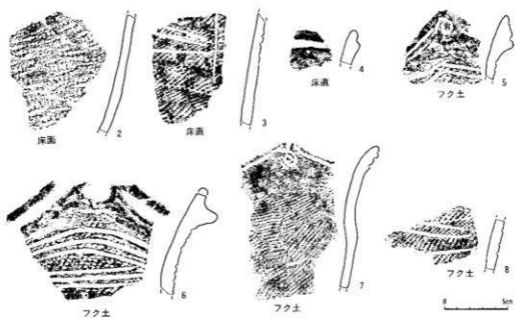
(増補土の東面図は第9号住居跡に載せている)



第231図 第85号住居跡(1)



第232図 第85号住居跡(2)



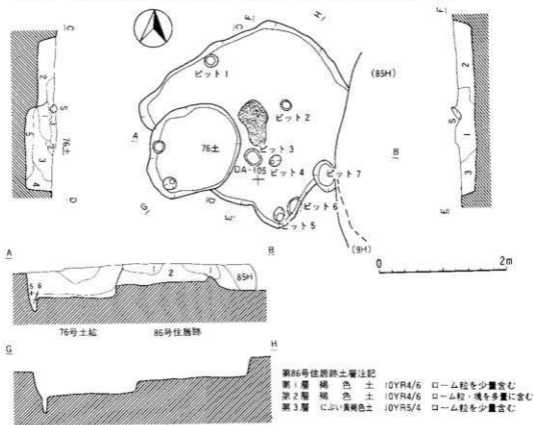
第233図 第85号住居跡(3)

われるカヤのようなものも検出された。樹種同定の結果、資料No.1・2はクリ、No.3・4はススキ属の1種とのことであった。
(畠山 昇)

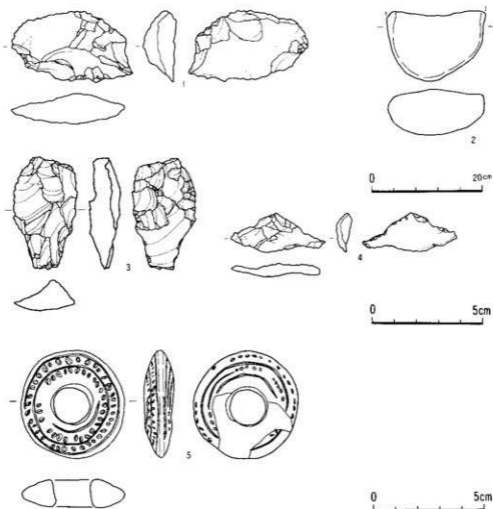
第86号住居跡 (第234・235図)

<位置と確認> CZ・DA-104・105グリッドで、第85号住居跡の調査中に確認した。

<重複> 第85号住居跡、第76号土壇と重複しており、本住居跡のほうが古い。



第234図 第86号住居跡(1)



第235図 第86号住居跡2)

〈平面形・規模〉 東壁の一部を第85号住居跡に壊されて不明であるが、短軸、長軸とも2m70cmの隅丸方形と思われる。南壁の一部が若干張り出している。推定床面積は6.6㎡である。

〈壁・床面〉 壁高は北壁27cm、南壁22～27cmで急な立ち上がり呈する。床面は、ほぼ平坦である。

〈壁溝〉 検出されなかった。

〈柱穴〉 7個のピットを検出したが、浅く、柱穴らしくない。ピットの深さは、P₁…8cm、P₂…11cm、P₃…8cm、P₄…13cm、P₅…23cm、P₆…17cm、P₇…7cmである。

〈炉〉 ほぼ中央に位置している。地床炉である。

〈特殊施設〉 南壁が半円状に張り出しており、内側には15×22cm、深さ23cmの楕円形のピット

トを検出した。ロームの盛土が馬蹄形状に巡らされていないが、それに類する施設と思われる。

<堆積土> ローム粒を多量に含む褐色土の堆積が見られた。

<出土遺物> 土器は、覆土から床面からにかけて少量出土した。石器は、覆土から不定形石器3点、石皿1点が出土した。また、床面から有孔土製品(第235図5)が出土した。

<小結> 床面直上及び床面から出土の土器から本住居跡の時期は円筒上層d・e時期と思われる。(島山 昇)

第87号住居跡(第236～239図)

<位置と確認> 調査区ほぼ中央のDC-96グリッドに位置している。第III層下面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められない。

<平面形・規模> 南北に長い卵形で、規模は長軸5m35cm、短軸4m10cmである。床面積は15.31㎡である。

<壁・床面> 確認面からの壁は低く、緩やかに立ち上がる。各壁とも堅緻である。壁高は東壁11cm、西壁6cm、南壁3cm、北壁35cmである。全般的に貼り床がなされ、堅緻である。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 住居跡内から15個のピットが確認された。規模、配置等からP₃～P₅の5個が支柱穴と思われる。

<炉> 中央から若干北側にずれて位置している。炉石がコの字状に配置されている石囲炉である。規模は長軸55cm、短軸50cm、深さ4cmである。第1層下面が火床面で堅くしまっている。

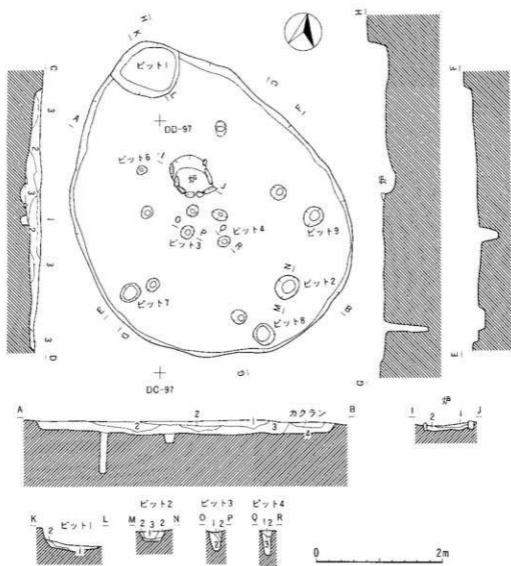
<特殊施設> 北側の壁際に不整な楕円形の特殊施設が認められた。規模は長軸1m15cm、短軸93cm、床面からの深さ13cmである。この特殊施設から遺物は出土しなかった。

<堆積土> ローム粒を比較的多く含む黒・暗褐色土の層で4層に分層した。中央部に焼土、炭化粒を含む。人為的堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 覆土より円筒上層d式土器～最花式土器が出土している。石器は覆土から石鏃12点、石錐3点、石筥1点、不定形石器13点、敲磨器類4点、台石1点、総数34点、また覆土から石製品1点、軽石類1点出土している。

<小結> 床面から本住居跡の構築時期を判断する良好な土器は出土していないので、構築時期は不明である。覆土から最花式土器が多いことなどから最花式期の可能性が高い。

(三浦 孝仁)



第87号住居跡土層注記

- | | |
|-------------------|---------------|
| 第1層 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒少量, 焼土粒微量 |
| 第2層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒中量, 炭化粒多量 |
| 第3層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒中量 |
| 第4層 黒褐色 (10YR2/3) | |

第87号住居跡 炉土層注記

- | | |
|-------------------|--------|
| 第1層 黒褐色 (10YR2/2) | ローム粒少量 |
| 第2層 明赤褐色 (5YR5/8) | |

第87号 ビット1 土層注記

- | | |
|-------------------|----------------|
| 第1層 黒褐色 (10YR2/3) | 炭化物少量, LB少量 |
| 第2層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒流入, 黒褐色土少量 |

第87号住居跡 ビット2 土層注記

- | | |
|-------------------|--------|
| 第1層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒微量 |
| 第2層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒少量 |
| 第3層 黄褐色 (10YR5/8) | |

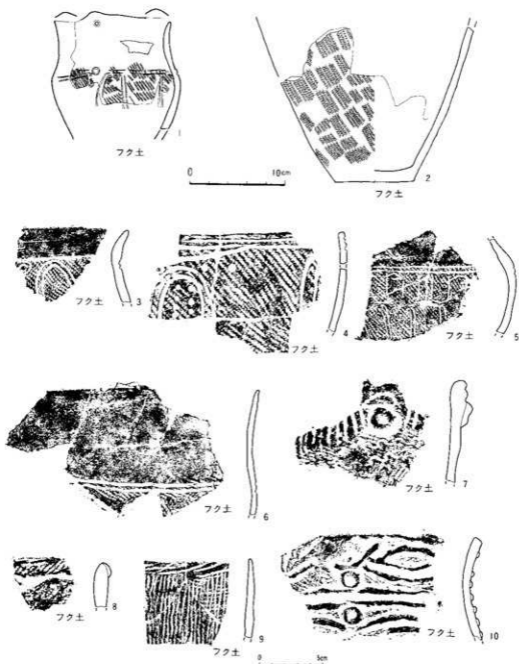
第87号住居跡 ビット3 土層注記

- | | |
|-------------------|--------|
| 第1層 黄褐色 (10YR5/8) | 暗褐色土少量 |
| 第2層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒微量 |

第87号住居跡 ビット4 土層注記

- | | |
|-------------------|--------|
| 第1層 暗褐色 (10YR3/3) | ローム粒中量 |
| 第2層 黄褐色 (10YR5/8) | |
| 第3層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒少量 |

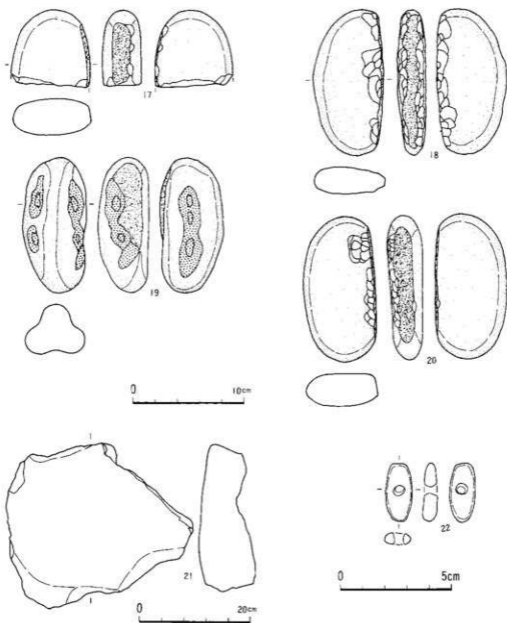
第236図 第87号住居跡(1)



第237図 第87号住居跡(2)



第238图 第87号住居跡(3)

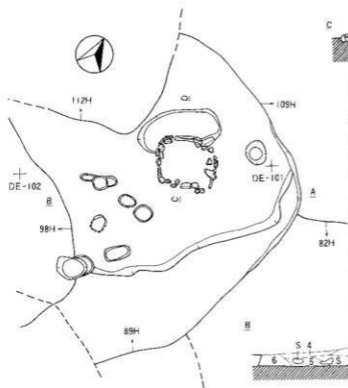


第239図 第87号住居跡(4)

第89号住居跡 (第240～245図)

<位置と確認> 調査区DD・DE-100・101グリッドに位置している。第82号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

<重複> 第82・98・109・112号住居跡と重複し、新旧関係は第98・112号住居跡より古く、第

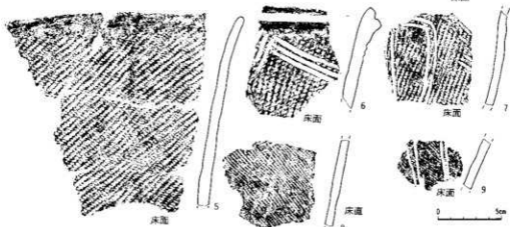
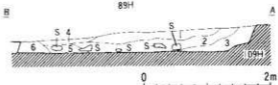


第89号住居跡 炉土層注記

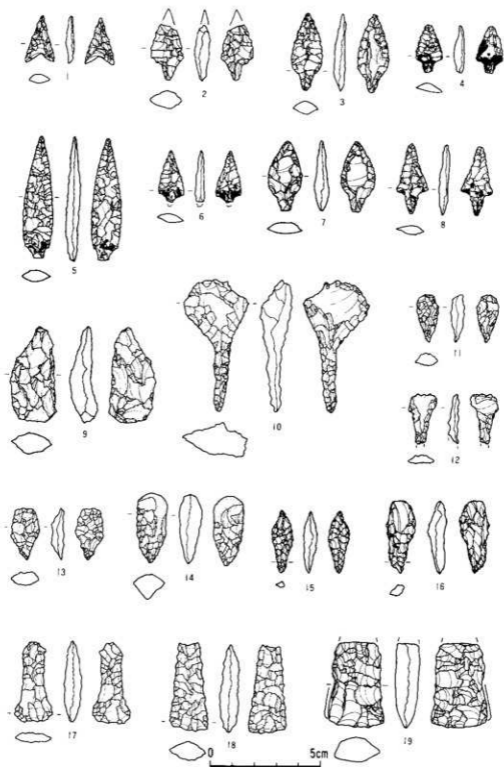
- 第1層 暗褐色 7.5YR3/3
ローム粒・炭化物を少量含む
- 第2層 暗褐色 7.5YR3/4
ローム粒少量、炭化物を多量に含む
- 第3層 暗赤褐色 2.5YR3/4 焼土粒を多量に含む
- 第4層 赤褐色 2.5YR4/6 焼土層
- 第5層 明赤褐色 2.5YR5/6 焼土粒を少量含む
- 第6層 明褐色 7.5YR5/6 炭化物を若干含む

第89号住居跡土層注記

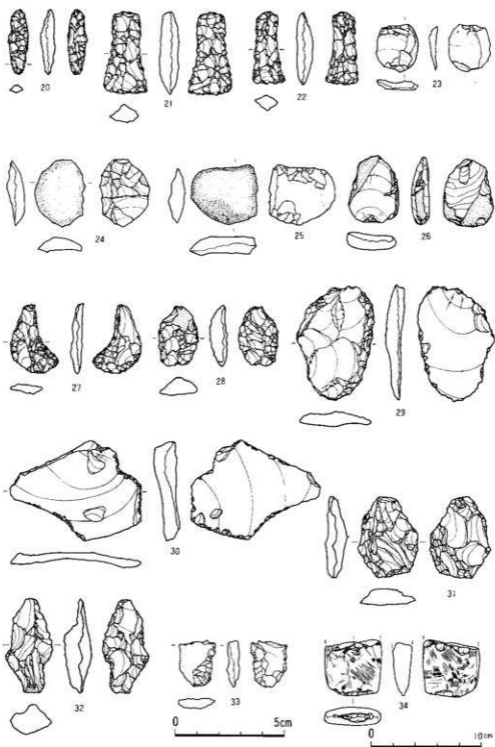
- 第1層 黒褐色 10YR2/3
炭化物多量、ロームブロック少量含む
- 第2層 暗褐色 10YR3/3
炭化物多量、焼土ブロック少量含む
- 第3層 暗褐色 10YR3/3
炭化物少量、ロームブロック混入
- 第4層 暗褐色 10YR3/3 炭化物多量、焼土粒少量含む
- 第5層 暗褐色 10YR3/4 炭化物若干、ローム粒少量含む
- 第6層 黒褐色 10YR3/3 炭化物、ローム粒少量含む



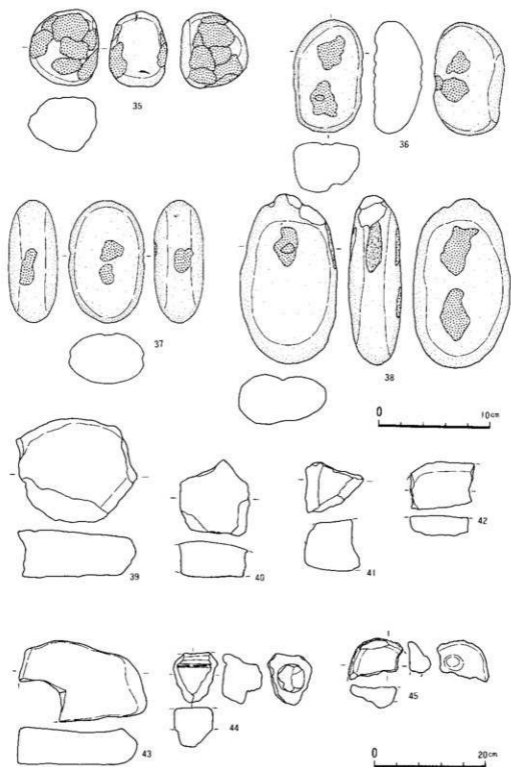
第240図 第89号住居跡(1)



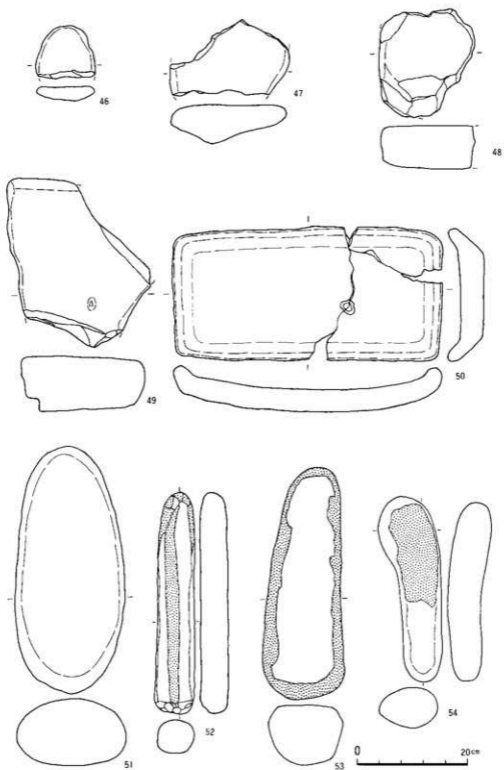
第241图 第89号住居跡(2)



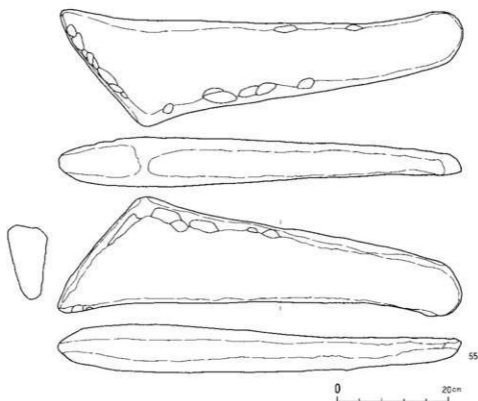
第242图 第89号住居跡(3)



第243图 第89号住居跡(4)



第244图 第89号住居跡(5)



第245図 第89号住居跡(6)

82・109号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 南側の残存部から推定すると、ほぼ楕円形を呈すると思われる。規模は、長軸（4 m15cm）・短軸（3 m50cm）を測る。

<壁・床面> 北壁のみの検出で上端から床面にかけて傾斜している。床面は炉の周辺が固くしまっており、住居跡の南側部分で高さ5cmの一段高いテラスを確認した。

<柱穴> ビットは11個検出した。P₁₁は、付属施設の項目で記載する。ビットは配置等から柱穴であり、P₁・P₂が支柱穴と思われる。

<炉> 住居跡の北寄りに位置し、礫を用いた方形の石囲炉である。規模は、長径94cm・短径85cm・深さ13cmを測る。

<特殊施設> 炉の北側に長径126cm・短径54cmの楕円形のビットを確認した。堆積土の観察から炉に伴う施設と考えられる。

<堆積土> 6層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

<出土遺物> 遺物は炉の周辺から多く出土した。石器は、覆土から石鎌19点・石槍1点・石

錐9点・石筥4点・ピエス・エスキュー5点・不定形石器38点・磨製石斧3点・敲磨器類3点・台石・石皿類8点・石棒類3点・軽石製品1点、床直から石鏃2点・石錐1点・不定形石器1点、床面から石鏃1点・石筥1点・不定形石器1点・台石・石皿類7点・石棒類2点が出土した。炉石には、敲磨器類1点・台石・石皿類を使用している。総数110点出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床面の土器から最花式期と思われる。 (成田 滋彦)

第90号住居跡 (第246・247図)

〈位置と確認〉 本調査区ほぼ中央のD C-98, 99グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みを確認し、第81号住居跡を精査中に本住居跡の床面を検出した。

〈重複〉 第174号土壌より新しい。第81, 104, 105号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 重複等によって平面形、規模ともに不明である。

〈壁・床面〉 東壁を一部確認したのみある。壁高は10cmである。一部貼り床がなされ、堅緻な部分もあるが、壁際は軟弱である。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 本住居跡の床面から4個のピットが確認された。支柱穴は明確でない。各ピットの深さはP₁…34cm, P₂…67cm, P₃…57cm, P₄…70cmである。

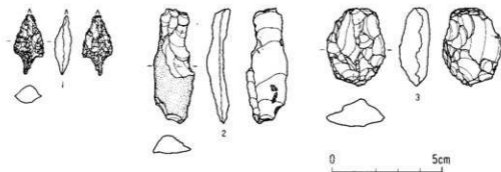
〈炉〉 残存部には認められなかった。

〈特殊施設〉 残存部には認められなかった。

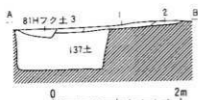
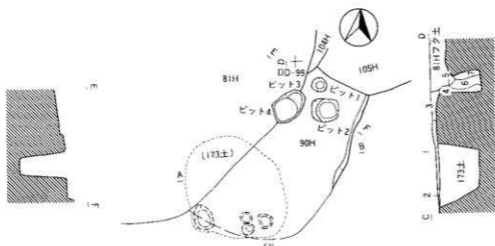
〈堆積土〉 確認できた堆積土が少ないものの3層に細分した。住居の中央に炭化材を含む。

〈出土遺物〉 土器は覆土から円筒上層c式土器、円筒上層d式土器、最花式土器が出土している。石器は覆土から石鏃1点、石錐1点、不定形石器3点、総数5点である。

〈小結〉 床面から良好な土器が出土していないため明確な構築時期は不明である。第105号住居跡より新しいことより、円筒上層c・d式期の可能性が高い。 (三浦 孝仁)



第246図 第90号住居跡(1)



第90号住居跡土層注記

- | | |
|--------------------|------------------|
| 第1層 黒褐色 (10YR2/3) | ローム粒微量 |
| 第2層 黒褐色 (10YR2/3) | ローム粒中量。φ10mm以下ばら |
| 第3層 黒褐色 (10YR2/2) | φ5-10mm炭化材少量 |
| 第4層 暗褐色 (10YR3/4) | ローム粒多量。炭化材微量 |
| 第5層 黒褐色 (10YR3/2) | ローム粒微量 |
| 第6層 褐色 (10YR4/4) | ローム粒中量 |
| 第7層 明黄褐色 (10YR6/8) | ローム質土 |



第247図 第90号住居跡(2)

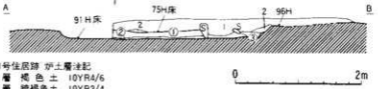
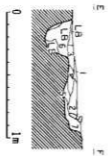
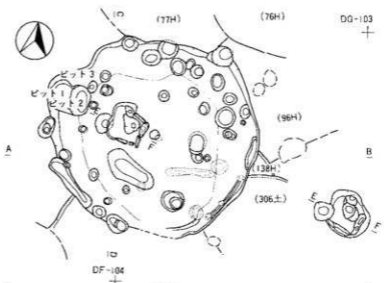
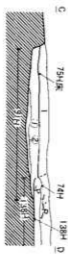
第91号住居跡 (第248・249図)

<位置と確認> DF-103・104グリッドに位置している。第75号住居跡の調査中に確認した。

<重複> 第74・75・77・138・161号住居跡より古く、第139号住居跡、第306号土壌より新しい。

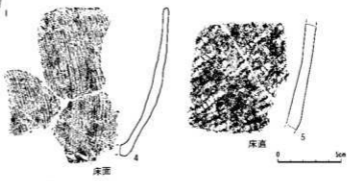
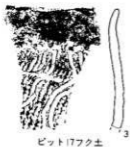
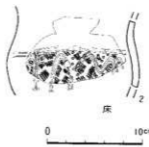
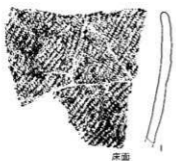
<平面形・規模> 短軸3m10cm、長軸3m30cm前後のほぼ円形を呈し、北西がやや張り出している。床面積は7.55㎡である。

<壁・床面> 壁は急に立ち上がり、15~20cm前後の壁高である。床面は平坦で、堅く踏み締

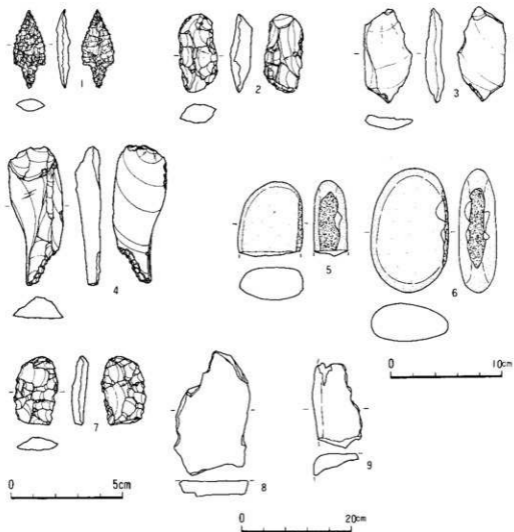


- 第91号住居跡 伊土層注記
- 第1層 褐色土 10YR4/6
 - 第2層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第3層 褐色土 10YR4/4
 - 第4層 暗褐色土 10YR3/4
 - 第5層 褐色土 10YR4/6
 - 第6層 褐色土 10YR4/4
 - 第7層 褐色土 10YR4/6

- 第91号住居跡土層注記
- 第①層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒・塊を含む
 - 第②層 褐色土 10YR4/4 ローム粒を若干含む
 - 第③層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒を若干含む



第248図 第91号住居跡(1)



第249図 第91号住居跡(2)

まっている。

<壁溝> 東南壁下で一部確認した。3～8cmの深さである。また南西壁を切るように、4～5cmの深さの溝を検出したが、本住居に伴うものか不明である。上部で検出した第75号住居跡に伴うものかもしれない。

<柱穴> 床面及び壁を切るように32個、また床下から8個のピットを検出した。ピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…14cm, P₂…18cm, P₃…34cm, P₄…33cm, P₅…9cm, P₆…31cm, P₇…9cm, P₈…53cm,
P₉…19cm, P₁₀…20cm, P₁₁…11cm, P₁₂…36cm, P₁₃…50cm, P₁₄…11cm, P₁₅…13cm, P₁₆…15

cm、P₁₇…7cm、P₁₈…11cm、P₁₉…14cm、P₂₀…15cm、P₂₁…34cm、P₂₂…8cm、P₂₃…7cm、P₂₄…27cm、P₂₅…14cm、P₂₆…11cm、P₂₇…8cm、P₂₈…13cm、P₂₉…12cm、P₃₀…48cm、P₃₁…32cm、P₃₂…37cm、P₃₃…28cm、P₃₅…4cm、P₃₆…57cm、P₃₇…21cm、P₃₈…42cm、P₃₉…23cm、P₄₀…46cm。

<炉> 中央から若干西に寄っている。西側が開いたコの字形の石囲い炉である。覆土から、獣骨片が検出されている。また、炉の下部及び西側ではこれより古いピットを検出した。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 第75号住居跡が上部を切っているため、堆積状況全体は不明である。確認したかぎりでは、ローム粒を多く含んだ暗褐色～褐色土の堆積が見られた。

<出土遺物> 土器の出土は少ないが、床面から最花式土器が出土している。石器は、床面から石鏃1点、不定形石器9点、敲磨器類1点、床面直上石鏃1点、不定形石器2点、敲磨器類1点、覆土から不定形石器1点が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は床面から出土した土器から最花式期と考えられる。(高山 昇)

第92号住居跡 (第250図)

<位置と確認> DE・DF-104グリッドに位置している。

<重複> 第74・97・108号住居跡と重複している。第74・97号住居跡とは新旧関係を把握することができなかった。セクションの観察からは、第138号住居跡に切られているように見られた。

<平面形・規模> 東西壁は不明であるが、確認できた範囲から推定して、径130cm前後の不整楕円形と思われる。推定床面積は約4.3㎡である。

<壁・床面> 壁高は約10cmで掘り込みの浅い住居である。床面は地山を掘り込んでおり、平坦で、堅緻である。

<壁溝> 検出できなかった。

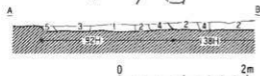
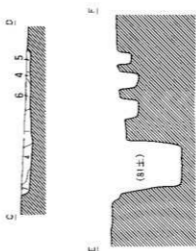
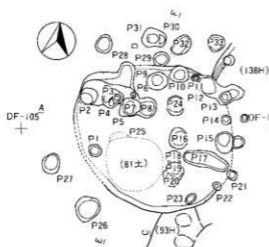
<柱穴> 壁内から10個、壁と重複して5個のピットを検出した。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…8cm、P₂…57cm、P₃…35cm、P₄…42cm、P₅…49cm、P₆…33cm、P₇…44cm、P₈…22cm、P₉…32cm、P₁₀…26cm、P₁₁…34cm、P₁₂…27cm、P₁₃…41cm、P₁₄…12cm、P₁₅…17cm、P₁₆…22cm、P₁₇…12cm、P₁₈…8cm、P₁₉…35cm、P₂₀…21cm、P₂₁…26cm、P₂₂…11cm、P₂₃…19cm、P₂₄…13cm、P₂₅…11cm。

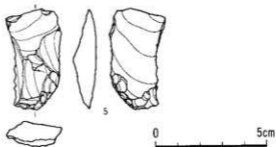
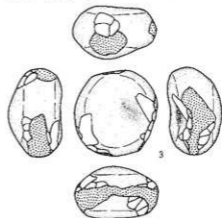
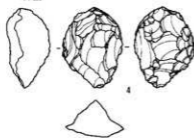
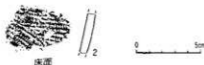
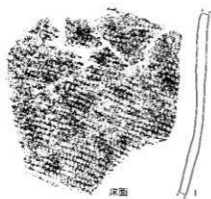
<炉> 検出されなかった。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 厚さ10cm前後の堆積土の中に、ローム粒・炭化物粒を含んだ黒～暗褐色土と、褐



- 第92号住居跡土層法記
- | | | | |
|-----|---------|---------|-------------|
| 第1層 | 暗褐色土 | 10YR3/4 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第2層 | 暗褐色土 | 10YR3/3 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第3層 | 黒褐色土 | 10YR3/2 | ローム粒を含む |
| 第4層 | 褐色土 | 10YR4/4 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第5層 | 褐色土 | 10YR4/4 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第6層 | にぶい黄褐色土 | 10YR4/3 | 焼土粒、炭化物を含む |
| 第7層 | 黄褐色土 | 10YR5/6 | 炭化物を含む |



第250図 第92号住居跡

色～黄褐色土との堆積がブロック状に観察された。

＜出土遺物＞ 遺物は若干出土した。土器は数片の出土に過ぎない。石器は、覆土から不定形石器3点、敲磨器類1点の総数4点が出土した。

＜小結＞ 本住居跡の構築時期は不明であるが、第138号住居跡より古いと考えられるので最花式期かそれより以前のものと思われる。 (島山 昇)

第94号住居跡 (第251・252図)

＜位置と確認＞ DD-103・104グリッドに位置している。第46号住居跡の調査中に発見したが、その後、隣接する第134号住居跡の貼り床下に本住居が位置していることを確認した。

＜重複＞ 第395・396号土壌より新しく、第46・134号住居跡より古い。

＜平面形・規模＞ 短軸2m90cm、長軸3m前後の円形を呈している。床面積は6.40㎡である。

＜壁・床面＞ 壁は急に立ち上がり、南壁は40cm前後の壁高であり、第134号住居跡よりは2～3cm低い。床面は平坦で、貼り床が施されている。

＜壁溝＞ 検出できなかった。

＜柱穴＞ 本住居跡調査中に2個、下位にある第396号土壌調査時に4個のピットを検出した。ピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…20cm、P₂…33cm、P₃…31cm、P₄…22cm、P₅…27cm、P₆…6cm、P₇…24cm、P₈…49cm、P₁₀…72cm。なお、P₇～P₁₀は下位にある第396号土壌の調査で検出したもので、本住居に伴うものとして計算してある。本住居跡の柱穴配置は、P₂(またはP₃)・P₅・P₆と134号住居跡P₆の4本柱かP₆を加えた5本柱、あるいは若干浅いが、P₆を加えた6本柱が考えられる。

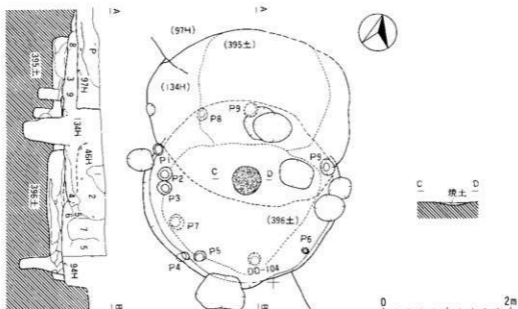
＜炉＞ 中央から若干北に寄っている。地床炉で、径44cmのほぼ円形を呈している。

＜特殊施設＞ 検出されなかった。

＜堆積土＞ 上部を第46・97号住居跡に切られている。第46号住居跡の切り合いのラインがぼんやりと見られる程度で、鮮明ではない。ローム粒・炭化物を含む褐色土を主体としている。

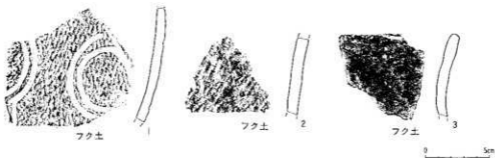
＜出土遺物＞ 覆土から若干の遺物が出土した。石器は、床面から石鏃1点、石槍1点、覆土から石槍1点、不定形石器4点が出土した。

＜小結＞ 本住居跡の時期は不明であるが、第134号住居跡より古いことから、榎林式期かそれ以前と思われる。 (島山 昇)

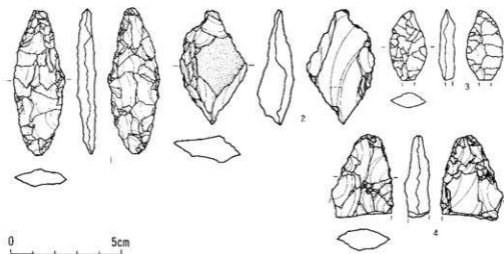


第94号、第134号住居跡土層注記

第1層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	ローム粒、炭化物を含む。	} 46Hと思われるラインが、ぼんやりと見えるが、不明瞭
第2層	褐色土	10YR4/4	ローム粒、炭化物を含む。	
第3層	暗褐色土	10YR2/3	ローム粒、炭化物を含む。	2層との境界、不明瞭
第4層	暗褐色土	10YR4/4	ローム粒、炭化物を含む	
第5層	暗褐色土	10YR3/4	ローム粒、炭化物を含む	
第6層	にぶい黄褐色土	10YR4/3		
第7層	暗褐色土	10YR3/3		
第8層	黄褐色土	10YR5/8	134Hの胎床	
第9層	赤褐色土	5YR4/8	焼土	



第251図 第94号住居跡(1)



第252図 第94号住居跡(2)

第95号住居跡 (第253・254図)

〈位置と確認〉 DD・DE-102・103グリッドで、炉と貼り床を確認し、第95号住居跡とした。

〈重複〉 第102号住居跡より古く、第46・165・166号住居跡より新しい。また、貼り床のみの検出であるため不確かではあるが、貼り床の分布から、第79号住居跡に切られている可能性が観察された。

〈平面形・規模〉 不明である。

〈壁・床面〉 壁は確認出来なかった。床面は貼り床の一部を確認できたにすぎない。

〈壁溝〉 検出できなかった。

〈柱穴〉 検出できなかった。

〈炉〉 40cm×50cm前後の楕円形を呈する地床炉である。

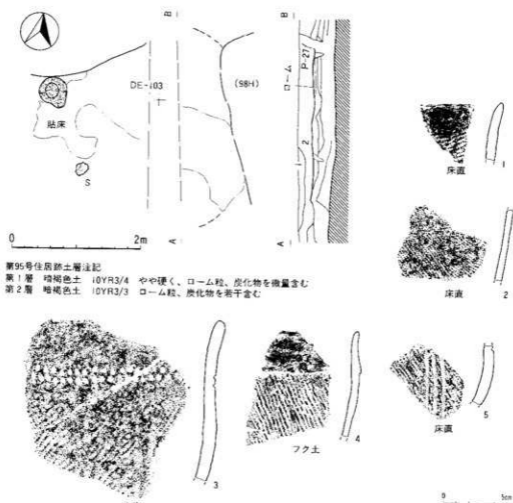
〈特殊施設〉 検出されなかった。

〈堆積土〉 ローム粒・炭化物粒を含んだ暗褐色土を主体とした堆積が見られた。

〈出土遺物〉 床面及び床面直上から若干の遺物が出土した。石器は、床面から石筈1点、不定形石器1点の総数2点、床面直上から石鏃3点、石錐1点、不定形石器5点、敲磨器類1点の総数10点、覆土から石鏃1点、不定形石器4点の総数5点が出土した。また、この他に覆土から琥珀(原石?)が出土した。

〈小結〉 床面直上からの出土土器から、本住居跡の構築時期は最花時期のあたりと思われる。

(晶山 昇)



第95号住居跡土層注記

第1層 暗褐色土 10YR3/4 やや硬く、ローム粒、炭化物を微量含む

第2層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒、炭化物を若干含む

第253図 第95号住居跡(1)

第96号住居跡 (第255図)

〈位置と確認〉 DF-103グリッドに位置している。第75・76・137号住居跡の調査中に確認した。

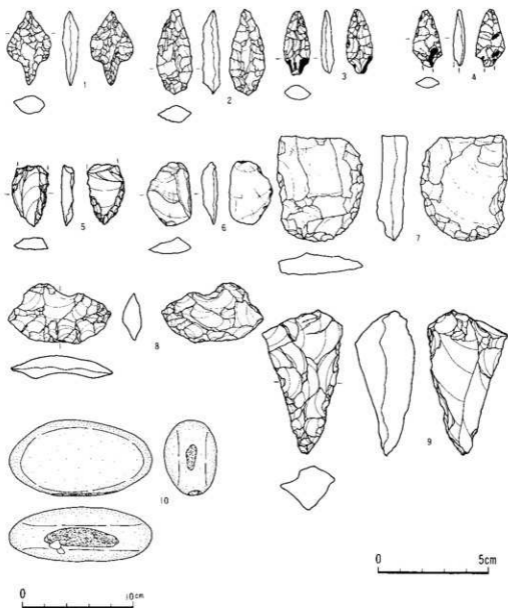
〈重複〉 第75～77・136～138・140号住居跡と重複しており、これらより古い。

〈平面形・規模〉 平面形・規模とも不明である。

〈壁・床面〉 壁は確認できなかった。床面は平坦で、堅緻である。しかし、第140号住居跡とほぼ同レベルで連続しているため、その境界は区分出来なかった。

〈壁溝〉 検出できなかった。

〈柱穴〉 周辺から、多数のピットを検出したが、どのピットが本住居跡に伴うものか不明である。ここでは周辺の住居跡の範囲外のピットを一応、本住居のものとして、報告する。この

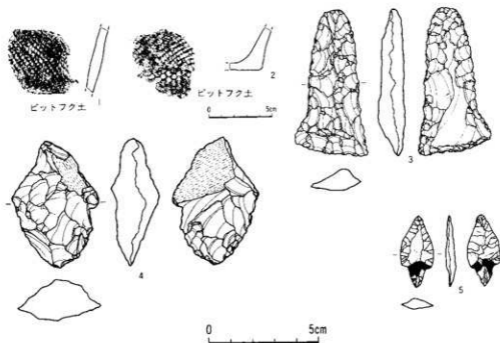


第254図 第95号住居跡(2)

部分からは13個のピットを検出したが、必ずしも本住居に伴うものとは言い切れない。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…17cm, P₂…31cm, P₃…13cm, P₄…8cm, P₅…16cm, P₆…22cm, P₇…23cm, P₈…44cm,
P₉…59cm, P₁₀…51cm, P₁₁…17cm, P₂₈…36cm, P₃₀…6cm。

<炉> 不明である。



第255図 第96号住居跡

〈特殊施設〉 不明である。

〈堆積土〉 不明である。

〈出土遺物〉 ごく少量の遺物が出土した。土器はビットから数点が出土した。石器は、床面から石楯1点、ビットから不定形石器1点、石筥1点の出土である。

〈小結〉 本住居跡の構築時期は不明であるが、周辺の住居跡より古いことが判明しているため円筒上層e式期か、それ以前と思われる。(畠山 昇)

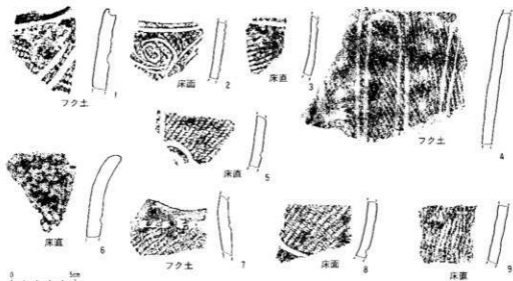
第97号住居跡 (第256・257図)

〈位置と確認〉 DE-103・104グリッドに位置しており、多数の遺構と重複して確認された。

〈重複〉 第74・79号住居跡よりは古いが、第46・92・134・138・139・165号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 平面形は楕円形を呈すると思われ、推定規模は短軸4m20cm前後、長軸5m前後と思われる。

〈壁・床面〉 壁は確認出来なかった。床面はほぼ平坦で、堅緻である。とくに、炉の周辺は非常に強く踏み縮まっている。



第256図 第97号住居跡(1)

〈壁溝〉 検出できなかった。

〈柱穴〉 本住居跡及び第97号住居跡を中心とする地域から、多数のピットを検出している。重複が激しいため、柱穴配置は不明である。これらのピットが、どの住居跡に伴うものか不明であったので、この地域から検出したピットは住居跡に関係なく通し番号を付けて調査し、ピットの深さについては、第79号住居跡で記載している。

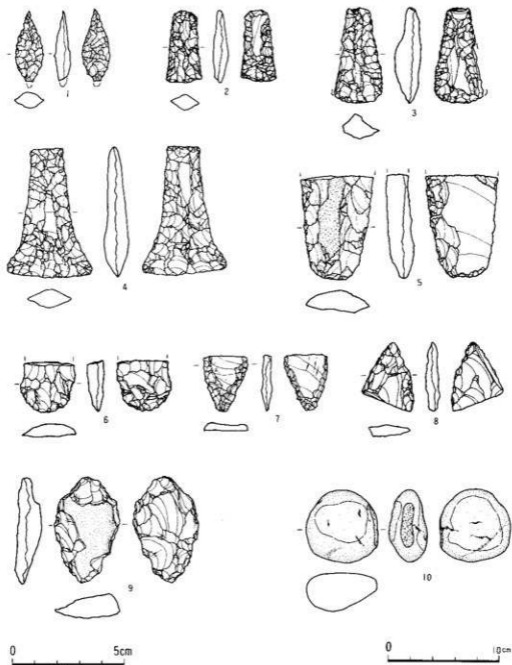
〈炉〉 住居跡の北壁寄りに位置するものと思われる。北側が開放された「コ」の字形の石囲炉で、短軸65cm、長軸75cmである。北側は若干低くなっており、その部分は約1mの不整形を呈している。またこの炉の南側に、古い炉を重複して検出した。炉の改築が行なわれたものであろう。掘り方のみの検出であるが、同タイプの炉であった可能性が考えられる。

〈特殊施設〉 不明である。

〈堆積土〉 全体にローム粒・炭化物粒を含んだ暗褐色土を主体としているが、土色・混入物等均質で、明瞭に区別できない。

〈出土遺物〉 覆土からは床面にかけて、遺物はあまり出土しなかった。土器は、床面から覆土にかけて、若干出土したにすぎない。石器は、床面から不定形石器2点、床面直上から石鏃1点、石槍1点、不定形石器7点、覆土から石鏃3点、石錐1点、石筈3点、不定形石器4点、敲磨器類1点、石皿1点、総数24点である。

〈小結〉 重複が激しく、本住居の全体像を把握することができなかった。本住居跡の構築時期を知る良好な土器が出土していないが、床面・床面直上からの出土土器から見ると榎林式～最花式期と思われるが、炉のあり方から最花式期の可能性が高い。(畠山 昇)



第257图 第97号住居跡(2)

第98号住居跡（第258～260図）

<位置と確認> DD・DE-102グリッドで、第102号住居跡の下位に本住居を確認した。

<重複> 第102号住居跡より古く、第46・89・95・165・166号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 床面のみの確認であるが、北側が若干狭くなった不整形を呈している。床面での大きさは長軸3m66cm、短軸3m38cmで、床面積は10.74㎡である。

<壁・床面> 壁は確認できなかった。地山を床面としており、平坦で、堅緻である。

<壁溝> 検出できなかった。

<柱穴> 大小24個のピットを検出した（貼り床下からの検出分を含む）。柱穴配置はP₂・P₃とP₇～P₁₀のいずれかと考えられ、これと対応する南東隅には検出できなかった。ピットの深さは以下のとおりである。

P₁…17cm、P₂…37cm、P₃…26cm、P₄…14cm、P₅…14cm、P₆…21cm、P₇…42cm、P₈…36cm、P₉…36cm、P₁₀…39cm、P₁₁…58cm、P₁₂…43cm、P₁₄…14cm、P₁₅…8cm、P₁₆…31cm、P₁₇…13cm、P₁₈…46cm、P₁₉…16cm、P₂₀…32cm、P₂₁…50cm、P₂₂…19cm、P₂₃…65cm。

<炉> 中央から若干東によった位置に、円形もしくはやや方形気味の石囲炉を検出した。この炉から東には浅い窪みの施設が付属している。

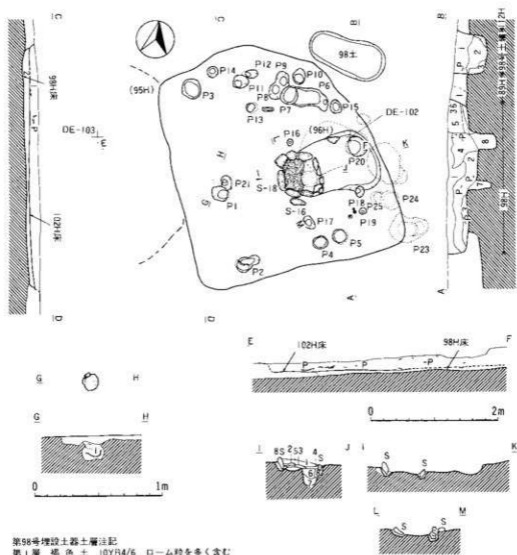
<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> ローム粒・炭化物粒を含んだ暗褐色土を主体とした堆積が見られた。

<出土遺物> 床面及び床面直上から若干の遺物が出土した。また床下から埋設された小型の深鉢形土器が出土した。石器は、床面から石鏃4点、石筥1点、不定形石器3点、敲磨器類2点、石皿1点の総数11点、床面直上から石皿1点、台石1点の総数2点、覆土から石鏃2点、ピエス・エスキュー2点、不定形石器5点の総数11点が出土した。

<小結> 本住居跡は南北に長い隅丸方形を基調とした形態であるが、北東側がやや狭くなっているおり、台形状を呈している。床面出土の土器及び埋設土器から、本住居跡の構築時期は最花式期に相当すると思われる。

（高山 昇）



第98号埋設土器土層注記

第1層 褐色土 10YR4/6 ローム粒を多く含む

第98号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒、炭化物を含む。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/4 ローム粒、炭化物を含む。
- 第4層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒、炭化物を含む。
- 第5層 黒褐色土 10YR2/3 ローム粒、炭化物を含む。
- 第6層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒、炭化物を含む。
- 第7層 褐色土 10YR4/4 ローム粒を多く含む。
- 第8層 黒褐色土 10YR3/2 ローム粒、炭化物を含む。

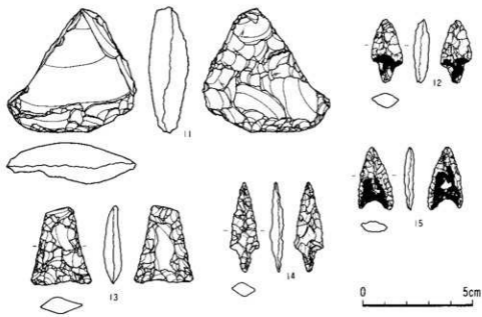
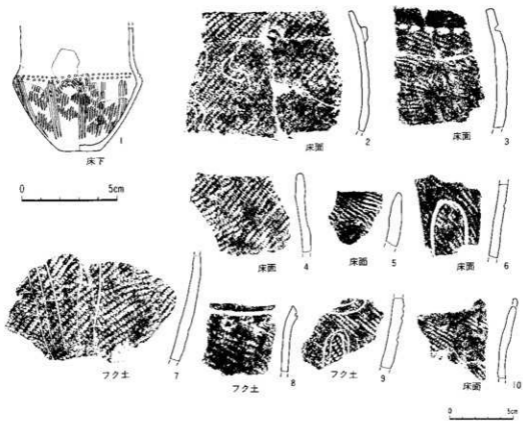
第98-102号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色土 10YR3/2 102H層土。ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3 98H層土。ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。

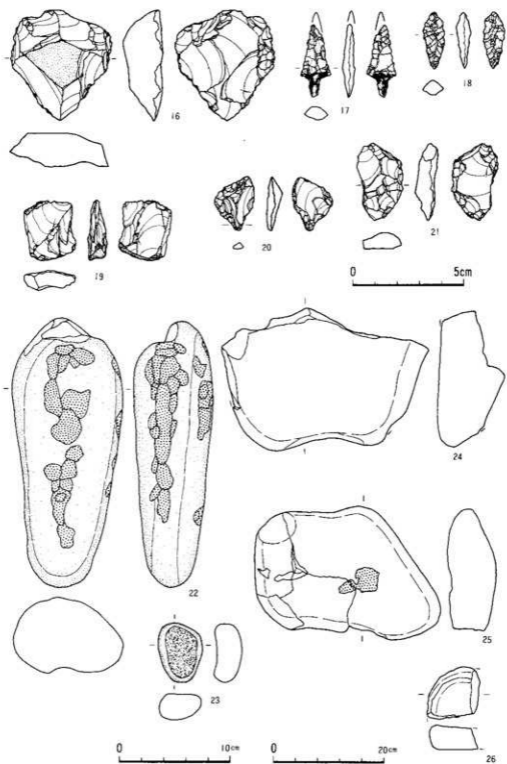
第98号住居跡 炉土層注記

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4
- 第2層 暗褐色土 10YR3/3
- 第3層 褐色土 10YR4/6
- 第4層 褐色土 10YR4/4
- 第5層 赤褐色土 5YR5/8 焼土
- 第6層 暗褐色土 10YR3/3
- 第7層 暗褐色土 10YR3/4
- 第8層 褐色土 10YR4/4

第258図 第98号住居跡(1)



第259図 第98号住居跡(2)



第260图 第98号住居跡(3)

第99号住居跡 (第261・262図)

〈位置と確認〉 DE-102グリッドで、石囲炉と貼り床の一部を確認、第99号住居跡とした。第121号B住居跡の上位に位置している。

〈重複〉 第121号・136号A・B住居跡、第301号土壌より新しい。また第79・98・102号住居跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。ただ、確認した貼り床の状況からは、これらの住居跡に切られているように検出されていることから、古い可能性が考えられる。

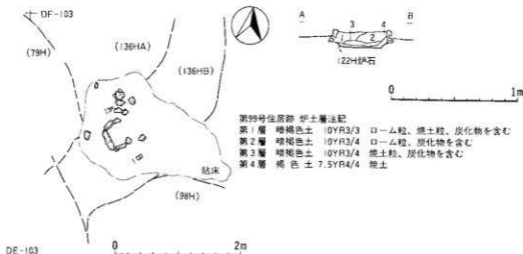
〈平面形・規模〉 平面形・規模は不明である。

〈壁・床面〉 壁は検出できなかった。炉の周辺に、貼り床の一部を確認したにすぎない。

〈壁溝〉 検出できなかった。

〈柱穴〉 検出できなかった。

〈炉〉 北東側が開いた「コ」の字形の石囲炉である。



〈特殊施設〉 検出されなかった。

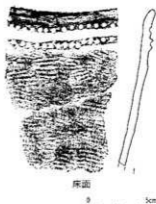
〈堆積土〉 不明である。

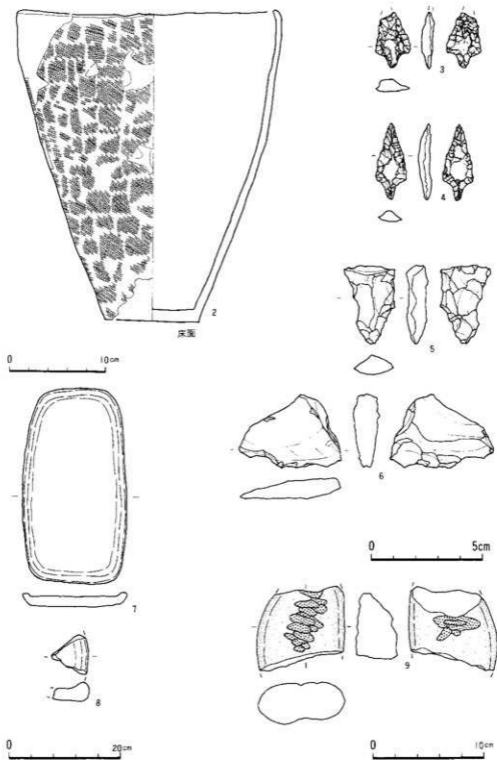
〈出土遺物〉 土器は床面から少量出土した。石器は、床面から石鏃2点、石皿1点、床面直上から不定形石器1点、覆土から不定形石器1点、敲磨器類1点、石皿1点が出土し、総数7点である。

〈小結〉 床面から出土した土器から、本住居跡の時期は、縄文時代中期後葉から末葉にかけてのものと考えられる。

(畠山 昇)

第261図 第99号住居跡(1)





第262图 第99号住居跡(2)

第100号住居跡（第263・264図）

<位置と確認> DA-94グリッドに位置し、黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 風倒木と重複し、本住居跡が古い。

<平面形・規模> 確認された規模は長軸3.8m、短軸2.1mで、平面形は不明である。

<壁・床面> 壁はゆるやかな立ち上がりで、北東壁10cm、南西壁22cmである。床面はかなり凸凹で、石囲炉の回りに貼り床が施されている。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 床面から大小合わせて21個のピットを検出した。各ピットの深さは

P₁…33cm、P₂…11cm、P₃…7cm、P₄…10cm、P₅…20cm、P₆…24cm、P₇…9cm、P₈…6cm、P₉…51cm、P₁₀…11cm、P₁₁…11cm、P₁₂…23cm、P₁₃…18cm、P₁₄…17cm、P₁₅…19cm、P₁₆…19cm、P₁₇…15cm、P₁₈…8cm、P₁₉…10cm、P₂₀…13cm、P₂₁…9cmである。

<炉> 住居跡のほぼ中央から北東寄りに位置し、「コ」の字状を呈する石囲炉である。一辺が50cm前後の方形状で、加熱痕は開口部の反対側にある。

<特殊施設> 確認できなかった。

<堆積土> 黒褐色土を主体とし、3層に分層した。

<出土遺物> 土器は床面から(1)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は、床面から石鏃1点、不定形石器5点、覆土から敲磨器類1点、石製品3点が出土した。（長崎 勝巳）

第101号住居跡（第265・266図）

<位置と確認> 調査区ほぼ中央のDD-98、DE-98グリッドに位置している。第三層でプランは明確でなかったが、黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第105号、107号住居跡と重複しており、本住居跡はいずれの住居跡よりも古い。

<平面形・規模> 重複により明確ではない。

<壁・床面> 地山まで床面が掘り込まれておらず、壁、床ともに明確でなかった。床面には所々貼り床がなされているが、全般的に堅緻ではない。

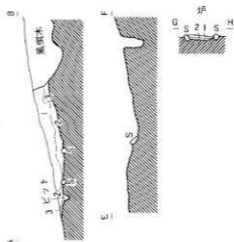
<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 2個のピットが検出された。深さはP₁…33cm、P₂…13cmであり、いずれも深くない。本住居跡の主柱穴か不明である。

<炉> 認められない。

<特殊施設> 認められない。

<堆積土> 確認面から薄い堆積土がみられたが、5層に分層した。炭化粒及び焼土粒が比較的多く含まれている。人為的堆積と思われる。



第100号住居跡 メイン土層注記

第1層 黒褐色土 10YR3/2 φ1mm程のローム粒少量

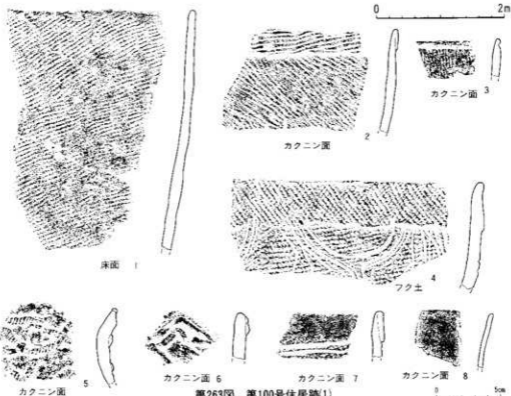
第2層 黒褐色土 10YR3/2 φ1mm程のローム粒微量

第3層 褐色土 10YR4/6

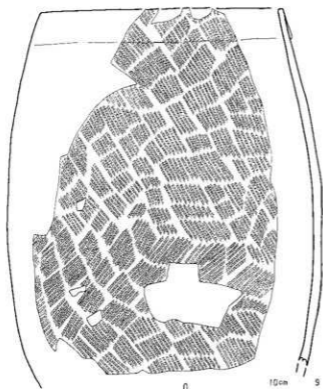
100H 伊土層注記

第1層 暗褐色土 10YR3/3 焼土粒微量

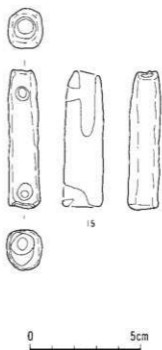
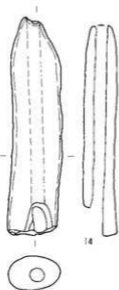
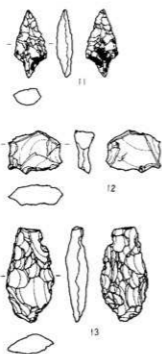
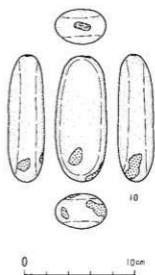
第2層 明赤褐色土 5YR5/8 焼土層



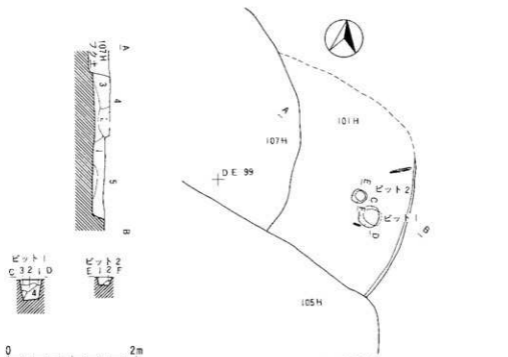
第263図 第100号住居跡(1)



カクニン面



第264図 第100号住居跡(2)



第101号住居跡土層注記

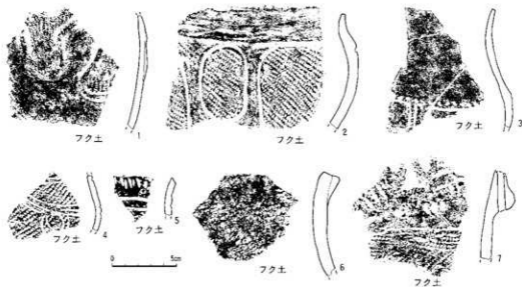
- 第1層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒微量、焼土粒微量
 第2層 褐色 (10YR 4/4) ローム粒少量、焼土粒中量
 第3層 橙黄色 (10YR 6/4) 炭化物少量、炭化物微量
 第4層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒少量、炭化物微量
 第5層 黒褐色 (10YR 2/4) ローム粒少量、炭化物微量

第101号住居跡ピット1土層注記

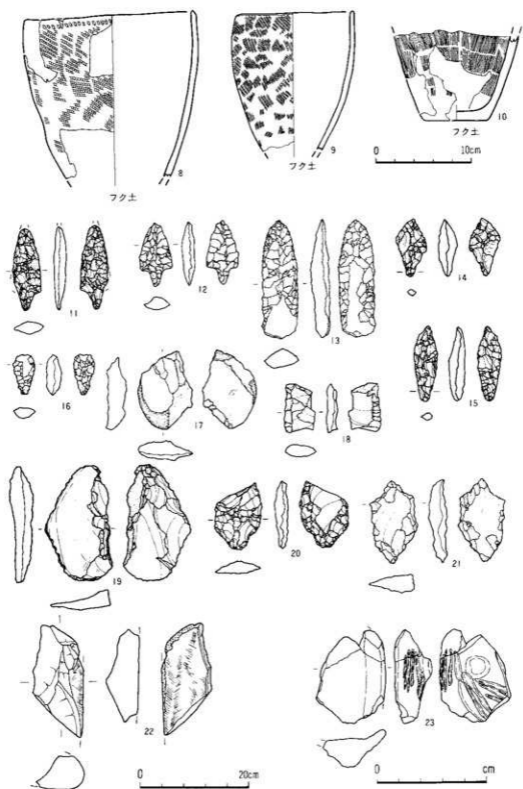
- 第1層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒中量、炭化材微量
 第2層 黒褐色 (10YR 2/4) ローム粒中量、炭化材微量
 第3層 濃い黄褐色 (10YR 5/4) ローム粒多量
 第4層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒中量

第101号住居跡ピット2土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR 2/4) ローム粒少量、炭化粒微量
 第2層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒適所々



第265図 第101号住居跡(1)



第266図 第101号住居跡(2)

<出土遺物> 覆土から円筒上層e式土器～弥栄平(1)式土器まで出土している。石器は覆土から石鏃3点、石槍1点、石錐3点、ピエス・エスキュー2点、不定形石器15点、石斧1点、石皿1点、総数26点、また覆土から軽石が1点出土している。

<小結> 床面から構築時期を判断する土器が出土しておらず明確ではないが、第105号住居跡より古いことから円筒上層c・d式期の可能性が高い。(三浦 孝仁)

第102号住居跡 (第267～273図)

<位置と確認> DD・DE-102グリッドで、貼り床を確認、第102号住居跡とした。第98号住居跡の上位に位置している。

<重複> 周辺及び下部から多数の住居跡が検出されているが、本住居跡は其中でも比較的新しい時期に構築されたものと思われる。第46・95・98・121・165号住居跡より新しい。また第99号住居跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。ただ、第99号住居跡の貼り床が、本住居跡に切られているような出かたをしていることから、新しい可能性も考えられる。

<平面形・規模> 平面形も規模も不明である。しかし、第99号住居跡の床面が本住居跡に切られているものとする、おおよそ短軸3m80cm、長軸4m20cm前後の規模と考えられる。

<壁・床面> 壁は検出できなかった。床面は貼り床が施され、部分的ながらも、やや広く確認することが出来た。

<壁溝> 検出できなかった。

<柱穴> 検出できなかった。

<炉> 検出できなかった。

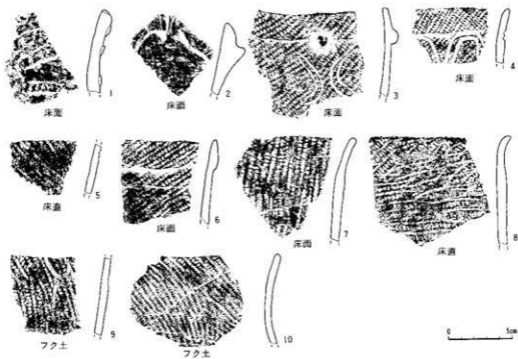
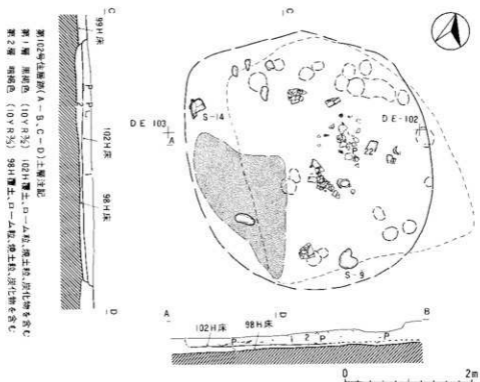
<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> ローム粒・炭化物・焼土粒を含んだ黒褐色土の堆積が見られた。

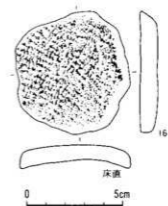
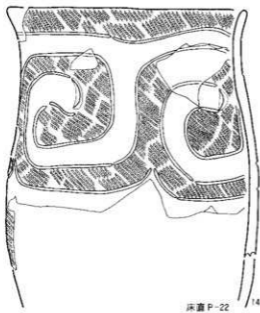
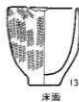
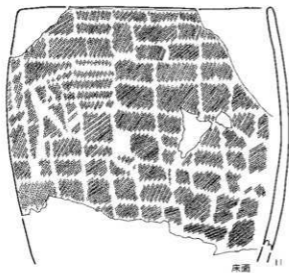
<出土遺物> 覆土から床面に掛けて多量の遺物が出土した。土器は円筒上層d式～弥栄平(1)式の土器が出土したが、床面からは最花式・弥栄平(1)式土器が多く出土した。

石器は床面から、石鏃7点、石槍1点、石錐1点、石匙1点、石篋2点、不定形石器15点、磨製石斧1点、敲磨器類1点、石皿3点、石棒類1点、床面直上から石鏃3点、石篋1点、不定形石器8点、磨製石斧1点、敲磨器類1点、覆土から石鏃10点、石錐2点、ピエス・エスキュー3点、不定形石器54点、磨製石斧4点、敲磨器類9点、石皿・台石類4点、石棒類1点が出土し、総数135点である。また床面直上から土器片利用製品1点、覆土から琥珀(原石?)2点が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は最花式期・弥栄平(1)式期のどちらかと考えられる。(島山 昇)

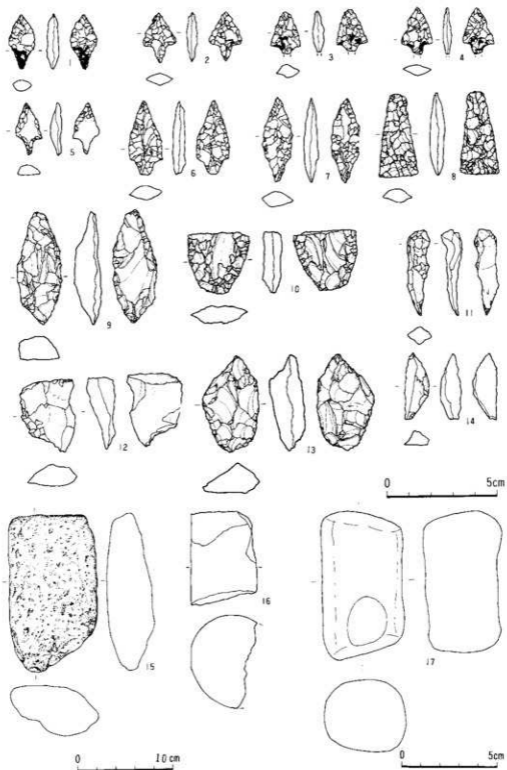


第267図 第102号住居跡(1)

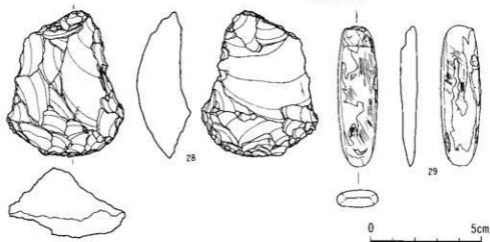
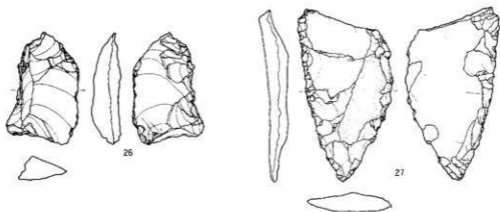
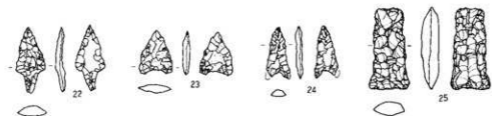
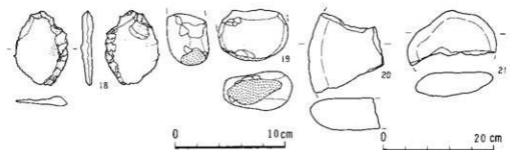


0 10 cm

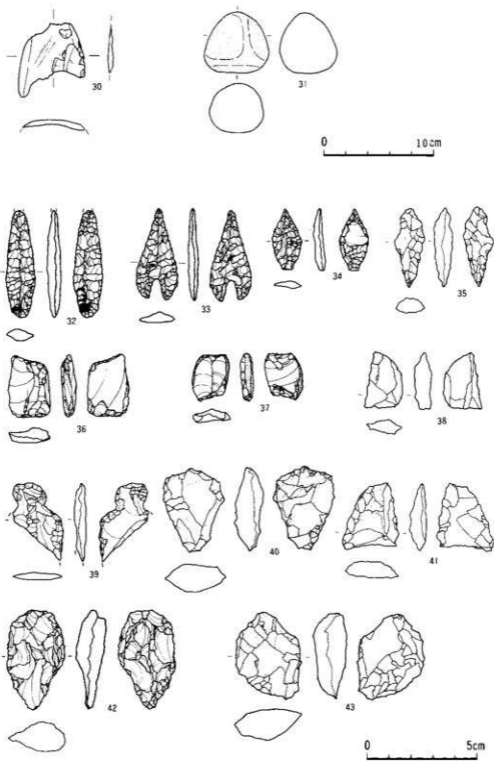
第268図 第102号住居跡(2)



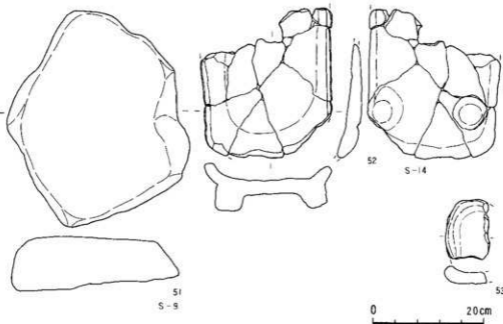
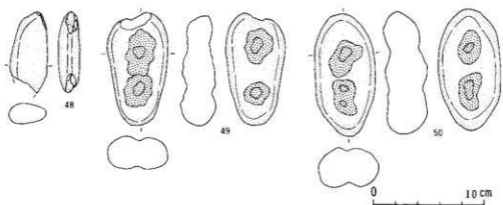
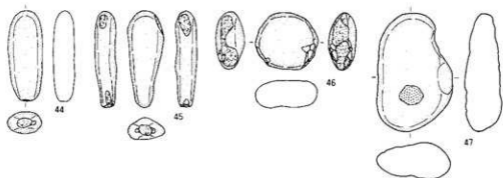
第269图 第102号住居跡(3)



第270图 第102号住居跡(4)



第271图 第102号住居跡(5)



第272图 第102号住居跡(6)

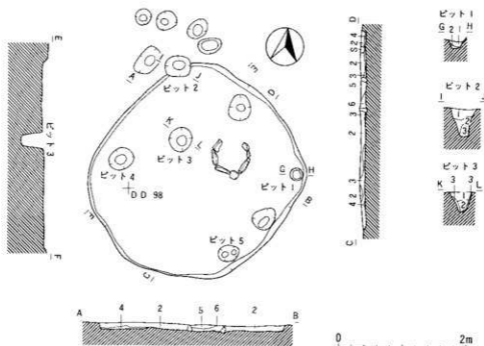


第273图 第102号住居跡(7)

第103号住居跡 (第274図)

<位置と確認> 調査区のDC-97, DD-97グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で黒褐色土の円形の落ち込みを確認した。

<重複> 第106号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。



第103号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR 3/5) ローム粒少量
- 第2層 黒褐色 (10YR 3/5) ローム粒少量
- 第3層 黒褐色 (10YR 3/5) ローム粒少量
- 第4層 黄褐色 (10YR 5/6) ローム質土
- 第5層 暗褐色 (10YR 3/4) 焼土粒少量
- 第6層 黄褐色 (10YR 5/6) 焼土粒少量

第103号住居跡ピット1土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR 3/5) ローム粒少量、炭化物、焼土粒少量
- 第2層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒少量、炭化物微量

第103号住居跡ピット2土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR 3/5) ローム粒少量、炭化物微量
- 第2層 暗褐色 (10YR 3/4) 炭化物少量、 ϕ 5mm L B少量
- 第3層 黒褐色 (10YR 2/5) ϕ 5mm L B少量

第103号住居跡ピット3土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR 2/5) ローム粒少量
- 第2層 暗褐色 (10YR 3/5) 炭化物微量
- 第3層 黄褐色 (10YR 5/6) 暗褐色土少量



第274図 第103号住居跡 (1)

<平面形・規模> 隅丸方形で、規模は長軸 3 m30cm、短軸 3 m10cmである。床面積は7.88㎡である。

<壁・床面> 壁は堅緻で明確である。壁高は東壁 8cm、西壁 9cm、南壁 5cm、北壁 7cmである。床面は、平坦で堅緻な造りである。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 住居跡内から 7 個のピットが確認されたが、配置から考えて P₁、P₂、P₄、P₅ の 4 個が支柱穴の可能性が高い。ピットの深さは P₁…20cm、P₂…46cm、P₄…10cm、P₅…35cmである。

<炉> 住居跡の中央から北寄りにずれて、石囲炉を 1 基確認した。炉石はコの字状に配置されている。規模は長軸 65cm、短軸 60cm、深さ 5cmである。

<特殊施設> 認められなかった。

<堆積土> 確認面から薄い堆積土が見られたが、4 層に分層した。人為的堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 覆土から円筒上層 e 式土器(1)が出土している。石器は出土していない。

<小結> 床面から本住居跡の構築時期を判断する土器が出土していないので明確でないが、覆土中の遺物から円筒上層 c～e 式期の可能性が高い。
(三浦 孝仁)

第104号住居跡 (第275図)

<位置と確認> 調査区のほぼ中央で DD-98グリッドに位置している。第81号住居跡の精査中に本住居跡の床面を確認した。

<重複> 第81号、105号住居跡と重複しており、本住居跡は第105号住居跡より新しく、第81号住居跡より古い。

<平面形・規模> 第81号住居跡によって大部分が削平されているため明確ではないが、残存部から推察すると円形を呈し、径 3 m50cm程になると思われる。床面積は推定で9.52㎡である。

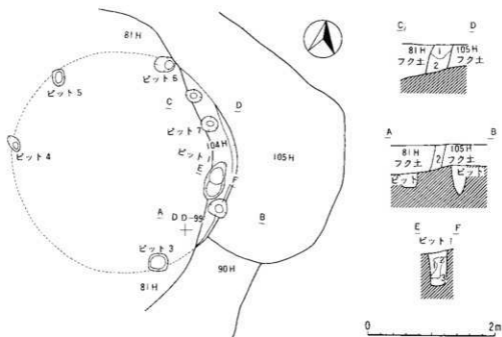
<壁・床面> 壁はほとんど確認できなかった。残存している床面は貼り床がなされ堅緻な造りとなっている。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 本住居跡の床面から 5 個のピットを確認したが、第81号住居跡の床面で確認したピットも考慮すると P₂～P₇ が支柱穴の可能性が考えられる。ピットの深さは P₂…42cm、P₃…(54cm)、P₄…(14cm)、P₅…(16cm)、P₆…(42cm)、P₇…56cmである。

<炉> 残存部には認められなかった。

<特殊施設> 残存部には認められなかった。

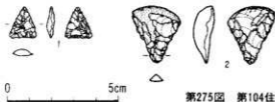


第104号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 (10YR 3/4) ローム粒少量、 ϕ 5mm炭化材まばら
 第2層 暗褐色土 (10YR 3/4) ローム粒少量、炭化粒微量、焼土粒中量

第104号住居跡ピット1土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒少量
 第2層 暗褐色 (10YR 3/5) ローム粒多量
 第3層 暗褐色 (10YR 3/4) ローム粒少量



第275図 第104住居跡

<堆積土> ほとんど確認できないが、確認できた層は暗褐色土層である。

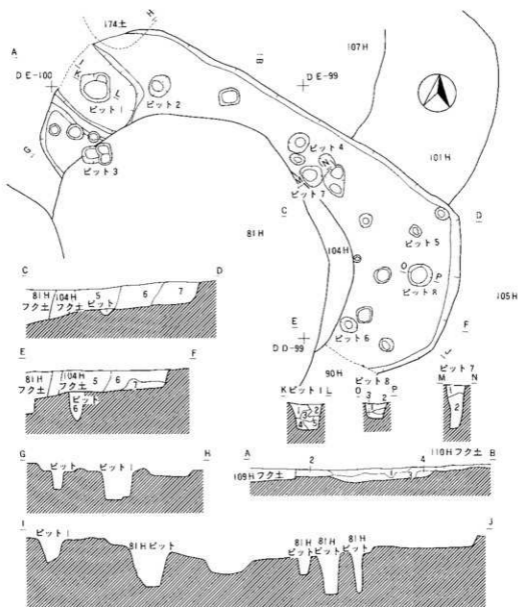
<出土遺物> 土器は確認できなかった。石器は、覆土から石鉄1点、石錐1点出土している。

<小結> 土器が出土していないので、構築時期は明確でないが、重複関係から円筒上層d式期以降と思われる。

(三浦 孝仁)

第105号住居跡 (第276・277図)

<位置と確認> 本調査区のほぼ中央でDD-98、DD-99グリッドに位置している。第81号住居跡の精査中に本住居跡の床面を確認した。



第105号住居跡土層注記

- 第1層 黄褐色 (10YR 5) ローム粒微量, φ 5~10mm 炭化材まばら
- 第2層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量, φ 5~10mm L B 両々
- 第3層 黄褐色 (10YR 5) ローム粒少量, φ 10~20mm L B 両々
- 第4層 黄褐色 (10YR 5) ローム粒少量, 炭色土まばら
- 第5層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量, 炭化材微量
- 第6層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量, 炭化材少量
- 第7層 黄褐色 (10YR 5) ローム粒少量, φ 10~15mm L B 少量

第105号住居跡ピット1土層注記

- 第1層 黄褐色 (10YR 5) ローム粒少量, φ 5~10mm L B まばら
- 第2層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量, φ 5=L B 少量
- 第3層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量
- 第4層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量
- 第5層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量, φ 10mm L B まばら



第105号住居跡ピット8土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR 3) φ 5~10mm 炭化材混々
- 第2層 暗褐色 (10YR 3) 焼土粒微量
- 第3層 黄褐色 (10YR 5) φ 5~10mm L B 両々

第105号住居跡ピット7土層注記

- 第1層 黄褐色 (10YR 5) ローム粒少量
- 第2層 暗褐色 (10YR 3) ローム粒少量

第276図 第105号住居跡(1)

<重複> 第81号、90号、101号、104号、106号、110号住居跡及び第174号土壇と重複しており、本住居跡は第90号、101号、107号住居跡、第174号土壇より新しく、第81号、104号、106号住居跡より古い。第110号住居跡との新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 残存部から推察すると東西に長い長方形で、規模は長軸7m20cm、短軸(3m00cm)である。

<壁・床面> 各壁はともにほぼ垂直に立ち上がる。各壁とも堅緻な造りである。壁高は東壁17cm、西壁14cm、北壁16cmである。床面全体に貼り床がなされ平坦で一般的に堅緻な造りである。

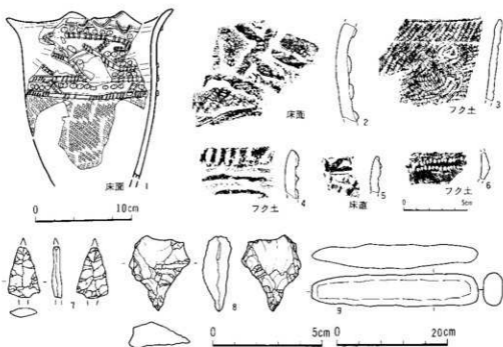
<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 残存している床面から20個のピットを検出したが、配置、規模等からP₂~P₆が主柱穴と思われる。P₄の対になる柱穴は確認できなかった。ピットの深さはP₂…58cm、P₃…60cm、P₄…50cm、P₅…51cm、P₆…45cmである。

<炉> 残存部からは検出されなかった。

<特殊施設> 住居跡の北西側で貼り付けにピットを伴った特殊施設が認められた。規模は長軸1m25cm、短軸1m20cmで、ピットの深さは40cmである。

<堆積土> 炭化材を比較的多く含む。人為的堆積の可能性が高い。



第277図 第105号住居跡(2)

〈出土遺物〉 遺物は散在する程度の出土である。土器は床面から円筒上層d式土器が出土している。石器は覆土から石鏃1点、石錐1点、不定形石器5点、石皿1点、石棒1点、総数9点出土している。

〈小結〉 床面から円筒上層d式土器が出土していることから、本住居跡は円筒上層d式期に構築されたと思われる。 (三浦 孝仁)

第106号住居跡 (第278図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央でDD-98グリッドに位置している。第105号住居跡の精査中に本住居跡の石囲炉を確認した。

〈重複〉 第103号、105号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 炉と貼り床を確認したのみで、平面形、規模ともに不明である。

〈壁・床面〉 炉の回りで貼り床が確認された。堅緻な造りである。

〈壁溝〉 認められなかった。

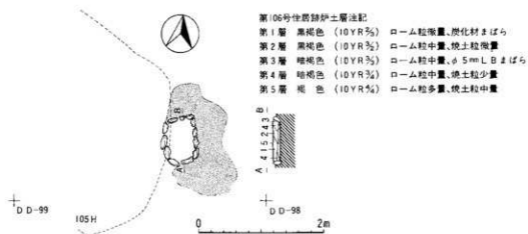
〈柱穴〉 ビットは認められなかった。

〈炉〉 炉石を四方に囲んだ石囲炉を検出した。第5層上面が火床面である。規模は長軸75cm、短軸58cm、深さ5cmである。

〈特殊施設〉 認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は確認できなかった。

〈小結〉 重複関係から円筒上層c・d式期に構築された可能性が高い。 (三浦 孝仁)



第278図 第106号住居跡

第107号住居跡 (第279・280図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央のDE-98、DE-99グリッドに位置している。第Ⅲ層で黒褐色土の落ち込みを確認した。

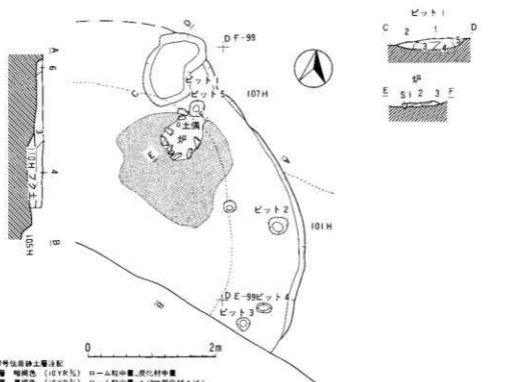
〈重複〉 第101号、105号、110号住居跡と重複しており、本住居跡は第101号住居跡より新しく、第105号、110号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 重複のため、平面形、規模ともに明確ではない。

〈壁・床面〉 壁は東側の一部を確認した。壁は低いが比較的堅緻である。床面は東側半分だけ確認したが、炉の回りは貼り床がなされ特に堅緻な造りである。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 本住居跡の床面内では5個のピットを確認した。支柱穴の配置等は確認できなかった。深さはP₂…12cm、P₃…8cm、P₄…12cm、P₅…51cmである。



第107号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒中量、炭化材中量
- 第2層 黒褐色 (10YR 3/1) ローム粒少量、φ 5~10mm炭化材まばら
- 第3層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒少量、φ 5~10mm炭化材まばら
- 第4層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒中量、15~20mm炭化材まばら
- 第5層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒中量、φ 5mm炭化材少量
- 第6層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒極まばら、炭化材少量

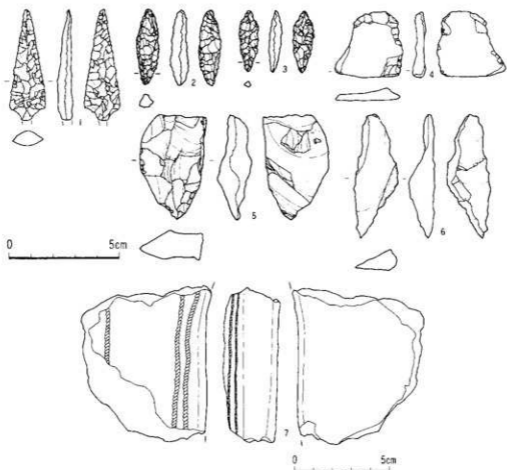
第107号住居跡炉土層注記

- 第1層 暗褐色 (10YR 3/2) φ 5~10mm炭化材所々、焼土粒微量
- 第2層 暗褐色 (10YR 3/2) 炭化材微量、焼土粒多量
- 第3層 黒褐色 (10YR 3/1) 炭化材微量

第107号住居跡ピット1土層注記

- 第1層 黒褐色 (10YR 3/1) ローム粒微量、φ 5~10mm炭化物所々
- 第2層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒少量
- 第3層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒少量、炭化粒微量
- 第4層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒微量、炭化材所々
- 第5層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒多量

第279図 第107号住居跡(1)



第280図 第107号住居跡(2)

〈炉〉 本住居跡の極めて北東側の壁寄りにコの字状の石囲炉1基を確認した。炉石の下にはほとんど掘り込みがなく、火床面も床面とほとんど同レベルである。規模は長軸70cm、短軸55cmである。

〈特殊施設〉 炉の北側に長軸1m25cm、短軸70cm、深さ13cmの落ち込みが認められた。

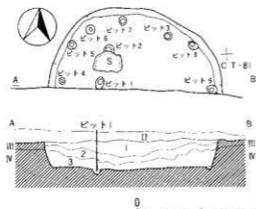
〈堆積土〉 炭化粒を比較的多く含む。人為的堆積と思われる。

〈出土遺物〉 住居跡内から時期を判断できる土器は出土していない。石器は、覆土から石鏃1点、石錐2点、不定形石器7点、総数10点である。また炉から土偶が1点出土している。

(三浦 孝仁)

第108号住居跡 (第281図)

〈位置と確認〉 CS・CT-81グリッドで黒褐色土の落ち込みを確認した。一部は調査区域外になっている。

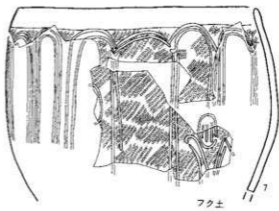
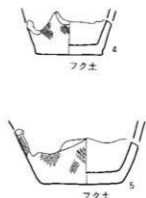
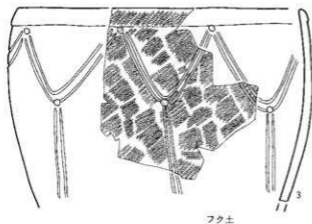
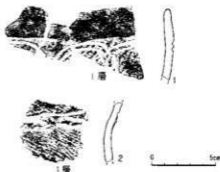


第108号住居跡土層注記

第1層 黒褐色土 (10YR5/2)

第2層 黒褐色土 (10YR5/2) □—ム粒(φ 1mm)少量

第3層 暗褐色土 (10YR3/2) □—ム粒(φ 5mm)少量



0 10cm

第281図 第108号住居跡

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 平面形は不明であるが、確認された規模は、長軸2.7m、短軸1.3mである。

<壁・床面> 第IV層を壁面とし緩やかな立ち上がりで、北壁19cm、東壁28cm、西壁24cmである。床面はほぼ平坦で全面に貼り床が施されている。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 床面から9個のビットを検出した。このうち、P₄~P₉は壁を巡っており配列及び規模から、壁柱穴と考えられる。各ビットの深さはP₁…8cm、P₂…13cm、P₃…21cm、P₄…8cm、P₅…10cm、P₆…9cm、P₇…8cm、P₈…8cm、P₉…5cmである。

<炉> 調査区域外にあるものと考えられる。

<施設> 確認できなかった。

<堆積土> 黒褐色土を主体とし、3層に分層した。

<出土遺物> 土器はすべて覆土からの出土で、石器は出土していない。 (長崎 勝巳)

第109号住居跡 (第282図)

<位置と確認> 調査区DD・DE-99・100グリッドに位置している。第117号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

<重複> 第105・117号住居跡と重複し、新旧関係は下記の変遷である。

(旧) —————→ (新)

第105号住居跡→本住居跡→第117号住居跡

<平面形・規模> 住居跡の残存部から推定すると、楕円形を呈すると思われる。残存部での規模は、長軸(3m97cm)・短軸(1m84cm)を測る。

<壁・床面> 上端から床面にかけて傾斜しており、軟らかい造りである。壁高は、東壁13cm・南壁6cm・北壁6cmを測る。床面は、ほぼ平坦で壁同様に軟らかい造りである。

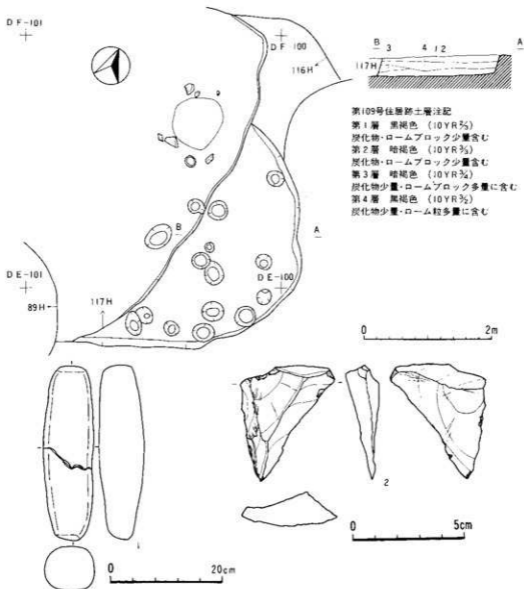
<柱穴> ビットは13個検出され柱穴と思われる。しかし、主柱穴は判断できなかった。

<炉・特殊施設> 認められなかった。

<堆積土> 4層に分層できた。自然・人為堆積かどうかは判断できなかった。

<出土遺物> 土器は覆土から細片(時期不明)が少量出土したのみである。石器は、覆土から不定形石器2点、床面から石棒類1点の総数3点が出土した。

<小結> 出土土器で時期を決定できなかったため、住居跡の重複で時期をみると円筒上層c式より新しく、榎林・最花式より古い。この事は、円筒上層d・e式の時期に相当するものと思われる。 (成田 滋彦)



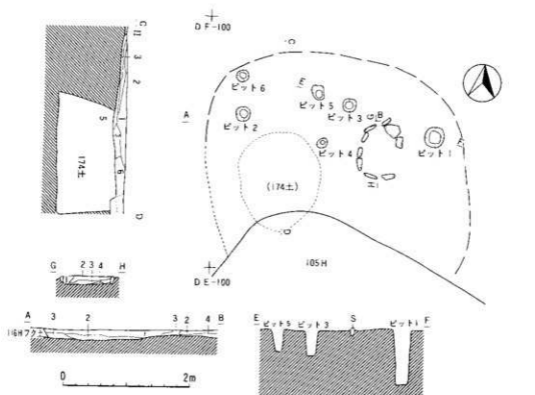
第282図 第109号住居跡

第110号住居跡 (第283・284図)

<位置と確認> 調査区のほぼ中央のDE-99グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第105号、107号、109号住居跡及び第174号土壌と重複しており、本住居跡は第107号、109号住居跡より古く、第174号土壌より新しい。第105号住居跡との新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 地山まで掘り込まれておらず、平面形は明確でない。貼り床の範囲と土層

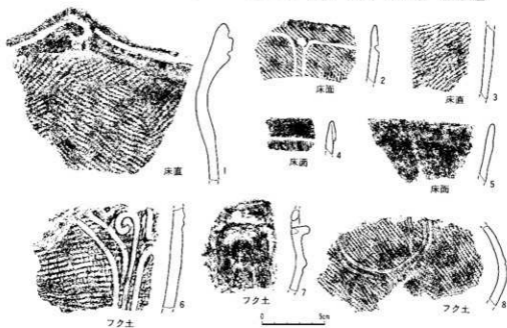


第110号住居跡土層注記

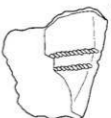
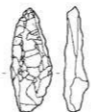
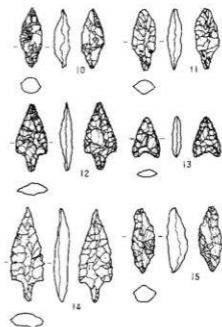
- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 第1層 黒褐色 (10YR 3/5) | ローム粒微量、 ϕ 10~20mm炭化物所々 |
| 第2層 暗褐色 (10YR 3/5) | ローム粒少量、 ϕ 10~20mm L B多量 |
| 第3層 暗褐色 (10YR 3/5) | ローム粒中量、 ϕ 5~10mm L B少量 |
| 第4層 暗褐色 (10YR 3/4) | ローム粒少量、 ϕ 10~20mm炭化物微量 |

第110号住居跡炉土層注記

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 第1層 黒褐色 (10YR 3/5) | ローム粒微量 |
| 第2層 黒褐色 (10YR 3/5) | ϕ 5mm炭化物まばら |
| 第3層 黒褐色 (10YR 3/5) | ϕ 5~10mm L B所々 |
| 第4層 暗褐色 (10YR 3/5) | 焼土粒中量 |



第283図 第110号住居跡(1)



第284図 第110号住居跡(2)

の断面から楕円形の可能性が考えられる。規模は4 m50cm程と思われる。

〈壁・床面〉 壁は確認できなかった。床面は、凹凸があるものの貼り床がなされ所々堅緻である。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 6個のピットが認められる。配置等からP₁、P₂が支柱穴の可能性が高い。深さはP₁…88cm、P₂…25cm、P₃…39cm、P₄…40cm、P₅…34cm、P₆…20cmである。

〈炉〉 住居跡の中央から若干東側でコの字状の石囲が認められた。規模は長軸90cm、短軸70cmである。第3層下面が火床面と思われる。

〈特殊施設〉 残存部には認められなかった。

〈堆積土〉 炭化粒が比較的多く含まれる。人為堆積の可能性が高い。

〈出土遺物〉 床面から最花式土器、覆土から榎林式土器が出土している。石器は床面直上から石鏃1点、覆土から石鏃10点、石槍2点、石錐2点、不定形石器6点、石斧1点、石皿1点、台石1点、総数24点出土している。また土偶が覆土から1点出土している。

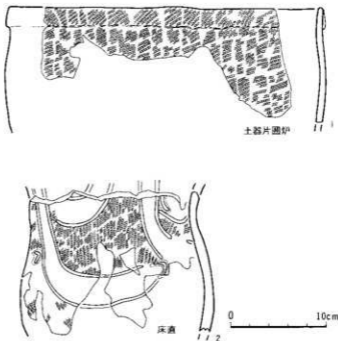
〈小結〉 本住居跡は、床面から最花式土器(1)が出土していることから、最花式期に構築されたと思われる。 (三浦 孝仁)

第112号住居跡 (第285・286図)

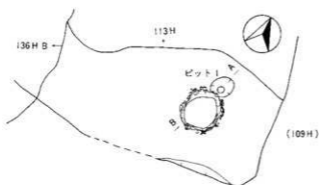
〈位置と確認〉 調査区D E-101・102グリッドで、第89号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第89・109・113・117号住居跡と重複し、新旧関係は第113号住居跡より古く、第89・109・117号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 炉を中心とした一部の残存部分の為、平面プランは把握できなかった。残存部の規模は、長軸(3 m2cm)・短軸(1 m80cm)を測る。



第285図 第112号住居跡(1)



第112号伊土層法記

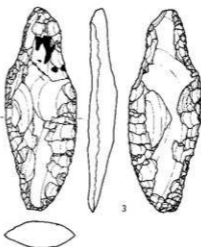
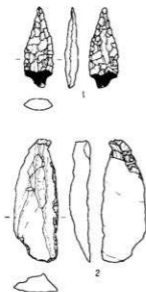
- 第1層 暗褐色 (10YR 5/2) 炭化物・焼土粒少量含む
- 第2層 赤褐色 (2.5YR 5/2) 炭化物若干含む
- 第3層 暗褐色 (10YR 3/2) 炭化物少量・焼土粒若干含む

第112号住居跡ピット1土層法記

- 第1層 黒褐色 (10YR 3/2) ローム粒・炭化物少量含む
- 第2層 暗褐色 (10YR 3/2) ローム粒少量含む

D E 102

0 2m



0 5cm

第286図 第112号住居跡2)

〈壁・床面〉 上端から床面にかけて傾斜しており、北壁のみ確認できた。炉の周辺は貼り床を呈し、ほぼ平坦である。

〈柱穴〉 ピットは炉の北側で1個検出した。柱穴かどうかは判断できなかった。

〈炉〉 住居跡の南壁よりに位置している。深鉢形土器片を用いて炉の壁に2・3重に置いた土器片囲炉である。規模は、長径64cm・短径58cm・深さ12cmを測る。

〈特殊施設・堆積土〉 認められなかった。

〈出土遺物〉 土器は、粗製の深鉢形土器(1)を炉として使用し、(2)は床直から出土した。石器は、覆土から石鏃1点・不定形石器2点、床面から石匙1点の総数4点が出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、弥栄平(1)式期と思われる。

(成田 滋彦)

第113号住居跡 (第287・288図)

〈位置と確認〉 調査区DE-101グリッドで、第112号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第112号住居跡と重複し、新旧関係は、本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 住居跡の残存部が少ないため平面プラン・規模は不明である。

〈壁・床面〉 上端から床面にかけて傾斜しており、軟らかい造りである。床面は、炉の周辺部のみ残存しており、ほぼ平坦で固くない。

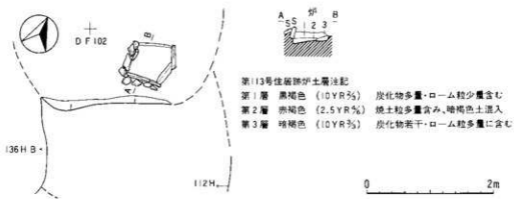
〈柱穴・特殊施設・堆積土〉 認められなかった。

〈炉〉 南壁よりに位置し、礫を用いた口字状に組んだ石囲炉である。規模は、長径75cm・短径74cm・深さ17cmを測る。

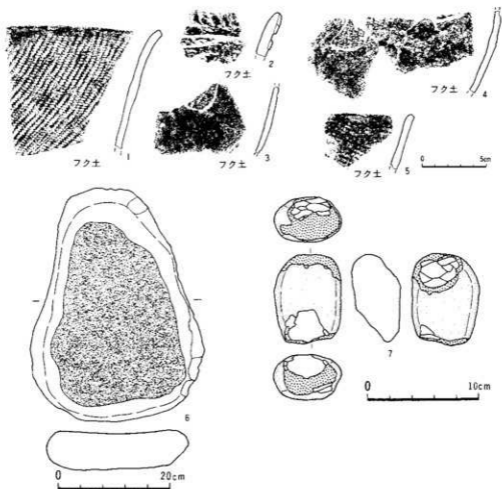
〈出土遺物〉 土器は、覆土から少量出土した。石器は、覆土から敵磨器類1点が出土し、炉石に台石・石皿類を1点使用している。総数は2点である。

〈小結〉 住居跡の構築時期は、覆土の廃棄時か廃棄以前であり最花式期か弥栄平(1)式期と思われる。

(成田 滋彦)



第287図 第113号住居跡(1)



第288図 第113号住居跡(2)

第114号住居跡 (第289図)

<位置と確認> CW-72グリッドで黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 確認された規模は、長軸2.8m、短軸1.3mで、平面形は不明である。

<壁・床面> 第IV層を壁面とし緩やかな立ち上がりで、壁高は北壁20cm、西壁40cmである。床面はほぼ平坦であるが、炉の付近は、やや低くなっている。

<壁溝> 確認できなかった。

<柱穴> 床面から8個のピットを検出した。このうち、P₁・P₂は配列及び規模から主柱穴と考えられる。各ピットの深さはP₁…46cm、P₂…65cm、P₃…12cm、P₄…9cm、P₅…6cm、P₆…3

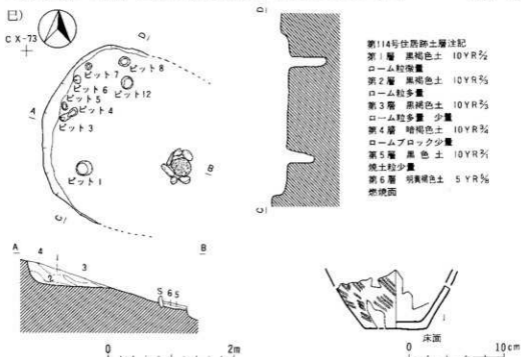
cm, P 7…3 cm, P 8…13cmである。

〈炉〉 住居跡の東側に位置し、円形を呈する石囲炉である。開口部は東側にあり、加熱痕の厚さは4cmほどである。

〈特殊施設〉 確認できなかった。

〈堆積土〉 黒褐色の土が主体で、全体にローム粒が混入している。

〈出土遺物〉 床面から土器の底部が出土し、石器は出土していない。 (長崎 勝)



第289図 第114号住居跡

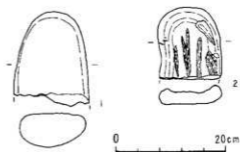
第115号住居跡 (第290・291図)

〈位置と確認〉 調査区DF・DG-100・101グリッドに位置している。

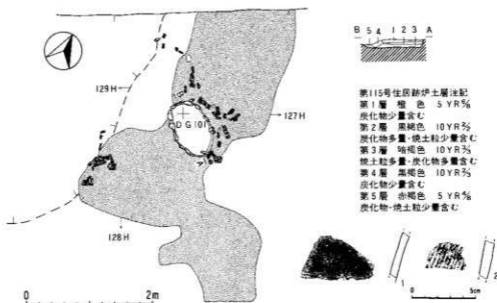
〈重複〉 第127・128・129号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉 石囲炉と一部の貼り床のみ残存している為、平面形及び規模については不明である。

〈壁・床面〉 壁は確認できなかった。床面



第290図 第115号住居跡(1)



第291図 第115号住居跡2)

は、ほぼ平坦で貼り床を呈し特に炉の部分が固い。

〈柱穴・特殊施設〉 認められなかった。

〈炉〉 丸みのある礫を楕円形に配置した石囲炉である。規模は、長径94cm・短径58cm・深さ13cmを測る。

〈出土遺物〉 土器は、床面から数片出土したのみである。石器は、覆土から台石・石皿類1点が出土し、炉石に台石・石皿類1点を使用している。総数は2点である。

〈小結〉 住居跡の時期は、床面の土器から最花式期と思われる。 (成田 滋彦)

第116号住居跡 (第292～294図)

〈位置と確認〉 調査区DE・DF-99・100グリッドに位置している。

〈重複〉 第109・110・117号住居跡と重複し、新旧関係は第109・117号住居跡より新しく、第110号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 残存部から推定すると円形のプランを呈すると思われる。残存部位は長軸(4m68cm)・短軸(3m12cm)を測る。

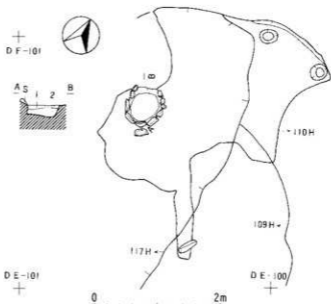
〈壁・床面〉 床面から上端にかけて垂直に立ち上がる。北壁のみ確認できた。床面はほぼ平坦で炉の周辺が固い。

〈柱穴〉 ビットは2個検出し、柱穴と思われる。しかし、主柱穴かどうか判断できなかった。

〈炉〉 住居跡の北側に位置する。丸みのある礎を用いて円形に配置した石囲炉である。規模は、長径64cm・短径62cm・深さ15cmを測る。

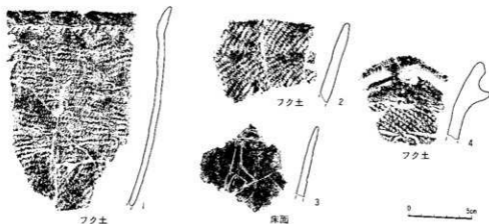
〈特殊施設・堆積土〉 認められなかった。

〈出土遺物〉 土器は全体的に散在して出土した。石器は、覆土から石鏃1点・石匙1点・不定形石器3点・蔽磨器類1点・磨製石斧1点・台石・石皿1点・軽石製品2点・石製品1点、床直から不定形石器1点が出土した。炉石に石棒類1点・台石・石皿1点を使用している。出土



第116号住居跡炉土層注記
 第1層 黒褐色 10YR 5/2 炭化物・坩土粒少量含む
 第2層 黒褐色 10YR 5/2 炭化物・ローム粒少量含む

第292図 第116号住居跡(1)

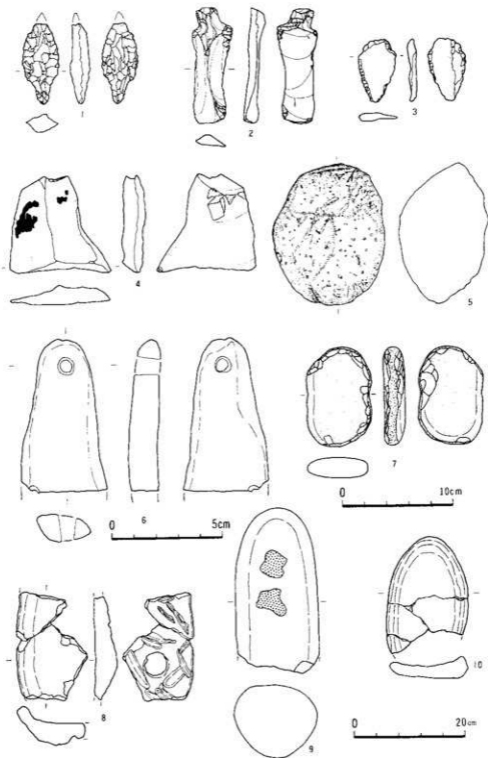


第293図 第116号住居跡(2)

石器の総数は14点出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床面の土器から榎林式期と思われる。

(成田 滋彦)



第294图 第116号住居跡(3)

第117号住居跡（第295図）

〈位置と確認〉 調査区DD・DE-100グリッドに位置している。第109号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第89・109・116号住居跡と重複し、新旧関係は第89・116号住居跡より古く、第109号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 住居跡の東側部分が残存しており、残存部から推定すると長方形のプランを呈すると思われる。残存部の規模は、長軸（5m60cm）・短軸（1m70cm）を測る。

〈壁・床面〉 床面から上端にかけて垂直に立ち上がり、堅緻な造りである。床面は、ほぼ平坦で炉の周辺が踏み固められてとくに固い。

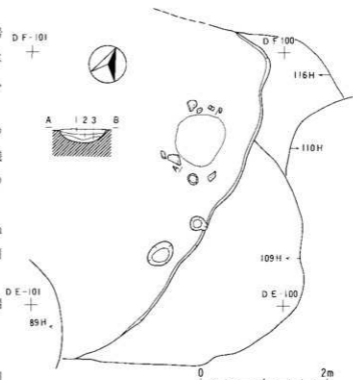
〈柱穴〉 ビットは3個検出され、配置等から柱穴と思われる。

〈炉〉 住居跡の東壁よりに位置する地床炉である。規模は、長径80cm・短径77cmである。

〈特殊施設・堆積土〉 認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は、覆土から台石・石皿が1点した。

〈小結〉 住居跡の時期は、重複から判断すると円筒上層c式期より新しく、榎林式期より古い。したがって、円筒上層d・e式期の時期に相当すると思われる。（成田 滋彦）



第117号住居跡が土層注記

- | | | | |
|-----|-----|-----------|--------------|
| 第1層 | 褐色 | 7.5YR 5/6 | 炭化物・焼土粒を多量含む |
| 第2層 | 赤褐色 | 5YR 5/6 | 焼土粒多量を含む |
| 第3層 | 暗褐色 | 7.5YR 3/4 | 炭化物・焼土粒を少量含む |

第295図 第117号住居跡

第121号住居跡（第296図）

<位置と確認> DE-102グリッドで、第99号住居跡の下位から石囲炉と貼り床の一部を確認、第121号住居跡とした。第136号B住居跡の上位に位置している。

<重複> 第136号B住居跡、第301号土壌より新しく、第99号住居跡より古い。また第79・98・136号A住居跡とも重複しているが、新旧関係は不明である。ただ、確認した貼り床の状況からは、これらの住居跡に切られているような出かたをしていることから、これらの住居跡より古い可能性も考えられる。

<平面形・規模> 平面形、規模とも不明である。

<壁・床面> 壁は検出できなかった。炉の周辺で、貼り床の一部を確認したにすぎない。

<壁溝> 検出できなかった。

<柱穴> 検出できなかった。

<炉> 西側が開いた半円形の石囲炉を確認したが、その後の調査で、掘り方に炉石の抜き取り痕が認められたことから、本来は円形であることが判明した。炉の覆土から、獣骨片が出土している。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 不明である。

<出土遺物> 土器は、床面と床面直上から数点出土したのみである。石器は、床面から石槍1点、不定形石器1点が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は不明である。

（島山 昇）

第122号住居跡（第297図）

<位置と確認> DF-102グリッドで石囲炉と貼り床の一部を確認、第122号住居跡とした。

<重複> 第136号A住居跡の上位にあり、これより新しい。

<平面形・規模> 平面形も規模も不明である。

<壁・床面> 壁は検出できなかった。炉の南側で、貼り床の一部を確認した。

<壁溝> 検出できなかった。

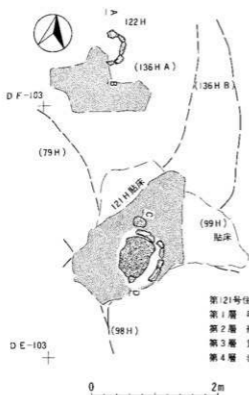
<柱穴> 検出出来なかった。

<炉> 西側が開いた「コ」の字形の石囲炉である。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 不明である。

<出土遺物> 遺物は少量出土した。石器は、床面から敲磨器類1点、覆土から不定形石器3点が出土した。



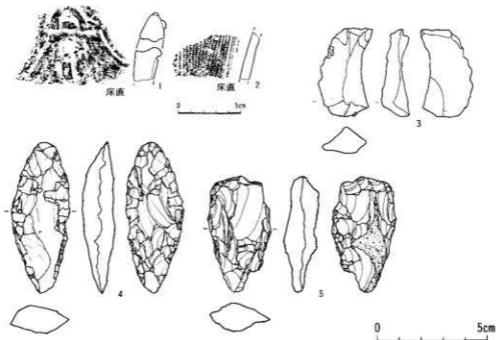
第122号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色土 10 YR 5/6
 □—△粒・炭化物・骨片を含む
 第2層 暗褐色土 10 YR 5/6
 □—△粒・炭化物・骨片を含む
 第3層 暗褐色土 10 YR 5/6
 □—△粒・炭化物・骨片を含む
 第4層 赤褐色土 5 YR 5/6
 焼土粒・骨片を含む
 第5層 暗褐色土 10 YR 5/6
 焼土粒・炭化物・骨片を含む

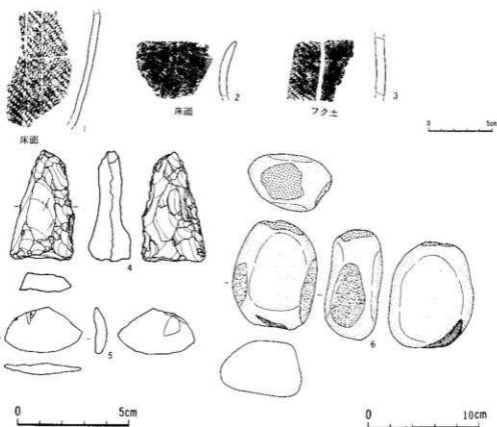


第121号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10 YR 5/6 □—△粒・炭化物・焼土粒・骨片を含む
 第2層 褐色土 10 YR 5/6 □—△粒・炭化物・焼土粒・骨片を含む
 第3層 黄褐色土 10 YR 5/6 炭化物・焼土粒・骨片を含む
 第4層 赤褐色土 5 YR 5/6 焼土



第296図 第121号住居跡



第297図 第122号住居跡

<小結> 本住居跡の構築時期は不明である。

(晶山 昇)

第125号住居跡 (第298図)

<位置と確認> 調査区のほぼ中央のDG-100グリッドに位置している。第156号住居跡を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第156号住居跡と重複しており、本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 本住居跡の大部分が調査区域外にあり、平面形、規模ともに把握でない。

<壁・床面> 第156号住居跡の床面までの壁高は15cm程であったが堅緻である。検出した床面は平坦で、堅緻である。

<壁溝> 認められなかった。

<柱穴> 検出した範囲から主柱穴と思われるピットは認められなかった。

<炉> 検出した範囲には認められなかった。

<特殊施設> 南側で特殊施設の可能性がある楕円形の張り出しが認められた。長軸50cm、短

〈平面形・規模〉 本住居跡の半分以上が調査区域外に延びているが、残存部から推察すると楕円形で、長軸は7m程になると思われる。

〈壁・床面〉 残存部の壁はほぼ垂直に立ち上がり、かなり堅緻に構築されている。壁高は重複している住居跡の床面までであるが、17～51cmを計る。床面は貼り床がなされ、極めて堅緻であるが、平坦でなく炉に向かってなだらかに傾斜している。

〈壁溝〉 残存部の壁に沿って認められた。床面からの深さは2～39cmである。所々小ピットがあり、壁柱穴の可能性が高い。

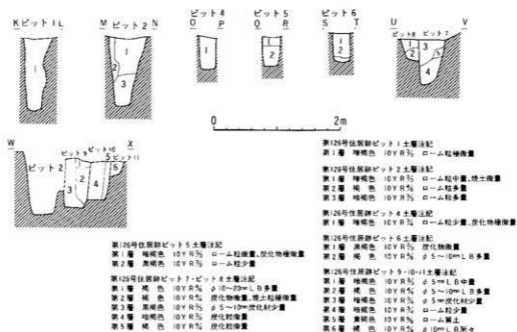
〈柱穴〉 本住居跡の床面から23個のピットを確認した。重複関係、配置、規模等からP₁、P₂が主柱穴の一部の可能性が考えられる。ピットの深さはP₁…125cm、P₂…133cm、P₃…21cm、P₄…61cm、P₅…50cm、P₆…47cm、P₇…75cm、P₈…79cm、P₉…82cm、P₁₀…72cm、P₁₁…58cmである。

〈炉〉 調査区域の末端で炉石の一部を確認した。

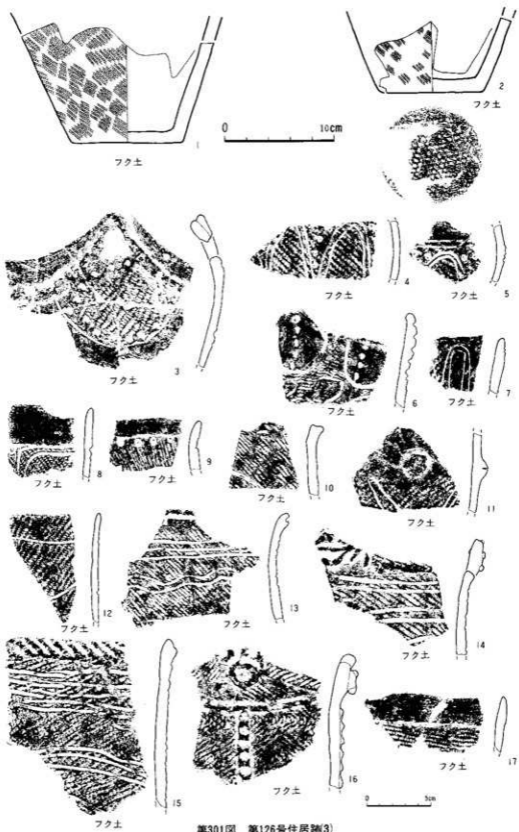
〈特殊施設〉 残存部には認められなかった。

〈堆積土〉 9層に分層できたが、覆土の中位に炭化材を比較的多く含む。人為的堆積の可能性が高い。

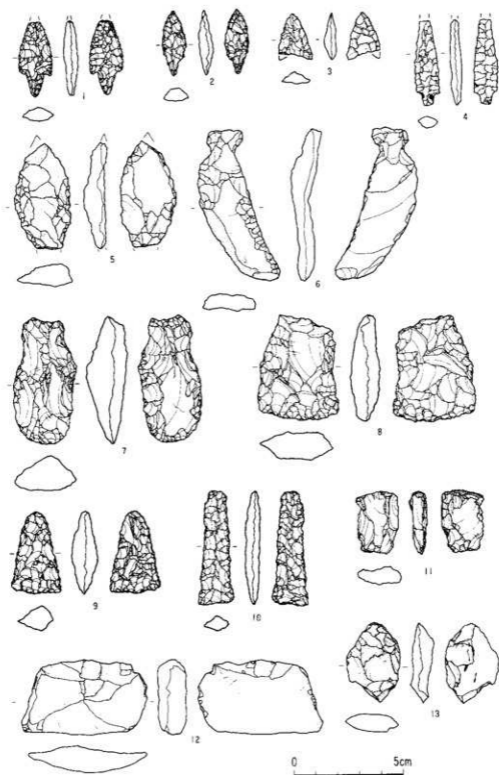
〈出土遺物〉 土器は覆土から円筒上層d式土器、円筒上層e式土器、最花式土器、弥栄平(1)式土器が出土している。石器は覆土から石鏃6点、石槍1点、石匙1点、石筈4点、ピエス・



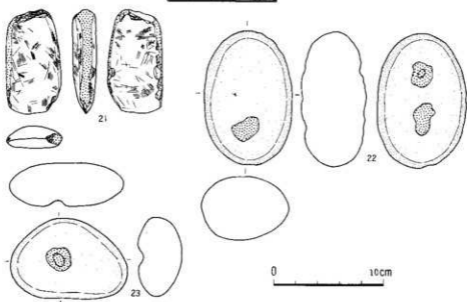
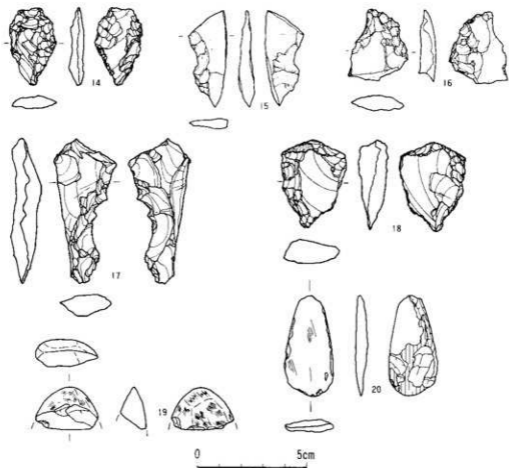
第299図 第126号住居跡(1)



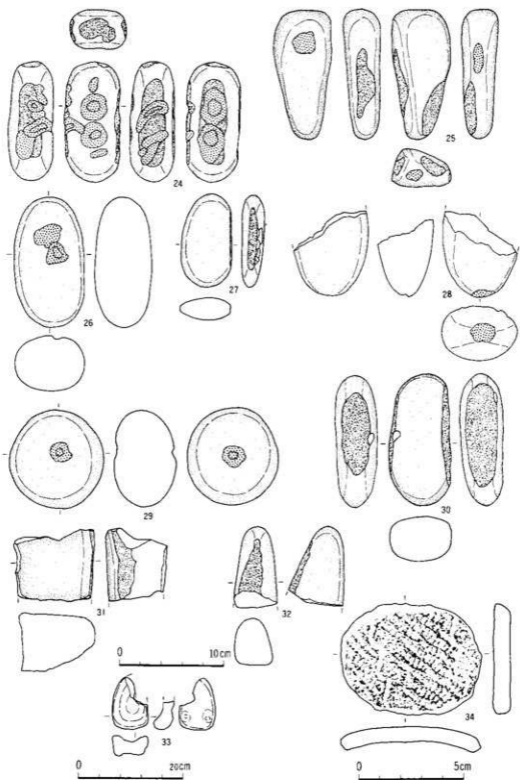
第301図 第126号住居跡(3)



第302图 第126号住居跡(4)



第303図 第126号住居跡5)



第304图 第126号住居跡(6)

エスキュー2点、不定形石器40点、石斧3点、石皿3点、戴磨器類11点、総数71点出土している。また覆土から軽石1点と土器片利用製品1点が出土している。

〈小結〉 床面から構築時期を判断する土器が出土していないため、明確ではないが、重複関係から榎林式期～弥栄平(1)式期と思われる。(三浦 孝仁)

第127号住居跡 (第305～308図)

〈位置と確認〉 調査区DE・DF-100・101グリッドに位置している。第129号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第115・128・129・156号住居跡と重複し、新旧関係は第115・129・156号住居跡より古く、第128号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 本住居跡は、炉と貼り床のみが残存し、また北側が調査区域外にあるため平面形及び規模については不明である。

〈壁・床面〉 壁は認められなかった。床面は、ほぼ平坦で、貼り床を施し、特に炉の部分は非常に固い。

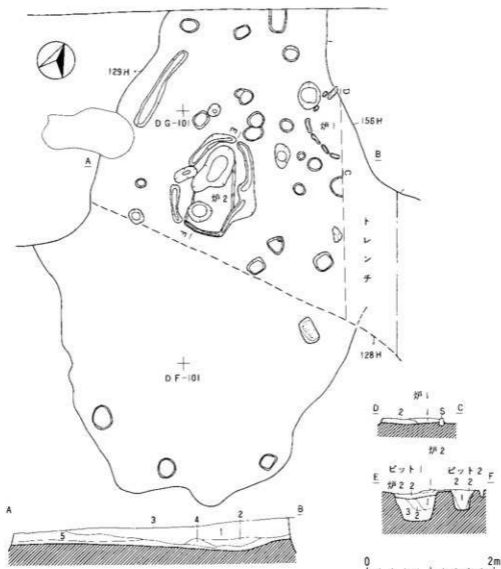
〈壁溝〉 住居跡の西側に幅22cm・深さ13cmの壁溝を検出した。壁溝は途切れており一部分のみの検出である。

〈柱穴〉 ビットは26個検出した。配置等から柱穴と思われるが、主柱穴かどうか判断できなかった。

〈炉〉 2個検出した。炉1は、礫を用い長方形に配列した石囲炉である。東側を第156号住居跡に切られている。炉2は、炉石が抜き取られた石囲炉である。規模は、長径167cm・短径143cm・深さ10cmを測る。



第305図 第127号住居跡(1)



第127号住居跡1土層法記

- 第1層 黄褐色 10Y R 5/5 ローム粒・焼土粒少量含む
- 第2層 黄褐色 10Y R 5/5 炭化物多量・焼土粒若干含む
- 第3層 黄褐色 10Y R 5/5 炭化物多量・ローム粒少量含む
- 第4層 雑褐色 10Y R 3/5 ローム粒多量・炭化物若干含む
- 第5層 雑褐色 10Y R 3/5 ローム粒少量・炭化物若干含む

第127号住居跡炉1土層法記

- 第1層 雑褐色 7.5Y R 7/5 炭化物多量・焼土も含む
- 第2層 褐色 7.5Y R 5/5 焼土ブロックも含む

第127号住居跡炉2土層法記

- 第1層 褐色 10Y R 5/5 焼土粒少量含む
- 第2層 褐色 7.5Y R 5/5 焼土粒多量・炭化物少量含む

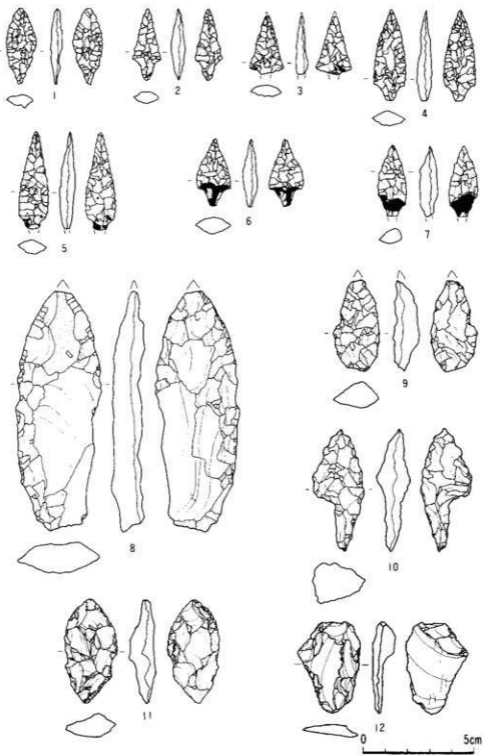
第127号住居跡ピット1土層法記

- 第1層 黄褐色 10Y R 3/5 黄褐色土混入・炭化物若干含む
- 第2層 褐色 10Y R 5/5 焼土粒多量・炭化物若干含む
- 第3層 雑褐色 10Y R 3/5 ロームブロック混入

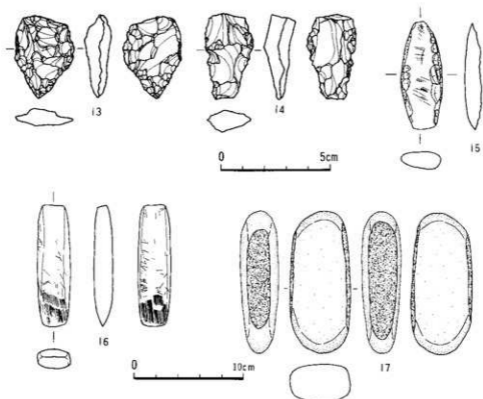
第127号住居跡ピット2土層法記

- 第1層 黄褐色 10Y R 5/5 ローム粒少量含む
- 第2層 雑褐色 10Y R 3/5 炭化物・焼土粒少量含む

第306図 第127号住居跡(2)



第307图 第127号住居跡(3)



第308図 第127号住居跡(4)

〈特殊施設〉 認められなかった。

〈堆積土〉 5層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉 土器は、(4)・(8)・(9)が床面・床直から出土し、他は覆土からの出土である。石器は、覆土から石鎌6点・石錐1点・石槍2点・不定形石器16点・磨製石斧1点・台石石皿1点・軽石製品1点・床直から石鎌5点・磨製石斧1点・蔽磨器類1点、床面から磨製石斧1点、石槍1点の総数37点が出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床面・床直の土器から榎林式期と思われる。 (成田 滋彦)

第128号住居跡 (第309～312図)

〈位置と確認〉 調査区DE・DF-101・102グリッドに位置している。第129号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第127・129・303・305号住居跡と重複し、新旧関係は第127・129号住居跡より古く、第303・305号住居跡よりは新しい。

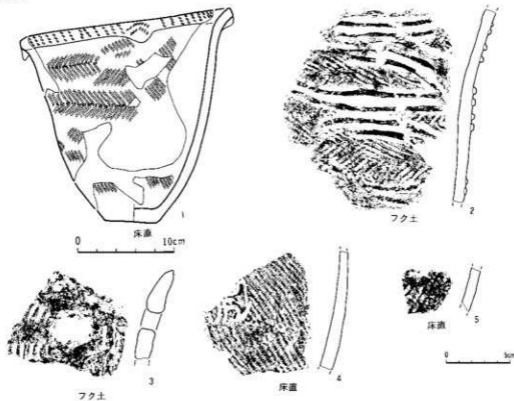
〈平面形・規模〉 住居跡の西側部分が切られているが、残存部から推定すると長方形を呈すると思われる。規模は、長軸(9m97cm)・短軸5m97cmを測る大型住居跡である。

〈壁・床面〉 床面から上端にかけて垂直に立ち上がり、堅緻な造りである。壁高は、東壁32cm・西壁不明・南壁16cm・北壁16cmを測る。床面は、ほぼ平坦で貼り床を呈し固い。

〈壁溝〉 壁よりに幅18cm・深さ6cmの壁溝を確認した。北南のコーナー部で一部途切れる。

〈柱穴〉 ビットは多数検出した。主柱穴はP₁～P₄が主柱穴と思われる。

〈炉〉 住居跡の長軸線上に沿って2個の炉を検出した。2個の炉とも地床炉である。規模は、炉1が長径43cm・短径(36)cm・深さ6cmを測る。炉2は長径57cm・短径(57)cm・深さ62cmを測る。



第309図 第128号住居跡(1)

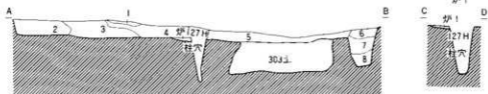
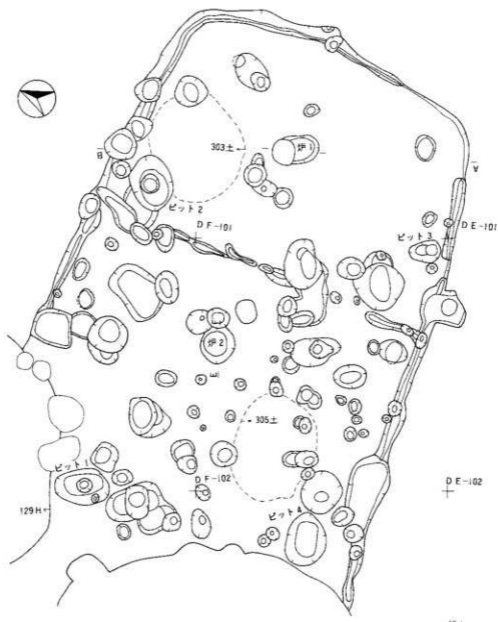
第128号住居跡土層注記

- | | | | |
|-----|-----|---------|-------------------|
| 第1層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | ロームブロック多量、炭化物少量含む |
| 第2層 | 褐色 | 10YR6/5 | ロームブロック多量を含む |
| 第3層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | ローム粒多量、炭化物若干含む |
| 第4層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | ローム粒少量、炭化物若干含む |
| 第5層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | ローム粒少量含む |
| 第6層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | ローム粒多量、炭化物若干含む |
| 第7層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | ローム粒多量を含む |
| 第8層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | ローム粒少量含む |

第128号住居跡炉2土層注記

- | | | | |
|-----|-------|---------|------------------|
| 第1層 | 暗褐色 | 10YR5/5 | 炭化物、ローム粒、粘土粒少量含む |
| 第2層 | 濃い黄褐色 | 10YR5/5 | 粘土粒少量含む |
| 第3層 | 褐色 | 10YR6/5 | ロームブロック多量を含む |
| 第4層 | 褐色 | 10YR6/5 | ローム粒多量を含む |

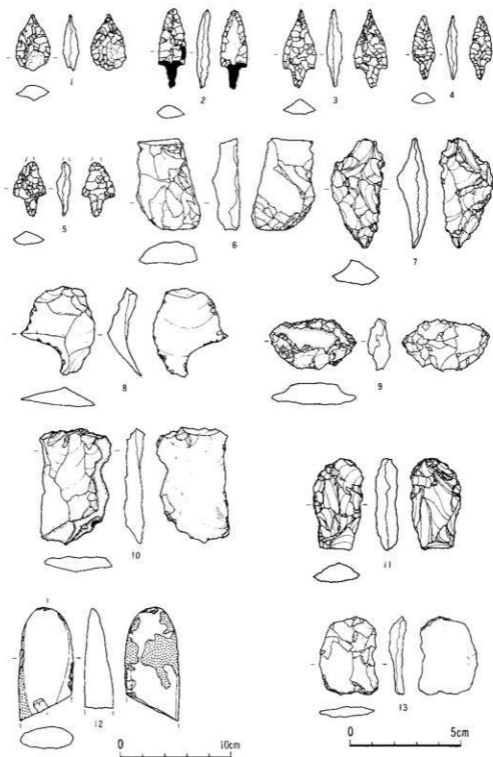
第310図 第128号住居跡(2)



第128号住居跡 土層注記
 第1層 赤褐色 2.5Y R 5 焼土層

0 2m

第311回 第128号住居跡(3)



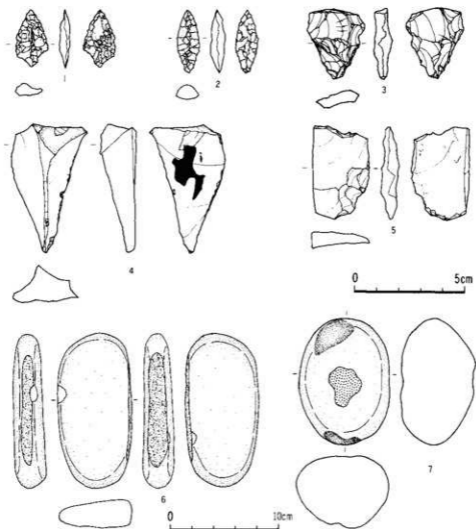
第312図 第128号住居跡(4)

〈特殊施設〉 住居跡の北から南側を横断するように幅15cm～20cm・深さ6cmで溝を検出した。この溝は、間仕切りを使用したものであり、南側の途切れている部分が入り口と思われる。

〈堆積土〉 8層に分層できた。堆積土中にローム・ロームブロックを多量に含んでおり、人為堆積と思われる。

〈出土遺物〉 土器は(1)・(3)・(5)が床直から出土し、他は覆土からの出土である。石器は、覆土から石鏃6点・不定形石器36点・磨製石斧1点・台石皿1点の総数44点が出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床直の土器から円筒上層d・e式期と思われる。(成田 滋彦)



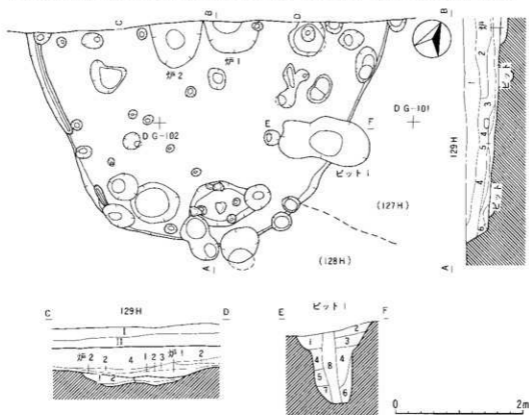
第313図 第129号住居跡(1)

第129号住居跡 (第313~315図)

〈位置と確認〉 調査区DF・DG-101グリッドに位置している。第127号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第115・127・128号住居跡と重複し、新旧関係は第115号住居跡より古く、第127・128号住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 住居跡の北側部分が調査区域外のために完掘できなかった。残存部から推定すると楕円形を呈すると思われる。規模は、長軸(5m30cm)・短軸(3m27cm)を測る。



第129号住居跡1土層法記

- 第1層 暗褐色 10Y R 3/5 炭化物・ロームブロック少量含む
- 第2層 黒褐色 10Y R 5/5 焼土粒多量、炭化物少量含む
- 第3層 黒褐色 10Y R 3/5 焼土粒・炭化物少量含む
- 第4層 暗褐色 10Y R 3/2 焼土粒多量、炭化物少量含む
- 第5層 暗褐色 10Y R 3/5 焼土粒少量、炭化物多量含む
- 第6層 褐色 10Y R 5/5 ロームブロック少量、炭化物若干含む

第129号住居跡ピット1土層法記

- 第1層 濃い黄褐色 ローム粒多量、炭化物少量含む
- 第2層 褐色 ロームブロック多量、炭化物若干含む
- 第3層 暗褐色 ローム粒、焼土粒若干含む
- 第4層 暗褐色 炭化物少量、ローム粒若干含む
- 第5層 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物若干含む

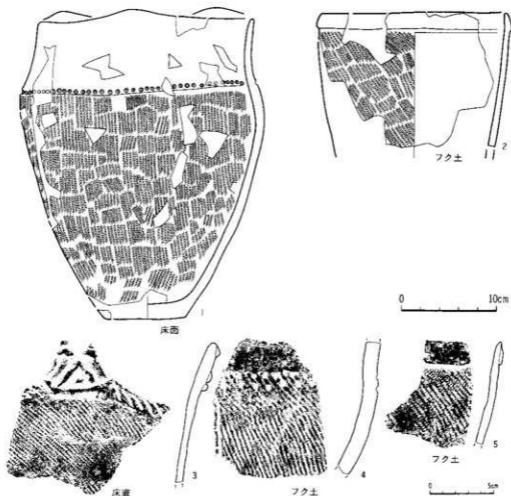
第129号住居跡I土層法記

- 第6層 黄褐色 10Y R 5/5 炭化物少量、暗褐色土混入
- 第7層 褐色 10Y R 5/4 ローム粒多量に含む
- 第8層 黒褐色 10Y R 5/5 炭化物多量に含む
- 第129号住居跡I土層法記
- 第1層 明褐色 7.5Y R 5/6 骨粉を多量に含む焼土層
- 第2層 明赤褐色 2.5Y R 5/6 焼土粒を多量に含む

第129号住居跡I土層法記

- 第1層 褐色 7.5Y R 5/6 ローム粒多量、炭化物若干含む
- 第2層 赤褐色 2.5Y R 5/6 焼土層、暗褐色土混入

第314図 第129号住居跡(2)



第315図 第129号住居跡(3)

〈壁・床面〉 床面から上端にかけて垂直に立ち上がり、堅緻な造りである。壁高は、東壁13cm・西壁10cm・南壁7cm・北壁は不明である。床面は、ほぼ平坦で固い造りである。

〈壁溝〉 西壁よりに幅16cm・深さ5cmの壁溝を検出した。西側のみの検出で他からは検出できなかった。

〈柱穴〉 ピットは壁よりに多く検出した。配置等から壁柱穴を主体にした柱穴と思われる。

〈炉〉 炉は2個検出された。炉1・炉2ともに地床炉であり、重複している。新旧関係は炉1が新しい。規模は、炉1が長径(82)cm・短径(46)cm・深さ(15)cm、炉2が長径(76)cm・短径(76)cm・深さ(17)cmを測る。

〈特殊施設〉 認められなかった。

〈堆積土〉 6層に分層できた。第2～5層に焼土粒を含んでおり、焼失家屋と思われる。

〈出土遺物〉 土器は、(1)・(3)が床直から出土し、他は覆土からの出土である。石器は、覆土

から石楯3点・石錐1点・不定形石器36点・台石・石皿6点・蔽磨器類1点が出土し、炉石に蔽磨器類1点を使用している。石器の総数は48点が出土した。

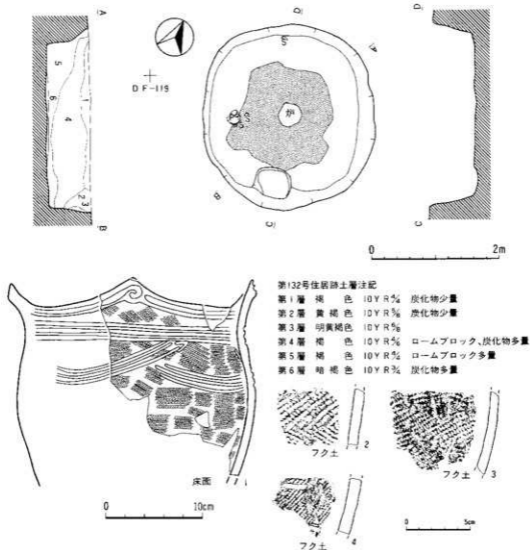
<小結> 住居跡の時期は、床直の土器から最花式期と思われる。

(成田 滋彦)

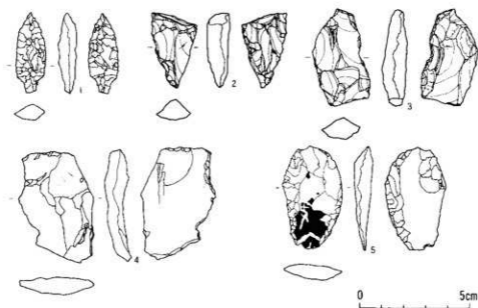
第132号住居跡 (第316・317図)

<位置と確認> 調査区域のほぼ中央の平坦部、DG-118グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で円形の褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。



第316図 第132号住居跡(1)



第317図 第132号住居跡(2)

〈平面形・規模〉 南北に長軸をもつ楕円形で長軸3m、短軸2m70cmで、床面積は5.04㎡である。

〈壁・床面〉 壁は床面から外側にやや開きながら直線的に立ち上がる。床面は壁際を除いて貼り床が施されている。壁高は東壁70cm・西壁65cm・南壁65cm・北壁65cmである。

〈壁溝〉 検出されなかった。

〈柱穴〉 検出されなかった。

〈炉〉 床面のほぼ中央に地床炉が構築されている。規模は長径約40cmで、ほぼ円形である。

〈特殊施設〉 長軸線上の南壁際床面に小ピットが検出された。規模は長径60cm、短径50cmで、半円形に近い。

〈堆積土〉 6層に分層した。層全体に炭化物を含む。人為的に埋め戻された可能性が高い。

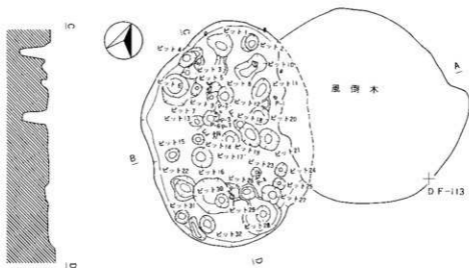
〈出土遺物〉 石器は覆土から石鏃1点、不定形石器6点が出土した。

〈小結〉 床面から椀林式土器が出土しており、この時期に本住居跡が相当すると思われる。

(岡田 康博)

第133号住居跡 (第318・319図)

〈位置と確認〉 調査区域のほぼ中央の平坦部、DF-113グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で楕円形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

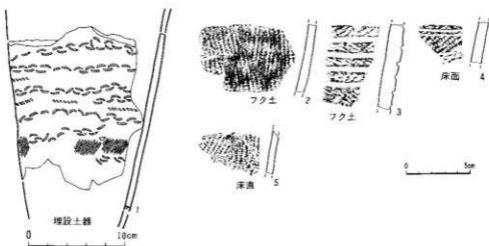


第133号住居跡内埋設土器層土層注記

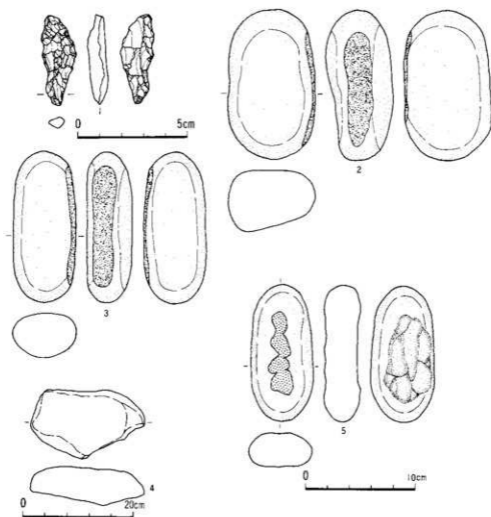
- 第1層 黒褐色 10YR 7/5 炭化粒、焼土粒少量
- 第2層 褐色 10YR 6/4 ロームブロック多量
- 第3層 褐色 10YR 6/4 ロームブロック、炭化粒少量

第133号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色 10YR 3/4 ロームブロック少量
- 第2層 黒褐色 10YR 3/5 ローム粒少量



第318図 第133号住居跡(1)



第319図 第133号住居跡2)

<重複> 東壁が風倒木痕により壊されている。

<平面形・規模> 南北に長軸をもつ楕円形で長軸3m60cm、短軸(2m70cm)である。床面積は(6.55㎡)である。

<壁・床面> 壁は床面から外側に開きながら緩やかに湾曲して立ち上がる。床面は壁際を除いて貼床が施され、軟質である。壁高は西壁30cm・南壁10cm・北壁15cmである。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 床面から32個検出した。このうち明確に主柱穴と断定できるものはない。深さはP₁…34cm、P₂…34cm、P₃…10cm、P₄…40cm、P₅…16cm、P₆…47cm、P₇…11cm、P₈…38cm、P₉…28cm、P₁₀…39cm、P₁₁…32cm、P₁₂…35cm、P₁₃…17cm、P₁₄…11cm、P₁₅…28cm、P₁₆…38

cm、P₁₇…35cm、P₁₈…11cm、P₁₉…35cm、P₂₀…27cm、P₂₁…43cm、P₂₂…15cm、P₂₃…28cm、P₂₄…34cm、P₂₅…26cm、P₂₆…23cm、P₂₇…21cm、P₂₈…30cm、P₂₉…25cm、P₃₀…33cm、P₃₁…23cm、P₃₂…35cmである。

<炉> 床面のほぼ中央から西壁寄りに土器埋設炉が構築されている。規模は長径約25cm、深さ約40cmで、ほぼ円形である。

<特殊施設> 認められなかった。

<堆積土> 2層に分層した。層全体にローム粒子を含む。人為的に埋め戻された可能性が高い。

<出土遺物> 石器は覆土から石錐1点・敲磨器類1点、床面から敲磨器類2点・台石・石皿類1点が出土した。
(岡田 康博)

第134号住居跡 (第320図)

<位置と確認> DD-103・104グリッドに位置している。第46号住居跡の調査中に確認した。

<重複> 第46・97・165・166号住居跡より古く、第94号住居跡、第395・396号土壌より新しい。

<平面形・規模> 短軸2m72cm、長軸3m26cm前後の楕円形を呈している。床面積は6.85㎡である。

<壁・床面> 壁は急に立ち上がり、20～30cm前後の壁高である。床面は平坦で、ほぼ全面に貼り床が施されている。

<壁溝> 東壁と南壁下で確認した。幅15cm、深さ2～10cmである。

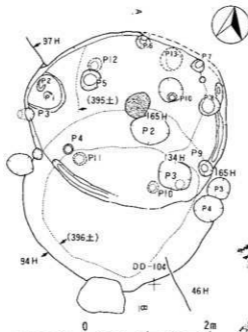
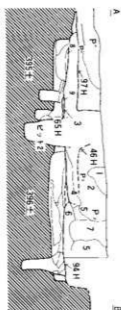
<柱穴> 12個のピットを検出した。ピットの深さは、以下のとおりである。

P₁…21cm、P₂…10cm、P₃…43cm、P₄…54cm、P₅…56cm、P₆…24cm、P₇…25cm、P₈…50cm、P₉…15cm、P₁₀…33cm、P₁₁…62cm、P₁₂…61cm。なお、P₁₀～P₁₂は下位にある第395号土壌の調査で検出したもので、本住居に伴うものとして計算してある。本住居跡の柱穴配置は、P₄、P₅ (またはP₁₂)・P₇・P₉ (またはP₁₀) と思われる。このうちP₉は、重複関係にある第94号住居跡の柱穴の可能性も考えられるので、P₁₀あるいは隣接している第46号住居跡のピットにより破壊されたことも考えられる。

<炉> 中央から若干北に寄っている。地床炉で、第165号住居跡のピットにより、一部破壊されている。

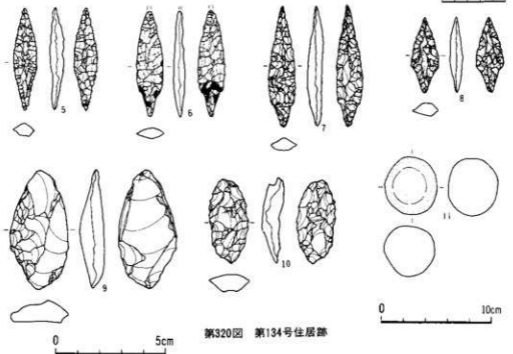
<特殊施設> 西壁に接して検出した。6～10cmの深さで、楕円形にくぼみ、壁に近くなるほど低くなっている。内側からは、2個のピットを検出した。

<堆積土> 上部を第46号住居跡によって切られているため、南半より確認していないが、人



第94号・134号住居跡土層注記

- | | | |
|------------|------------|------------------------|
| 第1層 濃い黄褐色土 | 10 Y R 5/5 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第2層 褐色土 | 10 Y R 5/4 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第3層 暗褐色土 | 10 Y R 5/3 | ローム粒、炭化物を含む、2層との境界、不明確 |
| 第4層 褐色土 | 10 Y R 5/4 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第5層 暗褐色土 | 10 Y R 5/3 | ローム粒、炭化物を含む |
| 第6層 濃い黄褐色土 | 10 Y R 5/5 | |
| 第7層 暗褐色土 | 10 Y R 5/3 | |
| 第8層 黄褐色土 | 10 Y R 5/4 | 134Hの粘床 |
| 第9層 赤褐色土 | 5 Y R 5/4 | 焼土 |



第320図 第134号住居跡

為堆積と思われる。

<出土遺物> 覆土から床面にかけて少量の遺物が出土した。石器は、床面から石鏃1点、不定形石器2点、床面直上から敲磨器類1点、覆土から石鏃3点が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は、他の住居跡との新旧関係及び堆積状況から榎林式期かそれ以前に構築されたものと思われる。
(畠山 昇)

第136号A住居跡 (第321~323図)

<位置と確認> DE・DF-102・103グリッドに位置している。多数の遺構と重複して確認した。当初、1軒の住居跡と思われたが、2条の壁溝が検出されたことから、内側をA住居跡、外側をB住居跡とした。A住居跡とB住居跡との新旧関係は不明である。

<重複> 多数の遺構と重複しているが、セクションの観察から新旧関係を把握できたものはない。また、各住居跡とのレベル差はあまりなく、不明なものが多い。確かなことは、本住居跡の上位で貼り床を確認しているので、第99・122・137号住居跡よりは古い、第79・91・121・136B・138・139号住居跡との新旧関係は明確には把握できない。ただ、第79号住居は2号炉の焼土を切っているように見られたことから、本住居跡より新しい可能性があり(はっきりしなかった)、また第121号住居跡の貼り床が本住居跡に切られているように検出されていることから、本住居跡より古い可能性も考えられる。また、第306号土壇は、その底面に本住居跡の床がリング状に検出された。土壇上部には貼り床の痕跡はないことから、土壇廃絶後に床が陥没したものと考えられ、本住居跡の方が古いものと考えられる。

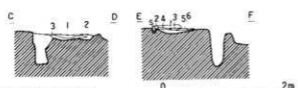
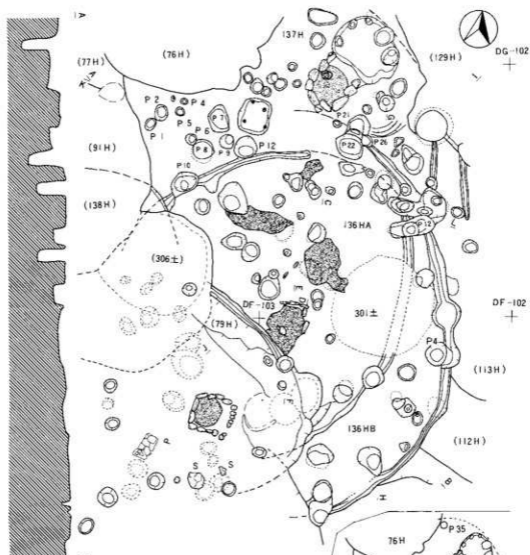
<平面形・規模> 北東のおよそ2分の1を調査したが、南西部分は不明である。調査できた部分の推定では、平面形は楕円形と思われ、規模は短軸4m40cm前後、長軸6m前後と思われる。

<壁・床面> 壁は確認できなかった。床面は部分的に貼り床が施され、平坦で、堅緻である。また東側の床面の一部は第301号土壇のため陥没していた。

<壁溝> 一部途切れているが、幅14cm前後、深さ10cm前後の壁溝を検出した。

<柱穴> 住居内から多数のピットを検出した。他の住居跡のピットも含まれているものと考えられるが、重複が激しく、どのピットが本住居跡に伴うものか不明である。ピットの深さは以下に記してあるが、第136号B住居跡のものも合わせて記載しておく。

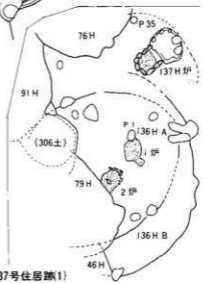
P₁…45cm、P₂…55cm、P₃…9cm、P₄…36cm、P₅…48cm、P₆…56cm、P₇…31cm、P₈…20cm、P₉…44cm、P₁₀…12cm、P₁₁…30cm、P₁₂…13cm、P₁₃…22cm、P₁₄…56cm、P₁₅…29cm、P₁₆…39cm、P₁₇…30cm、P₁₈…66cm、P₁₉…48cm、P₂₀…26cm、P₂₁…54cm、P₂₂…24cm、P₂₃…50cm、P₂₄…34cm、P₂₅…20cm、P₂₆…20cm、P₂₇…31cm、P₂₈…18cm、P₂₉…51cm、P₃₀…71cm、P₃₁…24



- 136号A住居1号炉土層法記
- 第1層 暗褐色土 10YR 3/4
 - 第2層 暗褐色土 10YR 3/5
 - 第3層 暗褐色土 10YR 3/5
 - 第4層 暗褐色土 10YR 3/4
 - 第5層 暗褐色土 10YR 3/4
 - 第6層 赤褐色土 5YR 3/4

灰土多量混入
灰土

- 2号炉土層法記
- 第1層 暗褐色土 10YR 3/4
 - 第2層 暗褐色土 10YR 3/5
 - 第3層 赤褐色土 5YR 3/4 灰土



第321图 第96・136号A・136号B・137号住居跡(1)

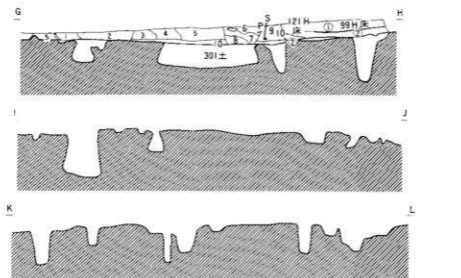
cm, P₃₂…42cm, P₃₃…31cm, P₃₄…66cm, P₃₅…55cm, P₃₆…20cm, P₃₇…7cm, P₃₈…73cm, P₃₉…22cm, P₄₀…68cm, P₄₁…24cm, P₄₂…10cm, P₄₃…25cm, P₄₄…42cm, P₄₅…75cm。

〈炉〉 床面が焼けている部分が3か所と石囲炉が検出された。前者の3か所のうち、石囲炉の北に検出されたものは、炉として機能していたものと思われる。これを1号炉とし、石囲炉を2号炉とする。どちらもほぼ同レベルで、新旧関係は把握できなかった。また本住居及び第136号B住居跡のいずれに所属するものか不明である。2号炉は北側と東側の一部で礎を検出した。南側にも礎が残存しているが、掘り方を確認できなかったので「コ」の字形または方形に組まれていたかどうかは不明である。火床面はやや広く検出されている。

〈特殊施設〉 検出されなかった。

〈堆積土〉 ローム粒・炭化物粒を含んだ暗褐色土を主体とした堆積が見られた。しかし土色・締まり・堅さ・混入物等は、各層に大差が認められなかった。

〈出土遺物〉 遺物は若干出土した。石器は床面から石鏃4点、敵磨器類1点の総数5点、覆



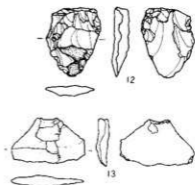
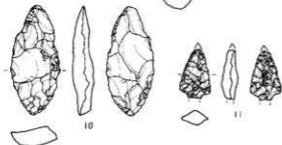
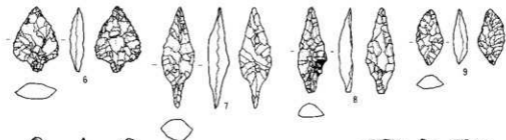
第136号住居跡土層注記

第1層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、焼土粒、炭化物粒を含む
第2層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、炭化物を含む
第3層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、炭化物を含む
第4層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、炭化物を含む
第5層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、焼土粒、炭化物を含む
第6層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、炭化物を含む
第7層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、炭化物を含む
第8層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、炭化物を含む
第9層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒、焼土粒、炭化物を含む
第10層	暗褐色土	10Y R 3/6	ローム粒を多量、焼土粒、炭化物を若干含む
第11層	暗褐色土	10Y R 3/6	
第12層	暗褐色土	10Y R 3/6	
第13層	暗褐色土	10Y R 3/6	

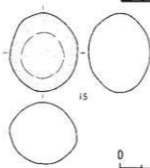
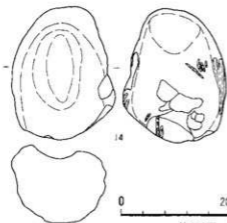
第322図 第136号A・137号B住居跡(2)



0 5cm



0 5cm



0 20cm

0 10cm

第323図 第136号A住居跡(3)

土から石楨3点、石楨1点、石皿2点の総数6点の出土である。また、この他に床面から琥珀(原石?)が出土した。

<小結> 本住居跡の時期は不明であるが、床面直上からの出土土器から榎林式～最花式期のあたりと思われる。(島山 昇)

第136号B住居跡(第321・322図)

<位置と確認> DE・DF-102・103グリッドに位置している。第136号A住居跡の外側に、重複して確認した。

<重複> A住居跡との新旧関係は不明であるが、A住居跡の拡張後の可能性も考えられる。第99・121・137号住居跡よりは古いが、第79・96・98・136B号住居跡とは新旧関係を把握できなかった。

<平面形・規模> 検出した壁溝から推定して、楕円形を呈するものと思われ、規模は不明である。

<壁・床面> 壁は確認できなかった。床面は平坦で、堅緻である。

<壁溝> 第136号A住居跡の東側に検出し、幅10～20cm前後、深さ10cm前後の壁溝を検出した。

<柱穴> 住居跡内から多数のピットを検出している。重複が激しく、どのピットが本住居跡に伴うものか不明であるが、P₉₁・P₄₀と第96号住居跡のP₁₀が本住居跡の柱穴の可能性が高い。なお、ピットの深さは第136号A住居跡で記述している。

<炉> 第136号A住居跡で記述しているが、1号炉か2号炉のいずれかと思われる。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> ローム粒・炭化物粒を含んだ暗褐色土を主体とした堆積が見られた。しかし土色・締まり・堅さ・混入物等は、各層に大差が認められなかった。

<出土遺物> 南西部で、多量のチップが出土した以外、ほとんど出土しなかった。

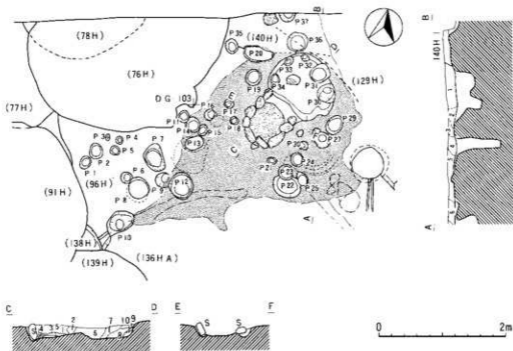
<小結> 本住居跡の時期は不明であるが、第136号A住居跡と大差のない時期と思われる。(島山 昇)

第137号住居跡(第324・325図)

<位置と確認> DF・DG-102・103グリッドに位置している。調査の早い段階で、石囲炉を確認、その周辺でロームの貼り床を確認したので、第137号住居跡とした。

<重複> 第76・96・136A・136B・140号住居跡より新しい。第129号住居跡との新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 平面形、規模とも不明である。



第137号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む
- 第2層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む
- 第3層 暗褐色土 10Y R 3/5 炭化物を少量含む
- 第4層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒、焼土粒を含む
- 第5層 暗褐色土 5Y R 3/5 硬土
- 第6層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒、焼土粒、炭化物を含む
- 第7層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む
- 第8層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒、炭化物を含む
- 第9層 暗褐色土 10Y R 3/5 炭化物を少量含む
- 第10層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む

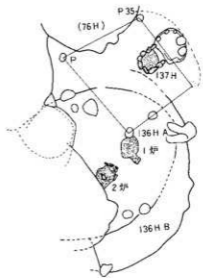
第137号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む
- 第2層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む
- 第3層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を少量含む
- 第4層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む
- 第5層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む
- 第6層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒を若干含む

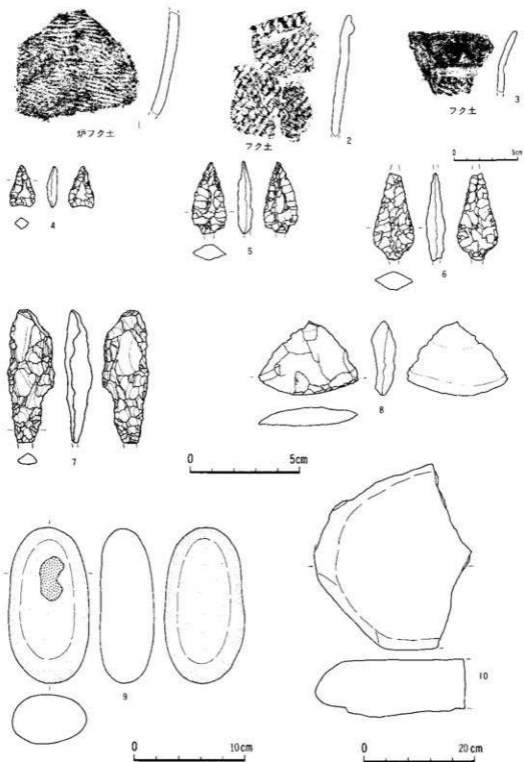
〈壁・床面〉 壁は確認出来なかった。セクションからは、壁高は10cm前後である。床面は貼り床が施され、平坦で、堅緻である。なお、貼り床の下部（炉の南東側）にロームで構築された弧状の盛土を検出したが、これは古い住居（住居番号は付けていない）に伴う特殊施設の残骸の可能性が高い。

〈壁溝〉 検出できなかった。

〈柱穴〉 周辺から、多数のピットを検出したが、どのピットが本住居跡に伴うものか不明で



第324図 第137号住居跡(1)



第325図 第137号住居跡(2)

ある。ここでは一応、貼り床が検出できた部分で確認したピットを本住居跡のものとして、報告する。この部分からは23個のピットを検出したが、重複が激しいため、必ずしも本住居跡に伴うものとは言いきれない。また、貼り床が検出された部分以外にも柱穴が存在した可能性も当然考えられる。推定ではあるが、第324図に、本住居跡の柱穴配置を示してある。ピットの深さは以下のとおりである。

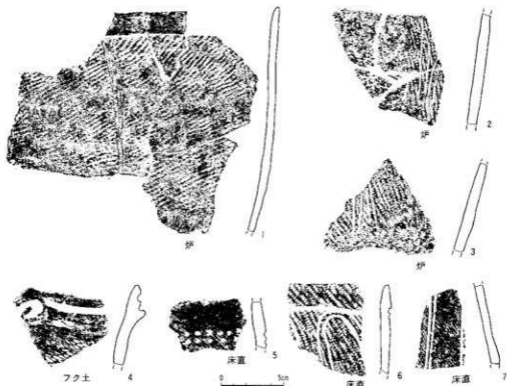
P₁₂…42cm, P₁₃…23cm, P₁₄…21cm, P₁₅…22cm, P₁₆…64cm, P₁₇…48cm, P₁₈…10cm, P₁₉…28cm, P₂₀…17cm, P₂₁…30cm, P₂₂…27cm, P₂₃…28cm, P₂₄…14cm, P₂₅…10cm, P₂₆…48cm, P₂₇…75cm, P₂₈…55cm, P₂₉…19cm, P₃₀…51cm, P₃₁…35cm, P₃₂…34cm, P₃₃…41cm, P₃₄…22cm。

〈炉〉 北東部が開いた「コ」の字形の石囲い炉で、北東部には楕円形で浅い（炉底から10cmほど低い）施設が付属している。焼土は石囲い炉の部分に多く認められた。全体の長軸は1m 70cmの規模である。

〈特殊施設〉 検出されなかった。

〈堆積土〉 暗褐色土を主体としているが、堆積状況は不明である。

〈出土遺物〉 遺物は若干出土した。土器は数点出土した。石器は、床面から石鏃3点、不定



第326図 第138号住居跡(1)

形石器1点、炉石に転用された石皿1点、覆土から石錐1点、不定形石器1点、ピットから敲磨器類1点が出土した。

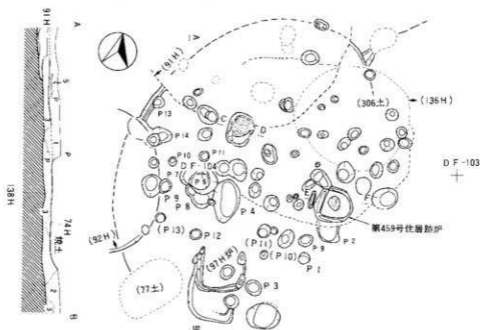
〈小結〉 本住居跡の時期は不明であるが、炉の形態から最花式期かそれ以降と思われる。

(高山 昇)

第138号住居跡 (第326~328図)

〈位置と確認〉 DE・DF-103グリッドに位置し、多数の遺構と重複している。

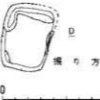
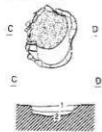
〈重複〉 第74・79・97号住居跡より古く、第91・139号住居跡及び第306号土壌より新しい。第92・136A・136B号住居跡との新旧関係は不明である。



第138号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色土 10Y R 3/6
- 第2層 暗褐色土 10Y R 3/6
- 第3層 暗褐色土 10Y R 3/6

- ムロ、炭化物を少量、焼土粒を極少量含む
- ムロ、炭化物を少量含む
- ムロ、炭化物を少量含む



第138号住居跡土層注記

- 第1層 暗褐色土 10Y R 3/6
- 第2層 濃い赤褐色土 5Y R 4/6

第459号住居跡炉



第49号住居跡炉土層注記

- 第1層 褐色土 10Y R 3/6
- 第2層 赤褐色土 5Y R 3/6 焼土
- 第3層 黄褐色土 10Y R 3/6

0 2m

第327図 第138号住居跡(2)



第328图 第138号住居跡(3)

＜平面形・規模＞ 平面形・規模は不明である。

＜壁・床面＞ 壁は北東側の一部しか確認できなかった。床面は全般に平坦だが、部分的に貼り床が施されているところもある。南側は平坦で、ほぼ同レベルで他の住居跡と連続している。

＜壁溝＞ 北西側に検出し、幅10cm前後、深さ5cm前後である。

＜柱穴＞ 周辺から、多数のビットを検出したが、重複が激しいため、どのビットが本住居跡に伴うか不明である。おもなビットの深さは以下のとおりである。

P₁…42cm、P₂…55cm、P₃…29cm、P₄…18cm、P₅…18cm、P₆…48cm、P₇…21cm、P₈…32cm、P₉…18cm、P₁₀…6cm、P₁₁…32cm、P₁₂…33cm、P₁₃…29cm、P₁₄…16cm。

＜炉＞ 土器片囲い炉である。南側と東側の一部を除いて、ほぼ方形に土器片で囲っている。南北約50cm、東西約36cmである。

＜特殊施設＞ 不明である。

＜堆積土＞ ローム粒を含んだ黒～暗褐色土を主体とした堆積土が見られたが、全体に均質なため、堆積状況は不明である。

＜出土遺物＞ 遺物は覆土から床面にかけて、若干出土した。土器は榎林式～最花式土器が比較的多く出土した。石器は、床面から石鏃1点、石錐1点、敲磨器類2点、床面直上から敲磨器類1点、覆土から石鏃3点、石錐2点、石筥1点、不定形石器2点が出土し、総数13点である。

＜小結＞ 本住居跡の時期は、炉に利用された土器から、最花式期である。（畠山 昇）

第139号住居跡（第329図）

＜位置と確認＞ DE・DF-103グリッドに位置している。第138号住居跡の下位に確認した。多数の遺構と重複している。

＜重複＞ 第74・79・91・97・138号住居跡より古く、第306号土墳より新しい。第136A・136B号住居跡との新旧関係は不明である。

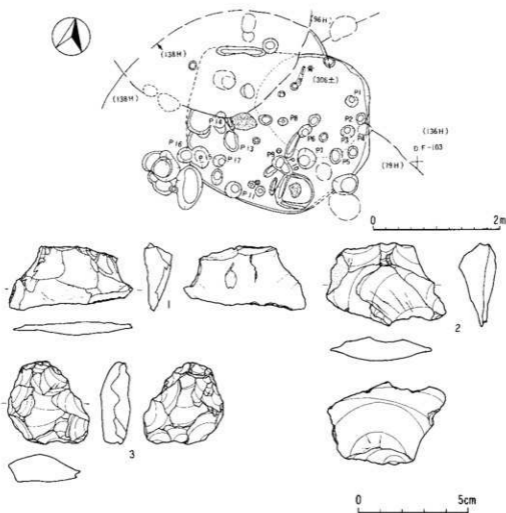
＜平面形・規模＞ 検出した部分から、平面形は楕円形を呈し、短軸2m40cm、長軸3m前後の規模と推定される。

＜壁・床面＞ 重複が激しく、わずか数cm程度の壁高を検出したにすぎない。床面は第138号住居跡のものと、高低差はあまり認められなかった。

＜壁溝＞ 検出できなかった。

＜柱穴＞ 周辺から、多数のビットを検出したが、重複が激しいため、どのビットが本住居跡に伴うか不明である。主なビットの深さは以下のとおりである。

P₁…14cm、P₂…44cm、P₃…22cm、P₄…19cm、P₅…44cm、P₇…62cm、P₈…38cm、P₉…61cm、



第329図 第139号住居跡

P₁₀…34cm, P₁₁…14cm, P₁₂…18cm, P₁₃…25cm, P₁₄…36cm, P₁₅…34cm, P₁₆…34cm, P₁₇…48cm。

〈炉〉 住居跡の中央から西に寄ったところで地床炉を検出した。北側を第91号住居跡に切られている。

〈特殊施設〉 不明である。

〈堆積土〉 不明である。

〈出土遺物〉 覆土から床面にかけて若干出土した。土器は出土しなかった。石器は、覆土から石鏃1点、不定形石器2点、石皿・台石類2点が出土した。

〈小結〉 本住居跡の時期は不明であるが、第91・138号住居跡より古いことが確かめられていることから、最花式期かそれ以前に構築されたものと思われる。 (畠山 昇)

第140号住居跡（第193図）

〈位置と確認〉 DG-102グリッドに位置している。

〈重複〉 第76・129・137号住居跡より古い。第96号住居跡との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉 平面形、規模とも不明である。

〈壁・床面〉 壁高は、セクションの観察から20cm前後である。床面は一部分を確認したにすぎないが、平坦で、堅緻である。なお、第96号住居跡とは床面が連続しており、その境界が定かではない。

〈壁溝〉 検出できなかった。

〈柱穴〉 3個のピットを検出したが、他の住居跡との重複部分にもあると思われる。しかし重複が激しく不明である。ピットの深さは、P₂…20cm、P₃…13cm、P₃₅…27cmである。

〈炉〉 地床炉を1基検出したが、北側は、調査区外へ延びている。

〈特殊施設〉 検出されなかった。

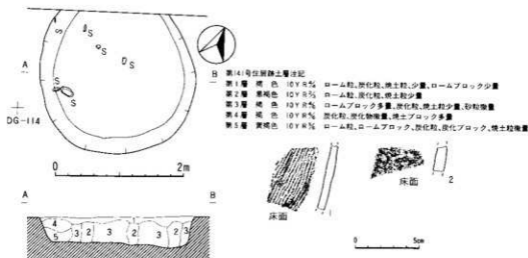
〈堆積土〉 東西を第76・129号住居跡に切られているが、黒褐色土と暗褐色土の堆積が見られた。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

〈小結〉 本住居跡の時期は不明であるが、他の住居跡との重複関係から最花式期よりは古い時期に構築されたものである。(畠山 昇)

第141号住居跡（第330図）

〈位置と確認〉 調査区域のほぼ中央の平坦部、DG-113グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で円



第330図 第141号住居跡

形の褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 北壁が調査区域外へ延びるもののほぼ円形で長軸約2m50cmであると考えられる。

<壁・床面> 壁は床面から外側にやや開きながら直線的に立ち上がる。床面は壁際を除いて貼り床が施されているものの軟質である。壁高は東壁50cm・西壁40cmである。

<壁溝> 水没のため精査不能。

<柱穴> 水没のため精査不能。

<炉> 水没のため精査不能。

<特殊施設> 水没のため精査不能。

<堆積土> 5層に分層した。層全体に焼土粒・炭化物・ローム粒を含む。人為的に埋め戻された可能性が高い。

<出土遺物> 石器は出土しなかった。

(岡田 康博)

第142号住居跡 (第331図)

<位置と確認> DB-105・106グリッドで、暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第276・277号土壌と重複しており、第276号土壌より古く、第277号土壌より新しい。

<平面形・規模> 東壁の一部がやや張り出しているが、短軸3m00cm、長軸2m10cmの楕円形で、床面積は、4.13㎡である。

<壁・床面> 壁は急に立ち上がり、壁高は各壁とも約60cm前後である。床面は、ほぼ平坦である。

<壁溝> 部分的に、幅約10cm、深さ2～4cmの壁溝を検出した。

<柱穴> 8個のピットを検出した。柱穴配置は不明である。主なピットの深さは、P₁…17cm、P₂…12cm、P₃…3cm、P₄…7cm、P₅…9cmで、浅い。

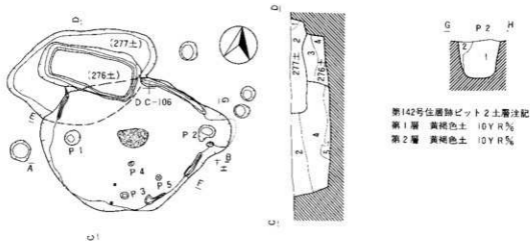
<炉> ほぼ中央に位置している。地床炉である。

<特殊施設> 東壁が半円状に張り出しており、ピット(P₂)が検出されている。ロームの盛土はが巡らされていないが、それに類する施設と思われる。

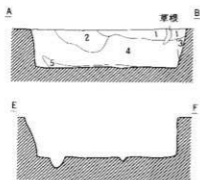
<堆積土> 下部に暗褐色土の堆積は見られるが、大部分は褐色～黄褐色土が占めており、人為堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 覆土から床面直上にかけて、椀林式・最花式土器が出土した。石器は、覆土から不定形石器1点が出土した。

<小結> 本住居跡は人為堆積と考えられるため、床面直上の土器が、本住居の時期を示すと



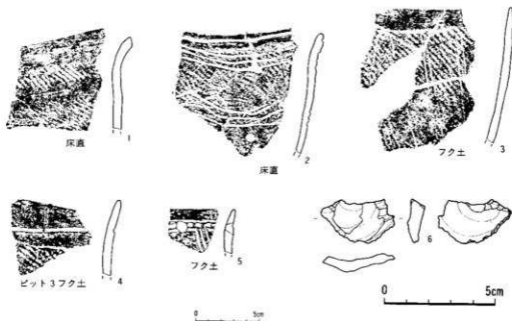
第142号住居跡ピット2土層注記
 第1層 黄褐色土 10YR%
 第2層 黄褐色土 10YR%



第142号住居跡土層注記

- | | |
|----------------|----------------|
| 第1層 褐色土 10YR% | ローム粒多量、炭化物微量含む |
| 第2層 褐色土 10YR% | ローム粒多量含む |
| 第3層 黄褐色土 10YR% | ローム質、しりなし |
| 第4層 黄褐色土 10YR% | ローム質、しりなし |
| 第5層 暗褐色土 10YR% | ローム粒微量含む |

0 2m



第331図 第142号住居跡

は限らないが、床面直上の土器から榎林式期かそれ以前に構築されたものと思われる。

(畠山 昇)

第143号住居跡 (第332・333図)

〈位置と確認〉 調査区域西端の平坦部、DA-143グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 第256号土壌と重複し、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 南北に長軸をもつ楕円形に近い洋梨形で、長軸4 m70cm・短軸4 m40cmで床面積は13.57㎡である。

〈壁・床面〉 壁は床面から外側に緩やかに湾曲しながら立ち上がる。床面は壁溝の内側に貼り床が施され、軟質である。壁高は東壁18cm・西壁12cm・南壁10cm・北壁16cmである。

〈壁溝〉 南壁の膨らみ部分で2か所ほど途切れるものの全周する。幅約10cm、深さ約4～17cmである。

〈柱穴〉 床面から4個の支柱穴と壁溝内から検出された。深さはP₁…8cm、P₂…11cm、P₃…14cm、P₄…10cmである。

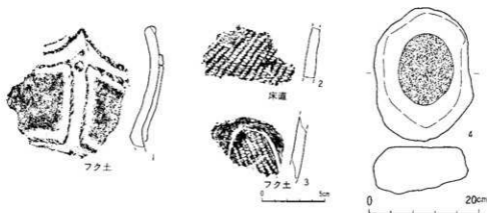
〈炉〉 床面の長軸線上の南壁寄りに石囲炉が構築されている。規模は一辺約40cmで、ほぼ方形である。

〈特殊施設〉 長軸線上の石囲炉に隣接してピットが検出された。規模は長径80cm、短径70cmで、楕円形に近い。少なくともこの小ピットは石囲炉構築以前のものである。

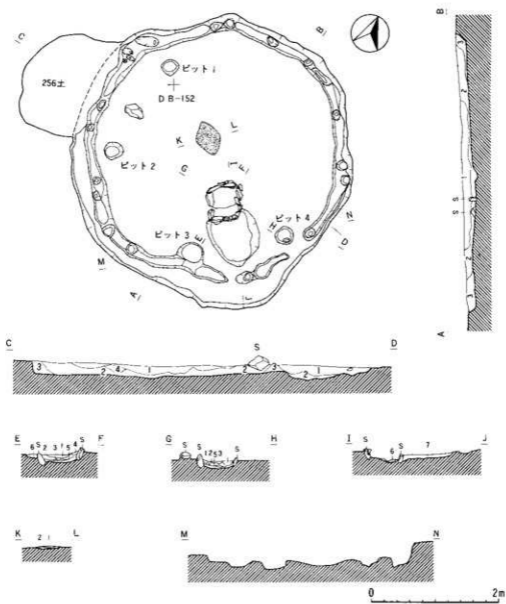
〈堆積土〉 4層に分層した。層全体にローム粒子を含む。自然堆積である。

〈出土遺物〉 石器は、覆土から石皿・台石が1点出土した。

(岡田 康博)



第332図 第143号住居跡(1)



- 第143号住居跡土層注記
- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 第1層 黒褐色 10Y R $\frac{5}{2}$ | ロームブロック、焼土粒少量 |
| 第2層 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$ | ローム少量 |
| 第3層 黄褐色 10Y R $\frac{5}{6}$ | |
| 第4層 黒褐色 10Y R $\frac{3}{2}$ | ローム粒微量 |

- 第143号住居跡内炉土層注記
- | | |
|---------------|------------------|
| 第1層 黒褐色 10Y R | ロームブロック多量 |
| 第2層 暗褐色 10Y R | |
| 第3層 褐色 7.5Y R | |
| 第4層 褐色 10Y R | |
| 第5層 褐色 7.5Y R | ロームブロック、焼土ブロック多量 |
| 第6層 暗褐色 10Y R | |
| 第7層 暗褐色 10Y R | ローム粒微量 |

- 第143号住居跡内灰土層注記
- | | |
|-----------------------------|-----------|
| 第1層 褐色 7.5Y R $\frac{5}{4}$ | 焼土ブロック少量 |
| 第2層 暗褐色 10Y R $\frac{3}{4}$ | ロームブロック少量 |

第333図 第143号住居跡(2)

第144号住居跡（第334図）

<位置と確認> DD・DE-106・107グリッドに位置する。第71号B住居跡の下部で、貼り床を確認した。

<重複> 第71号A・B住居跡より古く、第145号・161号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 平面形及び規模は不明であるが、確認した床面の範囲は、短軸2m80cm、長軸4m70cm前後で、東西に長い。

<壁・床面> 南壁の一部だけ確認した。壁高は4cm前後で浅い。貼り床は不整形に検出された。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 21個検出したが、周辺にも多数検出されているため、柱穴配置は不明である。

<炉> 貼り床の中央部から、やや西に寄ったところで、径10cm前後の大きさの焼土・床面が焼けた部分を検出した。炉の可能性が考えられる。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 掘り込みが浅く、堆積状況は不明である。

<出土遺物> 床面から不定形石器2点、磨製石斧1点が出土しただけである。

<小結> 本住居の時期は不明であるが、新旧関係から円筒上層d式期かそれ以前が考えられる。
(畠山 昇)

第145号住居跡（第335図）

<位置と確認> DD-106グリッドに位置する。第71号B住居跡の下部で、貼り床を確認し、第145号住居跡とした。

<重複> 第71号A・B住居跡より古く、第144号・161号住居跡より新しい。

<平面形・規模> 平面形及び規模は不明であるが、確認した床面の範囲は、短軸1m、長軸2m10cm前後である。

<壁・床面> 東壁の一部だけ確認した。壁高は5cm前後で浅い。貼り床は若干の凹凸が見られるが、ほぼ平坦である。

<壁溝> 検出されなかった。

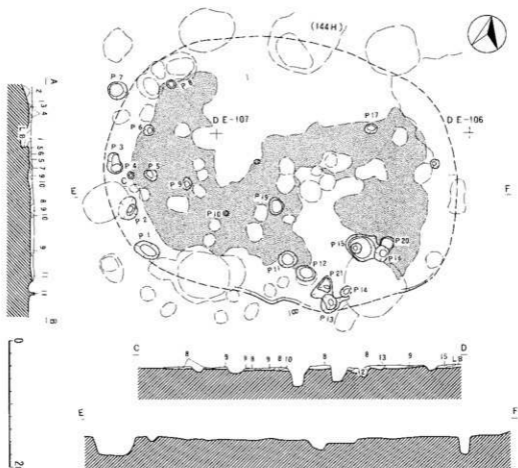
<柱穴> この段階では、ピットを2個検出した。ピットの深さはP₁…24cm、P₂…36cmである。

<炉> 検出されなかった。

<特殊施設> 検出されなかった。

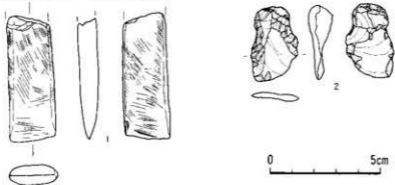
<堆積土> 堆積状況は不明である。

<出土遺物> 遺物は出土しなかった。

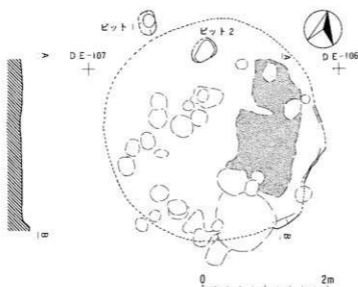


第144号住居跡土層表記

- | | | | |
|--------------------|--------------------|---------------------|-------------|
| 第1層 暗褐色土 10Y R 7/ | ローム粒少量含む | 第9層 褐色土 10Y R 6/ | |
| 第2層 褐色土 10Y R 6/ | | 第10層 黄褐色土 10Y R 4/ | |
| 第3層 黄褐色土 10Y R 5/ | ロームと黒色土の混合 | 第11層 褐色土 10Y R 6/ | |
| 第4層 褐色土 10Y R 6/ | ロームブロック少量含む | 第12層 褐色土 10Y R 6/ | ロームブロック少量含む |
| 第5層 褐色土 10Y R 6/ | ロームと黒色土の混合 | 第13層 暗褐色土 7.5Y R 7/ | 焼土塊多量含む |
| 第6層 暗褐色土 10Y R 7/ | 焼土塊少量, ロームブロック少量含む | 第14層 褐色土 10Y R 6/ | 焼土塊少量含む |
| 第7層 明褐色土 7.5Y R 7/ | 焼土粒多量含む | 第15層 褐色土 10Y R 6/ | 焼土少量含む |
| 第8層 褐色土 10Y R 6/ | ロームブロック少量含む | | |



第334図 第144号住居跡



第335図 第145号住居跡

＜小結＞ 本住居の時期は不明であるが、第71号B住居跡の下位に位置していることから、円筒上層d式期かそれ以前である。

(島山 昇)

＜位置と確認＞ C Y・C Z-102・103グリッドに位置し、第20号住居跡の床面下で確認した。

＜重複＞ 第20・50・147号住居跡、第12号土壇と重複して、第20号住居跡、第12号土壇より古く、第50・148号住居跡より新しい住居跡である。

＜平面形・規模＞ 検出された東・南壁及び西壁の一部から長軸8.1m、短軸4.9mの楕円形と考えられる。床面積は28.73㎡である。

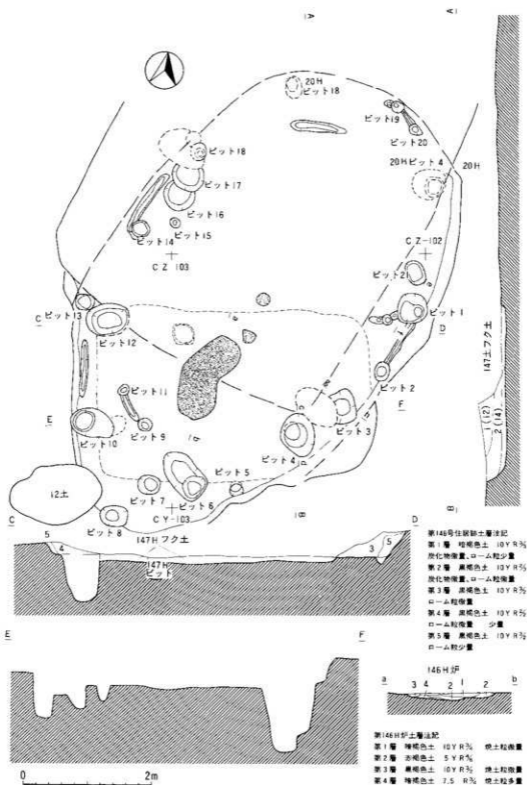
＜壁・床面＞ 第IV層を壁面として、緩やかな立ち上がりである。壁高は東壁38cm、西壁14cm、南壁14cmである。床面はほぼ平坦である。

＜壁溝＞ 東・西壁の一部で検出された。幅は15～20cm、深さ4～12cmである。また住居跡の内側で北と南側でも検出された。幅12～18cm、深さ12～20cmである。

＜柱穴＞ ピットは床面、床下から大小合わせて21個検出した。主柱穴はP₄・P₆・P₁₀・P₁₂・P₁₆・P₂₁と第20号住居跡P₄・P₁₈と考えられる。各ピットの深さは、P₁…81cm、P₂…16cm、P₃…75cm、P₄…74cm、P₅…63cm、P₆…83cm、P₇…41cm、P₈…28cm、P₉…24cm、P₁₀…57cm、P₁₁…18cm、P₁₂…80cm、P₁₃…28cm、P₁₄…26cm、P₁₅…6cm、P₁₆…16cm、P₁₇…19cm、P₁₈…100cm、P₁₉…16cm、P₂₀…7cm、P₂₁…78cmである。

＜炉＞ 住居跡の中央からやや南側には、70×60cmの不整な地床炉を付設している。また、その南側で焼土が2基検出され、直径20cm程の円形を呈する。

＜特殊施設＞ 確認されなかった。

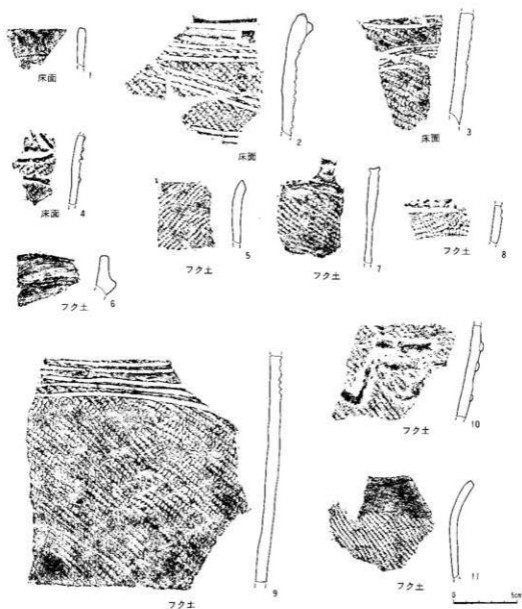


第336図 第146号住居跡(1)

- 第146Hピット1
 第1層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒少量
 第2層 黄褐色土 10Y R 3/5 ローム粒微量
 第3層 暗褐色土 10Y R 3/5
 第4層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒少量

- 第146Hピット4
 第1層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒微量
 第2層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒多量

- 第146Hピット3
 第1層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒微量
 第2層 暗褐色土 10Y R 3/5 ローム粒多量
 第3層 黄褐色土 10Y R 3/5 ローム粒微量

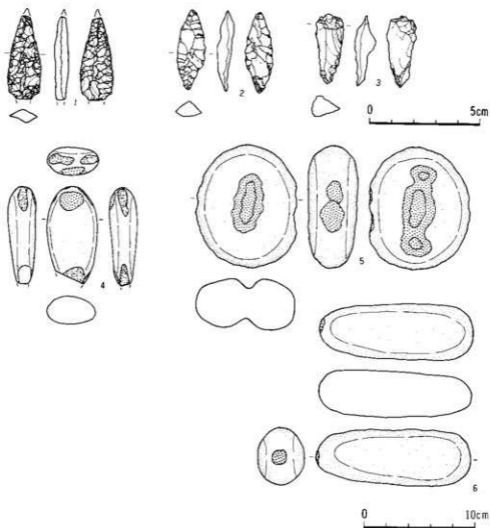


第337図 第146号住居跡(2)

<堆積土> 確認された堆積土は壁際で5層に分層した。

<出土遺物> 土器は床面・床面直上から(1~4)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から敵磨器類1点、覆土から石鏃2点、石錐1点、敵磨器類2点が出土した。

<小結> 床面出土の土器から榎林式期の住居跡と考えられる。 (長崎 勝巳)



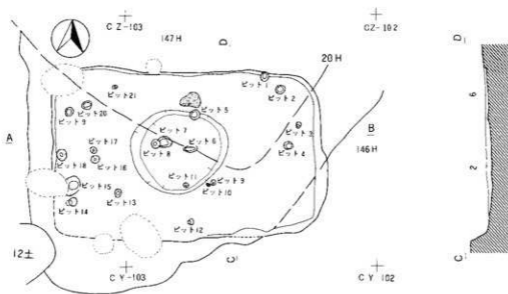
第338図 第146号住居跡(3)

第147号住居跡 (第339・340図)

<位置と確認> CY-102・103グリッドに位置する。

<重複> 第20・146号住居跡と重複し、本住居跡はこれらの住居跡より古い。

<平面形・規模> 長軸4 m20cm、短軸2 m70cmの隅丸長方形を呈する。床面積は10.26㎡であ



第146-147号住居跡土層注記

- 第1層 黄褐色土 10 Y R % 146H 貼床
- 第2層 褐色土 10 Y R % ローム粒多量
- 第3層 褐色土 10 Y R % ローム粒微量
- 第4層 赤褐色土 5 Y R % 146H 炉
- 第5層 黄褐色土 10 Y R %
- 第6層 黒褐色土 10 Y R % ローム粒微量



第339図 第147号住居跡(1)

る。

〈壁・床面〉 他の遺構との重複が残っている壁の高さは2～6cm程である。床面は第IV層を掘り込んで床面としている。床面中央部に直径140cmのすり鉢状の落ち込みが検出された。縁辺部から中央部にかけて13cm程落ち込んでいる。

〈壁溝〉 確認されなかった。

〈柱穴〉 床面から大小合わせて21個のピットが検出された。各ピットの深さはP₁…21cm, P₂…22cm, P₃…23cm, P₄…15cm, P₅…15cm, P₆…5cm, P₇…6cm, P₈…31cm, P₉…5cm, P₁₀…3cm, P₁₁…4cm, P₁₂…7cm, P₁₃…10cm, P₁₄…15cm, P₁₅…38cm, P₁₆…6cm, P₁₇…5cm, P₁₈…15cm, P₁₉…8cm, P₂₀…5cm, P₂₁…3cmである。

〈炉〉 住居跡中央部北側で35cm×20cmの不整の地床炉を検出した。

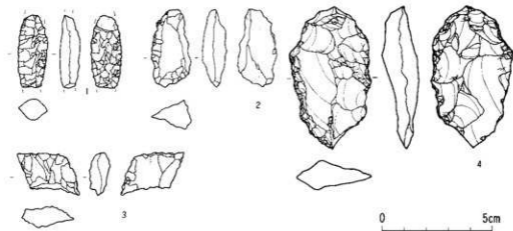
〈特殊施設〉 確認されなかった。

〈堆積土〉 6層に分層されたが、1～4層は第146号住居跡の貼り床部分と焼土の部分と考えられる。

〈出土遺物〉 土器は床面から(1～3)が出土し、他は覆土からの出土である。石器は床面から石鏃1点、不定形石器1点、P₂から不定形石器1点、覆土から不定形石器2点が出土した。

〈小結〉 本住居跡の中央部にある落ち込みは、床面積の3分の1程を占める。

(長崎 勝巳)



第340図 第147号住居跡(2)

第148号住居跡 (第341図)

〈位置と確認〉 DB-103グリッドに位置する。

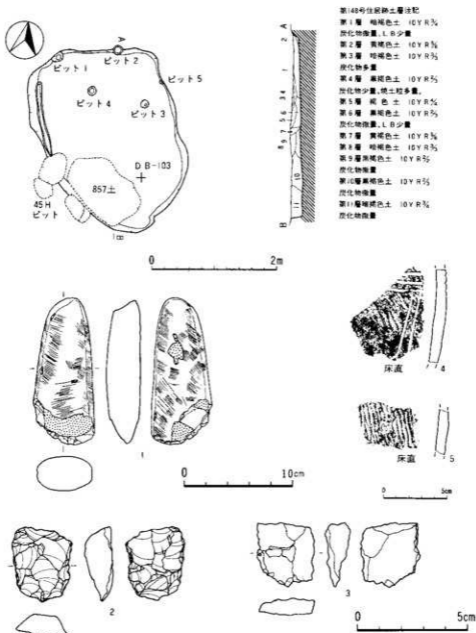
〈重複〉 第45号住居跡・第857号土壌と重複し、本住居跡は第45号住居跡より古く、第857号

土壌との新旧関係は不明である。

<平面形・規模> 長軸3m、短軸2.2mの不整楕円形を呈する。床面積は4.77㎡である。

<壁・床面> 重複が残っている壁の高さは14cm程である。床面はやや起伏があり、壁際が低くなっている。

<壁溝> 確認されなかった。



<柱穴> 床面から5個のピットが検出された。各ピットの深さは、P₁…44cm、P₂…34cm、P₃…7cm、P₄…16cm、P₅…3cmである。

<炉> 確認されなかった。

<特殊施設> 確認されなかった。

<堆積土> 11層に分層され、堆積状況及びロームの混入の状況から人為堆積と考えられる。

<出土遺物> 土器は床直から(1・2)が出土した。石器は床直から磨製石斧1点、覆土から不定形石器2点出土した。

<小結> 第45号住居跡が榎林式期と考えられるため、本住居跡はそれ以前のものと考えられる。
(長崎 勝巳)

第149号住居跡(第342～346図)

<位置と確認> 調査区のほぼ中央の平坦地DF-98、99グリッドに位置している。第III層下面で暗褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第127号、154号、171号住居跡、第394号土壌より新しく、第126号、150号、153号住居跡より古い。

<平面形・規模> 重複により明確ではないが、残存部から推測すると楕円形で、径5～6mと思われる。

<壁・床面> 残存する壁はほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。壁高は10～30cm程である。床面の一部は第154号住居跡と重複していると思われるが、平坦で堅緻である。

<壁溝> 途切れる部分もあるが壁の直下に認められた。幅12～31cmで、床面からの深さは3cm程である。

<柱穴> 主柱穴は配置から考えてP₇、P₈、P₉の可能性が高い。ピットの深さはP₇…80cm、P₈…80cm、P₉…91cmである。

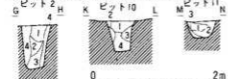
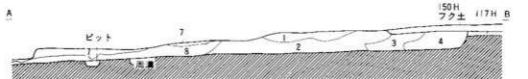
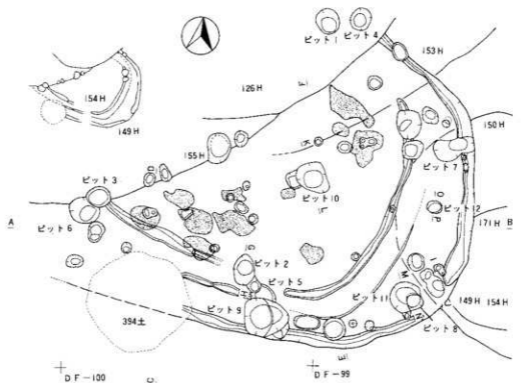
<炉> 床面上には11個の焼土が認められた。いずれも焼土の厚さが5～10cm程である。

<特殊施設> 残存部には認められなかった。

<堆積土> 覆土全体に炭化物を含む。人為的堆積の可能性が高い。

<出土遺物> 土器は床面直上から榎林式土器が出土している。石器は床面直上から石棒1点、覆土から石鏃11点、石槍1点、ピエス・エスキーユ1点、不定形石器11点、敲磨器類5点、石皿・台石類1点、石棒2点の総数33点出土した。

<小結> 構築時期は、榎林式期の可能性が高い。
(三浦 孝仁)



- 第149、154号住居跡ピット2土層注記
 第1層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 5mm炭化材B少量
 第2層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 5-10mm炭化材まばら
 第3層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 5mm炭化材少量
 第4層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 5mm炭化材少量
 第5層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 5-15mm L B中量
 第6層 暗褐色 10 Y R 5/2 焼土粒中量
 第7層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 10mm炭化材少量
 第8層 暗褐色 10 Y R 5/2 炭化材少量
 第9層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 10-20mm炭化材まばら、154Hフク土

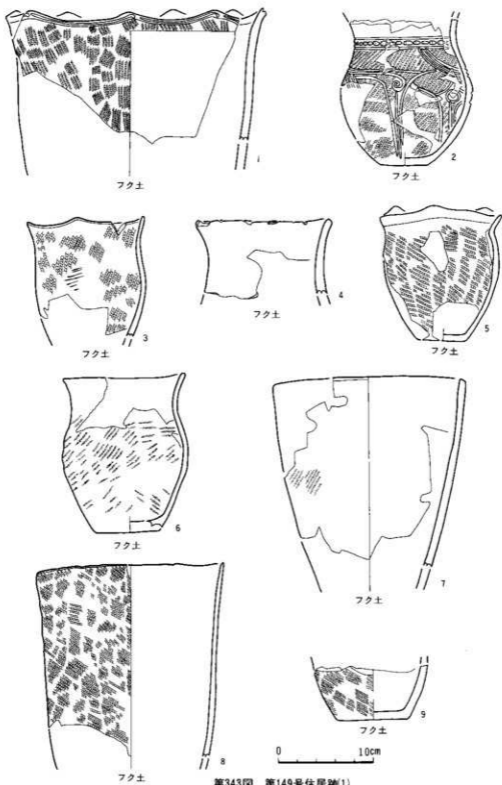
- 第149、154号住居跡ピット12土層注記
 第1層 暗褐色 10 Y R 5/2

- 第148、154号住居跡ピット8土層注記
 第1層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 10-20mm L B少量
 第2層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 10-20mm L B中量
 第3層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 10-20mm L B少量
 第4層 暗褐色 10 Y R 5/2

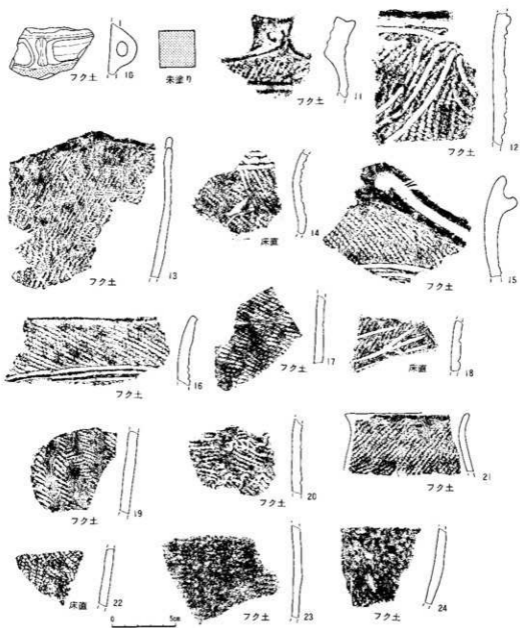
- 第149、154号住居跡ピット8土層注記
 第1層 暗褐色 10 Y R 5/2 炭化材少量
 第2層 暗褐色 10 Y R 5/2 コーム質土
 第3層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 5-20mm L B少量
 第4層 暗褐色 10 Y R 5/2 # 10mm L B中量

- 第149、154号住居跡ピット11土層注記
 第1層 暗褐色 10 Y R 5/2 コーム粒少量
 第2層 暗褐色 10 Y R 5/2 コーム粒中量
 第3層 暗褐色 10 Y R 5/2 コーム質土

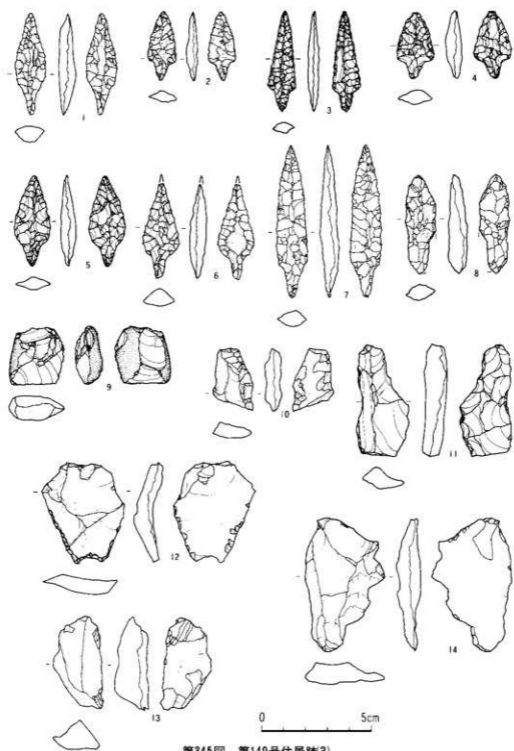
第342図 第149・154号住居跡



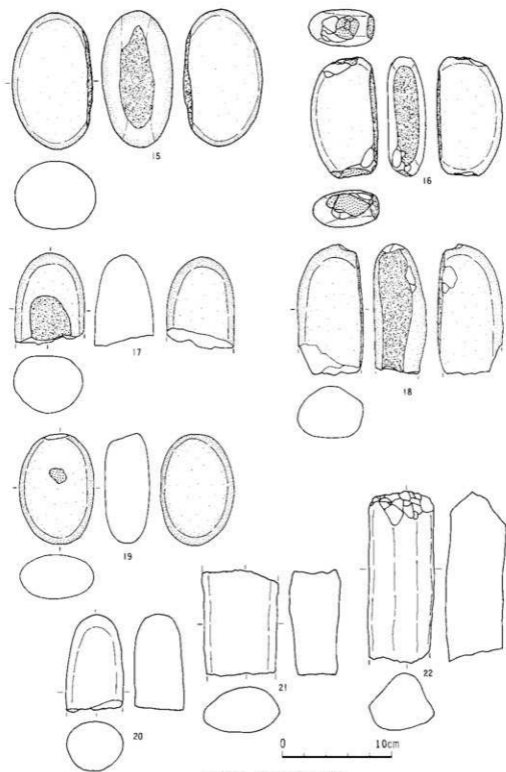
第343図 第149号住居跡(1)



第344図 第149号住居跡2)



第345图 第149号住居跡3)



第346图 第149号住居跡(4)

第150号住居跡 (第347・348図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央でD F-97, 98グリッドに位置している。粗掘中に本住居跡の床面の一部を確認した。

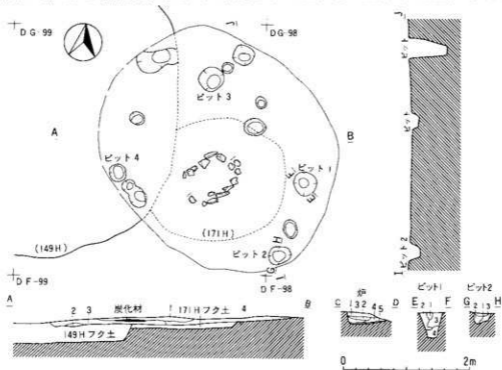
〈重複〉 第149号, 171号住居跡と重複しており, 本住居跡はいずれの住居跡より新しい。

〈平面形・規模〉 ほとんど壁が確認できずに平面形, 規模ともに明確でないが, 床面の広がりから推測すると長軸2m, 短軸1m65cmの楕円形と思われる。推定床面積は11.05㎡である

〈壁・床面〉 壁はほとんど確認できなかった。床面は貼り床がなされ堅緻に造られている。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 本住居跡の床面から13個のビットを確認した。配置, 規模等からP₁, P₃, P₄が支柱穴の一部である可能性が高い。ビットの深さはP₁…45cm, P₂…16cm, P₃…52cm, P₄…8cm



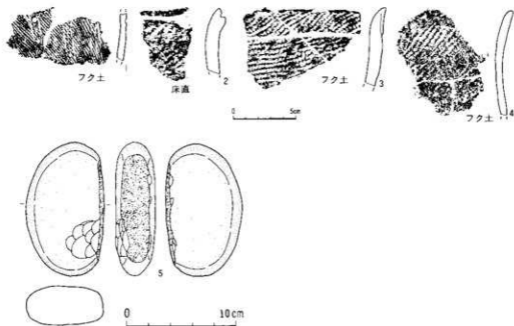
- 第150号住居跡土層注記
- 第1層 黄褐色 10Y R 5/6 φ10~20㎝炭化材まばら
 - 第2層 黄褐色 10Y R 5/6 φ10㎝炭化材中量
 - 第3層 黄褐色 10Y R 5/6 炭化材微量
 - 第4層 暗褐色 10Y R 3/6 焼土微量

- 第150号住居跡伊土層注記
- 第1層 暗褐色 10Y R 3/6 φ5㎝炭化材所々
 - 第2層 暗褐色 10Y R 3/6 焼土粒少量
 - 第3層 明赤褐色 5Y R 3/6 焼土
 - 第4層 暗褐色 10Y R 3/6 炭化材微量
 - 第5層 褐色 10Y R 4/6 焼土粒少量

- 第150号ビット1土層注記
- 第1層 黄褐色 10Y R 5/6 ローム粒少量
 - 第2層 暗褐色 10Y R 3/6 ローム粒少量
 - 第3層 暗褐色 10Y R 3/6 ローム粒少量
 - 第4層 黄褐色 10Y R 5/6 ローム粒微量

- 第150号ビット2土層注記
- 第1層 黄褐色 10Y R 5/6 ローム粒極微量
 - 第2層 黄褐色 10Y R 5/6 ローム粒少量
 - 第3層 暗褐色 10Y R 3/6 ローム粒多量

第347図 第150号住居跡(1)



第348図 第150号住居跡(2)

である。

〈炉〉 炉石がコの字状に配置された石囲炉である。中央から若干ずれて1基認められた。第2層下面が火床面である。規模は長軸78cm、短軸70cm、深さ20cmである。

〈特殊施設〉 認められなかった。

〈堆積土〉 東西を4つに細分したが、所々炭化材等を含む。人為的堆積の可能性が高い。

〈出土遺物〉 土器は小片のみであるが、床面直上から榎林式土器が出土している。石器は床面直上から石皿・台石類1点、炉から敲磨器類1点が出土している。

〈小結〉 床面直上からの土器から構築時期は、榎林式期の可能性が高い。(三浦 孝仁)

第151号住居跡 (第349図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央の平坦地のDG-97、98グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で暗褐色土の不整な落ち込みを確認した。

〈重複〉 第152号、153号住居跡と重複しており、第152号住居跡より新しく、第153号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 重複と調査区域外にプランの大部分が位置するため、平面形は判然としないが、残存部から推察すると南北に長い方形の可能性が高い。

〈壁・床面〉 残存部の壁はほぼ垂直に立ち上がり堅緻な構築である。壁高は25cm程である。床面は所々貼り床がなされ、平坦で堅緻である。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 Pは切り合いの関係から本住居跡の主柱穴の可能性もあるが、明確でない。

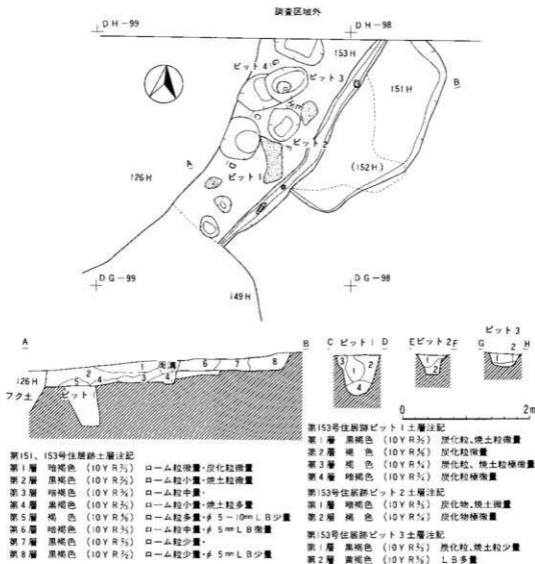
〈炉〉 残存部からは認められなかった。

〈特殊施設〉 残存部からは認められなかった。

〈堆積土〉 3層に分層したが、各層ともに締まりがある。人為的堆積の可能性が高い。

〈出土遺物〉 遺物は出土していない。

(三浦 孝仁)



第349図 第151、153号住居跡

第152号住居跡 (第350図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央でDG-97、98グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で暗褐色土の不整な落ち込みを確認した。

〈重複〉 第151号、153号住居跡と重複しており、本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉 重複から明確な平面形、規模は不明である。

〈壁・床面〉 残存部の壁はほとんど垂直に立ち上がり比較的堅緻である。第151号住居跡の床面からの壁高は10cm程である。床面は平坦であるが軟弱である。

〈壁溝〉 認められなかった。

〈柱穴〉 第152号住居跡の床面には認められなかった。

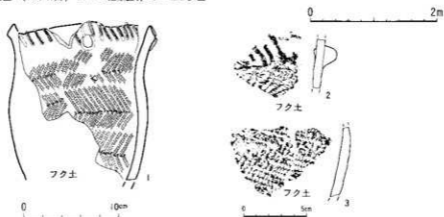
〈炉〉 残存部からは認められなかった。

〈特殊施設〉 残存部の東側で特殊施設の可能性がある張り出し部が認められた。張り出しの規模は長軸65cm、短軸60cm、床面から4～5cm高くなっている。



第152号住居跡土層注記

第Ⅰ層 暗褐色土 (10YR 5/2) ローム粒微量、 ϕ 5mm L B少量



第350図 第152号住居跡

〈堆積土〉 本住居跡の堆積土は薄く、人為的堆積か自然的堆積か判断できない。

〈出土遺物〉 床面から遺物は出土しなかった。土器は覆土から円筒上層d式土器が出土している。石器は出土していない。 (三浦 孝仁)

第153号住居跡 (第349・351図)

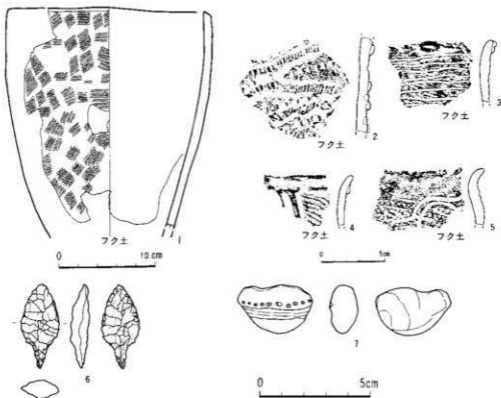
〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央でDG-98グリッドに位置している。第Ⅲ層下面で暗褐色土の不整な落ち込みを確認した。

〈重複〉 第126号、149号、151号、152号住居跡と重複しており、本住居跡は第149号、151号、152号住居跡より新しく、第126号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 重複等により平面形、規模ともに明確には判断できない。残存部から長方形の可能性が考えられる。

〈壁・床面〉 重複等により壁の一部しか認められないが、残存部の壁はほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。床面は平坦で堅緻である。

〈壁溝〉 残存する東壁～南壁にかけて幅14～30cm、深さ5～9cmの壁溝が壁直下に認められ



第351図 第153号住居跡

た。所々に小ピットが認められ、壁柱穴と思われる。

〈柱穴〉 ピットが7箇所確認された。主柱穴の配置等は不明である。ピットの深さはP₁…69cm、P₂…21cm、P₃…38cmである。

〈炉〉 焼土が3か所確認された。

〈特殊施設〉 残存部には認められない。

〈堆積土〉 覆土の下層に焼土を多量に含む。人為的堆積と思われる。

〈出土遺物〉 床面からの遺物の出土はなかった。土器は覆土から円筒上層c式土器、円筒上層e式土器、椀形式土器が出土している。石器は覆土から石鏃が1点出土している。

(三浦 孝仁)

第154号住居跡 (第342図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央でDF-98・99グリッドに位置している。第149号住居跡の床面を精査中に第149号住居跡の貼り床の下に黒褐色の覆土を確認した。

〈重複〉 第126号、149号、155号住居跡と重複しており、本住居跡はいずれの住居跡よりも古い。

〈平面形・規模〉 重複のため壁を確認できなく明確ではないが、壁溝から推測すると隅丸長方形の可能性が高い。

〈壁・床面〉 壁は重複によりほとんど残存していない。床面は一部第149号住居跡と重複した可能性があり極めて堅緻である。

〈壁溝〉 一部は本住居跡の壁下に沿って、また一部は壁から40～50cm離れて壁と平行した壁溝が確認された。改築による可能性が高い。

〈柱穴〉 改築前はP₁～P₃が主柱穴の可能性があり、改築後はP₄～P₆が主柱穴の可能性が高い。ピットの深さはP₁…100cm、P₂…81cm、P₃…53cm、P₄…60cm、P₅…40cm、P₆…58cmである。

〈炉〉 重複により確実に本住居跡の炉と思われるものは確認できなかった。

〈特殊施設〉 残存部には認められない。

〈堆積土〉 重複によりほとんど堆積していない。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。

(三浦 孝仁)

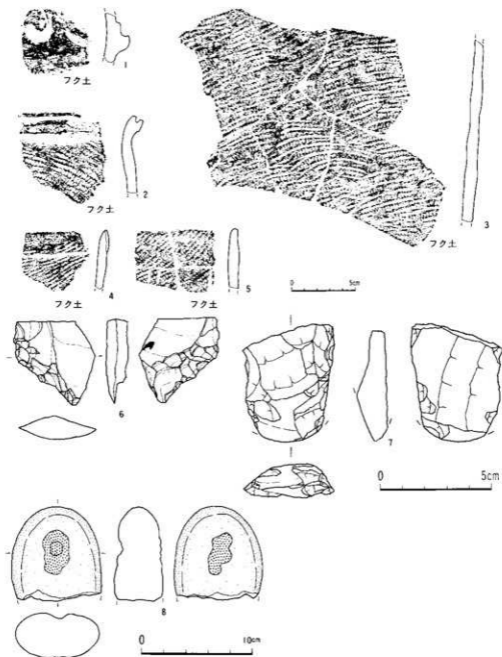
第155号住居跡 (第352図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央でDF-99グリッドに位置している。第149号住居跡を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第126号、149号、156号住居跡と重複しており、本住居跡は第149号住居跡よりも新しく、第126号、156号住居跡より古い。

<平面形・規模> 重複により平面形、規模ともに不明である。

<壁・床面> 第149号住居跡の床面からの壁高は6～15cm程しか確認できなかったが、ほぼ垂



第352図 第155号住居跡

直に立ち上がり堅緻である。残存部の床面は平坦である。

〈壁溝〉 残存部には認められなかった。

〈柱穴〉 支柱穴の配置等は確認できなかった。

〈炉〉 残存部には認められなかった。

〈特殊施設〉 残存部には認められなかった。

〈出土遺物〉 覆土中からすべて榎林式土器が出土した。石器は覆土から不定形石器1点、磨製石斧1点、敵磨器類1点、石皿1点、総数4点出土した。

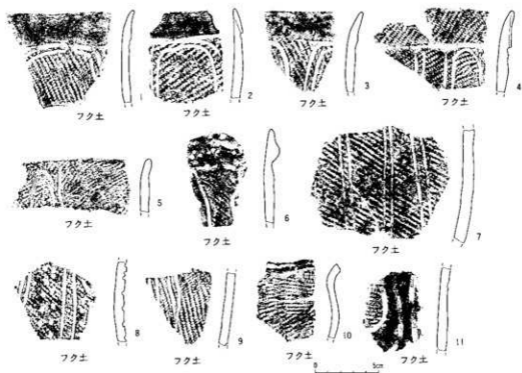
〈小結〉 床面から時期を判断する土器が出土していないが、覆土からすべて榎林式土器が出土したことから、本住居跡の構築時期は円筒上層e式期または榎林式期の可能性が高い。

(三浦 孝仁)

第156号住居跡 (第353・354図)

〈位置と確認〉 調査区のほぼ中央のDF-99、100グリッドに位置している。第149号、155号住居跡を精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

〈重複〉 149号、155号住居跡より新しく、第126号住居跡より古い。



第353図 第156号住居跡(1)

〈平面形・規模〉 平面形、規模ともに重複及び大部分が調査区域外にプランが位置しているため明確ではない。残存部から推測すると楕円形の可能性が高い。

〈壁・床面〉 第149号、155号住居跡の床面からの壁高は6～10cm程しか確認できなかったが、ほぼ垂直に立ち上がり堅緻である。床面は若干北側に傾斜しているが堅緻である。

〈壁溝〉 特殊施設の西側に壁溝の可能性がある溝を確認した。深さは10cm程である。

〈柱穴〉 残存部の床面から多数のビットが認められたが、P₁とP₂は配置、深さ等から支柱穴の可能性が高い。ビットの深さはP₁…87cm、P₂…36cm、P₃…36cm、P₄…52cm、P₅…90cmである。

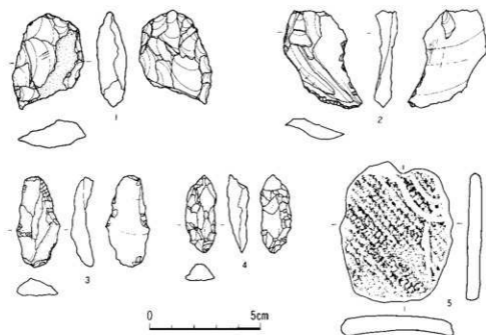
〈炉〉 残存部には認められなかった。

〈特殊施設〉 本住居跡の南側に特殊施設の可能性がある落ち込みが認められた。長軸100cm、短軸85cm、床面からの深さは2～13cm程である。

〈堆積土〉 上層に比較的炭化物を多く含む。人為的堆積の可能性が高い。

〈出土遺物〉 覆土からわずかに最花式土器、弥栄平(1)式土器が出土している。石器は覆土から不定形石器6点出土している。また覆土から土器片利用製品が1点出土している。

(三浦 孝仁)



第354図 第155号住居跡(2)

第157号住居跡 (第355～364図)

〈位置と確認〉 調査区CZ・DA-136・137・138グリッドに位置している。調査区西側の緩斜面で第Ⅲ層を精査中に本住居跡を確認した。

〈重複〉 第397・846号土壌と重複し、新旧関係は本住居跡が新しい。

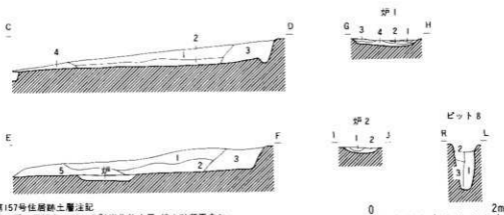
〈平面形・規模〉 北側部分は壁のみで、壁は確認できなかったが、残存部から推定すると隅丸長方形を呈する。規模は、長軸10m50cm・短軸(4m40cm)・床面積(39.15m²)の大型住居跡である。

〈壁・床面〉 北壁は確認できなかったが、上端から床面にかけて傾斜しており堅緻な造りである。壁高は、東壁33cm・西壁21cm・南壁22cm・北壁は不明である。床面は、西側部分がやや傾斜し、他はほぼ平坦で貼り床を呈し固い造りである。

〈壁溝〉 住居跡の北側と南側から検出し、溝は途切れている。規模は幅15cm～20cm・深さ6cmを測る。

〈柱穴〉 ビットは15個検出された。P₁₁～P₁₅は特殊施設の項目で記載する。他の10個のビットは配置等から柱穴と思われる。P₁・P₂・P₅・P₇・P₈・P₉の6本が主柱穴に使用している。ビットの深さは、P₁…66cm, P₂…75cm, P₃…11cm, P₄…16cm, P₅…62cm, P₆…62cm, P₇…67cm, P₈…65cm, P₉…72cm, P₁₀…11cmを測る。

〈炉〉 住居跡の中軸線上に東・西側に各々1個位置している。炉1は、長径109cm・短径85cm・



第157号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色 10Y R⁵/2 炭化物少量、焼土粒若干含む
- 第2層 黒褐色 10Y R⁵/2 ローム粒少量、焼土粒若干含む
- 第3層 褐色 10Y R⁵/4 ローム粒多量に含む
- 第4層 暗褐色 10Y R⁵/4 炭化物、焼土粒少量含む
- 第5層 暗褐色 10Y R⁵/4 ローム粒、焼土粒多量に含む
- 第6層 にぶい 10Y R⁵/4 ローム粒多量に含む
- 第7層 暗褐色 10Y R⁵/2 ローム粒少量含む

第157号住居跡ビット8土層注記

- 第1層 暗褐色 10Y R⁵/2 炭化物を少量含む
- 第2層 褐色 10Y R⁵/4 炭化物、ロームブロック少量含む
- 第3層 黄褐色 10Y R⁵/6 暗褐色土混入

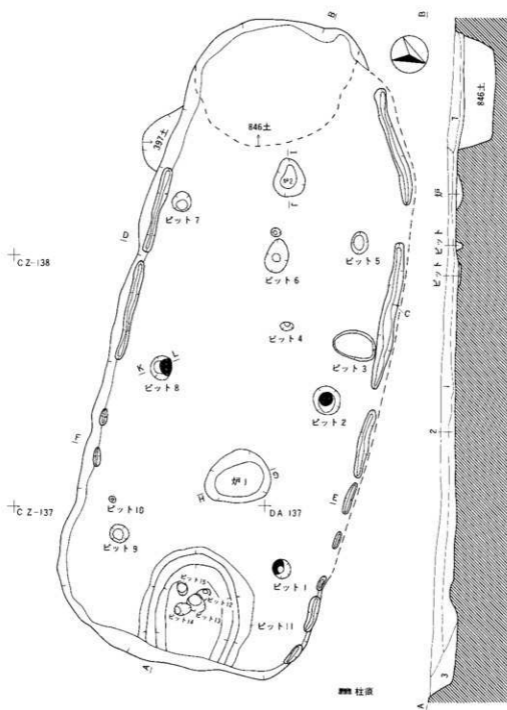
第157号住居跡炉1土層注記

- 第1層 暗褐色 10Y R⁵/2 焼土粒多量に含む
- 第2層 赤褐色 2.5Y R⁵/2 焼土粒多量、黄褐色土混入
- 第3層 暗赤褐色 2.5Y R⁵/2 焼土粒多量に含む
- 第4層 黄褐色 10Y R⁵/4 ローム粒多量に含む

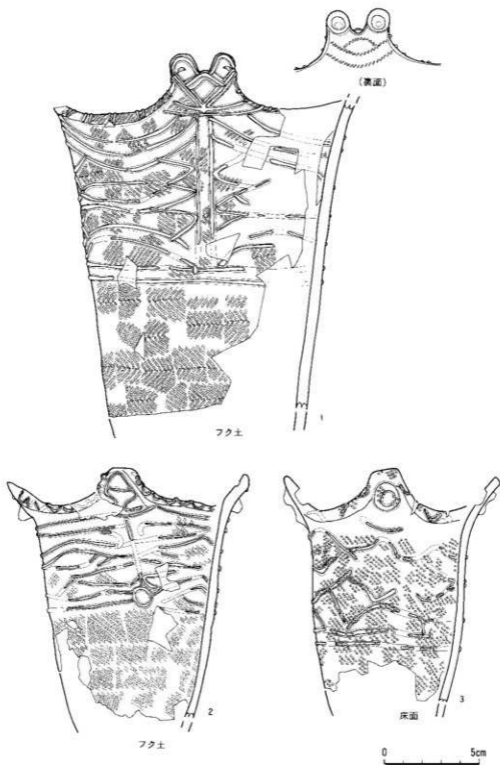
第157号住居跡炉2層注記

- 第1層 暗褐色 10Y R⁵/2 ローム粒、焼土粒少量含む
- 第2層 明赤褐色 5Y R⁵/2 焼土ブロック多量に含む

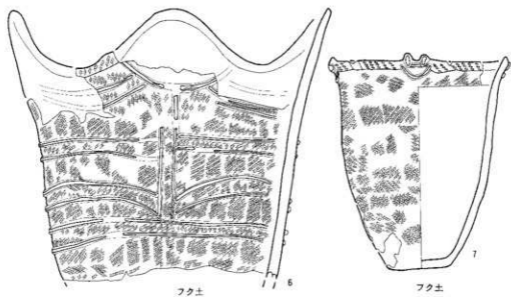
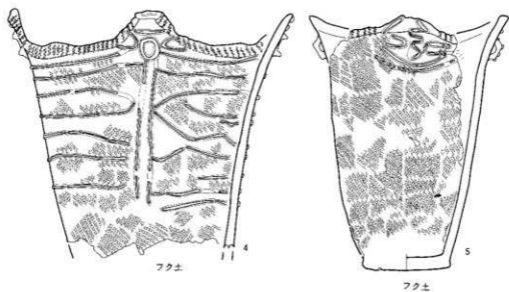
第355図 第157号住居跡(1)



第356図 第157号住居跡(2)

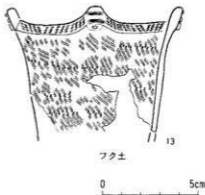
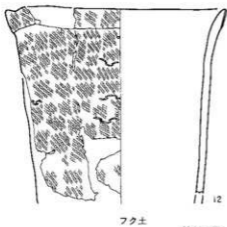
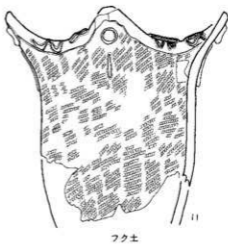
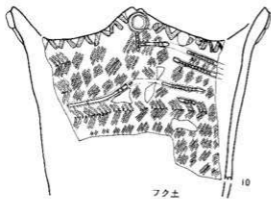
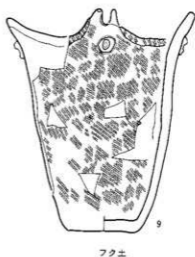
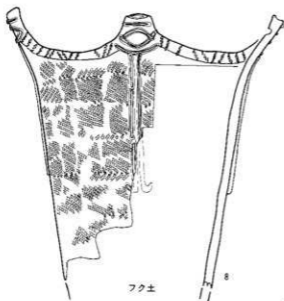


第357図 第157号住居跡(3)



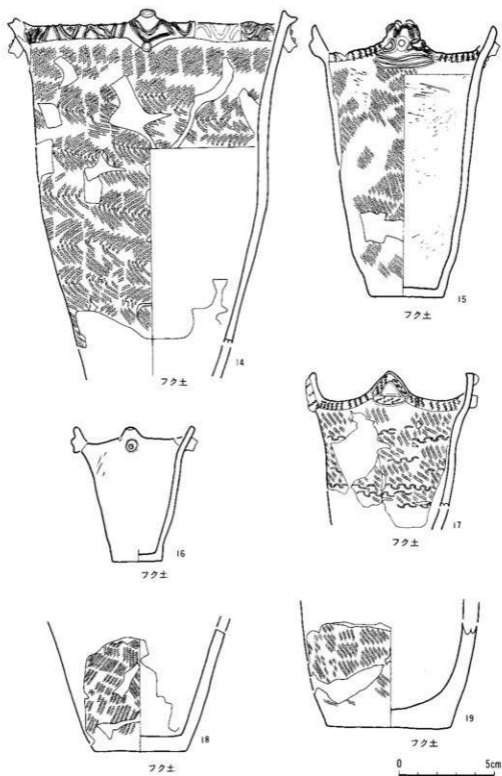
0 5cm

第358図 第157号住居跡(4)

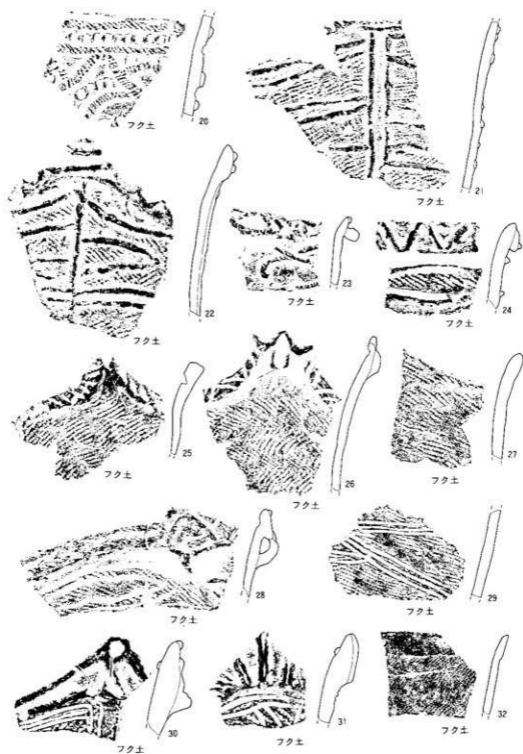


0 5cm

第359図 第157号住居跡5)

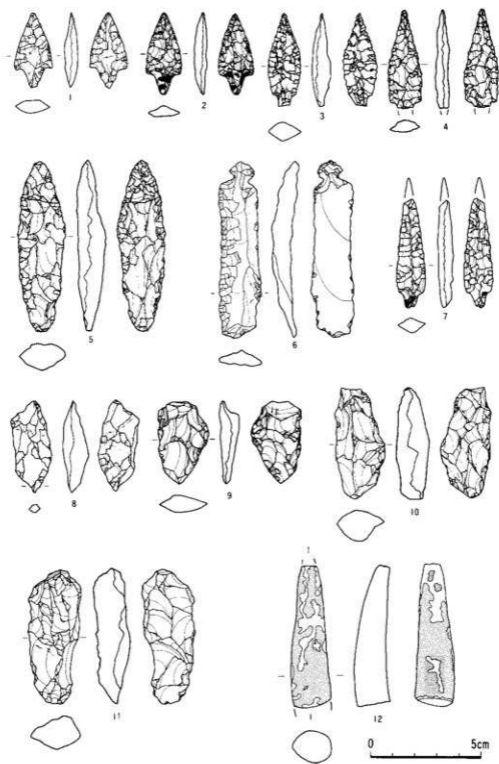


第360図 第157号住居跡(6)

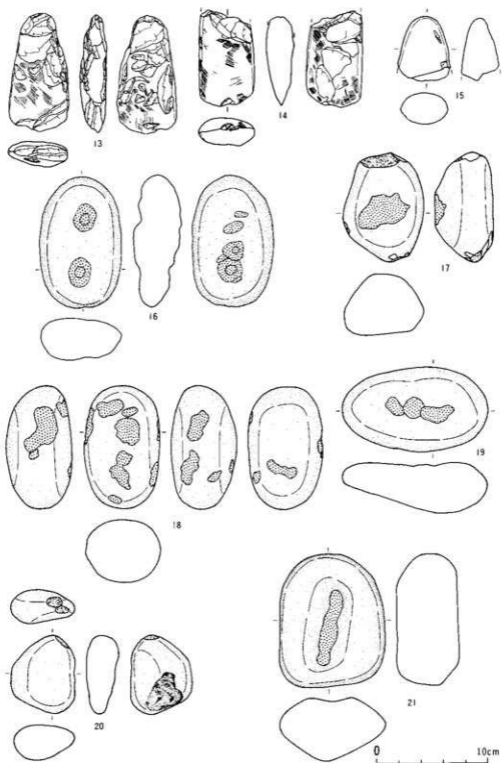


0 5cm

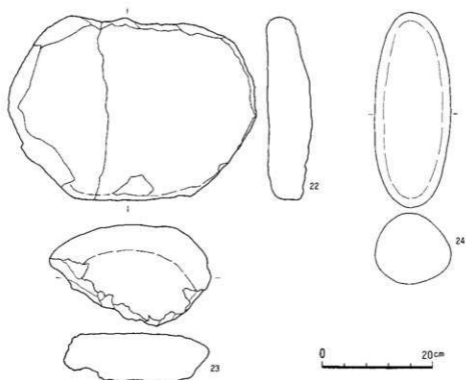
第361図 第157号住居跡7)



第362图 第157号住居跡8)



第363图 第157号住居跡(9)



第364図 第157号住居跡⑩

深さ8cmの楕円形の地床炉である。炉2は長径59cm・短径51cm・深さ7cmの円形の地床炉である。両炉ともに火熱面が弱く短期間の使用と考えられる。

〈特殊施設〉 住居跡の東壁よりに幅18cm・高さ7cmの馬蹄形の盛土を確認した。規模は、長径1m80cm・短径1m70cmである。内部からは、小ピットが4個検出された。深さは、 P_1 …8cm、 P_2 …56cm、 P_3 …46cm、 P_4 …36cmを測る。

〈堆積土〉 7層に分層できた。断面観察等から自然堆積と思われる。

〈出土遺物〉 遺物は住居跡内から多量に出土し、住居跡の中央部から西側にかけて多く出土した。床面(3)以外は、すべて覆土の一括廃棄土器である。石器は、覆土から石鎌8点・石槍1点・石錐1点・石匙1点・不定形石器20・磨製石斧3点・敲磨器類5点・石製品1点、床直から敲磨器類1点・石棒類1点・台石・石皿1点、床面から磨製石斧1点・台石・石皿1点の総数45点が出土した。

〈小結〉 住居跡の時期は、床面の土器から円筒上層d式期と思われる。(成田 滋彦)

第158号住居跡（第376図）

＜位置と確認＞ DD・DE-103グリッドに位置している。第46号住居跡の調査中に確認し、欠番となっていた第158号の番号を付けた。第46・166号住居跡の内側に位置している。

＜重複＞ 第46・79・95・97・167号住居跡より古いが、他の住居跡との関係は不明である。

＜平面形・規模＞ 平面形は不明である。推定規模は、短軸約2m80cm前後、長軸3m前後である。

＜壁・床面＞ 壁は確認出来なかった。床面は、他の住居跡と同レベルであり、平坦で堅緻である。

＜壁溝＞ 不明であるが、第46号住居跡の北側で検出した3条の壁溝のうち、中央のものが本住居跡に伴うと考えられる。幅10cm、深さ2～3cmである。

＜柱穴＞ 竪穴内から多数のピットを検出している。他の住居跡のピットも含まれているものと考えられるが、重複が激しいため、ピットの番号は第46号住居跡を中心に、第79・97号住居跡のものも合わせて通し番号を付け、その大半は、第46号住居跡でも記載している。本住居跡の主柱穴は位置的にP₅₆・P₆₅・P₇₉・P₈₂と考えられる。ピットの深さはP₅₆…47cm、P₆₅…43cm、P₇₉…34cm、P₈₂…61cmである。

＜炉＞ 不明であるが、位置的には、第46号住居跡の調査時に検出した6号炉と考えられる。短軸50cm、長軸75cmの楕円形の地床炉で、5cmほどくぼんでいる。また、西側外縁が土手状に若干高くなっている。

＜特殊施設＞ 南側の中央に位置するP₆₁～P₆₃の周辺が、楕円形状に10cmほどくぼんでおり、特殊施設の可能性が考えられる。短軸70cm、長軸80cmである。

＜堆積土＞ 不明である。

＜出土遺物＞ 遺物の出土は見られなかった。

（畠山 昇）

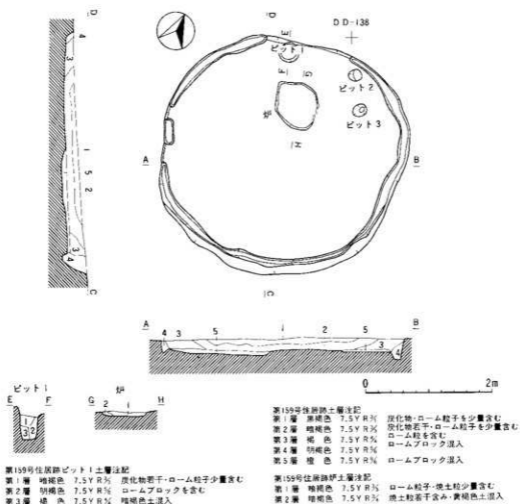
第159号住居跡 (第365・366図)

〈位置と確認〉 調査区D C-137・138グリッドに位置し、調査区西側の緩斜面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

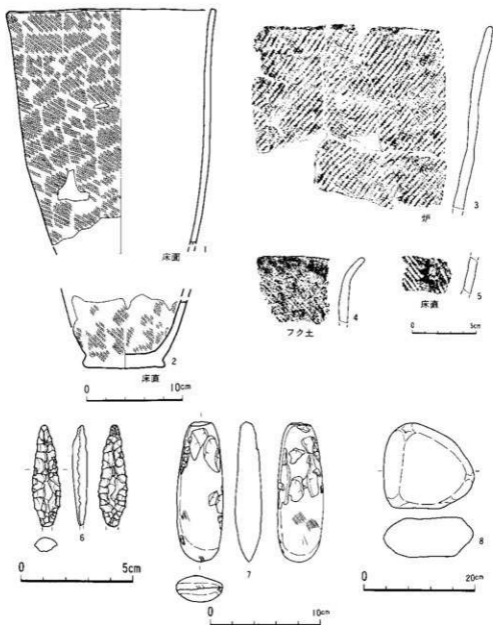
〈重複〉 認められなかった。

〈平面形・規模〉 全体的に丸みを有する円形の住居跡である。規模は、長軸3 m87cm・短軸3 m79cm・床面積10.02㎡を測る。

〈壁・床面〉 床面から上端にかけてほぼ垂直に立ち上がり、堅緻な造りである。壁高は、東壁12cm・西壁16cm・南壁21cm・北壁12cmを測る。床面は、ほぼ平坦で全面に貼り床を施している。



第365図 第159号住居跡(1)



第366図 第159号住居跡(2)

〈壁溝〉 幅10cm～15cm・深さ10cmの溝で、西側の一部と北側部分が途切れている。

〈柱穴〉 ビットは3個検出された。住居跡の北側に位置し柱穴と思われるが、主柱穴かどうか判断できなかった。

〈炉〉 北側の壁よりに位置している。炉壁に土器片を列状に配置した土器片囲炉である。規模は長径74cm・短径67cm・深さ8cmを測る。

<特殊施設> 壁溝の北側部分が途切れており、この部分は出入り口として使用したのではないかと思われる。

<堆積土> 5層に分層できた、断面観察等から自然堆積と思われる。

<出土遺物> 住居跡の中央部から多く出土した。土器は、(1～3・5)が炉・床面・床直から出土したは覆土からの出土である。石器は、覆土から石鏃1点・磨製石斧1点、4層から磨製石斧1点、床直から不定形石器1点・台石石皿1点の総数5点が出土した。

<小結> 土器は、すべて粗製の深鉢形土器であり製作技法から最花式～弥栄平(1)式の時期に相当すると思われる。(成田 滋彦)

第160号住居跡 (第367・368図)

<位置と確認> 調査区DE・DF-135・136グリッドに位置している。第173号住居跡を精査中に本住居跡を確認した。なお住居跡の北側は調査区域外のため完掘できなかった。

<重複> 第173号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡が古い。

<平面形・規模> コーナー部が丸をもつ隅丸長方形である。規模は長軸(2 m68cm)・短軸(2 m52cm)を測る。

<壁・床面> 上端から床面にかけて傾斜した堅緻な造りである。壁高は、東壁33cm・西壁32cm・南壁39cm・北壁は不明である。床面は、ほぼ平坦で貼り床を施し、壁同様に固い造りである。

<壁溝> 付属施設のピットから東側にかけて検出し、他の部分から検出できなかった。規模は幅8cm・深さ5cmを測る。

<柱穴> ピット1～4を主体にした4本柱と思われる。他のピットについては、第173号住居跡のピットか本住居跡のピットかどうか判断できなかった。

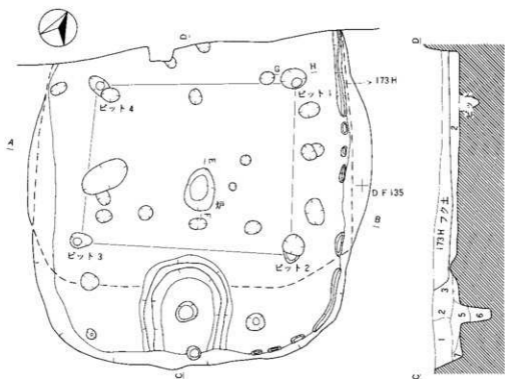
<炉> 住居跡の南側に位置し、形態が楕円形の地床炉である。規模は長径67cm・短径47cmを測る。

<特殊施設> 南壁よりに幅12cm・高さ6cmの馬蹄形の盛土を検出した。規模は、長径154cm・短径144cmで大形である。中央部に1個のピットを検出した。

<堆積土> 4層に分層できた。人為・自然堆積かどうか判断できなかった。

<出土遺物> 土器は少量のみの出土である。(4)が床直で他は覆土からの出土である。石器は、覆土から石槍1点・ピエス・エスキュー1点・不定形石器4点・石棒類1点、床直から不定形石器1点、床面から石鏃1点の9点が出土した。

<小結> 土器は、覆土から円筒上層d式が出土しており、住居跡の構築年代は円筒上層c・d式期と思われる。(成田 滋彦)



第160号住居跡ピット1土層注記

- | | |
|--------------------|------------|
| 第1層 黒褐色 10 Y R 5/5 | ローム粒を多量に含む |
| 第2層 黒褐色 10 Y R 5/5 | ローム粒を多量に含む |
| 第3層 黄褐色 10 Y R 5/5 | 黒褐色土混入 |

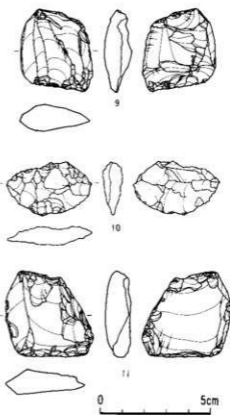
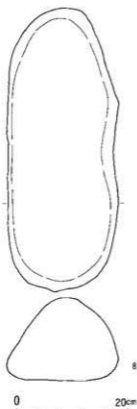
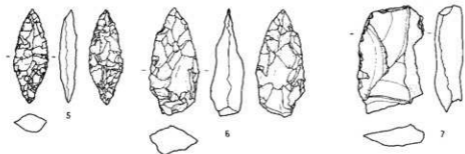
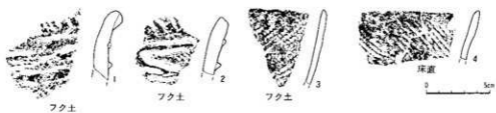
第160号住居跡土層注記

- | | |
|----------------------|--------------------|
| 第1層 じょうい 10 Y R 5/5 | ロームブロック含む、褐色土混入 |
| 第2層 黒褐色 10 Y R 5/5 | ローム粒を多量に含む |
| 第3層 黒褐色 10 Y R 5/5 | ローム粒少量含む |
| 第4層 褐色 7.5 Y R 5/5 | 暗褐色土混入、ロームブロック少量含む |
| 第5層 じょうい 7.5 Y R 5/5 | ローム粒多量に含む |
| 第6層 褐色 7.5 Y R 5/5 | ローム粒多量に含む |
| 第7層 黒褐色 10 Y R 5/5 | ロームブロック混入 |

第160号住居跡炉土層注記

- | | |
|---------------------|---------------|
| 第1層 暗褐色 10 Y R 5/5 | ローム粒・炭化物を少量含む |
| 第2層 赤褐色 2.5 Y R 5/5 | (焼土層)・黄褐色土混入 |

第367図 第160号住居跡(1)



第368図 第160号住居跡(2)

第161号住居跡 (第369図)

〈位置と確認〉 DD-106グリッドに位置する。第145号住居跡の下部で、貼り床を確認し、第161号住居跡とした。

〈重複〉 第71号A・B住居跡及び第144号・145号住居跡より古い。

〈平面形・規模〉 平面形及び規模は不明であるが、確認した床面の範囲は、短軸1m60cm、長軸3m40cm前後である。

〈壁・床面〉 東壁の一部だけ確認した。壁高は5cm前後で浅い。貼り床は、ほぼ平坦で、広く検出された。

〈壁溝〉 検出されなかった。

〈柱穴〉 この段階では、ピットを8個検出した。ピットの深さは以下のとおりである。

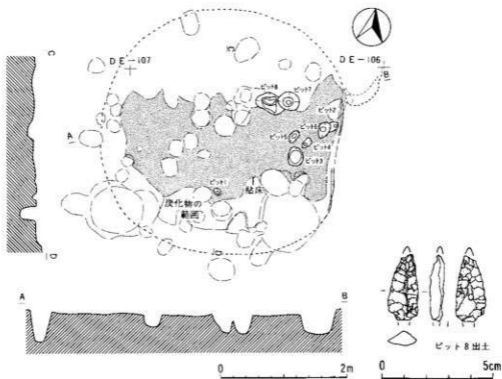
P₁…7cm、P₂…10cm、P₃…27cm、P₄…13cm、P₅…12cm、P₆…15cm、P₇…33cm、P₈…29cm。

〈炉〉 検出されなかった。

〈特殊施設〉 検出されなかった。

〈堆積土〉 堆積状況は不明であるが、ローム混じりの褐色土の堆積が見られた程度である。

〈出土遺物〉 土器は出土しなかったが、覆土から不定形石器1点と、軽石が1点出土した。



第369図 第161号住居跡

<小結> 本住居は第71号B住居跡の下位に検出されたことから、出土遺物はないが、円筒土層d式期がそれ以前に構築されたものと考えられる。(畠山 昇)

第162号住居跡 (第370・371図)

<位置と確認> 調査区D B・D C-134・135グリッドに位置している。第IV層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

<重複> 住居跡の東側部分で風倒木と重複し、新旧関係は本住居跡が新しい。

<平面形・規模> 残存部から推定すると円形を呈すると思われる。規模は、長軸(3 m80cm)・短軸(1 m85cm)を測る。

<壁・床面> 床面から上端にかけて垂直に立ち上がり堅緻である。壁高は東壁14cm・西壁不明・南壁31cm・北壁17cmを測る。

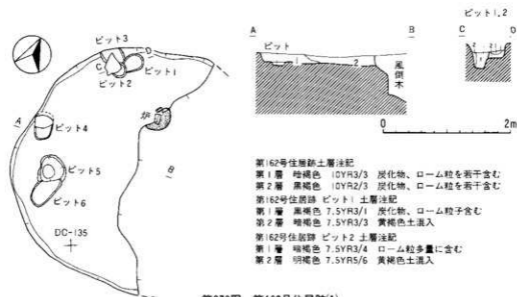
<柱穴> ビットは6個検出された。配置等から柱穴と思われる。

<炉> 北側に焼土と3個の礫を検出した。風倒木によって大部分を破壊されているが、石組炉と思われる。規模は、長径(42cm)・短径(25cm)を測る。

<特殊施設> 認められなかった。

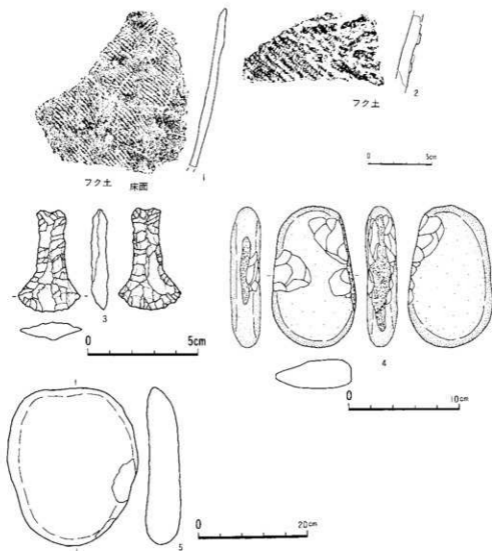
<堆積土> 2層に分層できた。人為・自然堆積かどうかは判断できなかった。

<出土遺物> 遺物は、住居跡の中央部から出土した。土器は覆土から2片出土したのみである。石器は、覆土から石筈1点、床直から台石石皿1点、床面から敲磨器類1点の3点が出土した。



第370図 第162号住居跡(1)

＜小結＞ 床面・床直から土器は出土せず、覆土の円筒上層d式の土器だけである。このことは、本住居跡の構築年代は円筒上層c・d式の時期に相当すると考えられる。(成田 滋彦)



第371図 第162号住居跡(2)

第163号住居跡 (第372・373図)

＜位置と確認＞ 調査区域西側の平坦部、DC-142グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

＜重複＞ 第414号土壌と重複し、本住居跡が新しい。

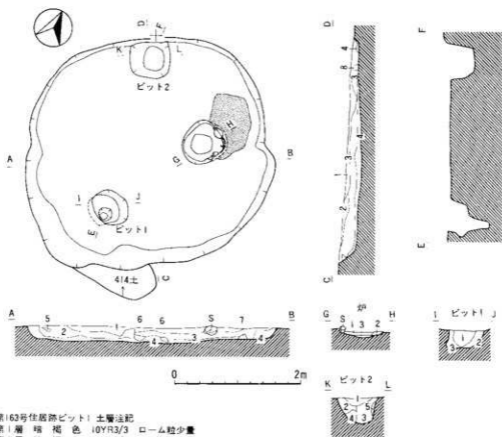
〈平面形・規模〉 南北に長軸をもつ楕円形で長軸約4m30cm、短軸約3m80cmで、床面積は9.85㎡である。

〈壁・床面〉 壁は床面から外側に緩やかに開きながら立ち上がる。床面は炉の東側の一部に貼り床が施されている。壁高は東壁16cm・西壁20cm・南壁22cm・北壁12cmである。

〈壁溝〉 検出されなかった。

〈柱穴〉 床面から2個の主柱穴が検出された。深さはP₁…40cm、P₂…65cmである。

〈炉〉 床面の中央から東壁寄りに土器片囲炉が構築されている。規模は長径約70cm、短



第163号住居跡ピット1 土層注記

- 第1層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒少量
- 第2層 暗褐色 10YR3/4 ローム粒少量
- 第3層 黄褐色 10YR5/6 黒色土粒、暗褐色土粒少量

第163号住居跡土層注記

- 第1層 栗褐色 10YR2/2 ローム粒微量
- 第2層 褐色 10YR4/4 ローム粒少量
- 第3層 黒褐色 10YR3/2 ローム粒少量 炭化物微量
- 第4層 暗褐色 10YR3/4 ロームブロック少量
- 第5層 褐色 10YR4/6
- 第6層 黒褐色 10YR2/3 ローム粒微量
- 第7層 黄褐色 10YR5/6 ロームブロック少量
- 第8層 にぶい黄褐色 10YR4/3 ロームブロック多量

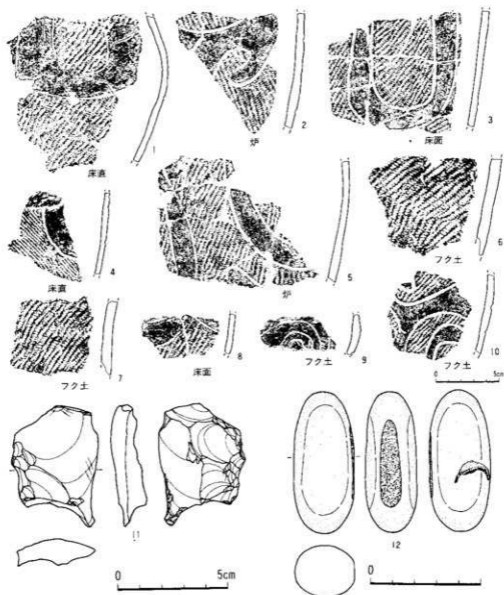
第163号住居跡炉土層注記

- 第1層 暗褐色 10YR3/3 焼土粒多量
- 第2層 褐色 10YR4/6 ローム粒少量
- 第3層 赤褐色 5YR4/8

第163号住居跡ピット2 土層注記

- 第1層 黒褐色 10YR2/3 ローム粒多量
- 第2層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒少量
- 第3層 褐色 10YR4/4 ロームブロック少量
- 第4層 黄褐色 10YR5/6 ロームブロック少量
- 第5層 明黄褐色 10YR6/6

第372図 第163号住居跡(1)



第373図 第163号住居跡(2)

径60cmで、楕円形である。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 8層に分層した。層全体にローム粒子を多く含む。人為的に埋め戻された可能性が高い。

<出土遺物> 石器は覆土から不定形石器3点・敲磨器類1点、床面から不定形石器1点出土した。

＜小結＞ 炉・床面から弥栄平(1)式土器が出土しており、この時期に本住居跡が相当するものと思われる。 (岡田 康博)

第164号住居跡 (第374図)

＜位置と確認＞ 調査区域南西側の斜面、CX-148グリッドに位置し、第III層上面で円形の黒褐色土の落ち込みを確認した。

＜重複＞ 認められなかった。

＜平面形・規模＞ 斜面下側(南側)が残存してないので全体は不明であるが、南北に長軸をもつ楕円形と考えられ、長軸(3m)、短軸(3m)で、床面積は(7.38㎡)である。

＜壁・床面＞ 壁は床面から外側にやや開きながら直線的に立ち上がる。床面は壁際を除いて貼床が施され、軟質である。壁高は東壁30cm・西壁18cm・北壁65cmである。

＜壁溝＞ 検出されなかった。

＜柱穴＞ 床面から6個検出した。このうち、P₁・P₆が主柱穴である。深さはP₁…12cm、P₂…44cm、P₃…30cm、P₄…15cm、P₅…10cm、P₆…21cmである。

＜炉＞ 床面の長軸線上の南壁寄りに石囲炉が構築されている。規模は約60cm×40cmで、ほぼ長方形である。

＜特殊施設＞ 検出されなかった。

＜堆積土＞ 10層に分層した。層全体にローム粒子・炭化物を含む。人為的に埋め戻された可能性が高い。

＜出土遺物＞ 石器は床面から敲磨器類1点が出土した。 (岡田 康博)

第165号住居跡 (第375図)

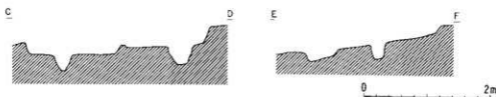
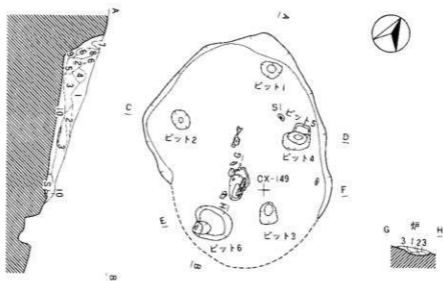
＜位置と確認＞ DC~DE-102・103グリッドに位置している。第46号住居跡の調査中に確認したもので、その住居跡の内側に位置している。

＜重複＞ 第46・75・79・95・97・98・102号住居跡より古く、第94・134・166・167・168号住居跡、第307・395・396号土壇より新しい。

＜平面形・規模＞ 平面形は楕円形を呈するものと思われる。推定規模は、短軸5m40cm、長軸7m80cmで、推定床面積は33.65㎡である。

＜壁・床面＞ 壁は確認出来なかった。床面は第46号住居跡にあるが、平坦で、堅緻である。その広がり、把握できなかった。

＜壁溝＞ 第46号住居跡の南西壁、東壁で検出し、これより内側に検出した。幅約16~20cmである。



第164号住居跡土層注記

- 第1層 黒褐色 IOYR2/3 ローム粒、炭化粒多量
- 第2層 黒褐色 IOYR2/3 ローム粒少量
- 第3層 暗褐色 IOYR3/4 ローム粒、炭化粒少量
- 第4層 暗褐色 IOYR3/4 炭化粒多量、焼土粒少量
- 第5層 暗褐色 IOYR3/3 ローム粒多量
- 第6層 褐色 IOYR4/6 ローム粒少量
- 第7層 黒褐色 IOYR2/3 炭化物微量

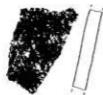
- 第8層 褐色 IOYR4/4 ローム粒多量
- 第9層 黄褐色 IOYR5/6
- 第10層 黄褐色 IOYR5/8 ロームブロック少量

第164号住居跡伊土層注記

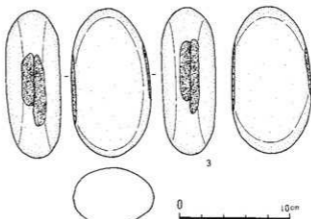
- 第1層 褐色 IOYR4/4 焼土粒微量
- 第2層 褐色 IOYR4/6 焼土粒少量
- 第3層 黄褐色 IOYR5/6 焼土粒少量



フク土



0 5cm



第374図 第164号住居跡

<柱穴> 竪穴内から多数のピットを検出している。他の住居跡のピットも含まれているものと考えられるが、重複が激しいため、ピットの番号は第46号住居跡を中心に、第79・97号住居跡のものも合わせて通し番号を付け、その大半は、第46号住居跡でも記載している。本住居跡に関係する、主なピットの深さは以下のとおりである。

P₄₀…51cm, P₅₂…71cm, P₅₃…40cm, P₆₄…46cm, P₈₃…64cm, P₉₁…74cm, P₉₃…80cm,

このうち、本住居跡の柱穴はP₅₂ (またはP₅₃)・P₆₄・P₉₁ (またはP₉₃)・P₈₃ (またはP₈₄)・P₁₀₁・P₁₀₅と考えられる。

<炉> 位置的には、1・3・5・7・9号炉のいずれかが本住居に伴う可能性が高い。すべて地床炉で、9号炉は若干くぼんでいる。

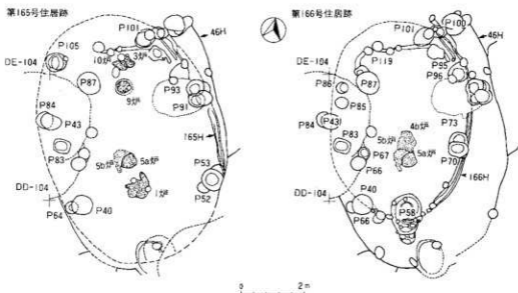
<特殊施設> 長軸の南端で検出した。第46号住居跡の特殊施設下に検出したP₄₀が特殊施設に伴うピットと考えられる。

<堆積土> 不明である。

<出土遺物> 遺物の出土は見られなかった。

<小結> 第46号住居跡とほぼ同規模で、重複していることから、建て替えが行なわれたものと考えられる。

(高山 昇)



第375図 第165・166号住居跡

第166号住居跡 (第375図)

<位置と確認> DC・DE-102・103グリッドに位置している。第46号住居跡の調査中に確認したもので、第46・165号住居跡の内側に位置している。

<重複> 第46・75・79・95・97・98・102号住居跡より古い。他の住居跡との関係は不明である。

<平面形・規模> 平面形は楕円形を呈するものと思われる。推定規模は、短軸4m20cm、長軸6m50cm(張り出し部分を含む)で、推定床面積は20.94㎡である。

<壁・床面> 壁は確認出来なかった。床面は第46号住居跡にあるが、平坦で、堅緻である。

<壁溝> 第46号住居跡内部に検出し、幅約16~20cm、深さ15cm前後である。

<柱穴> 多数のピットを検出している。他の住居跡のピットも含まれているものと考えられるが、重複が激しいため、ピットの番号は第46号住居跡を中心に、第79・97号住居跡のものも合わせて通し番号を付け、その大半は、第46号住居跡でも記載している。本住居跡の主柱穴はP₆₆(またはP₈₃)・P₇₀(またはP₇₃)・P₉₅・P₁₁₉(またはP₈₆)と考えられる。ピットの深さは、P₆₆…78cm、P₇₀…77cm、P₇₃…56cm、P₈₃…64cm、P₈₆…80cm、P₉₅…89cmである。

<炉> 不明であるが、位置的には、第46号住居跡の調査時に検出した4・5号炉が本住居に伴う可能性が高い。

<特殊施設> 長軸の南端で検出した。南端が若干外側に張り出している。短軸92cm、長軸1m30cmの楕円形を呈し、内側が12cmほど低くなっている。この内側には径34cm、深さ57cmのピット(P₈₈)がある。施設下には壁溝らしいものと、小ピットが検出されたが、付随するものかどうかは不明である。

<堆積土> 不明である。

<出土遺物> 遺物の出土は見られなかった。 (畠山 昇)

第167号住居跡 (第376図)

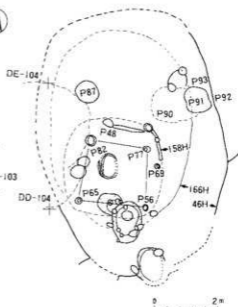
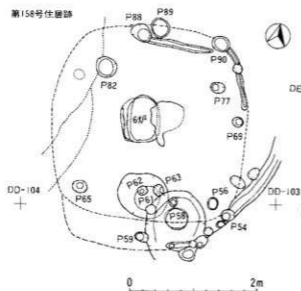
<位置と確認> DD・DE-103グリッドに位置している。第46号住居跡の調査中に確認した。第46・166号住居跡の内側に位置している。

<重複> 第46・79・95・97号住居跡より古く、第158号住居跡より新しい。他の住居跡との関係は不明である。

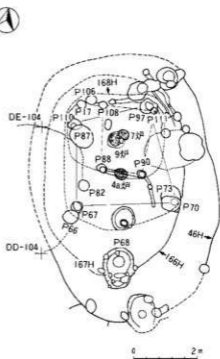
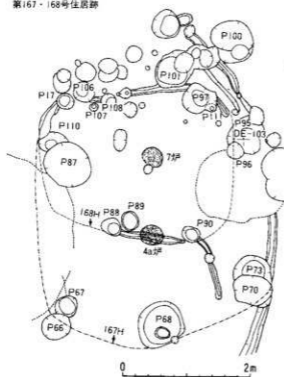
<平面形・規模> 平面形は不明である。推定規模は、短軸3m70cm前後、長軸4m60cm前後で、推定床面積は13.5㎡である。

<壁・床面> 壁は確認出来なかった。床面は、他の住居跡と同レベルであり、平坦で堅緻である。

第158号住居跡



第167・168号住居跡



第376図 第158・167・168号住居跡

<壁溝> 不明であるが、第46号住居跡の調査時に北側で検出した3条の壁溝のいずれかが、本住居に伴う可能性がある。

<柱穴> 多数のピットを検出している。他の住居跡のピットも含まれているものと考えられるが、重複が激しいため、ピットの番号は第46号住居跡を中心に、第79・97号住居跡のものも合わせて通し番号を付け、その大半は、第46号住居跡でも記載している。本住居跡の主柱穴はP₆₇・P₆₈・P₁₀₇・P₁₁₀と考えられ、これに対応するものはP₇₀により、壊されたものと思われる。ピットの深さはP₆₇…58cm、P₆₈…41cm、P₁₀₇…19cm、P₁₁₀…58cmである。

<炉> 不明であるが、位置的には、第46号住居跡の調査時に検出した4 a号炉と考えられる。4 a号炉は第158号住居跡の壁溝の上部に検出された。

<特殊施設> 長軸の南端で検出した。径70cmの不整形で若干(9cm)低くなっている。この内側で径20cm、深さ41cmのピット(P₆₈)を検出した。

<堆積土> 不明である。

<出土遺物> 遺物の出土は見られなかった。(畠山 昇)

第168号住居跡(第376図)

<位置と確認> DD・DE-103グリッドに位置している。第46号住居跡の調査中に確認した。第46・166号住居跡の内側に位置している。

<重複> 第46・79・95・97号住居跡より古いが、他の住居跡との関係は不明である。

<平面形・規模> 平面形は不明である。推定規模は、短軸約2m50cm前後、長軸3m前後である。

<壁・床面> 壁は確認出来なかった。床面は、他の住居跡と同レベルであり、平坦で堅緻である。

<壁溝> 不明であるが、第46号住居跡の北側で検出した3条の壁溝のうち、南側のものが本住居に伴うと考えられる。幅10cm、深さ5cm前後である。

<柱穴> 竅穴内から多数のピットを検出している。他の住居跡のピットも含まれているものと考えられるが、重複が激しいため、ピットの番号は第46号住居跡を中心に、第79・97号住居跡のものも合わせて通し番号を付け、その大半は、第46号住居跡でも記載している。本住居跡の主柱穴は位置的にP₃₇・P₈₈・P₉₀・P₁₁₁と考えられる。ピットの深さはP₃₇…47cm、P₈₈…48cm、P₉₀…56cmである。

<炉> 不明であるが、位置的には、第46号住居跡の調査時に検出した7号炉と考えられる。地床炉である。

<特殊施設> 不明である。

<堆積土> 不明である。

<出土遺物> 遺物の出土は見られなかった。

(高山 昇)

第169号住居跡 (第377～380図)

<位置と確認> 調査区域西側の北端、DF-140グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で楕円形の黒色土の落ち込みを確認した。

<重複> 第177号住居跡と重複し、本住居跡が新しい。また、少なくとも3回以上の建て替え・拡張を繰り返したと考えられる。

<平面形・規模> 北側約半分が調査区域外に延びているので全体の平面形・規模とも明確でないが、残存部分では長軸(10m40cm)、短軸(2m90cm)で、床面積は不明である。東西に長軸をもつ洋梨形か楕円形と考えられる。

<壁・床面> 壁は床面から外側にやや開きながら直線的に立ち上がる。床面は壁溝より内側は貼り床が施されている。壁高は東壁45cm・西壁8cm・南壁60cmである。

<壁溝> 床面から1条(Ⅲ期)、床下から2条(Ⅰ・Ⅱ期)検出した。いずれも所々途切れるもののほぼ全周するらしい。規模は、Ⅰ期・幅5～15cm、深さ3～8cm、Ⅱ期・幅15～20cm深さ3～8cm、Ⅲ期・幅10～15cm、深さ10～23cmである。

<柱穴> 床面から5個、床下から12個検出した。柱穴配置から推定して、Ⅰ期・P₂、P₁₄、Ⅱ期・P₄、P₁₃、Ⅲ期・P₁、P₂、P₃がそれぞれの時期の主柱穴である可能性が高い。
P₁…80cm、P₂…87cm、P₃…70cm、P₄…60cm、P₅…50cm、P₆…84cm、P₇…53cm、P₈…56cm、P₉…32cm、P₁₀…73cm、P₁₁…43cm、P₁₂…33cm、P₁₃…24cm、P₁₄…80cm、P₁₅…70cm、P₁₆…40cm、P₁₇…32cmである。

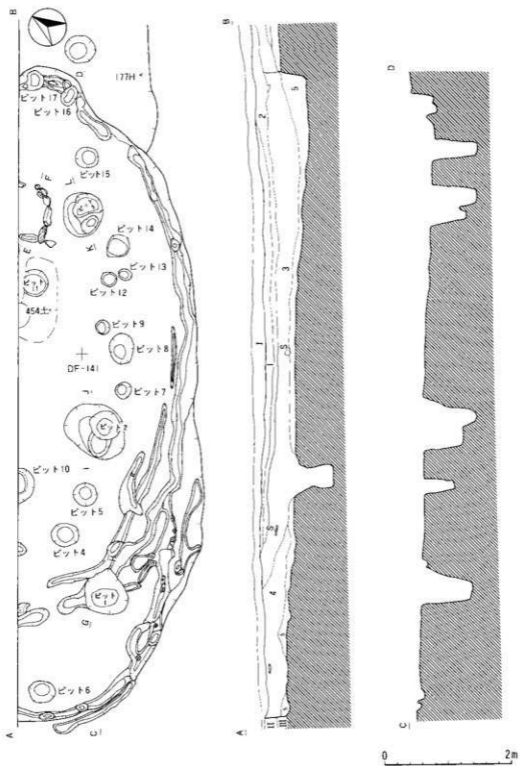
<炉> 床面の長軸線上の中央から東壁寄りに石囲炉が構築されている。一部調査区域外に延びているため全体の規模は不明である。

<特殊施設> 検出されなかった。しかし、長軸線上の東壁は外側に若干張り出し、壁溝からピットが検出されていることから、何らかの施設と関係があるのかもしれない。

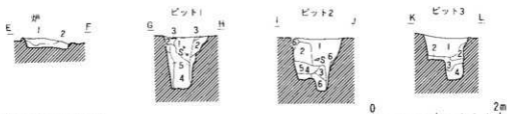
<堆積土> 5層に分層した。層全体にローム粒子・焼土粒子・炭化物を含む。自然堆積と考えられる。

<出土遺物> 床面直上から最花式土器片が出土した。石器は出土しなかった。

<小結> 少なくとも本住居跡は、大きく3時期にわたって建て替え・拡張を繰り返したと柱穴の配置・検出状況から考えることができよう。Ⅰ期(四本柱)を拡張してⅡ期(四本柱)へと移行し、さらに拡張してⅢ期(六本柱)となる。そしてこの時期には建て替えを行っている可能性が柱穴配置から想像できる。しかし、本住居跡は北側半分が調査区域外に存在するため、



第377図 第169号住居跡(1)



第169号住居跡 炉土層注記

- 第1層 黒褐色 10YR2/3
 ロームブロック少量、炭化物微量
 第2層 暗褐色 10YR3/3
 ロームブロック微量、焼土粒微量

第169号住居跡土層注記

- 第1層 黒色 10YR2/1 ロームブロック少量
 第2層 黒褐色 10YR2/2
 ロームブロック、焼土粒、黒色土粒少量
 第3層 黒褐色 10YR2/3
 ローム粒、ロームブロック多量、炭化粒、焼土粒少量
 第4層 黒褐色 10YR3/2
 ローム粒多量、ロームブロック少量、焼土粒、炭化粒多量
 第5層 暗褐色 10YR3/3
 ローム粒多量、ロームブロック、炭化粒、焼土粒少量

第169号住居跡ピット1 土層注記

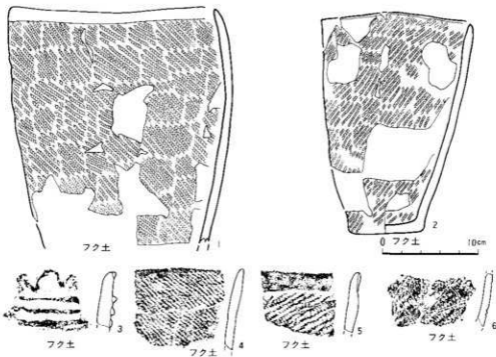
- 第1層 黒褐色 10YR3/2 ローム粒多量
 第2層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒多量
 第3層 暗褐色 10YR3/4 ローム粒多量
 第4層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒多量
 第5層 明黄褐色 10YR6/8

第169号住居跡ピット3 土層注記

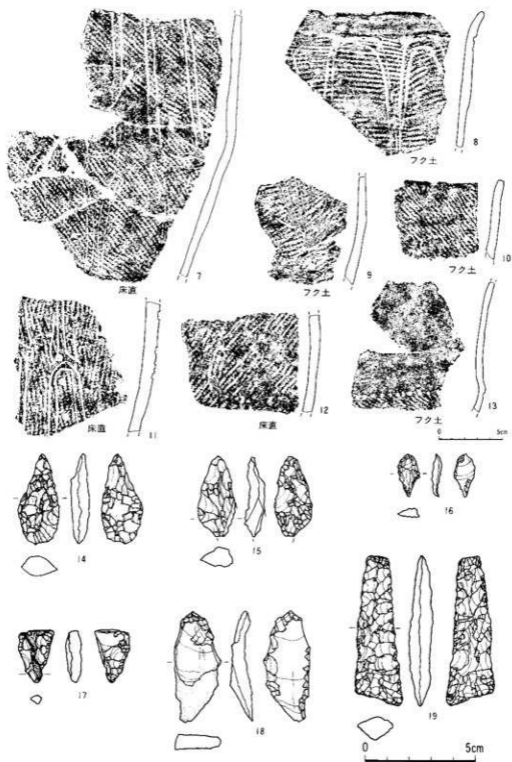
- 第1層 黒褐色 10YR3/2 ローム粒微量
 第2層 褐色 10YR4/4 ローム粒多量
 第3層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒微量
 第4層 黄褐色 10YR5/6 ローム粒多量

第169号住居跡ピット2 土層注記

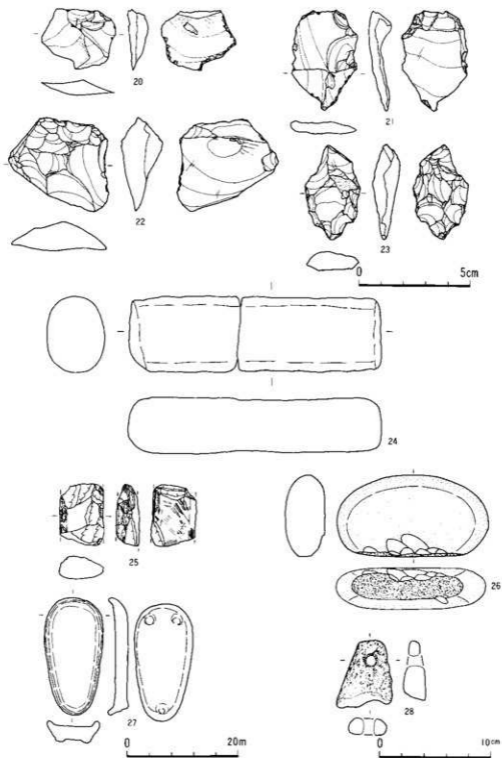
- 第1層 黒褐色 10YR3/2
 ローム粒、ロームブロック多量、炭化粒少量
 第2層 暗褐色 10YR3/3 ローム粒多量
 第3層 黒褐色 10YR2/3 ローム粒少量
 第4層 明黄褐色 10YR6/6 黒褐色土少量
 第5層 黒褐色 10YR2/2
 第6層 黄褐色 10YR5/8



第378図 第169号住居跡(2)



第379回 第169号住居跡(3)



第380図 第169号住居跡(4)

詳細は不明であり、あくまでも可能性の示唆に留めたい。

(岡田 康博)

第170号住居跡 (第381図)

<位置と確認> 調査区域の北西端の平坦部、DC-148グリッドに位置し、第Ⅲ層上面で石囲炉の一部を確認した。

<重複> 認められなかった。

<平面形・規模> 石囲炉・柱穴・床面の一部のみしか残存していないので平面形・規模ともに不明である。

<壁・床面> 壁は残存しない。床面は貼り床が確認できず、焼土が一部残存しているのみである。

<壁溝> 検出されなかった。

<柱穴> 検出されなかった。

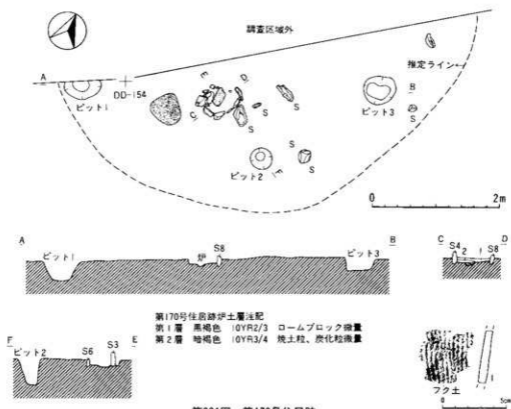
<炉> 住居跡内の位置は不明であるが石囲炉が構築されている。規模は約70cm×55cmで、ほぼ長方形である。

<特殊施設> 検出されなかった。

<堆積土> 認められなかった。

<出土遺物> 石器は出土しなかった。

(岡田 康博)



第381図 第170号住居跡

